

---

# 魔法先生ネギま！ 執事の前田

フリスタ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法先生ネギま！ 執事の前田

### 【Nコード】

N3752Q

### 【作者名】

フリスタ

### 【あらすじ】

- 1・その男、転生者ではない。
- 2・その男、最強である。
- 3・その男、執事である。

これは『魔法先生ネギま！』の二次創作です。

## 設定情報や各話の様子

1. この物語は『執事の前田』が主人公ではあるが、ほぼ千雨視点で描かれて行く。
2. 前田の正体は謎である。
3. 千雨はヒロインではあるが、恋人になるとは限らない。
4. 場合によっては変更になる可能性もあるが、前田はどこに行っても前田である。

名前：前田・ヴァンデンバーグ・政宗

性別：男

職業：執事 兼 教師

服装：基本的に執事服。白い手袋を嵌めている。

外見：18歳〜24歳ぐらいに見える。かなりのイケメン。

好きな事：執事の仕事

嫌いな事：執事の仕事以外

趣味：執事の仕事

特技：お菓子作りから格闘技まで何でもござれ

頭はかなり良い。

けどアホ発言が多い。

運動神経もかなり良い。

メールで当選したから、当選者の千雨の部屋にやってくるが、執事が何故当たるのか？ 給金要らずで働けるのか？ それは全て秘密。

### 【第01話】

長谷川千雨のワンクリックで突如として現れたのは謎の執事。かなりのイケメンで教員免許も持っているようだ。ある意味完璧で、ある意味完璧にボケる。はたして、この執事は一体何者なのか？

### 【第02話】

どうやら前田は過去に雪広家に仕えていたようだ。その腕は、執事長にもなるほどの執事。しかし、置き手紙と共に消

えた男。

委員長の【雪広あやか】とも知り合いだし。

【ザジ・レイニーデイ】とも知り合いの様だが……？  
料理人になりたかったらしい。

### 【第03話】

自分で作った非公式サイト【エヴァたんを愛でる会】通称EMK。  
会長であり会員N01だったりする前田は、  
エヴァンジェリンを生徒としてではなく、【闇の福音】として知っ  
ているらしい。

念話も使い、ただの執事ではないようだ。

### 【第04話】

『パンツが好きなんだろう』と誤解されながらもせわしくボケる  
前田。

新任の子供先生が来てもその表情は一切崩れる事はない。

「執事は飛ぶものでございます」そう言って、前田は空を飛び、転  
移魔法も使用する。

底が見えて来ない謎の執事前田。もう底なのか？ 底なしなのか？  
野球選手になりたかったらしい。

【第05話】

当然執事だから主人より後に寝て先に起きる。

しかし暗記パンなど手の込みようを考えるところが寝てるのか？

エヴァンジェリンの呪いも思うところがあるようぞ？

嘘か真か、主人（千雨ちゃん）が弱点らしいぞ

エヴァンジェリンが前田の情報を隠蔽しているぞ

【第06話】

清水の舞台から飛び降りる気持ちで飛び降りたはずの前田。

手には籠でしか売ってないアイス。先に買っておいて飛び降りてい

なかつたのか？

はたまた飛び降りて一瞬でアイス買って戻って来たのか？

手品師にもなりたかつたようだ。

【第07話】

修学旅行中の前田の朝は旅館の仕事を奪う事から始まる。

前田の執事服は呪われていて外せないらしいぞ？ 嘘かも知れない

空気だ。

前田は目くらまし出来る程の強力な光をはなてるようだ。

バイトだって関係なく仕事に誇りを持たせるぞ。

【第08話】

「【触手モノ】でございます」執事は恥ずかしげも無くそう主人に話す。

好きなモノは好きだと。恥ずかしい事など何一つ無いと。自信を持って言う。

そこに偽りは無く、その姿に妥協もない。

焦りや後悔も無ければ、それを受け入れる者もいなかった。

そう、彼は変態執事なのだから。

【第09話】

彼はマイクを握る。小指を立てて。

暗いピンク色の室内に、ミラーボールが輝く。

そして、彼は大声で叫ぶ、悩みがあると。

前田特製 幕の内弁当 デンプシーロール味 580円

全国のコンビニで大好評欠品中。

【第10話】

一人、また一人と将来有望な魔法使いの下から消えて行く。  
契約した者、魔法と言うモノを知った者。

記憶は消され、関わりを持たなくなるようになって行く。

そして、彼は暗躍し続ける。自分の存在を偽り、隠し、執事として  
振る舞う。

彼は何かを変えて行っている。確実に。

【第11話】

紙人形が整列する。音を奏でる。行進する。それは御伽話の様な世  
界。

囲まれるボロボロの少女は、その音に包まれ傷を癒して行く。

そして、呪いが解け、新たな呪いを受け生きて行く。

【お願いキティちゃん】の呪文をあと2回聞けば自由の身だ。

【第12話】

雷鳴鳴り響く夜。外は大雨だ。

だれしもが「雨止まないか？」と外を見つめ、雷の光を見る。

ソレが雷の光ではないと知らずに。

そして、レインダンスの片割れは消えて行く。

執事の正体を知り、自分の無力さを噛みしめ、生涯を遂げる。

誰にも知られずに消えて行く。それがどれほど恐ろしい事かも知ら



ずに。

【番外 - ?】

割とまともな過ごす執事。

それは緊張からなのか、それとも計算でなのかは分からない。

彼を知る屋敷の人間は話す。彼ほど素晴らしい執事はいないと。

そして、彼を知らない今の主人は話す。誰かコイツを引き取ってくれと。

第01話「ワンクリックでございます」(前書き)

噂の(?)新作、始めました。

今回は？ 今回だけなのか？

よく分らんけど、千雨ちゃん視点で進んでいきます。

## 第01話「ワンクリックでございます」

麻帆良学園

そこが私の通う学園だ。

中学2年もあと数カ月で終わる。

しかし、中学生が終わるまでにまだ1年もある。

いるもんはいるで仕方ないかもしれないが、おかしいだろう？

他のクラスは普通の日本人ばかりで、何でウチのクラスだけ留学生に中学生らしからぬデカいのやら幼稚園みたいのがいるんだ！ 窮めつけはあのロボだ！ おかしいだろうがよ！？ 何で誰も突っ込まないんだよ！？ 耳にアンテナとか膝関節部分とかあからさまだろうが！！

……はあ、私の安息の場所は寮でのネットだけだ。ルームメイトにも知られない様にコスプレして！ 写真を取り！ プロ顔負けの補正技術を駆使し！！ ネットアイドルランキングでもぶっちぎりの1位！！

表の世界では目立たず騒がず危険を冒さず、リスクの少ない裏の世界でトップを取る！ それが私のスタンス！

そう、あの日が来るまでそれが普通だったんだよな……。

「お嬢様、お弁当をお忘れです」

「あ、ああ……」

「いつてらっしゃいませ、お嬢様」

ルームメイトはいつの間にか別の部屋に移動しており、私の部屋には……おかしな執事が住み着いていた。私は頭を抱えて寮を後にした。

数日前。

私はいつものようにブログとか、ネット検索したりとかして過ごしていた。

ポーン

『You got mail!』

「ん？ 何だ？」

見知らぬアドレスからのメールだった。しかし、添付ファイルもない。迷惑メールフォルダではなく直接受信ボックスに入って来たメール。

開いてみると『おめでと〜いございます』の文字

「迷惑メールか」

と思い、消そうとした時、一文が目にとまった。

『あなたに送らせて頂きます。ご了承頂ければ“コチラ”をクリックしてください』

普通ならそのままゴミ箱行きだ。しかし、それが気になっていた。

“コチラ”の部分にポインターを合わせる。サイトのアドレスで検索をかけるが、特に問題は感じない。右クリックしてプロパティで情報を得ても問題は無いと判断した。そして、私は何気なくその場所をクリックした。

カチッ

『ご契約ありがとうございます！』

クリックした瞬間に後悔した。まあ意味は無いがワンクリック詐欺的なもんだと判断したからだ。しかし、本当に後悔するのはもう少し先の事になるのだが……。とにかく、私はメールを削除し、その日は寝ることにした。

### 【翌朝】

ルームメイトが姿を消していた。荷物も全て無い状態。個人的には広くなっていいのだが、疑問ばかりが頭の中を巡っていた。そして……。

コンコン……コンコン……コンコンー！

「……はい……チッ」

くそっ、こんな時ならルームメイトが出てくれるんだけどな。そう舌打ちをしながらドアに向かう。ドアを開けようとすると手は空を切っていた。ドアがアチラから開けられていたのだ。

「失礼します！」

ドゴッ

「グハッ！！」

突然腹部に衝撃を感じた。衝撃はすぐさま痛みに変換され、私は立っていられなかった。ぼやけた目に映るのは、本棚らしき木製の物体だった。

「はじめまして、私の名前は前田・ヴァンデンバーグ・政宗と申します。長谷川千雨様ですね？ ご契約ありがとうございます。今後は“お嬢様”とお呼びいたしますのでよろしくお願いいたします。……お嬢様？ その様に笑い転げられては私といたしましても傷付くと言うものです」

「笑い転げてんじゃねー！ ゴホッ！

腹を強打して痛みが転がってるんだ！！ ゲホッゲホッ！」

「……賊の侵入を許すとは不覚！！ どこに……！！？」

「お前だーっ！！」

「……なるほど、初対面で緊張する私を和ませようとしていらっしやるのですね？ 何とお優しい。この前田、お優しい主人に恵まれ感激しております」

「ッ！ 誰だお前は！」

私はようやく痛みが引いて来て立ち上がれるようになった。

いきなり腹にハンマーを貰ったような感覚をくれたこの……この……  
…執事？ そうだ執事の服を着ている。誰だこいつは？

「お嬢様、もう大丈夫です。私の緊張はほぐれております。もうボケなくて結構でございます。……よもや！ 本気でボケていらっしやるのですか！？ 私です！ 前田でございます！ あの時の事をお忘れですか！？」

「ボケてるのはお前だ！！ あの時も何もたつた今の事だろうが！！」

「それは良かった。では失礼します……ふむ、ここが良いでしょうか」

「何だよお前は？ おい、何で入って来てるんだ？ おい？」

前田と名乗る執事の男は木製の本棚を、昨日までルームメイトの私物が色々置いてあった隅に置き、廊下から更に荷物を運び込み、様々な本を次々に収納し始めた。

「まさか、アレか？ 新しいルームメイトとかが来て、それがお嬢様タイプで、金にモノを言わせて前のルームメイトを移動させたの

か？」

「お嬢様。大変失礼かとは思いますが、心を鬼にして言わせて頂きます。少しエロゲーのやり過ぎではないでしょうか？ そんな事があるわけがございません。お金持ちのお嬢様タイプが金にモノを言わせるのなら、寮に住む必要は微塵もございません」

この執事むかつく。初対面でエロゲーのやりすぎとか言われるとはしかし、言っている事はもっともではある。そんな事があるわけではない。

「じゃ、じゃあ誰の荷物だつてんだよ？」

「私の私物にございます」

「それこそあるわけがねーだろうがーっ！！ 何でお前の荷物を…

…！」

「これでよし。ではお嬢様。改めましてご契約ありがとうございます」

「そう、それだ。契約って何の話だ？」

「……昨日メールが来ましたよね？」

「あ？ ああ、来たな。すぐに削除したけど」



「お読みになっただけならいいじゃない？」

「迷惑メールだろ？」

「私はご迷惑ですか？」

「迷惑をかけていないとでも？」

「それならば大丈夫ですね。ではご説明いたしましょう」

「いや、聞けし」

「お嬢様は当選したのでございます！ この地球全土に住まう人類の中の一人に選ばれたのでございます！！ おめでとうございます。はい、クラツカーをどうぞ！」

私は渡されたクラツカーを棚に置き、話を聞くことにした。

「事を成す前に祝ってはならぬと？ …… 御立派ですお嬢様。感激のあまり、私、目頭が熱くなつてまいりました」

「いいから話を続けろ」

涙を拭く前田という男は、ハンカチをポケットにしまうと、少し考えてからこう言った。

「……終わりましたが？」

「はあ!？」

「え〜……ではもう一度申し上げますが、私の名前は前田・ヴァンデンバーグ・政宗。職業は執事。御主人様はお嬢様、あなた様にございます。以上です」

「雇う気も無いし雇う金もねーよ」

「大丈夫でございますお嬢様。当たったので金額は一切かかりません。いやぁ強運の持ち主であられる。才気溢れますね素晴らしい」  
こうして、ワケのわからない執事は私の部屋に住みつくことになった。ルームメイトは他の部屋で問題ないそうだ。学園側からも何も言われない。一体コイツは何なのだろう？

【翌朝】

「おはようございますお嬢様。朝食の準備が出来ております」

「……はあ」

「その愁いを帯びた溜め息、何かお悩み事でしょうか？ 私でよろしければ相談に乗らせて頂きますが？」

お前の事だお前の。

「お前が何を考えてるか知らないが……」

「前田、でございますお嬢様」

……朝から疲れる。

「……行ってくる」

「お待ちくださいお嬢様。こちらお弁当でございます。いってらっしゃいます」

私は受け取り部屋を後にした。

この学園生活は……ダメだ。

教室に着いた。毎朝毎朝静かな日が無い教室。

何て子供な連中なんだろう。寮も居場所が無くなった気がする。

ああ、私はこれからどこに平穩を求めればいいのだろうか？

「おはよ〜千雨ちゃん」

「……ああ」

適当に挨拶を済ませ、席に着く。私はノートパソコンを開き、昨日の削除したメールをゴミ箱から取り出す。受信ボックスに戻された

メールにはそれらしい内容が書いてあった。

『夢のお嬢様生活をお楽しみください。執事に関する費用は一切不要です』

ますますワケがわからん。

少し冷静になって分析してみよう。

前田・ヴァンデンバーグ・政宗。年齢、おおよそ18〜24歳ぐらいか。執事服の男で、身長は175以上はあるだろう。髪は黒髪で、ルーズなようで整っていて、クールに見えなくもない。顔は、かなりのイケメンだろう。あのボケさえなければ……。

「なあなあ昨日すごいイケメンが女子寮に来てたって噂本当!？」

「あ、私も聞いた！ 見てないけど凄い美形の執事らしいよ？」

「執事？」

「そうそう、確か誰かの部屋のルームメイトが部屋を移ったんだって」

「執事って事は、そこにお嬢様でも来たのかな？ 来るのかな？」

お〜い、噂になってるぞアホ執事。

「いいんちよ何か聞いてる〜？」

「いえ、存じませんわ」

「そっか〜、部屋を勝手に改築しちゃういいんちよでも知らないか」

「なっ！ 許可は取ってますわ！」

「いや、度が過ぎてるでしょうよ。しっかりと見てみたいよね〜」

外を出歩かない様に言おう……。いや、即刻退去させた方が良いでしょう。

しかし、そう言う事を考えていた矢先に事件は起きて行った。

ガラァ

このクラスの担任で、一部ではデスメガネの異名を持つ高畑先生が入ってくる。

「おはようみんな。突然だけど僕、出張になってしまっただけ。新しい先生を紹介するよ。いきなりで申し訳ないんだけど頼めるかな？」

「かしこまりました」

昨日と今日の朝に聞いた事がある声が聞こえてきた。止めてくれ。この展開は避けようがない……。ああ、何故私はあの時、クリックしてしまったのだろうか。

「失礼いたします。突然ではありますが本日からこの学校で教員をすることになりました」

……。止めてくれ。

私は恐る恐る顔を上げた。出来れば他人の空似程度で済んでくれと願いながら。

「前田・ヴァンデンバーグ・政宗にございます。不得手な教科はございませんので、お気軽にご質問ください」

終わった。奴だ。間違いない。  
顔・声・名前・服装。全てが一致してしまった。

「「「「「キヤア~~~~~!! カッ!いい~~~~~!!!!」「」「」「」

「ありがとうございます。ちなみに私、こちらの一番後ろの席にお座りになられている長谷川千雨様の執事も兼ねております。それ故、時間が取れぬ事もあるかと思しますので、よろしくお願いいたします」

……完全に終わった。

「千雨ちゃんどういう事!？」

「千雨ちゃんってお嬢様だったの!？」

「……ま、前田?」

「これはこれは、お久しぶりですね。あやか様」

「いいちよも知り合いなの!？」

「何なに!?! 三角関係!?!」

もう、好きにしてくれ。

その日、私の夢見る平穏な学園生活は訪れる事なく、

私のワンクリックによって完全崩壊した。



第01話「ワンクリックでございませう」(後書き)

感想は随時受け付けさせていただきます。



第02話「少し過去の事でございます」（前書き）

前田って何者？

こんな疑問が少しずつ晴れて行く物語。

その第2話。今回はあやかさんのお話がメインかな。

## 第02話「少し過去の事でございます」

バンッ！

「前田、あなたどういつもりなんですの！？ 突然いなくなつたと思つたら、学園の教師になつてゐるわ、千雨さんの執事だなんて！？」

「出席を取ります。相坂さん」

「聞きなさい！！」

教室内はHRすら始まらず、出席すらも確認されないでいる。

「ねえ、千雨ちゃん。止めなくていいの？」

「修羅場だ修羅場」

知るか。委員長の執事なら戻ればいいだろう。それで万事解決だ。私の平穏な学園生活に向けて一歩戻れるわけだからな。

「お世話になりました？ 新しい主人を探しますので失礼します？ 大変勉強になりました？ 探さないでください？ あのような置き手紙を残して何をしていたのです！？」

「あやか様。申し訳ございません。私、雪広家に仕え何年間か……。とてもではございませんが、その仕事量に日々驚いていたのでございます。私を含め、多数のメイドや、執事の使用者の方々が無理しておりますが、私はついていけなかつたのでございます」

「どこがですか!？ あなた以上に働いていた者はいなくてよ!？  
アレほどの仕事をして平然とし、誰よりも遅く寝て、早く起きて、  
異例ではあったけど、あなたが執事長になる日は近かったと言っ  
に!！」

「これは失礼しました申し訳ございません。私、その事をお嬢様は  
知らないかと思い、嘘をつきました。実は、旦那さまから執事長就  
任の打診があつたので辞めさせて頂きました」

「何故!？」

「私は執事長という役職には興味がありません。仕える主人の為だ  
けに働きたいのでございます」

「~~~~~ほお~~~~~」

「……まあ、立派かもしれないが。」

「雪広家は素晴らしい名家でございます。しかし、それ故に、あや  
か様に仕えるのは私一人ではなく、他にも多数仕える者がいます。  
私は主人を独占したいのでございます」

「~~~~~ほおおお~~~~~!」「~~~~~」

立派……立派なのか？ ある意味、危ないヤツなんじゃないか？  
普通、みんな仕事で仕事を分散した方がやりやすいだろうに。

それほどまでに、前田は一人で仕事をするのが好きなのか？

「……戻りたくなったらいつでも言いなさい。その時は専属で雇わせてもらいますわ」

「その願いは難しいかもしれませんが」

前田が出席簿を開き、書き込みながら歩いてコチラに向かってくる。出欠確認が進まないの、目視確認に切り替えたのだろう。しかし、その歩みは私の横で止まる。

そして、委員長の方をキリツと視線を投げて言った。

「何故なら、今のお嬢様が放してくれませんので」

「そこでコツチに振るなーっ!!」

「…………ほおおおおお…………!!」「…………」

「千雨さん!? くっ…………手強いですわね…………」

何がだ。さっさと連れて行けこんなアホ執事。そして首輪でもつけて縛りつけておくんだな。

「さて、欠席はなしですね。しかし、あなたもお久しぶりですね。ザジさん」

「…………ん」

サーカス人間のザジとも知り合いかよ。よく喋る前田と、全く喋らない留学生のザジ。どこで知り合ったのかは知らないが、組合せと

してはいいのかもしれない。

どこでもいいから、私以外のところへ再就職してもらいたいものだ。

「はいはい！ 前田先生は彼女いるんですか？」

「残念ながら、特定の女性とお付き合いはしておりません。私は執事ですので、お嬢様が第一優先になるのでございます」

「あ、じゃあ私でも雇えますか？」

「正直に申し上げて難しいかと思われます。しかし、何らかの要因で、釘宮さんが多いなる力を得た時、雇えるかもしれません」

「え？ 前田先生くきみとも知り合いなの？ 何で名前知っているの？」

「覚えましたから」

いつだ。

さっき出席簿を見た時だけでか？

「じゃあ、私の名前は？ フルネームで！」

「明石裕奈さん」

「「「「「おおおお〜!」「」「」「」

「私から見て、その右隣りに座っていらっしやるのが、お嬢様、その反対に座っていらっしやるのが絡繰茶々丸さん。その後ろがエヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウエルさんですね」

「っ! (…………ギリッ)」

「「「「「凄ーい!」「」「」「」

「え、エヴァンジェリンさんの名前ってそんなに長かったの?」

「エヴァンジェリン・アタナ……何とか? とにかく前田先生凄ーい!」

うるさいクラスだ。

しかし、右後ろの方から歯ぎしりが聞こえてきたぞ、気の所為か?

キーンコーンカーンコーン

「自己紹介はこれぐらいしておきましょうか。では英語の授業ですな」

「では、この訳を……ザジヤン」

「……………」

「はい正解です。この様に動詞が」

今、本当に答えたのか？

授業は進んでいく。ザジの解答は置いといて、非常に教え方が上手いと思う。

しかし、数分間で頭が良くなるほどの知能は生憎持ち合わせていない。

指されても答えられる自信は……

「では、次の訳をお嬢様」

絶対追いだす。

しかし、簡単な訳で良かった。

「……………アンは冬休みに家族旅行をするつもりだ」

「実力を隠されるのですね。まあお嬢様の考えもあるのでしょう。え〜訳は合っています。訳す時にはただ日本語に直すのではなく、物語を考えましょう。そうすると自然な訳が出来ます。例えばここは『アンは冬休みの家族旅行を心待ちにしている』等ですかね。ただの教科書と思ってはつまらないでしょう。嫌々やるより、楽しんでやって行きましょう」

予想通り、休み時間になると話題はアホ執事一色になっていた。私は次の授業の準備をして席についていた。

「いやあ、前田先生はカッコいいし、言う事が違うね」

「ハーフなのかな？」

「黒髪だけど、青い目してたからね。そうなんじゃない？」

「名前からしてハーフだろうけど……でも、いいんちよの家からは  
「逃げ出したんですわー！」

「……回想シーンいつとく？」

「ええ！ あれはそう、約10年ほど前でしたわ……」

別に聞きたくないぞ……ここで話すなよ……つたく。

「え、会えないってどうゆーこと？」

「……残念だけど……あやか……」

私は弟が出来ると、嬉しさのあまりはしゃぎ回っていました……。  
結果は今に至るわけですが、あの時は……とにかく落ち込んでいま  
したわ。

その時に私のところにやって来たのが前田でしたわ。

「本日からお嬢様の身の回りのお世話をさせて頂くことになりました。  
前田・ヴァンデンバーグ・政宗と申します」

「……そう」



「お嬢様。コチラを差し上げましょう。特別ですよ?」

渡されたのは1枚の写真でしたわ。見向きもしないで返そうとしましたわ。

「今はこんなの……」

「元気を出してくださいませ。お嬢様が笑っていないと、私を含め家中の者、いえ、世界中の者が心配なされます」

その言葉に、私は写真を突き返すのを止めて、  
一目だけでも見てみようと思ったのです。そこには……

「……これは!? 誰!? 誰ですの!?!」

「私でございますお嬢様」

写っているのは愛苦しい少年。その写真を見て、すぐに安易な想像が出来ましたわ。「弟がいたらきつとこんな……」それほどに可愛らしかった。

その写真の裏には数年前の日付けが書かれていましたわ。

「今すぐこの姿にお戻りなさい前田!」

「ん……お嬢様が元気になったら考えましょう」

「もう元気になったわ! さあ今すぐこの写真の姿に……!」

「……。考えましたが元に戻るのとは不可能かと存じますお嬢様」

「嘘を付きましたのね!？」

「ですが、元気になられましたね。では、お茶にいたしましょう。実は私、お菓子作りの天才でもあるのですよ?」

今思えばそれはそうだと理解しましたわ。

子供ながらに不思議な考え方を持っていたものです。

嘘を付かれた事には、不思議と腹は立ちませんでしたわ。小学年を4年ほど過ごした時も。

「前田! また私の、し、下着を洗濯しましたわね!？」

「それはしますとも……はっ! これは失礼しました! 匂いを嗅ぐのを忘れておりました!」

「ち、違いますわ! メイドに任せるから良いと言っていますの!」

「……左様でございますか」

何かにつけて前田はワザとふざけてみせて、私の世話をしようとしていましたわ。今の私があるのは、前田のおかげ。それは分かっています。前田が仕事を全てこなせる人間で、全て一人でやりたいたとは考えても見ませんでしたわ。

「あやか、前田君を執事長にしてもいいかな？」

「お父様、前田が執事長になったら、もう会えないのですか？」

そう、また会えなくなるのかと思いましたわ。

大事な人となっていた前田は、出来るはずだった弟と同じぐらいかけがえのない存在になっていましたわ。

「会う時間は少なくなるかもしれないけど、前田君は優秀だ。何でも出来るスーパーマンだ。あやかも大きくなつたし、分かるだろう？」

「会えなくなるわけじゃないなら良いわ。我慢いたしますわ。その代わり、私が社会に出る頃には返して貰いますわよ？」

そう、前田はその実力を買われて、執事長の座に就こうとしていた。私の専属から家を取り仕切る存在になるうとしていたのです。それが数ヶ月前の事。

だからこそ、あの手紙が数ヶ月前に前田の部屋に置かれていたのは衝撃的事件でしたわ。

【お嬢様へ】

「突然ですがお世話になりました。お嬢様には沢山のメイド・執事の方がいらっしやいます。私、前田は新しい主人を探す旅に出ます。この屋敷での事、非常に勉強になりました。では、探さないでください。ばいちゃ。」

【前田・ヴァンデンバーグ・政宗】

「それでいなくなっちゃったんだ」

「『ばいちゃ』って……最後までふざけ倒して行ったのか……」

「執事長って凄いの？ お給料とかさ」

「執事長は、時にはお父様の秘書としても働くので、その忙しさは尋常ではありませんわ。お給料もそこらの会社の重役よりも上かと  
思いますけど……」

「私はお金は気にしませんが」

「前田！ いつからそこに……何か用ですの！？ もしかして、戻  
る決意を？」

いや、用というか……お前らも戻れ、座れ。

「あやか様。席にお着き下さいませ。もう数学の授業の時間です」

数学もお前が担当するのか。

【学園長室】

「高畑君、ネギ君が来るまであと2ヶ月ほどじゃがどうかのう？」

『1か月ほどで戻れるでしょうから、間に合いますね。では』

電話を切り、麻帆良学園の学園長である近衛 近右衛門は自分の髭を撫で、ソファアに座る少女に声をかけた。

「ふおふおふお、どうしたのじゃ？」

いつもなら早く早くと言っておったではないか？」

「ふんっ、奴の息子よりも今日から担任になったあの執事はなんだ？」

「教員免許を持っておったしのう、どの教科も問題なく教えられる上に、雪広家の執事をしておったそうじゃ。それからしばらくは野良執事をしていたそうじゃが、かなり優秀でのう……何か問題があったかのう？」

「出席簿には私の名前がどの様に書いてある？」

近右衛門は立ち上がり、本棚から出席簿のファイルを取り出した。

「ふむ……2-A……こうじゃな『Evangeline A. K. McDowell』」

「ジジイ、何を隠している？ あの執事は私のミドルネームも知っ

ていたぞ」

「……ふむう、隠している事は何もない。前田君は教員として採用されただけじゃ。高畑君がよく出張に行ってしまうからのう。高畑君を副担任にして、担任を前田君。ネギくんが来たたら前田君を副担任にして、高畑君をフリーにしようと思ったのじゃが……」

嘘は言っていない。

近右衛門の言葉に少女は苛立ちを隠さずに学園長室を去って行った。

「エヴァンジェリンの名前を知っている男……しかし魔力や気は感じません……少し調べてみるかのう」

夕日に照らされながら、執事と女子学生は帰路についていた。

「お嬢様。本日の夕食は何がよろしいですか？」

「お前が寮で作るのはフランスだか、イタリアだか知らないけど懲りすぎなんだよ。弁当も気味が悪いぐらい綺麗だしよ」

「恐れ入ります。しかし、お嬢様には敵いません」

「……お前って何でも作れるのか？」

下手な世辞を無視して女子学生は隣の長身の細身の男に聞く。  
不可能な事ぐらいあるだろう。そう思っただけの軽い質問だった。  
しかし、執事服の男は自信があるとも、不安とも取れないような、  
さも当たり前かのように答える。

「御要望があれば何なりと」

「焼き魚、白いごはん、味噌汁は？」

「和食は得意分野にございます」

「じゃあ、昨日のは？」

「フレンチでございますね。得意分野にございます」

「何が不得意なんだお前は……。何で執事なんてやってるんだ？」

「本当は料理人になりたかったのでございます」

「答えになってねーよ」

第02話「少し過去の事でございます」(後書き)

お客様、感想は随時受付中でございます。



第03話「子供先生の噂でございます」(前書き)

まだ出て来ないネギ坊主。いつ出てくるんだ君はw

### 第03話「子供先生の噂でございます」

#### 【ある日の夜の事】

「ハアハアハアツ……！」

一人の女子生徒が桜並木、通称【桜通り】を駆け抜ける。部活の練習かと思いきや、その姿は制服。制服姿で競技する運動部というのはいないだろう。そして、手には学生靴が激しく揺れ動く。尚更のこと、部活などの練習では無い事が分かるだろう。

何故彼女は走るのか？

そこに道があるから？

門限に遅れるから？

無性に走りたくなったから？

そのいずれも正解ではない。では急ぎ走る理由とは何か？  
答えは彼女の後ろに迫る黒い影だった。

「キヤアツ！」

ほんの僅かな段差、それが彼女の足を捉えていた。転ぶ彼女は擦り傷の痛みも忘れていたのかのように振り返る。そこには消えることのない黒い影。

「あ、ああ……イヤアアアアツ……！」

夜の桜並木に悲鳴が上がっていた。

【女子寮・長谷川の部屋】

「むっ！」

「何だよ？」

前田は何を感じ取ったのか知らないが、真面目な顔をして窓を開けた。

「お嬢様……」

「だから、何だよ？」

「綺麗な満月にございます」

「……そうか」

どうでも良いことに反応しやがって、こっちはお前の出した宿題やってるんだよ。

「あ、そうそう。洗濯物ですが衣装ケースに収納してございます」

前田は私の机の脇に紅茶とクッキーを用意してそう言った。  
コイツ……またやりやがったのか。

「おい前田」

「……お嬢様が名前で呼んでくれるようになって1ヶ月ほどになり  
ますでしょうか？ 呼ばれる度に私、喜びのあまり胸を締め付けら  
れる思いにございます。これは恋なのでしょう？ いえ、それだ  
けはなりません。お嬢様はお嬢様であり、私は執事。これは叶わぬ  
恋！ ああ、しかし苦しい！ この気持ちは一体……！！」

「残念ながら絞め付けられているのは毎度のことながら私の両手に  
よってだ……また私の下着を勝手に洗ったんだろう？」

「ああ、なりませんお嬢様！ その様に掴みかかられても、私の気  
持ちは変わりません！ そう、私の気持ちは移り行く季節の様なも  
のにございます！」

「人の話を聞け！！ それに気持ちも変わって行ってるじゃねーか  
！！」

「これは一本取られました。流石はお嬢様」

このアホ執事……。

私は毎回ながら洗濯を勝手にする前田に切れる。  
怒っても流されるから仕方のないことなのだが、割り切れない気持  
ちもあると言っものだ。

「いい加減に洗濯からは手を引けよ！」

「お嬢様の年頃ですと、恥ずかしいとお考えになるかと思いますが

」

恭しく前田は頭を垂れる。

どうせ、「執事ですので当然の仕事です」とか、「私の洗濯物とは  
分けさせて頂いております」とか言い出すんだろう。執事なんてい  
らないってーのに。

なんて思ってる私はまだまだ前田の事を理解していなかったのだらう。コイツはこんなことを言っただけじゃなかった。

「御安心ください。匂いは嗅いでおりません」

まあ、当然のように斜め右上に行く言葉を吐いてきた前田には、腹に蹴りを入れてやった。全然スッキリしない。委員長のところに行った時もそんな事を言っただけだっけか？

「これは失礼いたしました。嗅いだ方がよろしかったのですね？流石はお嬢様、常人とは違った性へ……感性をお持ちでいらっしやる」

「それも違い！！」

鳩尾に入っているはずの蹴りに、前田は笑顔でボケ続ける。どうしたらいいんだ……。

「そう言えばお嬢様、お伝えするのを忘れておりました」

「……何だよ？」

「3日後、新しい担任の先生が来るそうです」

「は？ だっってお前が担任になっただけか……。何をやったんだ？」

「お嬢様、素晴らしいほどの疑いの眼差しにございます。疑われた者が常人ならば、怒り狂いお嬢様に襲いかかるほどでございますよ」

つまりお前は普通じゃないってことだ。知ってるけどな。

「話を戻します。聞くとところによると、その方はオックスフォード

を出た優秀な方だそうでした、3学期の間、研修と言う事で2・Aを担任するそうです。ちなみに年齢は10歳」

「何だつて？」

「オックスフォードですよ。オックスフォード。あ、ちなみにオックスフォード大学という大学は存在しませんよ？ オックスフォードという町にある30以上の大学を総称してオックスフォード大学と呼ぶのでございます」

「へ〜……ってそこじゃねーよ！ 10歳！？ 10歳って言ったよな！？ ガキじゃねーか！！」

天才子供教師か……嫌味なガキだったつら面倒臭いな。

「どうやら私は副担任になるようです」

「まあ研修の間だけならいいか……3年生になればオサラバって事だろ？」

「恐らくはそうなるかと……そこで、お嬢様。メガネを外しましょう」

「その流れは予想してなかったし、意味が分からん」

顔が見えないから怖くない。顔が見えるから怖い。

その気持ちは変えられない。

メガネを外すのは今の千雨の時ではなく、ネットアイドルとしての「ちゅ」の時だけだ。前田も流石に私のもう一つの姿は知らないだろう。

「ですが、この【ちゅタン】のお嬢様も素晴らしいかと思いますが」「うばぁー……！」

「お嬢様、奇声を発するのはお止めください」  
「てめえっ！ どこでソレを！！？ 説明しろ！」

前田は私のデジカメをレビューで見回しながら、平然としている。

「こちら、1200万画素で広角レンズを搭載したコンパクトデジタルカメラ。ズーム倍率は5倍と、遠くを取るには適しておりますが、御自身を撮影されるお嬢様には問題ない事でありましょう。気になるお値段は……」

「カメラの説明じゃねーよ！ 私の部屋にあったはずだろう！？」

「ええ、お部屋を掃除させて頂いた時に見つけまして……私、機械には疎いのですが、見つけてしまった以上、そのまましておくのも失礼かと思ひ……」

「失礼にもほどがあるだろうが！！ それにめちやくちや詳しいじやねーか！」

「とにかく、この姿のお嬢様の方が輝いているかと存じます」

「ぐっ……！！……ほ、本当か？」

それは隠してあったもう一つの私の姿を見ての、初めての感想だった。

ネット上では何件も何百件も感想を貰う。でもそれはその顔しか見られてないからだ。補正しまくりの写真をカワイイカワイイと言われているだけだ。

だが、目の前にいる執事の前田は見比べて、その上でもう一つの顔を輝いていると言う。

「本当でございます。では早速……」  
「え？ ちよっ！…!？」

次の日。

キーンコーンカーンコーン

「や、やっぱ帰る!」

「お嬢様。予鈴が鳴り響いております。このままでは遅刻になって  
しまいます」

「前田先生おはようございま〜す」

「あれ？ 隣にいるのは……長谷川？」

「メガネ取ったんだ。似合っ〜」

終わった。またもや終わった。私の人生この若さで終わりすぎじゃないか？

私は諦めに近い顔で隣の執事を見やる。

そこには爽やかな笑顔を浮かべる男がいた。

誰でも良い。コイツを亡き者にするか、引き取ってくれ。



【放課後】

「本日は何に致しましょうか？」

「何でも良い……」

今日の晩御飯の献立を聞いてくる執事を私はシッシッと、掃うように答える。

まだ教師としての職務があるであろう前田は食材を買ってから帰ってくる。私は先に帰って僅かな解放感を味わう。少し前まではこれが許されず一緒に帰り、晩御飯の準備等が整ったら前田は一人学校に戻り、残りの職務をこなしてまた帰ってきて晩御飯開始と言った形式を取っていた。

「お嬢様が、暴漢にいつ襲われるか心配でなりません」との事だったのだが、この麻帆良学園では見回りの教師もいるため、そういった心配が無いに等しい。かなりの時間を要したが、前田は遂に折れて、今の形式になった。

それに、この前田、中々に人気が高い。放課後も帰るのに一苦労するほどに相談事などが集中する。最近は落ち着いてきたのかもしれないが……っと、今日も来たな。

「前田先生。屋上にてお待ちいたしております」

「絡繰さん。屋上ですね分かりました」

ロボの相談事と言うのも興味が無いわけではないが、一秒でも長く解放感に満たされるため、私は先に帰ることにした。

Side エヴァ

「来られるそうです」

「そうか」

屋上で待つ私の下に茶々丸がやって来た。

私の名前を知っている得体のしれない執事。生徒の人気は中々高いようで、話をかけるタイミングが取りづらかったのだが、遂に呼出すことに成功した。

ガチャ

それほど待つ事も無く、執事服の男はやって来た。

「前田、聞きたい事がある」

「これはこれは、キティさんからの御相談は初めてでございますね」

「殺すぞ」

「可愛らしい女性がその様な言葉遣い。いけません。しかし、屋上に放課後呼び出されるとは……。よもや！ いけませんエヴァンジエリンさん。私は教師です。告白などはお止めください」

「何を勘違いしている！ 何故私の名前を知っているのか言え！」

茶々丸は直立不動で控えている。

しかし、いつでも攻撃、反撃出来るように言いつけてもある。

「エヴァンジェリンさんのお名前ですか？　これはおかしなことを、かなりの有名人ではございませんか」  
「やはり私の事を知っているんだな？」

ダーク・エヴァンジェル  
闇の福音の名前を。

「はい、私も応援と言う気持ちで会員にさせて頂きました」  
「は？」

会員？　何を言っているんだコイツは？

「こちらでございますね？　【エヴァたんを愛でる会】通称EMK」  
「何だそれはー！！」

前田は携帯電話の画面にサイトを表示して、私に見せてくる。  
かなり凝った作りのサイトは、私の写真がデカデカと表示されており、【エヴァたんのプロフィール】という項目に名前がフルネームで入っていた。

「（マスター……可愛い）」  
「誰だ作ったやつはー！！」  
「誰かは分かりませんが、会員ナンバー1番を取らせて頂きました」

「それはお前が作ったんじゃないか！？」  
「そう言えば、昨日作った様な気がします」

駄目だ。ペースを握られている。

「茶々丸！」

実力行使に切り替えて、茶々丸が執事を抑え込もうとする。しかし、そこに前田はいない。

「このスリーサイズの欄だけは埋めようにも憶測でしか書けませんので、どうか教えて頂けますか？」

「っ！？」

前田は私の横に着き、携帯の画面を私に見せて、セクハラ発言をしている。しかし、携帯を持つ手とは逆の左手は、私のクビに添えるように置かれている。

そして、前田はいきなり真面目な顔になる。

< 私は敵ではございません。私が敵になるとしたら、あなたが悪い方向に行動する時にございます。どうか学園生活を乱さぬようにお願いいたします。例えば、満月の夜に血を吸われるですとか……ね？ 【闇の福音】さん >

その声は口から耳ではなく、念話として脳から脳に響いてきた。

「き、貴様！ やはり知って……！！！」

「コレは差し上げましょう。お嬢様はいららないそうなので持て余していたのでございます。毒だとかの類は入っていませんのでご安心を」

そう言って、前田は私の手に小さな紙袋を渡してくる。

そして、前田は屋上を後にした。

「ま、マスター……」

私は紙袋の中からクッキーを取りだし、一枚口に運びこんだ。

「結局、何者かは分からず終いか……美味しいな」

Side out

「ふむう……」

「どうしたんです学園長？」

デスメガネの異名を持つ高畑教諭が学園に戻っていた。もうすぐ英雄の息子であるネギがこの学園にやってくる。それなりの試練を与えて、立派に育ってほしい。そう願うのだが、一枚の資料を手に学園長は唸っていた。

「高畑君、コレを見てくれ」

「コレは？ ……何です？」

高畑教諭の笑顔が消える。

手渡された紙は一枚。素性調査の紙だった。対象は執事であり教師の前田だ。

前田・ヴァンデンバーグ・政宗。

執事の家系に生まれ、英才教育を受け、最終学歴はオックスフォード。そして、雪広家に就職。自主退職をして、長谷川千雨の執事となり、学園に流れ着いた。

と言うのは前回までの調べで分かっていたこと。調べと言っても履

歴書に書いてあったことだ。深くは調べなかった。

しかし、深く掘り下げて調べてみることに1カ月余り、彼を知っているのは雪広家の人間ぐらいで、同期の人間は彼の事を何も知らない。確かに学歴などに問題は無い。しかし、人間関係は雪広家からしか確認できなかった。

「今のところ、優秀な執事先生としか見えんのじゃがのう」

「……調べても何も出て来ないなら、出させるしかないですね」

「ネギ君も明後日には来るし……慎重にのう？」

「分かりました」

第03話「子供先生の噂でございます」(後書き)

感想は随時受付中でございます。

第04話「吸血鬼の幼女でございます」(前書き)

ネギ登場!! でもあんまり活躍しない。

前田が空を飛ぶ



## 第04話「吸血鬼の幼女でございます」

「お嬢様。メガネを外さないのですか？ 髪も下ろさずに……」  
「こっちの方が落ち着くんだよ。【ちこ】の時だけで良いんだよア  
レは」

「左様でございますか」

今日から新しい担任のガキが来るらしい。  
まあ私には関係のない事だ。

電車に乗っていると隣の車両から悲鳴が上がった。

「何だ？」

「あちらの車両に乗っている女子生徒の方々のスカートが突然捲れ  
あがりました」

「……行かないのか？ パンツだ。とか言ってる」

「……お嬢様。私はパンツが好きなのではございません。帰りまし  
たら一度話し合いますよ」

必要ねーよ

『次は〽麻帆良学園中央駅〽』

「着きますね。さて、今日もお嬢様をお姫様抱っこで走りますか」

んなこと一回もした事ないし、させる気も無い。

「では、お嬢様。私は一足先に行きます。遅刻だけはされぬように」  
「ああ、大丈夫だよ。さっさと行け」

教室に入ると、いつものように愉快で能気なクラスメイト。陸上部の春日や幼女姉妹が入り口から教壇までにトラップを仕掛けているのが見える。どうせなら前田が引つ掛かればと思うのだが、アイツの事だ。噂の新任教師を生贄に自分は五体満足で平然としている事だろう。

コンコンッ

ドアがノックされる。例の新任教師が来たのであろう。  
ガラッ

「失礼しま……」

落ちてくる黒板消し。しかし、それは教師に当たらず空中で止まる。それは白い手袋によって掴まれていた。

「黒板消しトラップですか……いや、これはこれは。ネギ先生、少々お待ちを」

「は、はい」

ざわざわ ざわざわ

教室を開けたのはスーツに身を包んだ子供。前田が言っていた子供教師だろう。しかし、先頭切って入ってくるのは前田だった。一步教室に足を踏み入れると頬笑みを浮かべて、子供教師を再度廊下に

戻した。

「春日さん、鳴滝さん姉妹、それにこの計算された流れ、チャオさんですか？」

「〇ハレテラ（汗）」

前田はロープを切り、落ちてくる水入りのバケツをキャッチ。連動して飛んでくるオモチャの矢を全てキャッチした。

「〇〇〇〇おお〜！！」「」

「ふむ、67点と言ったところでしょうか？ 気絶するぐらいの悪戯が丁度いいかと思えます。次回からはより良い悪戯を期待しております」

仮にも教師の台詞とは思えん。

「では、ネギ先生どうぞ」

「し、失礼します」

「今日からこの学校でまほ……英語を教えることになりました。ネギ・スプリングフィールドです。3学期の間ですけどよろしくお願ひします」

「〇〇〇〇キヤアアッ！！ か、かわいいいい〜！！」「」

「何歳なの！？」

「えっ！？ その10歳で……」

「どっからきたの！？ 何人！？」

「ウエ、ウエールズの山奥の……」

「今どこに住んでるの!？」

「いや、まだどこにも……」

「ねえ君つてば頭良いの!？」

「い、一応大学卒業程度の語学力は……」

バンバンッ

騒がしい教室に突然机を叩く音が響く。委員長だ。

「皆さん席に戻って先生がお困りになってるでしょう？ ネギ先生はオックスフォードをお出になった天才とお聞きしておりますわ。

教えるのに年齢は関係ございません。どうぞHRをお続けになってください」

「は……どうも」

「おい、前田。良いのか？ お前の人気全て持って行かれたんじゃないか？」

「お嬢様の想いだけ受けられれば満足でございます」

じゃあ何もいらないうてことか。

「委員長何いい子ぶってんのよアンタ！」

「あら……いい子なんだからいい子に見えてしまつのは当然でしょうっ」

「何がいい子よ、このシヨタコン」

「なっ！ 言いがかりはお止めなさい！ 私は前田がいれば……つて何を言わせるんですの!？ あんたなんかオヤジ趣味のくせにいー!! 知ってるのよ あなた高畑先生の事……!!」

「うぎゃー！！ その先を言うんじゃないーこの女ー！！」

いつものように犬猿の中に見える神楽坂と委員長のやり取りが冴えわたる。つまり、騒がしいってことだ。

それからと言うもの。前田は担任から外れたと同時に私の傍から離れることが多くなった気がする。

いや、別に良いんだぞ？ そう何も困らない。

……何も困らない。そう、困らないけど……。

ほら、いきなりいなくなると、

菓子とかが用意されてないから口が寂しいっていうのか……。

いや、いても困るだけだよな。この前の高等部とのドッジボール対決の時も……。

「お嬢様〜！！ そこです！ トライアングルアタックがなんです

か！ 反撃です！ 今必殺のサンアタックでございます！！」

「うるせー！！（ポコッ）」

「長谷川OUT〜」

「くっ！ 申し訳ございません。私が出ていればこのような屈辱は…  
…！」  
「と言いつつウレタン製のバットを構えているのは何でだ？」

「……ルールでございますから。さあお尻をコチラへ」  
「それは笑ってはいけない時に笑った場合のルールだろうが…！」

うん、どうかしてるな。思い出してみたら期末試験の時もそうだったな。

「お嬢様、まだ時間はございます。冷静になれば解ける問題にございます」

「……（カリカリ）」

「お嬢様、残り時間2分！ ……嘘でございます」

「……（カリカリ）」

「お嬢様……お嬢様！！ そんな！ こんなに血が流れてるのに…  
…！」

「……（カリカリ）」

「お嬢様、そこは昨日進研ゼミでやった問題でございます」  
「……（カリカリ）」

「お嬢さ……」

ガラッ！！

「前田先生！！ 試験官が生徒に話し掛けてどうするんですか！！」

「これはこれはしずな先生。お気になさらずに」

「しずな先生」

私は手を上げて、サムズアップさせ、その手を首の前で横にスライドさせた。

しずな先生は理解したらしく、メガネを光らせコクリと一度頷いて、前田の首根っこを捕まえて連行して行った。

「お嬢様~~~~~あああ……」

「……（カリカリ）」

うん。どう考えても問題あるのは、あの執事。前田だ。だから私が寂しいとか感じるわけがない。帰ってネット三昧にしよう。と思ったのだが、今日は……。

「お嬢様。本日も少々出かけてまいります。お食事も冷蔵庫に用意してございますのでレンジで……」

「チンして食べれば良いんだろ？ さっさと行けよ」

「……申し訳ございません。あ、それと本日は大停電の日です。レンジでチンはお急ぎくださいませ。では、失礼します」

そう言って苦笑した前田は去って行く。

「千雨さん。何かあったんですの？」

「委員長……いや、別に。私、帰るから」

そう、大停電の日だった。

だから？　って思うか？

いやいやいや、説明したくないが説明が必要か。

前田が私の部屋に住んでいると言う事だ。

……分かった。全部言うよ。

前田が住み着いているって事は、今日は私しかないと言う事だ。

普通ならルームメイトと過ごすって感じかもしれないが、そうも行かない。

ネットで時間を潰そうにも電源が無い。

バッテリー？　そこまで長く持たないんだ。買い替え時かな。

怖いわけじゃない……ただ。

「はい、懐中電灯に蝋燭ね。700円」

「あ、はい。スミマセン」

「失礼、懐中電灯もう一つですわ」

「はい、じゃあ1200円ね」

「委員長……何だよ？」

「気分がすぐれませんが。千鶴さんと村上さんに迷惑はかけられませんが。今日は千雨さんの部屋に置いて下さらない？」

わけ分かんねーよ。私なら迷惑かけてもいいってか？



……でも……。

「仕方ねーな。前田の飯でも食いたいのか？」

「そ、そう言うわけではありません！」

「レンジでチンだぞ？」

「だから違います！」

Side エヴァンジェリン

「……やりおつたな小僧……フフツ……フフフ、期待通りだよ。流石は奴の息子だ」

「あ、あわつ脱げっ!? ごめんなさい！」

「や、やったぜ兄貴！ あのエヴァンジェリンに打ち勝ったぜ!? 信じられねー!!！」

「っ!!! いけない!!! マスター戻って!!！」

「何!?!」

バシヤツ!!!

突然、橋のライトがエヴァンジェリンを照らす。停電が復旧して行く。

「予定よりも7分27秒も停電の復旧が早い！ マスター!!！」  
「ちっ！いい加減な仕事をしおって!!！」

ちりつと微電流が来た。ここまでか……。呪いの効果が戻る。  
バシンッ！！

「きゃんっ！！」

『危なかったなーガキ』

『もう一カ月になるぜ？ 俺について来たってイイこたねーぞどっ  
かいけ』

『登校地獄！！』

『あっはっはっはっ！！ 似合う！ 素晴らしく似合ってるぜエヴ  
アンジェリン。くっくっく、ひーひー【闇の福音】が……ぷっ』

『お前が卒業する頃にはまた帰ってきてやるからさ。光に生きてみ  
ろ、そしたらその時お前の呪いも解いてやる』

……ウソツキ。

パシッ

「え？」

「光栄に思っして下さい。お姫様抱っこするのはこれが3人目でござ

います」

執事の前田？ 何故飛んで……いや、杖すら持っていない。魔力媒介も何も……。

「ま、前田先生!？」

「え!？ 前田先生!？ 本当だ!」

「こんばんわ。ネギ先生。ナギ・スプリングフィールドの息子。生徒に手を出すのは些か問題があるかも知れませんが……相手がエヴァンジェリンでは仕方が無いでしょう。しかし、そちらのお姫様を仮契約者に選ぶとは……ふむ。今日は見逃しましょう」

「貴様、何故私を助けた!? それに何故飛んでいる!？」

「それは」

「それは？」

「私が教師で執事だからです」

「待て、助けた理由しか分らん!」

「執事は飛ぶものでございます」

「ぶっ飛んでるの間違いだろう!！」

「まあ騒がずに。ではネギ先生。おやすみなさいませ」

「これは! 影を使った転移魔法!? 貴様一体……!！」

「歩けますか？」

「大丈夫だ。おろせ」

「では部屋までお運びいたしましょう」

「話を聞け！ さっさとおろせ！」

「ふむ、なるほど。かなりデタラメな呪いをかけられていますね」

「……貴様。何故下ろさないかと思えば、私の呪いを解析していたのか？」

「はて？ 私は裸の幼女をお姫様抱っこして興奮しているだけです  
が？」

「誰が幼女だ！！ 教えろ、お前は何者なんだ？」

「仕方ありませんね。私の名前は前田・ヴァンデンバーグ・政宗。  
長谷川千雨様の執事で、2・A組の副担任でございます」

「……いや例えば、紅き翼のメンバーだとか……魔法使いだとか……」

「本当は野球選手になりたかったのでございます」

「聞くなと言う事か？」

「エヴァンジェリンさん。その様な格好で恥ずかしくないのですか？  
それとも、仮にも教師である私を誘惑しているのですか？」

「分かった。何も聞かん。（今はな）」

「私のストライクゾーンはエヴァンジェリン。アナタからしずな先生  
生ぐらいまでです。遊びで誘惑しているとしたら……覚悟してくだ  
さい！」

「本気でボケているのか!？」

ガチャッ

「良かった。マスター戻っていたのです……ね。お、お邪魔しました」

「うおおおいつー!!」

【裸の私】 + 【仮にも教師の前田】 = 【過ち】  
そんな方程式は成り立たん!!

「気を使わせてしまいましたね。では続きを」

「ボケるな!!」

「ふむ、アナタでも大丈夫かと思ったのですがね。学校にはサボらず来るんですよ？ では おやすみなさいませ」

「私でも？」

そう言つて、執事の前田は去って行った。外での会話が少し漏れて聞こえてくる。

「ああすみません絡繰さん。事を済ませましたのでどうぞ、匂いも残ってないかと思いますが、シーツのシミ等だけは申し訳ありません」

「ま、マスターをよろしくお願いします」

ばんっ！

「ボケてないでさっさと帰れー!!」

Side out

「ちょっと千雨さん！ そのケーキは私の！！」  
「うるせーな。沢山あるだろうが。そんなに前田が好きなら告白でもすればいいじゃねーか」

パッ

「おっ、停電が復旧したな。これでレンジも使える」  
「どうして、前田は千雨さんのところに……はぁ」

こっちが聞きたい。  
ワンクリック詐欺だあんなモノ。

結局、レンジでチンする前に停電になり、晩御飯は今からと言う運びになっていた。晩御飯を食べ終わり、私達は寝ることにした。

「もう寝るぞ、アンタがソツチ。私がコツチ。これで良いだろう？」  
「ええ、……い、一緒に寝ませんか？」

「何言ってるんだよ。あ、こら引っ張るな」  
「良いじゃないですか」

カチャッ

「……………」

「……」  
「……」

「ただいま戻りました。まだ起きていらっしやっただのですね？」

沈黙を破ったのは帰って来た前田だった。

「あ、ああ。もう寝るところだ」

「左様でございますか……では私も一緒に」

「前田と一緒に!？」

「ねーよ。前田は自分の部屋で寝ろ」

「千雨さんは寂しいかもしれませんが、一人で寝て下さい。では前田の部屋はどこ？」

「こちらでございます。あやか様」

「だぁーもっつ! 委員長はこの部屋! 一緒に寝てやるから!!」

「お嬢様。あやか様を私の部屋で、お嬢様と私が一緒に寝るといいう選択肢もござい……」

「出てけー!!」

第04話「吸血鬼の幼女でございます」(後書き)

感想は随時受付中でございます。



**第05話「辛くても京都でござります」(前書き)**

執事になりたいあなた、

これは執事の教則本じゃありません。

執事になりたいなら真面目に執事を目指してください。

さてさて、前田に弱点はあるの？

## 第05話「辛くても京都でございます」

チュンチュン……。

朝目覚めると、横には委員長が寝ている。

昨日は大停電の日で、何故か委員長はこの部屋に泊まったのだった。

そして、前田の姿は無かった。

いつもなら……「お嬢様。何度も申し上げておりますが、寝起きはもう少し破廉恥な格好で誘って下さいませ」とかアホな事を言ってくるのだが、それが無い。ソレがない事が嬉しくもあり、他に何かがあるんじゃないか？ という不安にもかられる。

しかし、部屋のどこにも前田の姿は無い。

代わりにいるのはテーブルの上のメモ紙一枚。

そこには綺麗な筆記体の英語でツラツラと書かれているが、そんなモノは読めるわけも無く、私は何気なく裏を見た。

『流石はお嬢様。裏を読むとは流石でございます。何か後ろめたいことや、人の裏をかくことばかり考えている証でございます。誇りに思つて頂くのがよろしいかと存じます。こちらは朝食でございます。あやか様とお召し上がりになってください。』

私は職員会議と言う執事の職務ではないワケの分からないモノに御呼ばれておりますので、心苦しいのですが、本日は少し早めに出立いたします。何かご不便を感じる事がございましたら、遠慮なくいつものように『前田のアレが忘れられないの。もう一度……して？』と恥じらいながら仰っていただければ、3秒で参ります。では、

遅刻はされぬように。

前田・ヴァンデンバーグ・政宗 』

……まず、誇りに思えないし、職員会議は先生としての職務だし、いつものようにもなにも言った事がないし、3秒では来れないだろう。と、心の中で無駄な突っ込みを入れつつ、唯一まともな朝食のサンドイッチに手を伸ばす。

しかし、サンドイッチの白いパンに何やら違和感を覚える。薄らと焦げ目が文字の様に入っているのだ。そこには、三角形や英数字が並び、正解までが描かれている。また一つ取り上げると、歴史の問題が書かれていたりする。

「暗記パンかよー!!」

毎日手の込んだ事をする男だ。ちゃんと寝ているのであろうか？

74

Side エヴァンジェリン

あれは次の日のオープンカフェでの出来事だった。

「おはようございます。前田先生」

「……今日はお嬢様とやらは一緒じゃないのか？」

「これはこれは、おはようございます。絡線さんにエヴァンジェリンさん。お嬢様でしたら今頃、飲食学习中かと存じます」

睡眠学習なら聞いたことがあるが、飲食学習とはなんだ？

「よく分からんが、丁度いい。前田、私の呪いに関して思うところはあるか？ 例えば……この呪いが解けるとか」

「呪いですか……何かの文献で読んだことがございます。いや、あれはDVDでしたか……？」

解けるのか！？ このアホ執事なら、と思ったが……本当に何者だコイツは！？ というかDVD？ 呪いを解くのにDVDで解説なんてしていると云うのか？

「夢というのは、呪いと同じだそうでした」

は？ 夢？

「呪いを解くには夢を叶えるしかない。ですが、途中で夢を挫折した者は、一生呪われたまま……らしいのでございます。解決策は……」

「よく分からんが、解決策はあると言う事か。解決策はなんだ？」

「夢にときめけ！ 明日にきらめけ！！ でございます。エヴァンジェリンさん。一緒に甲子園を目指しませんか？ 夢を叶えましょう！！」

前田は私に野球のボールを放り投げてきた。私はそれを掴み、全力で投げ返した。

「アホかー！！」

「ああ、マスターがこんなにはしゃいで……」

カキーンッ！！

いつの間にか金属バットを構えていた前田は、私の投げたボールを真芯で捉えて振り抜いた。

「エヴァンジェリンさん。いけません、ハンドでございませす」

「ルールすら分かっていないではないか！！」

誰が甲子園が夢だと言った！！ ふんっ！！ 行くぞ茶々丸！！」

「はいマスター。では、失礼いたします」

ペースを握られたら終わりだ。こちらのペースで話す必要がある。

……あの男には難しいか。弱点は無いのか、あの男に。

Side out

Side ネギ

職員会議が終わり、教室に向かう途中。

隣にいる執事の前田先生に話を聞くことにしたんだけど……。

「あの……前田先生」

「はい、何でしょう？」

「昨日の夜の事なんですけど……」

「昨夜……。ネギ先生がエヴァンジェリンさんを裸にしたこと、ごさいますか？ 大丈夫です。誰にも言いません。年頃の男の子なのですから、異性の裸が気になっしょうがなく、無理矢理、と言う

事もあるでしょう」

「ち、違います！ その……前田先生も、茶々丸さんと同じく、エヴァンジェリンさんの従者なんですか？」

「私がエヴァンジェリンさんの？ 面白い発想ですね。残念ながら私は彼女の従者ではありませんよ。さあ着きました。HRを始めましょう」

この人も悪い人には見えないんだけど……。  
悪い人じゃないなら良いか……。

その後、エヴァンジェリンさんとも話し、父さんの事などを話した。エヴァンジェリンさんは父さんが死んだと思っていて、呪いはもう解けないと思っていたんだけど、生きていると知って、上機嫌に京都に父さんの手掛かりがあると教えてくれた。しかも、朝のHRで修学旅行先は京都になっているとの事。

学園長から呼び出され学園長室で話したところ、関西呪術協会というところと、ここ関東魔法協会の仲が悪く、親書を相手の長に渡す使命を受けた。京都行きが中止にならなくて良かったけど、妨害や邪魔が入る可能性もあるらしい。

S i d e o u t

「お嬢様……一大事にございます」  
「なんだよ？」

「修学旅行はハワイだとばかり思っていたのですが……」

「良いじゃねーかよ。海外なんて面倒だし、国内の方が飯も困らないし会話も通じて問題が少ないだろう？」

「ですがー！ 京都とは……神社やお寺と言う、神を祀ったりするところが多いと聞いたのですが？」

「そりゃそうだな……前田は熱烈なキリシタンなのか？」

「いえ、むしろ逆にございます。寺院や教会に入ると気分が悪くなってしまうのでございます」

「悪魔か妖怪かお前は」

「あ、別に胸に十字の杭を打たれても問題はありませんので心配なく」

「いや、それで問題がないのが問題だ。

化け物かどうか知らないが、人間なら普通は絶命するぞ」

帰りの道中、前田は少し顔色を悪くして京都行きに難色を示していた。

コイツにも弱点があったか……でも寺とかが弱点ってなんだ……？  
しかし顔色悪いな……大丈夫かコイツは？

と、思っていたら、前田はハンカチで自分の顔を拭き始めた。

「さて、今日の夕食は何に致しましょうか？」

そこには青白く汚れたハンカチと、  
めっさ気持ちのいい笑顔振りまく前田の顔があった。

「顔色悪いのはメイクかよ!!」

「当然でございます。もしかして心配をして頂けたのですか？」

いつもなら「してねー」とでも返すんだろうけど

……何故か、自然と私の声は漏れていた。

「……少しな」

「よもや！これは大変失礼いたしました。今後いらぬ心配を  
かけぬように、これだけは言っておきましょう。私に弱点と言う物は  
ございません。強いて挙げるとすれば……お嬢様が弱点でございます」

「私が？ どういう意味だ？」

「はい、執事でございますから。お嬢様がいないと手持無沙汰にな  
るのでございます。ゼンマイの巻かれない人形は、指先一つ動かす  
事は出来ません」

「大袈裟だろう？ 私は何も指示出してないし、お前も好きに動い  
てるじゃねーか」

「……左様でございますね」

また返ってくる笑顔。一瞬の間は何を考えたのだろうか？  
私はカバンを前田の背中に軽く当てた。



修学旅行出発日。

「お嬢様。起きて下さい」

「あ？ なんだよ？ ……ふあゝまだ早すぎだろつがよお……………」

私はメガネをかけ、侵入者の執事を……………侵入者？

「……………待ておい」

「はい、なんでございましょう？」

「毎回思ってたんだけどよ？ ……鍵は？」

「お嬢様。古来より言われております。【鍵は執事の前には意味をなさない】と」

「聞いたことねーよー!!」

「わ、私も初めて申し上げました！ 聞いた事もございません!!」

「何でお前が驚いてるんだよ!! ったく、朝っぱらから全開だなお前は……………もう怒る気も出てこねーよ。……………はあ、で？ なんだよ？」

「私、一応は教員なので、早めに行かないとなりません。ですので、一緒に参りましょう」

「いや、昨日も言っただろつ？ 私は別にそこまで急がなくても……………」

「さあ、お嬢様。朝食の準備が整っております」

「いや、だからな？ ……分かったよ……………ったく」

朝っぱらから騒がしい修学旅行が始まった。

あと1時間は眠れたはずだが……。

「前田、私達の3班にザジさんが入りますわ」

「あやか様。どうかしたのですか？」

「ええ、エヴァンジェリンさんと茶々丸さんが修学旅行には来れないそうで」

「……なるほど、そうでしたね」

そうでしたね？ 何か知ってるのか？ まあ、そついやロボがいなかったか……確かに一緒によくいるエヴァンジェリンもいない……。確かあの二人は同じ班だったよな？ 4人班で2人減ったから他の2人が余ってしまったのだろう。もう1人の余りになった桜咲は神楽坂の班になったようだ。

「まあ私には関係ないけどな」

「そつとも言い切れませんよ、お嬢様」

「うおつ！ いきなり出てくるなよ……どういう事だよ？」

「お嬢様の班には、私の元主人であるあやか様、溢れる母性の那波さん、クラスNo4の胸囲を持つ朝倉さん、伏兵である素朴さを売りにする村上さん。そして、そこに介入してきた謎の留学生ザジさん……どう立ち向かいます？」

「誰が何のために立ち向かわなきゃならないのか分からねーよ」

「前田！ 私なら立ち向かいますわ！！」

委員長はいつも通りだな。

「何なに？ この3班で前田先生の取り合い？ 賭ける？」

朝倉は記事のネタになるなら何でもいいのだろう。

「ふふふ、あやかったら」

那波は遠巻きに見ているだけだろうか。

「わ、私は千鶴ねえみたく大きくないから……」

村上、何が大きくないんだ？

「……」

何か言ってるのか？ ザジは何か言ってるのか？

「お茶ですね？ ほうじ茶で？ かしこまりました」

前田は聞こえたようだ。

「……ってゆーかどーでもいい。思い出したけど、私は眠いんだ」  
「修学旅行が待ち遠しくて眠れなかったのですか？」

「お前が寝かしてくれなかったんだろーが！！」

「ど、どどど、どーゆー事ですの千雨さん！！？」 前田！？」

「はい、お嬢様の寝顔はいつも愛らしくていらっしやいます」

何だか否定するのも面倒になって来た……寝よ。

Side エヴァ

「ふう……今頃奴等は新幹線か……」

「マスターは呪いのせいで修学旅行に行けず残念ですね」

「……オイ、何が残念なんだ？ 別にガキどもの旅行など」

「いえ、行きたそうな顔をしておりましたので、違いましたか」

「アホか、それよりお前行ってもいいんだぞ。行きたいんだろ？」

「いえ、私は常にマスターのお傍に」

「……ふん」

温かな陽気の中、ウトウトとしてしまいそうになる。

学園にいても何も無いが、学園敷地以外に出る事も出来ない。

呪いか……

【途中で夢を挫折した者は、一生呪われたまま……らしいのでごめ  
います】

一生呪われたまま……か。

ピンポンパンポーン

『2-A組のエヴァンジェリンさん。学園長室までお越しください』  
ジジイか……どうせ、将棋か囲碁の相手でもしろと言っただろっ。

「茶々丸、前田の事は話すな。話を合わせる様にしろ」  
「かしこまりました」

予想通りの展開だった。  
ジジイを前に私は囲碁に付き合っている。

パチッ

「ぬおっ！そこは……！」  
「待ったは無しだぞ」  
「マスターお茶です。学園長もどうぞ」

「む、すまんのう……ズズウ……エヴァンジェリンよ」  
「何だジジイ？」

「前田君をどう見る？」  
「あの執事か？ どうとはなんだ？」

パチッ

「前に言っておったではないか、あの執事は私のミドルネームも知っていたぞ」とな……何か分かったのかのう？」

「ふざけた話だ。どこで漏れたかは知らないが……茶々丸」

「はい、このようなサイトが作られていたのです」

「……【エヴァたんを愛でる会】EMKとな？」

「そこにフルネームが載っている。作成者は見つけたら生きてきたことを後悔させてやるつもりだがな」

パチッ ……カチャ

「穏便にのう……」

「ふんっ」

「しかし、あの執事がどうかしたのか？ お前が雇った教員だろうが」

「ふむ……実はのう、彼の過去がないのじゃ」

パチッ

「過去がない？ 雪広家の執事じゃなかったのか？」

「それは、間違いないのじゃが……それより以前の彼を知るものが誰もいないのじゃ。高畑君が今調べておるのじゃが……」

「そう言えばタカミチは最近見ないな。いつ頃からだ？」

「高畑先生が学校からいなくなったのは期末テスト辺りからですね」

「随分と長いじゃないか。どこまで調べに行ってるんだ？」

「海外じゃ」

ポロッ

「……あの執事。そんなにヤバイヤツなのか？」

「いや超が付くほどに優秀じゃよ。しかしのう、ネギ君にとってはイレギュラーな存在じゃ、招き入れたのはワシじゃが……ネギ君に何かが起こってからでは遅いからのう」

パチッ

「随分過保護なんだな？　立派な魔法使いにするのがそんなに大切か？」

「大事なことじゃよ……ふむ、投了じゃな……ズズウ……」

「ジジイ、ぼうやに何かあってからでは遅いと言っても、修学旅行に行ってしまったではないか」

「うむ、それに関しては一人、魔法先生を内緒で同行させておる」

あの細目の防御魔法ぐらいしか取り柄のない瀬流彦とか言う男か。意味があるのか無いのか知らんが……。まあ私には関係のないことだ。

前田は海外出身ではないな……しかし、アッチの国から何しに来たと言っただ？　目で追えないほどの動きを見せる時もあるが、立派な魔法使いステルマギと言っわけでもない。タカミチが知らないと言っなら、紅き翼の関係者でもないだろう……。あの短時間で呪いの解析もしたほどの男だ。有名でないのが不思議なぐらいなのだ。

「マスター、楽しそうですね」

「ん？　楽しそうな顔をしていたか？」

「ええ、夢でも見つけた様な印象を受けましたが……」

夢か……。ふむ、何となくだが、やはりあの男、私の呪いを解ける  
のではないか？

S i d e o u t



第05話「辛くても京都でございます」(後書き)

感想は随時受付中でございます。

第06話「飛び降り執事でございます」(前書き)

やっと更新出来た……フウ。

## 第06話「飛び降り執事でございます」

清水寺。

基本的に引き籠もりライフを良しとする私としては、修学旅行ですら嫌なのだが、こういう観光名所を見ると少しは良いかなと思ってしまう。しかし……

「京都おー!!」

「これが噂の飛び降りるアレ!!」

「誰かつ！ 飛び降りれっ!!」

「では拙者が……」

「おやめなさいっ!!」

テンションたけーなーこいつら。

「お嬢様、あちらを御覧下さい。

あちらの赤い屋根が麻帆良学園の女子寮でございます」

「嘘をつけ。見えるわけがないだろう？ お前はいつぺんここから

飛び降りて心入れ替えてきた方が良くないか？」

「入れ替える事は難しいかもしれませんが、やってみましょうか？」

「ああ、そうしろそうしろ」

バツ!!

「ちよっ!?!」

「前田先生が飛び降りたー!!?!」

「嘘！ 自殺!?!」

「前田!？」

……嘘だろ? 私が言ったからか?

私は手摺に走り、下を覗きこむが木々しか見えない。……本当に嘘だろ?

「ま……前田ー!!」

「はい。お呼びでしょうか?」

……。

「……飛び降りたよな?」

「はい。ついでに麓で売っていたアイスを買ってきましたが如何ですか?」

「一気に食って腹壊せ!! このアホ執事!!」

「申し訳ございません。執事のお腹は壊れないように出来ております」

どうやったか知らないが、飛び降りたように見せかけて、買っておいたアイスでも出したんだろ。周りの連中も同じように考えたのか、ホツとして普段の賑やかさを取り戻して行く。コイツ、手品師の方が合ってるんじゃないか?

「はい。本当は手品師になりたかったのですがございます」

「前は料理人とか言ってたか?」

「手品を披露する料理人になりたかったのですがございます」

「布をかぶせて消したり増やしたりするのか?」

「作った料理を箱に入れてナイフで串刺しでございますかね？」  
「料理人あるまじき行為だな」

……。あれ？ 私、手品師の事を口に出してたのか？

ガキどもがはしゃいで先を急いで行く。前田にべつたりな委員長も何やら『縁結び』というキーワードに引き寄せられるように先を行く。ガキかよ……。

「おや？ 少々不味いですね」

「何がだよ？」

「あちらをご覧ください。あやか様を筆頭に3 - Aの皆様が酔い潰れております」

「酔い潰れてって……マジかよ。何かあの子供教師は甘酒とか叫んでないか？」

「……甘酒の匂いではありませんね。これは日本酒。微かに檜の匂いもしますので、樽酒かと思われませぬ。飲みやすいように日本酒独特の匂いを上手く消し、甘い感じに仕上げていますね」

「匂いでそこまで分かるのか？」

「ソムリエの資格も持っていますので」

「……聞きたいんだけどよ。冗談抜きで苦手な事は無いのか？」

「そうですね……饅頭の後の苦いお茶が」

「落語じゃねーか」

他の先生にバレると不味いと言う事で、  
酔い潰れた連中をバスに連れ込み、旅館に向かった。

「つしょつと……大丈夫か委員長？」

「良い気持ちですわ〜……くう……」

「いい気なもんだ。お前は報告の責務とかそう言うのはないのか？」

「はい。教師である前に執事でございますので」

いや、前とかじゃなくて今は教師だろうが。

「報告してしまいますと今からでもこの修学旅行が中止になりかねませんので、楽しんでおられるお嬢様の邪魔は出来ないのでございます」

「あーそうかそうか」

コイツは仕えること以外に自分の楽しみと言う物は無いのか？

### 【修学旅行2日目・早朝】

同じ班の連中で風呂に入ることになった。

委員長の二日酔い覚ましにと付き合う羽目になったのだが……。

胸でけーなこいつら……くそ。

「うーん……頭がガンガンしますわ……」

「いいんちょコレ飲むと良いよ。(迎え酒)」

「あら、どーしたの？ 夏美ちゃん」

「みんな中学生のスタイルじゃないよ……」

ザジはまだ寝続けららしい。朝飯までまだあるから大丈夫だろう。

つーかザジは前田とどういう知り合いなのだろうか？ 前田と同じく謎だらけの留学生だし不明だな。

そして、これも何だ？ 誰かが壊したのか？

温泉のと真ん中にある岩に看板が掛けられている。

【Don't Touch! 接着中                      ネギ】

クラスの誰かが壊したのだろう。落ち着きのない連中だからな。

「昨日は散々でしたわ……千雨さん。前田と進展がありました？」

「進展って何だよ？」

「おっ三角関係だね？ 報道部としても気になるね。どうなん？」

前田……か。

「……前田はただの執事で、私は一時の主人だろ？ 他に仕えたい主人が出てくれば離れて行くさ」

「千雨さん。前田はそういう人間ではありませんわ」

委員長の反論に私は少し驚いた。

「委員長の時は前田が出て行ったんだろ？ 何でんなことが言えるんだよ？」

「私の時は私の使用人が多かったのが問題だと言ってましたわ。前田は嘘はつきますけど、悪い嘘はつきませんから……職を賭したあの置き手紙は真実だったのでしょうか？」

「信頼してるね。長谷川はどうなのよ？」

「……知らねーよ」

「あらあら、素直じゃないわね」

ザバアツ

「……先に戻ってる」

何だっただよ？

私は何故か胸の内にあるイライラとする感情に疑問を持ちながら浴衣に着替えて部屋に戻る。そこには起きてお茶を啜るザジと前田がいた。

「これは、おはようございますお嬢様。お茶は如何ですか？」

「……教師の仕事は良いのか？」

「お嬢様が第一優先でございますから。出来ればいつものようにお背中も流して差し上げたいのですが……申し訳ございません」

「やっってもらったことなんかねーよ。……あれ？ 八つ橋なんてあったっけか？」



「手作りでございます。お口に合うとよろしいのですが」  
「……旨い」

「恐れ入ります。どうぞ」

タイミング良く用意されたお茶は、熱すぎず温すぎず、私に調度いい温かさで用意されていた。

……気付けば、さっきまでの原因不明のイライラも消えている。  
よく分らん。

Side しずな

「では、そろそろ就寝時間になりますので、もう一度見回りを始めましょう。毎年舞い上がって眠らず遊び通す生徒が多いですからな」

新田先生はそう言ってメガネを持ち上げる仕草をする。

多分、3 - Aの子達が昨日静かだったから、その反動が今日来るだろう。

「ははは……可哀そうだけど、3 - Aのみんなは正座かなあ」

と、瀬流彦先生が呟く。瀬流彦先生も展開が見えているのか、私と同じ考え方を持っているようだ。

前田先生は……。右手で教師としての仕事内容などを手帳に記入し、

左手で別の手帳に何かを書き込んでいる。ビツシリと書きこまれた手帳に別の色で文面が追加されて行く。予定の修正でもしているのだろうか？ 相変わらずこの人の仕事ぶりは凄い。仕事をしていない時は別の意味で凄いが……。この人の職業が教師だけだったら惚れていたかもしれない。それぐらいに内面まで磨かれている人物だろう。

「む？」

「何ですか？ 前田先生」

「少し騒がしくなり始めましたね。恐らくウチのクラスでしょうけれど」

「え？ 何か聞こえるんですか？」

「特に何も聞こえませんが……」

「私にも聞こえませんが、前田先生が言うならそうなのでしょう。ふう、ネギ先生は甘いですからなあ……。前田先生が担任ならしつかりしたクラスになるんでしょうが……」

新田先生は前田先生の本性を知らない。それ故に凄く高い評価をしている。確かに教師と言う点だけで見れば素晴らしい人材だろう。この若さでどんな問題も問題と思わない的確な判断に動作。それが長谷川さんの執事だとかで、かなり方向性の違う人物になるから私も戸惑ってしまうけど……。

「ネギ先生はもう寝ましたかな？」

「生徒と同じ就寝時間ですからね。流石に寝ているのではないでしょうが？」

「では出歩いている生徒、騒いでいる生徒の注意を始めます。よろしく願います」

S i d e o u t

「とうとうわけで、お嬢様。寝静まりください」

「言われなくても寝るっつーの」

「前田、わざわざ言いに来てくれたのね」

「騒いでも構いませんが、

新田先生は朝まで正座をさせる気らしいので、では」

そう言っつて前田は去って行く。

那波、村上、ザジは既に布団の中だ。……あれ？

「委員長、朝倉は？」

「……正座ですわね。私達は寝ましょう」

本当に前田の事以外は頭に入らないんだな。見捨てやがったま、いいけどな。

S i d e 朝倉和美

「コラア3-A！ いーかげんにしなさい！！」

騒いでいるところに現れたのは学園広域生活指導員の鬼の新田だ。とりあえず、怒られる側はその場に正座をさせられ自分の班の部屋からの退出を禁止。出歩いているのが見つければロビーで朝まで正座を言い渡されていた。

「くつくつく……怒られてやんの……」

「あ、朝倉!？」

「隠れてみてたの!？」

「卑怯者〜!!」

「まあまあ、私からみんなに提案があるのよ。このまま夜が終わるのもつたないじゃない? 一丁3-Aで派手にゲームして遊ばない?」

「ゲーム?」

「どんな?」

「名付けて『くちびる争奪!』 修学旅行でネギ先生とラブラブキッス大作戦!!!」ネギ君のマネージャーの了解も取ってあるよ」

こうして始まった枕殴り大会。

私のいる3班からは誰も出ていない。みんな寝るの早すぎでしょう?

「とうとう犠牲者が出ました! 鬼の新田に捕まったのは明石、佐々木の両名! これで4班は消滅だー!!」

ふう、やっぱり委員長が出ないとなると、優勝はクーフエイ・長瀬

コンビの2班が人気高いな。儲けが少ない。こりゃ決まりかな…  
…。と思った矢先に事件は起きた。

「あーわわわ大変だ大変だ！ アニキが5人も~~~~!!!?」  
「何なの何なのアレは~~~~!? アンタ妖精でしょ！ 何とかしなさいよ!!」

モニターに同時に映る5人のネギ先生。  
現場の方には伝わらないが、モニターリングしている方からすればパニックだろう。

『執事ラリアット!!』

ポウンッ

一人、ネギ先生が爆散した。そこに映っていたのは前田先生だった。カメラ目線で前田先生はコチラに伝えてくる。

『後ほど伺いますが、朝倉さん正座ですからね?』

バシてるー!!?』

『クーフエイさん、長瀬さん。正座の時間でございます』

『む！ 見つかったアル!』

『ここは拙者がいくで!』……ぞああ〜』

前田先生の前にあの二人も軽く取り押さえられる。次々に捕獲されて行く参加者達。

「本当に何もんだ？ あの執事は……」  
「いやあ凄いやね……アタシも正座確定かな」

『執事シャイニングウィザード!!』

ポフンッ

また消えるネギ先生……の偽物。  
どういふ仕組みかは知らないが、  
目的を果たしたり果たせなかったりした時は消えるようだ。

『前田先生！ 一体この煙は!?!』

『これはこれは、新田先生。害は無いようですが、悪戯が過ぎますね。あつ！ 新田先生危ない!!』

若干棒読み風にも聞こえたが、残りのネギ先生もどきは新田に飛びかかっていた。気絶する新田。前田先生は新田をソファーまで運び、またカメラ視線だ。

『室井さん！ どうして現場に血が流れるんだ!!』

室井じゃないし、刑事ドラマの見過ぎだ。  
何気に楽しんでないか前田先生。そして、また走る。

『前田スクリーンパイロドライバー!!』

ポワンッ

……いやね、本物だったらどうする気だろう本当に。それやったら死ぬよ？

って言うか、どうやって偽物だと判別しているんだろう？

杖を持った本物のネギ先生が帰って来た。外に出ていたのか。

何を言っているかは分からないが、本屋と良い雰囲気なのは間違いない。

と、そこに走って来たのは、つい先ほど他のモニターで5人目の偽物を消した前田先生だった。って待って先生？ その勢いは……！？

『これで最後です！ 前田ビッグバンアタック……！』

と、ヤバそうな技名を叫んでおいて、前田先生は躓いてネギ先生の背中を押す形になった。その先には、本屋の唇が……。

「ゆ、優勝は宮崎のどかー！！（カチッ）よっしゃズラかるよ力もっちー！！」

私はマイクオフにして、扉を開けて外へと飛び出す。しかし、そこには鬼と呼ばれる男がいた。

「……なるほど朝倉。お前が主犯か」

終わった。

S i d e o u t

チュンチュン……

3日目・朝

ウチの班だと朝倉だけが正座していた。

何でも枕投げ大会をしていたとかで……何故か担任の子供教師も正座していた。

「ふざけ過ぎでございますね」

「とか言いつつ、お前もふざけてたんじゃないか？」

前田は右手を拳に代えて、何やら悔しそうにしている。

「……最後のが決まっていれば」

「何をやってたんだお前は」



**第06話「飛び降り執事でございます」(後書き)**

感想は随時受付中でございます。

第07話「ああシネマ村でございます」（前書き）

お久しぶりです。

地震の影響により更新が遅れております。

パソコン等に問題はありますが、書き手に精神的ダメージが来ております。

すぴりちゅある・アタックでございますー！！

ふー。

今回も楽しく書けたぞー。

では、ごぞ

## 第07話「ああシネマ村でございます」

旅館での朝食が終わると前田は私のところに即座にやって来た。

「では、本日の完全自由行動は御一緒させて頂きますのでよろしく  
お願いいたします」

「ああ分かったよ。……な、何だよ？」

私が返答すると前田はハンカチを眼下に当て始めた。  
泣いてるのか？

「お嬢様が私を邪険に扱わなくなるとは……」

「……特に変わらないだろう？」

「いえ！ お祝いをしなくては！ 赤飯を炊くべきでしょうか!？」

「……やっぱりお前、今日はこの旅館の風呂でも掃除してる」

「それはもう済んでおります」

「旅館の仕事を取るな」

完全自由行動。

着いたのは時代錯誤な建物に、  
すれ違う人も幾人か時代劇で見る様な服に身を包んでいる。

「そう、ここはシネマ村」

「何ナレーションみたいに言ってるんだよ」

「ツツコミ恐れ入ります。いやしかし、シネマ村とは助かりますあやか様。大仏などを見に行くと言われた時はどうしようかと思いましたが……」

「ホホホ、喜んでくれるのね。良かったですわ」

「お前の神社・寺が苦手の設定は生きてるのか……」

「では、私はあちらの方で着替えてまいります」

コイツも遂に執事服以外を着るのか。

寝る時とかは見た事がないから不明だが、執事服以外は初見だな。

私達は貸衣装屋にて着替えていた。

「いいんちょはコレじゃない？ お姫様みたいな？ ほらカツラもあるよ」

「あら、いいですね。朝倉さんは剣客ですか？ 髪型が映えますわね」

「ちづ姉は南蛮系の衣装？」

「夏美ちゃんも町娘ね、よく似合うわ」

「ザジは……サムライか？」

「（コクリ）……ガクセイ？」

最近話すのをたまに聞く様になった……気がする。気のせいかな。ザジが私を見て指さし疑問を声に変換した。

まあ私は女学生風の和服だな。振袖とかではなく袴だ。

外に出ると既に前田は立っていた。

「これはこれはお嬢様……先代の大奥様を思い出しますね。よく似ていらつしゃいます。あれはお米がたくさん取れた日の事でした。先代のシンデイ様は竹槍で仮想敵のカカシを突き刺し……」

誰だそれは、いつだそれは。

しかし……目の前にいるのはいつも通りの前田だ。

「前田は執事服ですね。似合っているわ」

「いやいやいや！ アホか、いつも通りの執事服じゃなーか！ 着替えたんじゃないのかよ！？」

「気付いたのですが、呪われていて外せないのでございます」

ドラクエかよ！

まあ、想像してみるに、他の衣装が似合うとも考えづらいが。

ブラブラと歩いている内に、黒い忍びが3名駆けてくる。通り過ぎるかと思いきや私達を囲むように止まった。

「我等は甲賀の忍び！」

「我らが主がそちらの姫を御所望なのだ！」

「さあ！ そちらの姫を渡して貰おう！！」

どうやら標的は委員長の様だ。

「え？ 私ですの？」

「待てーい！」

突如、長屋の屋根上に現れたのは赤い忍者の男だった。

この様に、ここシネマ村では客を巻き込んで、少し飛んだ設定で劇が始まったりする。

そして始まった寸劇は突然の急展開を迎えた。

前田が手裏剣を赤い忍者に投げたのだ。

スカーンッ！ ドサッ

「曲者でしたね」

いやいやいや！

アレはどっちか言ったらヒーローだろう！？

「ど、どーすんだよ須々木さんがやられたぞ……」

「アイツ誰だよ？ 執事なんて聞いてねーよ……」

「ちくしょう、楽なバイトだって聞いてたのにアドリブなんて……」

チラホラと悪役忍者の声も聞こえてくるが……。

「では、護衛をよろしくお願いいたします」

前田はその悪役忍者3人を雇いやがった。

3人も「もうどうとでもなれ」という感じでした。

「何を考えてるんだお前は……」

「お嬢様の事だけを考えております」

厄介極りない男だ。

しかし、忍者がバイトって……小さい子供が聞いたら夢が壊れるな。

Side ????

ウチの軽い投擲を華麗に捌きセンパイは街中を駆けまわっております。

そして、お姫様を抱えて和風なテーマパークに飛び入りました。

「シネマ村……面白い所に逃げ込みましたな。ハア、刹那センパイかぁ……仕事でなくても仕合いたいお方やわぁ……」

Side out

「おっ、みんな静かに」

朝倉が何かを見つけたようだ。その先には綾瀬と早乙女がいる。

「あいつ等の班もシネマ村だったのか」

「それにしてもネギ先生の姿が見えませんね。確か桜咲さん達の班と行動しているハズでしたが」

「どうでもいいけどな、あのガキはヘラヘラして厄介事ばかり引き起こしてるから好きじゃないんだ」

「二人とも静かにつてば……」

朝倉達の視線の先には近衛と桜咲がこれまた衣装を借りて演劇に巻き込まれている。西洋風の貴婦人の女が馬車から下りてきて、何やら白い手袋を桜咲に投げつけたようだ。確か決闘の挨拶みたいなものだったか？

Side 刹那

一般人の多くいる街中で攻撃をしてきた者がその姿を現した。

「お……お前は!？」

「どうも神鳴流です。じゃなかったです……その洋館のお金持ちの貴婦人にございます。そこな剣士はん。今日こそ借金のカタにお姫様もらい受けに来ましたえ」



ここに来るまでに街中にも関わらず攻撃を仕掛けてきたのはコイツだったのか。確か名前は月詠。厄介な二刀使いの神鳴流剣士だ。

「せつちゃん これ劇や劇 お芝居や」

なるほど、劇に見せかけて衆人環視の中、堂々とお嬢様を連れ去ろうと言う訳か。

「そうはさせんぞ！ このかお嬢様は私が守る！」

「キヤー！ せつちゃん格好えー！！」

不意にお嬢様が抱きついてくる。

周りの一般の方々も歓声をあげる。……何故だ。

「わ！ い、いけません お嬢様……」

「そーおすかー。ほなしかたありまへんなー」

そう言っつて、月詠は白の手袋を外し、私に投げつけてきた。

「む……」

「このか様をかけて決闘を申し込ませて頂きます！。30分後、場所はシネマ村正門横【日本橋】にて。ご迷惑かと思えますけどウチ……手合わせて頂きたいんですー、逃げたらあきまへんえー……刹那センパイ」

月詠は眼光を変化させ殺気も込めてくる。



「ちよちよ、ちよつと待って下さい！ 皆さん何の話をしてるんですか！？」

「いやいや、お姉さんは応援するよお！ 記事に野暮は書かないから安心してって」

「私達味方だからね桜咲さん！！」

「ちよちよつと話が見えませんかわよ！！ 皆さん私を置いてけぼりにしてー！！」

「もーニブいないいんちよはー、てかスゴイ格好だね」

「いいよねみんな？ よーし決めた！！ 二人の恋 私達が全力で応援するよー！！」

「よっしや野郎共！ 助太刀だー！！」

「「「「「おーっ！！」「」「」「」

「？」

「あやか 私が説明してあげますから こっちに来なさい」

わああ！？

「ちよちよ！ 違うんです待って皆さんーっ！！」

トントンと話は勝手に進んでいき、勘違いをされて……これで決闘を？

Side out

「はあ、アホか」

「よろしいのですか？」

「あー、30分後に正門近くに行けばいいんだろ？勝手にやらせておけばいいだろうよ……お前も良いのか？」

ザジも私と同意見なのか、はたまた思うところがあるのか、単純にもう帰りたいのかは分からないが、私と同様に一緒に桜咲達とは離れることにしたようだ。

「では、あちらの甘味処で少しお茶にしましょうか」

その後は簡単なアトラクションや記念写真館で時間を潰して入り口近くの【日本橋】に向かった。

アトラクションの途中でザジが一時離脱したりして記念写真は前田と二人で取る破目になった。今思えばコレって生徒と教員のツーショットだよな？

「良からぬ事はお考えにならぬ方がよろしいかと」

心を読むな。

と、そこにザジが帰って来た。

「お、どこ行ってたんだ？」

「……アルバイト」

どうやら、劇を【する側】として参加したようだ。

「ん？ おい前田。そう言えば3人の忍者はどうしたんだ？」

「アチラとアチラとアチラに控えさせております。お呼びになりま  
すか？」

指さされた方を見ると、屋根の上に一人、酒屋の店前の樽の影に一人、地面から息を吸っているであろうホースが見える。あそこに最後の一人がいるのであろう。

なんか、シネマ村にそこまで求めてないレベルで隠れてないか？

言われないと気付かないだろう……。言われても気付かないかもし  
れない。勝手にシネマ村の労働力を使役して怒られないのだろうか？

「（我等、前田忍軍の中忍。黒影）」

「（黒蔵）」

「（黒衣でござる）」

「おい、遠くにいるのにすぐ近くで声が聞こえとかレベルが違う

だろう!? 本物の忍者みたいじゃねーか! って言うか最後のは舞台に出てくる役者の介添や舞台装置を操作する奴だろう!？」

「(頭領の命により)」

「(いついかなる時にでも)」

「(介添するでござる)」

「結局介添えかよ! 何したんだよお前……っーか頭領って……」

「アルバイトとは言え今は忍び。仕事に誇りを持って頂いたのでございます」

それはお前の仕事じゃねー。

ほどなく歩くと【日本橋】に辿り着く。しかし、橋には人だかりが出来ている。

声援や拍手が聞こえてくるが、何が起きているのか見えない。

「ひゃっきゃこおー」

橋の方から少し大きめの声が聞こえてくる。

「おおースゴイCGだー!!」

「さすがシネマ村のアトラクションー!!」

チラッと見えた。小さい……ん〜妖怪で良いのか? 人形のようなフ

アンシーな妖怪たちが委員長や朝倉達たちを襲撃している。

あゝ参加せんで良かった。

「にとーれんげきざんてつせーん」

ギンギン！ ガキッ！ ガキャンッ！！

おおスゲエな。

と、委員長と眼が合った。

「前田！？ 前田もそこにいますの！？」

「助けに行かないのか？」

「そうですね」

「（お待ちください！ あの程度、頭領の御手を煩わせる事はございませぬ）」

「（我等にお任せを）」

「（我等、前田忍軍の中忍）」

「（前田頭領の一の忍び。アオベエ！）」

「（キスケ！）」

「（アカネ！）」

「名前変わってるじゃねーか！ それに一人性別変わってるだろう！？」

ツツコミ無視で黒い忍者3人は橋の上に躍り出た。躍り出たと言うよりも降り立ったと言っていていかもしれない。走って来たというのではなく、突然そこに現れた様に参戦した。

「「「「「おおおおお〜っ！！」「」「」「」

忍者と仮装したクラスの連中の前に排除されていく妖怪たち。

「いつも元気な奴らだぜ、よーあきんな……アホどもが」

コク……

と、頷き答えるのはザジだ。

ん？ 前田はどこに行った？

「アレ見てアレー！」

「おおっ！」

「えっ何なに？」

「あー、ホラ お城の上だよ！」

「あ、あんなところでも劇が……！」

観客が騒ぎ出す。私も城の上に視線を送ると、忍者の格好をしたネギ先生と、近衛がいる。その奥には悪者風の役者がいる。ファンシィな熊のデカイ着グルミから凝った造りの魔物の姿も見える。命綱



無しで落ちるなよ？

っっていうか、ここまで劇に協力する必要はあるのか？

「いや……劇じゃ有り得ないよな？」

私の思考回路が冷静さを取り戻し始める。

さっきの妖怪たちもCG？有り得ねえ。映像ではなく目の前でCGを見せられるシステムなんて知らないし、そんなモノがシネマ村にあるとは思えない。

それに殺陣と思い込まされているアレだ。桜咲ともう一人が繰り出す剣戟の音。生の音だろう。ならば最低でも硬い金属、最悪の場合真剣だろう。いずれにしても、身体で受けた場合打撲では済まないだろう。

となれば、あの城の上で放たれようとしている矢は……。嘘だろ？いや、まさか……。だが、一般人をここまで巻き込んで？

あーくそっ、落ち着け、冷静に考える。これは劇だろ？ そうだよな？

……いや、やっぱり違う！！

しかし、そんな事に考えを巡らせている間も時間は進み、劇まがいな現実も進んでいく。

「あーっ！？ 何で射つんやーっ！！ お嬢様に死なれたら困るや  
るーっ！！」

魔物の放った矢がネギ先生の腕を吹っ飛ばす。  
肘から先が消える様に……いや消えた。

その矢は近衛に……。

スローモーションの様だった。

自分の事じゃないのに？

そう、自分の事じゃないのにスローモーションに映るその現実で起  
こっている劇。

その矢は近衛の前に現れた前田に突き刺さった。

「ま……えだ……？」

前田の胸元に矢が刺さり、それを抜き取り、前田は……。

「前田フラーツシュ！！」

光った。

「……………うおっまぶし！！」「……………」

突然全てが真っ白に光る。視界が奪われ思考も停止したままだった。

……。

視界が戻る。周囲の観客はまだ視力が回復していない人もいるようだ。そして、私は城の上に視線を戻した。城の上には【成敗！】と書かれた御旗を括りつけられた役者や着グルミ達が縛られていた。前田達はいない。

トッ

と、すぐ近くに降りてきた前田と抱えられた近衛。どこから降りてきた？

「近衛さん大丈夫でしたか？ 桜咲さんが心配しております。どうぞ」

「え？ あれ？ ウチ……あ、せつちゃん」

「お嬢様！」

桜咲が近衛の元に駆けってくる。

近衛は何が起こったのか意味不明という顔をしながら前田の元から離れた。

「お、おい。お前 大丈夫だったのかよ」

「はい。矢は逸れて飛んで行きましたから」

見間違いだった？ 本当に？

いや、私は確かに見た。矢が刺さり、それを抜き取り光を放った前

田を……。

「いや、ねーな。白昼夢だな。そーだよな。あるわけ……ねーよな」

前田は笑顔のままだった。血とかも流れてない。

どこからどこまでが劇だったのだろうか。

観客の拍手喝采の中、私はただ立ち尽くしていた。

私がおの後も取り乱さずに冷静でいられたのは、

シネマ村を去る時に、こんな事を目の前でやられていたからだ。

「頭領！ 我等にお暇を言い渡されると!？」

「我等この身に代えても任務をこなします!」

「何卒ご再考を!! 何卒!!」

「暇を与えるわけではございません。あなた達は立派な忍者です。

これからは上忍として、あなた方の隠れ里を作り、この村を守り続けなさい」

いや、【この村】って、【シネマ村】だし。

「と、頭領……!! いえ、前田殿!!」

「そこまで我等の事を!!」

「僅かばかりの時間でしたが学ぶべき事が多く、何もお返しが出来ず……!!」

「忍びの者として、誇りを忘れず、真に仕えられる主を見つけるのです」

「「「前田殿」!!」「」

忘れてるかもしれないが、そいつらただのバイトだからな？

第07話「あゝシネマ村でございます」（後書き）

感想は随時受付中でございます。

しかしながら前田の事だけは感想で聞かれても何も答えられないのです。

こーだろっなーって思っても聞かないでね！

けっこー設定などを放置しているから書き足していくか。

第08話「一生奴隷の呪いでございます」(前書き)

今回は長いよ、本当に長い。覚悟する事!!

さあ！ みんなも前田にツッコミ入れよう!!

京都編が終わり間近!! さあ今回の前田さんは!?

## 第08話「一生奴隷の呪でございます」

Side 刹那

夕風を眺め、私は自分の手の平を見つめ、先ほどの剣戟の音を思い出していた。

あの時、前田先生がいなかったら。

もし、あの矢がお嬢様を刺し貫いていたら。

やはり、ネギ先生には荷が重いのもかもしれない。

私は眼を閉じ、シネマ村の一件を思い出す。

ネギ先生の分身体を等身大に変えた。

手が離せない以上、実体のないネギ先生の手でも借りたい状態だった。

「わあ！ 僕は忍者の役ですか！」

非常時に何を喜んでいるのかは流すしかなかった。

飛べないからとりあえず気をつける様にとしか言えなかった。

そして、お嬢様を安全な場所に連れて行くようにしか言えなかった。

そう、あの時ネギ先生は履き違えたのだ。この場合の安全な場所とは、【人が多い場所だが、ここからは離れている場所】という意味合いだ。一般人に危害を出さぬように攻撃してくるのは、私の目の前にいる月詠ぐらいだからだ。その他の刺客ならお嬢様を傷付ける



のは良しとしないはず。今はそれを信じるしかないのだが……。しかし、ネギ先生は……。

ギンツ！ ガキツキキンツ！！

「にとーれんげぎざんてつせーん」

（くっ、キリがない！）

「アレ見てアレー！」

「おおっ！」

「えっ何なに？」

「あー、ホラ お城の上だよ！」

「あ、あんなところでも劇が……！」

（城の上？）

私は剣戟を捌きつつ城の上に目を向ける。

「スゴーイ 何アレー」

「かいじゅーだー」

「お姫様が危ないよお父さん！」

「またCG!？」

「少年忍者がんばれー！」

「お嬢様!？」

「アラ よそ見はあきまへんえ」

ガキッ！

「ぐっ」

(何故屋根の上にいるんだ！)

そう、ネギ先生は城を登り屋根にまで上がっていた。  
どうして安全な場所と言えよう？

すぐに助けに行かなければならない。

だが、目の前の月詠から目を放す事こそ危険行為だ。

そこに現れたのが……。

バババツ！

「見える、拙者にも敵が見えるでござるよ」

キンツ！

手裏剣が月詠の小太刀に弾かれる。  
投げたのは……シネマ村の忍者？  
一般人じゃないか！

「くっ！ 月詠！ この人は……！！」

「心配御無用！ 一人では……ござらん！」

キキンッ！

また増えた！？

無理だ！ 守りきれない！！

「むゝ邪魔したらあきまへんえゝ、にとーれんげきゝ……」

「フツ 隙ありでござる……前田流奥義……」

【劣化！ ライジンクサン 国土無双十三面待ち！！】

そして、3人目が現れる。

13にも及ぶクナイに手裏剣がほぼ同時に投擲される。  
ただの一般人じゃないのか……？

「おおゝ、中々やりおすなゝ。でも神鳴流に飛び道具は効きまへんえゝ」

<桜咲さん。近衛さんの方は私が何とかしましょう>

念話！？ この声は……！！

<そちらの3人ですが、

ある程度は戦えるようにはしておりますので気にならずにこぼれず

戦えるように……してある！？

声の主を探しても見当たらず、私は城の上へ上へと跳躍しようと思  
った。しかし、月詠は3人の忍者を捌きつつ棒手裏剣を私の急所に  
向けて的確に投げってくる。

キキンッ！

「ふふふ、センパイの相手はすぐに出来ますえ〜。もう少し待つと  
ってくださいね〜」

（くっ！ お嬢様は……！！ 前田先生！？）

前田先生の身体を突き刺す矢。そして、一瞬奇妙な感覚が身体を駆  
け巡った。魔力、気、その類の感覚にも似通ったモノ。何と言え  
ば良いのか、純粹過ぎる力を感じた。

「前田フラーツシュ〜！！」

カッ！！

そして、光輝く前田先生に視界を奪われた。視界が解けると目の前  
にはお嬢様を抱えた前田先生がいた。

「桜咲さんが心配しております。どうぞ」

「え？ あれ？ ウチ……あ、せっちゃん」

「お嬢様！」

私はお嬢様の無事を確認し、前田先生の方に視線を向ける。そこに

はいつものように長谷川さんに尽くす執事の姿しかなかった。尽くし方は置いておくとして。私は先ほどの念の後を追い、念話を送る。

<前田先生……だったんですね？ お怪我は？>

<出来れば御内密にお願い致します。怪我も無いですよ。では>

<あ、あの！ ありがとうございます！>

屋根を見ると旗だけで刺客達はその姿を消していた。

「お嬢様。今からお嬢様の御実家へ参りましょう。神楽坂さん達と合流します！」

敵が見えない以上かくまって頂くしかない。今となつては総本山が一番安全だろう。

そして、何故か合流を許してしまった朝倉さん達と、総本山へと私達は入った。

S i d e o u t

目の前を慌ただしく動く桜咲と近衛の二人。

「着替え終わりましたか!？」

「うん、せつちゃん!」

「おーい。このかゝ今のつて……あーまた逃げられた! 追うのよ!」

「で、でもどうやってです?」

桜咲と同じ班であるはずの早乙女と綾瀬はシネマ村の塀を飛び越えて行く桜咲を眼で追うことしか出来ないでいる。お前から同じ班だろう? 一緒に行動しろよ。神楽坂も宮崎も見あたらねーけど。

しかし……私がおかしいのか? どんな最強のスポーツ選手でも、人一人抱えて塀を飛び越えられるわけがない。しかし、目の前で近衛は桜咲にお姫様抱っこで連れて行かれた。

「……帰って眠らないと駄目だな。今日は冷静な判断が出来そうにない」

「左様でございますね」

お前も要因の一つだろうが……。

「ふふふ、私に任せておきなよ。こんなコトもあるうかと桜咲さんの荷物にGPS携帯放り込んでいたから。位置はバッチリ」

そう早乙女達に自信満々に伝えるのはウチの班の朝倉だ。追ってどうするんだよ全く……。

「さすが朝倉ーッ!」

「はっはっは〜! んじゃ早速　　!」

朝倉は私達の班からも離脱し、超完全自由行動を取り始めた。

「あれは教師としてどうなんだ?」

「朝倉さんでございますか? そうですね……いえ、やはりお嬢様の方がお美しいかと存じますが?」

「あーそうだった! お前は人の話は聞かないんだっただな!」

「はい、執事の耳は都合の良い事だけ聞くのでございます」

それは既に執事じゃねーだろうが。

「前田! 無事でしたのね!? 私の合気柔術はどうでした!」

「申し訳ございません。お嬢様に夢中で見逃してありました」

「お前屋根の上にいたじゃねーかよ」

「千雨さん……くっ! 負けませんわよ!」

「だから私を巻き込むなっつての!」

私達は結局そのまま旅館に戻ることにした。

途中で土産物を見たりもしたが、特別何かあるわけでもなかった。

夜になると朝倉を含めた5班は帰って来た。ヘラヘラと間抜けな感じに更にアホさを増した気がするが……修学旅行の力と言う事にしておこう。

委員長は風呂に入ったあと部屋に帰ってきていない。ホテルの玄関に立ち、他の班の帰りの確認をしている。『今日こそは誰一人として正座をさせない。(前田に褒めてもらいますわ)』と意気込んでいるようだ。

那波と村上はまだ風呂だ。ザジは……寝るの早えーな。

私は今日撮った和服のコスプレ写真などをパソコンに取り込む作業をしていた。ふと、一枚の写真で手が止まる。前田と私の写真だ。頭一つ分ほど身長の高い隣の執事は、いつもの何を考えているのか分からない笑顔を作っている。

何気なくベランダに出る。

手摺に手を置き、夜景を眺めていた。

アイツは、前田は何者なんだろう？

ただの執事じゃない事は分かっている。

【執事で何でも出来る】って言われたら、料理・洗濯・掃除などなどを思い浮かべるが、アイツの場合は特殊すぎだ。矢に当たっても血が出ず、光る。光るってなんだよ。

トンデモ論は好きじゃないが、無理矢理にでもアイツを【普通】だ



と仮定するならば、防弾チョッキ的なものを着ていて、眩く発光する薬品か何かを使用したとこじつける事は出来るかもしれない。そう、例えばシネマ村に雇われて……イベントを企画し参加させてもらったとか？ まあとにかくその問題はクリアとしておこう。

じゃあ、委員長たちが巻き込まれていた妖怪たちのCGはなんだ？ 集団で幻覚でも見たか？ それは有り得ない。実際に委員長たちはアレに触っていたし触られていたしな。それに桜咲の剣戟もだ……。

「あゝ駄目だ分からん！」

すると目の前にロープが現れる。上から降って来たロープはユラユラと揺れ動き、私はそのロープを溜め息混じりに見つめていた。

「またアイツか……」

そう、どうせ前田だ。毎回手の込んだ登場をするもんだ。しかし、今回は先に気付いた。驚くことも無いだろう。もし、これが前田ではなく泥棒とかだったりしたら驚くが、ここはかなり高い場所に位置するホテルの一室だ。こんなことをするのは前田ぐらいしか思い当たらない。

……ん？ 中々下りて来ないな。アイツの事だからスーツと下りてくるもんだと思っただが……。私は少し乗り出し、上を見上げた。そこには誰もいない状態で、何とか手の届く位置に紙が貼りついていた。

「よっ……んっ！ ……っつゝ何だコレ？ 『後ろでございます』？」

「はい、私は既にお嬢様の後ろでございます」

「うおわ！！？」

「お休み中のところ申し訳ございませんお嬢様」

「驚かすんじゃないー！！ 何の用だよ？」

「少々パソコンをお借りしたいのですがよろしいでしょうか？」

「あ？ パソコン使えるのか？ 使っているとこ見た事ねーけどよ？」

「お嬢様？ 今は情報化社会、借りに行かずともパソコンとネット環境があれば店員の目を気にせずにDVDがレンタルできるので！！ サンプル動画だけでも満足イク場合もございますが……やはりDVDをレンタルした方が、他作品の紹介もあつたりと、一度で2度、3度とおいしいのでございます！！」

「何のDVDだ！ 満足イッテンじゃねーよ！！」

「お嬢様には少々過激な内容かと思いますが、【触手モノ】でございます」

「最低だな！ 最低だなお前は！」

「お嬢様、素晴らしいツッコミですが、私がDMだったらどうするんですか？ 大変なことになりますよ？」

コイツは……。

「ホラよ……」

「ではお借りしてメールを送らせて頂きますね」

DVDはやっぱり嘘かよ……。

最近、やっとコイツの事が分かって来た。

……気がするだけかもしれない。

しかし、誰に送るんだ？

「絡線さんでございます」

「心を読むな……. ったく、すげー勘が良いなお前は」

しかし、ロボにメールとか……. 情報化社会ねえ〜。

「さて、これで良いでしょうかね。お嬢様ありがとうございます。最近お嬢様の新しい画像がアップされていないので寂しくもありますが……」

「隙を突いて何見てんだよ!」

「セーラー服姿のお嬢様でございます」

「うがアー！っ！！」

ドタバタドタバタ！！！！

「はあはあはあ……もう終わりか？ よし帰れ！」

「……もう一つだけ。聡明なお嬢様の事です。本日の事で何かしら納得がいかない事があるのでは？」

そりゃあ、今日は納得いかないことだらけだった。

シネマ村での一件。殺陣と思い込ませられていた真剣勝負。腕の吹っ飛んだネギ先生。光る前田。そして、その全てが何もなかったかのように認識している周りの連中。

「お前は……前田は……」

「はい」

コレを聞いたら……。もし、万が一にも夢物語的な何かが現実起きているとしたら。私は今その秘密を聞いて、いつもの不変で平和で退屈な日々を維持できるだろうか？

もし聞いたら、

ソッチ側に行つて、帰つて来れなくなつてしまつのではないだろうか？

ソッチ側は、私が嫌いな非現実的なモノなのではないか？

「お嬢様。他人の話は聞かなくても良いと思います」

「お、お前はそうだよな。本当に人の話を聞かぬーし……」

考え中にいきなり話し掛けられドモってしまっが、何を言い出すんだコイツは。

「お嬢様が信じ、手に入れた情報。そのみを信じ、間違っていればやり直せば良いかと、私はそう思います。しかし、恐らくではありませんが、今お嬢様が私に聞こうとしている事、それは取り返しのつかない情報かと思われます。お嬢様が今悩まれていると言っ事は、全く想像が付かない状態で、その先が見えないからでございます」

いつものようにボケる様子も無く話を続ける前田。

「お嬢様のクラスメイトの方々ですと、【先が見えないから楽しい】と思ひ込み、【その先の人生を決めてしまっ答え】を聞くでしょう。その先が、その人にとって残酷で恐ろしい未来が待っているとも知らずに……。楽しいと感じる方もいるかもしれませんが稀でしょう。どうかお嬢様は冷静に見極めて下さい。先が見えないとは必ずしも楽しい事ではございません」

「……お前は……お前は私をどうしたいんだ？ 何で私を主人に決めたんだ？ あの最初のメールも何かしらの手を加えてあるんだろ？ 契約？ んなものは……」

「お嬢様。今、私が言えることは、【いずれは聞くべきこと】ですが、今はどうかお控いただければ……。それだけでございませす。私はお嬢様の執事でございませすから」

「……じゃあ……じゃあよ、これだけは答えるよ」

「はい、何でございましょう?」

「本当にあの時の矢は逸れたんだな?」

「……申し訳ございません。素晴らしい眼をお持ちで、お嬢様の言つとおり、コチラに刺さりました」

前田は深々と頭を下げ、嘘を謝罪し、胸元を指先で示した。

「っ! ……無事、なんだよな?」

「それはこの通り」

トントントと強めにその刺さったであろう個所を前田は指で突く。もちろん、そこに当たったかどうか不明確ではあるが、顔色は悪くないし、シャツに血が滲んだりなどはしていない。

「……ちっ。分かったよ。」

いや、分かってねーけど……あーもう分からん! もう寝る!」

「恐れ入ります。……お嬢様?」

「……何だよ?」

「寂しい様であればいつものように添い寝を……」

「して貰ったことねーし！ いらねーよ！……」

Side エヴァンジェリン

「何いい！？ やっぱダメとは何だじじイ！！ 学園から出れると言っただるおが！？」

「うっっむ、修学旅行も学業の一環じゃし短時間なら呪いの精霊をだまくらかせると思っただんじゃがのっ。ナギの奴め力任せに術をかけよつてからに……正直無理かも。てへ」

「てへ じゃない！ 何とかしろじじイ！！ 殺るぞ！？ マゴの危機だろっ」

「マスターそんなに熱心になって、よほどネギ先生が心配なんです  
ね……」

「誰・が・あのガキのこと心配してるってっ？ 私ほただ外に出ただけで……ええいつまいてやる まいてやるっ このボケ口

ボツ」

キリキリキリキリ……。

「ああ、いけませんそんなに巻いては……」

京都で事件が起こった様だ。助っ人としても学園の外に出れるならばありがたい話ではある。まあ正直、あのボーヤはどうでもいい。

ただ、あの前田がいても収まりが付かないというのか？

じじいに前田の情報を渡す気はないが、アイツがいれば全て……丸くなるかどうかは分かんが事件は収まる気がする。

……ふっ、私が他人を評価するとはな……。

ピピッ

<マスターメールが届きました>

<メール？ ワタシ宛にか？>

茶々丸は書物を唸りながら見つめるじじいを気にかけてつつ、私に念話を送つて来た。しかし、メールと言われても、ハイテクなモノは良く分からんぞ？ いや、わざわざこの距離で念話を使うと言う事は、じじいに知られてはまずいモノか。

<まさか、前田か？>

<はい、これは……詐欺術式？>



詐欺術式？ 何だそれは？

<マスター、精霊の騙し方が載っています>

「何だとーっ!？」

「ふお!？ 今、他の方法を探しておるからもう少し待ってくれんかのう?」

<ふむ……なるほど……ではこのじじいが生贄になれば良いわけだ>

<その様ですね>

「<よしっ!> じじい!! 代われ! 私がやる!!!」

「ふお!？ やり方を知っておるのか!？」

「ああ、その代わり貴様がファイナルフュージョン承認の判子を5秒に一回押して行け! 何度も何度もな!!!」

<マスター【ファイナルフュージョン】は前田先生のギャグセンスと言いますか、お笑い要素の様です。通常通り【承認の判子】と言う事で……>

<ええい! この際なんでも良いわ!!>

「何じゃとお!?! 5秒に一度!?! 爺虐待じゃよ!?!」

しかし、ますます貴様に興味が出てきたぞ前田。精霊の騙し方を知っている。それは、やはり解呪方法を知っているか、それに準じた何かを知っていると云う事だろう。

ズドンッ！

「準備完了しました学園長」

茶々丸が学園長の机に用意したのは【エヴァンジェリンの京都行きは学業の一環である】という誓約書の術式に必要な詐欺の書類だ。書類の山がいくつも出来上がっているが……。

「これで足りるのか？」

「明日の夜7時までには余裕で持つ計算になっている枚数です。帰りの新幹線で駅弁を楽しむ余裕もありますマスター」

「うひい~~~~~!!!!」

「さあ！ マゴの命の危機だぞ！ 報酬は明日の修学旅行終了までの完全なる自由時間と、遊び歩く金だ！ 私は優しいからな、100万で許してやろう!! ふはははははははは!!!!」

「ああマスターが楽しそう」

「栄養ドリンク買って来るぞい……」

S i d e o u t

S i d e このか

せつちゃんキレイやったな。天使みたいやったわ。  
攫われても せつちゃんが助けてくれる。昔からそうやった。

子供の頃は犬からも助けてくれたし、  
学園で再会してからも陰ながら守ってくれた……陰ながらやのー  
て、一緒に仲良おしたかったけど、昨日だって、今日だって、さっ  
きだって助けてくれたんや。

「せつちゃん。ウチの為に色々ありがとな」

「お嬢様……」

大きな大きな鬼が消えて行くのを見ながら、みんなのところに戻っ  
て行った。

そこには石化して行くネギ君がおった。

「ど、どうにかならないのエヴァちゃん!!」

「私は不死だから治癒系の魔法は苦手なんだ。それに助ける義理も

無い」

みんなはパニック状態になつとる。

「お嬢様……」

「うん。あんなアスナ……ウチ、ネギ君にチューしてもええ？」

「なつ 何言つてんのよこのか こんな時に！」

「あわわっ ちゃうちゃう あのホラ、ぱ……パクテオーとかいう  
やつや」

「え？」

「みんな……ウチせつちゃんに色々聞きました。……ありがとう。  
今日はこんなに沢山のクラスみんなに助けてもらって……ウチに  
はこれくらいしかできひんから……」

ウチの治癒の魔力ゆーのがすごいんなら……ネギ君とパクテオーす  
ればネギ君は助かる。

でも、ネギ君に触れたら石化がなくなつとったんや……。  
みんな驚いているけど、良かったって笑ってる……。  
その時、声が聞こえてきたんや。

く近衛このかさん。これ以上魔法に関わらない方が良いでしょう。  
場合によっては死にます。あなたを守るうとする桜咲さんの方が先

に死ぬかと思いますが。それでも関わりますか？ それとも安全で  
平和な道を選びますか？>

「え!？」

「お嬢様いかなさいました？」

せつちゃんが危険に……？  
ウチは……。

S i d e o u t

S i d e エヴァ

「ど、どうにかならないのエヴァちゃん!!」

「私は不死だから治癒系の魔法は苦手なんだ。それに助ける義理も  
無い」

あの大鬼を倒してやったんだ。それ以上私に関わるなガキどもが。

<流石はキティさん。冷たいですね>

<その呼び方は止める! ……どこで見ている?>

前田からの念話に私は、身体・眼球などを動かさずに探索し始めた。

< いつもあなたの心の中でじぞいます >

< ふんっ ふざけおって……ん？ ボーヤの石化が……貴様か >

< これ以上、魔法関係者が増えるのは問題ですので >

< お前に迷惑がかかるのか？ >

< いいえ全く。ですが一応は教師をしておりますので >

< 生徒の安全か、教師らしいじゃないか。では教師らしく私の呪いも解け！ >

< ……夢は見つかりましたか？ >

< 何だと？ >

< 言ったはずです。夢を叶えないと呪われたままだと >

< 真面目に言っていたのか？ ……私は夢など…… >

< 【生きている】とは【活きている】という事。【活きている】と

言う事は【夢を持てる】という事でございます。どうか生きて下さい。  
ダークエヴァンジェル  
い。闇の福音あなたに幸福あれ >

念話が切れる。

夢……呪いを解く為には夢が必要。夢が叶う時、呪いも解ける。

はっ 御伽話ではないか。

私の幸福を願う者がどこにいる……。  
この身体は忌み嫌われるものだ。

<そうですか？ 私は割と好きですけどねロリ >

<殺す！！ 殺すから出て来い！！ すぐ近くにいるだろ貴様！！ >

「ああマスターが何やら面白い事に」

S i d e o u t

S i d e 天ヶ崎 千草

ガサガサガサガサ！！

「ハアツハアツ！ くっ！ あんな化け物が出てくるとは！ しゃあない、一度逃げて仕切り直しや！」

ザッ！

「誰や！？」

目の前に人影が降り立つ。

街灯も何も無い獣道だ。男なのか女なのか、追手なのか、人なのか。全てにおいて情報は見出せない。私は札で明かりを灯す。目の前にいたのは、執事服を着た男だった。

「これはこれは、天ヶ崎さんではないですか？ お久しぶりですね」

「あ、アンタは前田はん！？ ちょうど良い所に！！ 助けてくれまへんか！？ 追われてるかもしれへんのや！」

「追われている？ それは大変ですね。しかし私も忙しい身。今後手伝って頂ければ、手を貸しましょう。どうです？」

「何でもやらしてもらうえ！ いや、前田はんの助けがあれば、もうなあんも心配ありやしまへん！ それで、何をするんや？（ドクンッ！）」

心臓が鷲掴みにされた様な感覚に陥る。

自分の身体に視線を移す。しかし、そこには何の変化も見られない。刺されてもいないし、攻撃を受けているわけでもない。

それなのに焼けつく様な胸の熱い痛み……。

前田はんは懐から鷹の様な鳥をモチーフにしてある秤を取りだした。



「これ、お見せした事があるから御存知ですよ。封印級の魔法具とされる【鵬法璽】」  
エンノモス・アエトスフレイギス

結構前の事や……確かに見せてもらった事がある。契約の絶対尊守の魔法具。つまり、契約した場合、死ぬまで従い続ける最悪の代物や……。それを私に？ 契約内容は？ 【今後手伝って頂ければ】×  
【何でもやらしてもらおうえ】＝【一生奴隷】

「ま、前田はん？ 嘘やろ？ ウチ、そんな事されんでも前田はんの為やったら何でも……」

「いえ、今回の仕事だけは、あなたは断ったでしょうからね……行きますよ？」

ぐっ！ アカン！ もう身体に強制力が付いている。  
何でなん？ ウチ……前田はんなら……。

「では始めますよ。え、10分で終わらせますのでお願いしますね」

着いたのは……関西呪術協会の総本山。

「な、何をするんや？」

「全ての石化を解呪します。さあ、天ヶ崎さん石像をここから並べ

で行って下さい。私は解呪と同時に見つからぬように睡眠と催眠の魔法もかけなければなりませんので」

「ぬわあああああ~~~~~!!」

身体が勝手に動く〜！ 重いのに！ 手が引き千切れそうなのに持ててる〜!!!!

「忘れておりました。……これでどうですか？」

あ、軽く……。肉体強化系の魔法をかけてくれたようやな。そーゆー優しい所も変わってへん……。

「前田はん……ウチ……」

「さあ！ 時間がないですよ！！ スピードアップ！！ クロックアップ！！」

「つてえ！ ぬううあああああ!!!!」

鬼〜!! 悪魔〜!!!! 軽いけど、軽いけど〜!!  
ああ光が見える~~~~~!!!!

S i d e o u t

第08話「一生奴隷の呪でございます」(後書き)

感想は随時受付中でございます。

第09話「前田システムでございます」（前書き）

長いよ。長いって……。

あゝ疲れの眠いの。明日も仕事なの……寝よ。

えゝ今回は。修学旅行編が終わり、前田が歌い、千雨が吼えます。

ではござ

第09話「前田システムでございます」

S i d e 天ヶ崎 千草

あれは何年前やったんかなあ……？

確か、まだウチが3歳とかそこの頃やったと思うわ。

ウチの両親は、まあそれなりの力を持つとって、

魔法の世界に行ったらしいんや。

……でも、死んでもうたんや。

「お父様とお母様が……？」

目の前の人は涙を流して頷くだけやったわ。

何で泣いてはるんやろか？

あん時は理解も出来ずに「死んだ」って言われた両親を待った  
な……。

帰ってくるわけも無いのに、毎日毎日、近衛の家に走ったわ。

「帰ってこないんだよ」

そう言われても、「まだ」帰ってこない」と勘違いしとって、  
何度も何度も稽古もすっぱかして走って行ったわ。

それから少しして、周りから言われるようになったんや。

「お前ん家のお父さんとお母さんって死んだんだろ？」

「死んだってなんや？ 帰ってこーへんだけや」

「アホだなあお前。死んだってーことは、もう絶対に帰ってこないつて事だぞ？」

ほんまに「嘘や」って思ったわ。

まあ、いつまでも信じない子供ではなかったし、近衛の本家にも修行とかで通うこともあつたさかいに、調べることは調べとつた。

ウチが今の このかお嬢様ぐらい、中学生ぐらいになった頃や。やつと分かつたわ。全ては魔法の世界の戦争だつたんやてな。

どんな死に方をしたかも記録されてへんかつたけど、

両親は間違いなくアツチで死んだ。

それだけなら「しゃーない」ですんだんやけど……。

あん時の師事してた呪符の師匠がこう言うたんや。

「両親とは違い筋がいい。西洋の魔法使いにも そうそう遅れは取らんだろう」

「し、師匠はウチの父様と母様をご存知なのですか!？」

この時の師匠は元々が西洋魔術をやつとつて、関西に鞍替えしたんや。せやから西洋魔術にも詳しくかつたし、アツチのことも多少は知つとつたんやと。

この人がまあ最悪やつたな……。この人さえおらんかつたら……。あ、いや、おらんかつたら前田はんと会えなかつたんか？

だとしたら、嫌いやけど感謝やな。

「両親の事を知りたいか？ ふむ、今日はコレぐらいにしておこう。汗を流し家に来るといい。全てを話してやろう」

「はい！」

ああ〜思い出すだけで純真すぎるわウチ。完全に信用しきつとったわ。

本家の風呂使わせてもろて、少し歩いたところにある師匠の家に行つたんや。

師匠は酒を1杯飲んで話し始めたわ。

「お前の両親はな、魔法の世界で死んだ。味方であるはずの同じ人間によつてだ」

びつくりしたわ。悪魔とかワンサカ出とつたらしいから、悪魔やと思つとつたんや。ソレが人間にやられたやなんて……。師匠はまた1杯飲んで続けたわ。

「あの戦争に参加していた一部の者は、嵌められたんだ。お前の両親もな、私も同じだが、私は何とか生き延びたよ」

師匠が言うには囷に使われて、その隙に大魔法でドツカーン。大げさに両手を広げて言うてはつたわ。そこに父様と母様がいたんやと。やつたんは西洋魔術師やと。

その話しが終わってウチは絶望しとったわ。そこで師匠が立ち上がったんや。

「その顔、くくく。たまらんな……母親そっくりじゃないか」

そう言っつて師匠はウチを拘束魔法で口を封じ、両手両足を封じて身体中を触り、舐め回したわ。

「奴等はこの拘束魔法で身動きできんようにして悪魔を倒していたなあ……。西洋魔術の拘束はどんな気分だ？ 私を誘惑する悪魔をお前の中から追い払ってやるわ。ぐふふふふ……。おい、もっと良い顔をせんか……。ああ、そうだ。そう言えばお前の母親はあの後、少しだけ息があつてな。西洋魔術師が治癒魔法をかけて今のお前の様に拘束されて慰みモノになっておつたわ。アレは良い顔であつたな。……そうじゃ！ その顔じゃ！ ふははははは！」

ウチは涙しか流せへんかつた。どうして目の前の男は私に覆いかぶさっている？ どうして身体中を汚ない舌で舐められている？ もう絶望しかなかつたわ。死んだ方がマシやと思つた。

ドンドン。

誰かが来た。

一瞬、助かつたと思つたわ。でも目の前の醜悪な姿にしか見えなかつたの師匠は、大声で「取り込み中だ！！」と答え、頬を釣り上げたまま私を見てきた。

助からない。目の前の光は消え、ウチの目は何も見えんようになつたわ。

比喩とかやないで？ ほんまに見えんようになつたんや。



精神的に限界が来たんやろうな。音と触られてる感覚しかなかったわ。

ドンドン！

それでも戸は叩かれてな。ウチを他の部屋、もしかすると押入れとかかも知れんけど、そこに移動させて出たんや。声しか聞こえんかったけど、ソレが前田はんやった。

「うるさいぞ！ 何の用だ！！」

「夜分遅くに申し訳ありません。実は道に迷ってしまいまして、なにぶんキューバ共和国は初めてでございまして、言葉も通じず困っ……」

「ここは京都だ！！ ボケるのなら大阪に行け！！」

「おお！ ここが有名な京都！！ キューバと京都……似ているわけでございますね……。なるほど、京都でございましたか、と言う事は寺や神社が数多くあると……通りで動き辛いはずでございます……はっ！ ではあなたはもしかや有名な……！！ あなたは誰でしょうか？」

「私は忙しいんだ！！ さっさと消え……！！！」

「女の子を襲うのにでございますか？」

え？ ってな。本当にびっくりしたわ。

迷い込んできたどこか頼りない救世主は、いきなり声色を変えて言

うたわ。

「な、何を言っておるのだ私は一人で……!!」

「実は私、仕えるべき主人を探しておりまして、【前田センサー】にそれらしい反応を見つけたので寄らせていただいたのでございます。もし、声も出せず、手足も動かせず、涙を流す女の子がこの家にいたとして、私の主人になるべき方であれば……消しますよ?」

「た、たわけ!! 私がその様なことをするわけが……!!」

「ではお伺いいたしますが、女の子はこの家に絶対にいないと? 中学生ぐらいの女の子でそれなりの気や魔力を備えていそうなのですが……本当にいないと? では、あなた様の残りの人生を賭けて頂きましょう。そうですね……もし嘘だとしたら、【今の生活を全て捨て、ゴミ処理場の仕分け作業員として一生勤勉に働く】ようになつて頂きますが、よろしいですか?」

「な、何をわけの分からんことを! 私は一人暮らした! 女の子などこの家にはいない!! (ドクンツ!) か……? かはっ……? ご、ゴミ処理場に行かなくては……分別をしなくては……」

「嘘は身を滅ぼしますよ? お気を付け下さいませ……もう手遅れですがね」

今思えば嘘は前田はんも付いとつたけど……。

まあ分かりやすい嘘ならええんかね？

「天ヶ崎千草 様……申し訳ありません。どうやら神社やお寺の影響なのか、【前田リーダー】が不調の様です。あなたを主人とする訳にはいかないようです。お楽しみを邪魔してしまいましたので、視力が回復するまでお手伝いいたしましょう」

「楽しみやないです！ あ、あの 前田はんは一体……」

「今は野良執事でございます」

「ノラ執事……？」

その日からはプロの執事の仕事をウチ相手にしてくれはったわ。炊事・洗濯にあらゆる補佐。……風呂や御手洗いもやけど……本当に助かったわ。

それからしばらくして、目が見える様になった……目の前には執事服の少し年上の格好ええ方がおりましたわ。目が見える様になった途端に別れになるやなんてな……。ウチはこないな人に助けられて優しくしてもらってたんやな……。風呂で裸も見られて、御手洗いまでも……。

「それは中学生の頃だけでございます」

「心を読まんとして下さい！ あ、前田はん 忘れ物です……鷹の置物？」

「これは申し訳ございません。これは契約の魔法具でして、これを  
使い交わした約束は絶対に守られるのでございます」

「え？ ……じゃ、じゃあ もしかして ウチの師匠はこれで……  
？」

「左様でございます……では、とあるお屋敷の採用試験イクサミネーションの時間です  
ございますので。あ、レールガンなどは特に関係ございませんのであ  
しからず」

「は、はあ……？ (どういう意味やるか?)」

そう言っつて前田はんは行っつてしまいましたわ。

それからの私は師匠の言っつていた事が嘘かも知れんかったけど、  
両親を殺した西洋魔術師を憎む様になっつたんやなあ。

そつでもせんと、あん時の記憶が甦っつて何度も吐いたわ。  
いつしか憎むんが普通になっつて。  
ウチ、何してたんやろ……。

自分で巻いたタネとはいえ、近衛の本家の石化の治癒の手伝いしと  
るし、

関西呪術とか西洋魔術とか、もうどーでもええな。

満月の月明かりで ウチは呪符を眺めていた。

「終わりました。数時間で目覚めることでしょう。天ヶ崎さん、お手伝い頂きありがとうございます」

「前田はん……」

あれ？ 今思えば記憶に残る前田はんのままや……。あれから何年や？ けっこー経つのに記憶どおりっておかしないか？ あの頃は年上やと思っとったけど、これやとウチと同一年ぐらいか……。アカン、ウチの方が少し上かも知れん。

「執事は歳を取らないものでございます」

「こ、心を読むんも変わっておまへん……」

「では、夜が明ける前に行きましょうか」

「一生奴隷になってもうたけど……  
ウチは前田はんの為やったら、何でもするえ」

「お手伝いを依頼しただけなのですが、あの時の発言が契約とされてしまったようですからね」

そう、数十分前にあった呪いクラスの契約。

【手伝って（無期限）】に対して【何でもする】と答えてしもたんやな……。だつて仕方ありやしまへん。前田はんにかえた喜び、助かったと思つた安堵感、契約魔法具を使われてると思わへんかった

信用。

見事に【一生お手伝いします】という契約を結んでもたけど、裏を返せば【この命の限り前田はんの傍にいます】という事やもんな……。そないに悲観することもないな。

S i d e o u t

【3班（着替え中）】

修学旅行も今日で終わり。

結局、前田の謎が増えただけな気がするぞ……。部屋では着替え中で、一人拳を握り震える委員長がいる。

「ふふふ、私 雪広あやかはこの修学旅行で一回りも二回りも成長してしまいましたわ」

「何が成長したの？ いいんちよ」

村上が何気なく聞くが、どうせくだらない事だろう。

「決まっています！ 前田への『愛』がですわ！！ ホホホ、千雨さんには負けませんわよー！！！」

バカが極ったか……。

「ふふ あやかは最近こっちも成長してるじゃない？」

もにゆ

「ひゃあ！？ なな、何をちづるさんっ！ー！！」

「久しぶりに比べっこしてみましようか？ 千雨さんもどう？」

「なっ！？ だっ 誰がためえらみたいな爆乳とー！！」

「……」

「はいはい抑えてちうちゃん 村上もこっち向いて」

ん？ 朝倉？ どっかに行つてなかったか？  
いつの間にか戻ったんだ？  
っーかもう着替え終わってんのかよ。

「ハイチーズ」

パシヤッ

ちよっ!!

「何タダで撮ってんだ朝倉ーッ!! 金払えっ!!」

「朝倉さんーっ!?!」

「ナハハハ」 スタコラ

っーかザジに関しては上半身裸じゃねーか!! まずいだろっが!!

ドンッ

「っつと、スミマセン……げっ!!」

「朝倉さん。お嬢様の下着姿を撮影でございますか?」

「あ、いや、修学旅行の撮影担当として……」

「お借りします」

「ああ! 私のSDカードが!!」

カタカタカタ……カチカチ。



「あ、前田！ ソイツを捕まえる！！ 盗撮だ！」

「うわっ追いつかれた！ 盗撮じゃないよ！ ハイチーズって言ったじゃん！」

「はい、お返しいたします」

「へ？ はあどうも……へ？」

前田はいつの間にか私のパソコンを手に画像を表示させている。たった今撮られた写真で、朝倉以外が下着姿の3班の写真だ。

「お、おい？ 何してんだお前……私のパソコンいつの間に……」

「さあ、お嬢様の下着姿！！ 6000円から〜！！」

学園に戻り次第印刷しお渡しいたします！！」

「売るなー！！」

「いえ、ここはお嬢様の美しさを世界に広めませんとー！！」

「それで有名になったら、ただの痴女じゃねーかよー！！」

「前田にも見られてしまいましたわ……どうしましょう」

それで顔を赤らめるのは違っただろ！ 委員長も怒れよ！

「前田！！ 私の京都観光に付き従え！！ そして呪いを解け！！」

「マスター。呪いと大声で叫んでは……（オロオロ）」

いつの間に来てたんだよ！ ロボと留学生幼女！

昨日までいなかっただろ！！

Side 天ヶ崎 千草

「お姉さんこつちオレンジジュース！」

「何か軽い食べ物あるかい？」

「こつちはポテチ〜！」

「牛乳はありますか〜？」

目の前に展開される注文という名の攻撃。  
ウチはそれを捌く、捌く、売り捌く。

数十分前の京都駅。

新幹線で関東へ帰ろうとする学生さんら、  
ウチもチケットを買おうとした時やった。

「では、コレに着替えてお仕事がんばってください。あちらに帰る  
までが修学旅行ですので」

「は、はぁ………どういふ事やるか前田はん？」

乗車券は いらないと、売り子の制服を渡され、  
新幹線に乗り込むと、何故か注文の嵐。

「あゝ560円になります。こっちは980円です。今参りま  
す。！」

「あ、こんなところにいたか。何やってんだ前田……」

「これはお嬢様、売り子さんの販売方法を確認し、問題があれば指  
導をと思ひまして……」

「……可哀相だから仕事の邪魔すんなよ？」

「かしこまりました」

……あれが、前田はんの主人？

ううん。どうにも冴えへんよーに見えるんやけど……。

特別な魔力とかは感じられへんし……。

「天ヶ崎さん。サボリですか？」

「うおおっ!?!? ちゃいますちやいます!?!」

「さあ、スピードアップ! クロックアップで販売するのです!  
それがあなたの交通費なのでございます!」

「のあああああ!?! また光が見える~~~~!?! いるうっしや  
いませええええ~~~~~~~~いいいい………」

Side out

「じゃあね〜皆〜。長谷川も〜」

「ああ」

適当にヒラヒラと手を振り、私は寮の自分の部屋へと戻って来た。

「適当にあしらう様には言え、お嬢様がクラスメイトの方々に手を振る様になるとは……今夜はお祝いにいたしましょうか？」

「手ぐらい振るだろフツ」

……。いや、今まで振らなかったか？

まあどうでも良いだろ。

こうして

騒がしい京都修学旅行は終わった。

「明日は休みだから明後日からまた騒がしい学園生活か……平穩はどこだ」

もう、騒がしさしか味わえないのか私は……

「お嬢様も大変でございますね」

「お前が言うな!」

S i d e 桜咲刹那

修学旅行から戻った次の日。

私はある人からの手紙による招集を受け、学園のとある一室に来て  
いる。

しかし、呼ばれたのは私だけではなく。

「楓、真名も……」

「やあ、刹那も呼ばれたか」

「なんやるか？」

「と言うか、この手紙は誰アルか？」

「誰でしょう？」

「綺麗な便箋でした。筆跡も見事なものです」

このかお嬢様は私が連れてきた。

そして、他にはクーフェイト、宮崎さんに綾瀬さんもいる。

カシャン！

急に室内は暗くなり、スポットライトで教壇が照らされる。

「何だ！？」

真名は銃を抜き取るうとしているが、何故だろう？ 私は妙に落ち着いてライトの当たる教壇を見ていた。この流れはあの人の造り出している空気に違いない。

あの、長谷川さんの執事をしているウチのクラスの副担任。  
前田先生だろう。

『ニポン ノミナサン コンバン ワ！』

「こんばんわ〜！ ってせっちゃん！ 前田先生や！！」

ああ、予想通りだ。

イントネーションとか凝ってるな……。

前田先生はマイクを片手に小指をピンと立てている。

「先生 どうしたですか？」

『綾瀬さん。いえ、皆様！ 実は私、壮絶に悩んでおりまして、この事を話すべきか、放って置くべきか悩んでいるのでございませう！』

「あの〜悩みはマイクで大きな声で話さなくても〜」

宮崎さんの言うとおりだ。

しかし、提案も虚しく流される。

『ですが、悩み抜いた結果あ！ 話す事に致しました。さて、お集まり頂いた皆様には共通点がございます。ジャパニーズNINJA 楓さん。分かりますか？』

「忍者とは何のことでござるかな？　しかし、共通点でござるか…  
…バカレンジャーはレッドとピンクが欠席でござるな」

『では宮崎さん分かりますか？』

「え、えっと、本が好きですか？」

『そうかも知れませんが、では大ヒント。一昨日の事でございます』

一昨日、天ヶ崎千草がお嬢様を攫い、関西呪術協会が壊滅するかもしれない状況に陥った事件があった。エヴァンジェリンさんのお陰で、どうにか解決した件だ。しかし、それは前田先生は知らないはず。精々、シネマ村の事までのはずだが……？

『では、魔法の谷間の龍宮さん。魔弾の籠った銃撃が……』

「っ！　……前田先生セクハラで訴えようか？」

明らかに真名は動揺した。“カチリ”と銃のセーフティを解除しているが撃つ気はないだろう……と思う。

『これは怖い。では、本が好きな綾瀬さん。あの夜は綺麗な満月でしたが、狼少年とか見ませんでしたか？』



「っ！ ……せ、先生。満月で見るのは狼男です」

狼少年とは、あの小太郎の事か？

『なるほど、大猿ではないのですね。ブルーツ波を浴びても人体に影響は無し……と。では、人ならざる者をその拳で倒したいと思えますか？ クーさん』

「強いなら普通の人でも良いのではないアルか？」

クーは何も分かってない面持ちで平然と答えているが、間違いない。前田先生はあの夜の事を知っている。

『なるほど、クーさんらしい回答です。』

では……桜咲さん。背中から羽が生える人をどう思いますか？』

「っ！？ そ、それは……」

何故そこまで知っているんだ！？ その事はあの場にいないと……！！

真名や綾瀬さんの情報が分かるのは、何とか納得できる。

しかし、あそこから私達のいた場所までの距離は……！！

ぎゅっ

「っ、このかお嬢様……？」

「大丈夫や、何も怖い事なんてあらへん。せっちゃんはせっちゃん

や

『左様でございますね。では、近衛さん。改めて聞きましょうか。その手に握る剣士の手を血で汚しますか？』

前田先生は声を落として質問してくる。

「あ、改めて……？」

「やっぱり、あの時の頭に響いて来た声は先生やったんやね……」

頭に響いて来た……念話か！

「このかお嬢様に何を話したんですか？」

『……【魔法】とは映画や、本で読めばファンタジーな楽しそうで、体験したいモノでございます。しかし、現実に魔法があったとしたらどうでしょうか？ 一昨日の様な事が日常茶飯事になる場合もあります。その時、桜咲さん。あなたは』

【お嬢様を守れますか？】

守れる。

そう言い切りたい。言い切ってしまったえばこの話は終わりだ。

だけど、言い切ってしまったえば……。

言い切れ！ 私は強い！ お嬢様だって助けだせる！

助けだせる？ 何故助け出す？

助け出すと言う事は、

その時点で助け出さなければいけない状況になってしまっている。

そう、私はあの時 既にお嬢様を攫われていたではないか。

この人がいなければ、お嬢様は矢に貫かれ、城から落ち、

このお姿を二度と見せる事は出来なかったかもしれない。

「せつちゃん」

「……お嬢様？」

全部聞くと言う顔をしている。

何故だろう、それが伝わって来る。

私は強くない。これは分かっている。

私より強い者など数え切れないほどいる。

そう、私は。

「このかお嬢様。 私は弱いです。この場であなたを絶対に守れると言い切れない！ 私にはその力が無い！ お嬢様にはいつまでも無事で、幸せに、ずっと幸せでいて欲しいと思っております……ですから、ですから……恥を忍んでお願い致します。どうか、どうか これ以上……！」

「せつちゃん。ウチな、前田先生に言われたんや、そんでずっと考えとった。ウチを守ってくれるんは、いつもせつちゃんやった。嬉しいし、格好ええなあとも思うし、本当に感謝しとるんよ。でもな……怖いんや。せつちゃんが傷付くのが……。今後な、もしウチがあの時 ネギ君とパクテオーしてたとしても、治せんかもう傷を負うかも知れへん。……せやからな せつちゃん。お願いや。ウチ、魔法なんて使えなくてもええ、学園生活が終わったらすぐにお父様のいる京都に帰る。それまでだけでええから……一緒に……一緒に……助けてなんて言えへん、でもお願いや、その時までウチと一緒に……おつてください」

『キゝス！ キゝス！』

スカーンツ！！

「茶化すな先生。しかし、なるほどそう言う事か……」

銃で前田先生の頭部を殴った真名は銃をしまい、考え始める。

これほどの人前で私は何を口走っていたんだ……。穴があつたらお嬢様以外 全員埋めたい気分だ。

「どういう事アルか？」

「魔法は危険だから関わるな。ということでしょう。そうですね？  
前田先生」

『左様でございます。ネギ先生一人でやっている事でしたら問題は  
ございませんでした。しかし、そこに一般人が入ると危険が危ない  
のでございます。ネギ・スプリングフィールド。彼は魔法使いとし  
ては少し特殊な存在でございます。今後更なる危険が伴うでしょ  
う。ネギ先生一人ということであれば、魔法使いの仲間がネギ先生  
を守れます。しかし、一般人の方があると、それを守らなければな  
らないですし、魔法使いの方々は【一般人にバレる】と、恐れてし  
まい手助けが出来ないのでございます』

「アイアイ」。修行は自己流で出来るでござるからな」

「強い人と戦えるならワタシも問題ないアルね」

「私は【関わらない】と言ってしまうと仕事に支障が出るからね。  
ネギ先生には依頼が無い限り関わらないようにしよう」

「……で、でも。関わらないと言ってもコレが」

宮崎さんはネギ先生との仮契約のカードを取り出し、困惑している。

『それに関しては破棄が可能です。カードの能力は失効しますが、

カードだけは残せますので記念にどうぞ。そもそも、あの時、邪魔が入らなければその契約も無かったはずなのですが……」

邪魔が入らなければ？

宮崎さんが契約したのは確か修学旅行の2日目。

前田先生の邪魔を出来る程の人物がいたのか……？

「あの、一つ質問があります。魔法に関わらないということが私達にとっても、ネギ先生にとっても一番リスクが少ないであろう事は分かったですが、知的好奇心、探究心に勝てる自信がない場合はどうするですか？」

『それは御安心くださいませ。そのお気持ちだけで十分でございます』

パチンツ！

カチャン カチャン

ウイイイイインツ

ゴウンツ

「え？ なんや!？」

「ミラーボールが出てきたアルよ!？」

前田先生の指がなると同時に前後の入り口のドアのカギが閉まり、スポットライトが消え、室内は暗いピンク色の様な照明に変わり、中央の天上からキラキラとミラーボールが降りてくる。

何だこれは……？

「カラオケボックスみたいやな……」

『通称：前田システムでございます』

通称の割には聞いた事が無い。

『クー・フェイさん～あなたは～記憶を失うのです～コーヒー～』

『長瀬楓さん～あなたは～記憶を失うのです～一杯と言わずに～』

『綾瀬夕映さん～あなたは～記憶を失うのです～砂糖多目に～』

『宮崎のどかさん～あなたは～記憶を失うのです～ミルク多目で～』

』

「な、なんだ!？」

前田先生は一人なのに、声が四重になって響いた。

「これは、強烈な催眠魔法だな……名前を呼ばれ、効果を唄いあげると半永久的な催眠にかかる……まさか使えるアホがいるとはな」

『内容は魔法に関わる事は全て消去。物語の魔法等は覚えていますが、現実を起こった魔法などは何も覚えていない状態です。ちなみに、宮崎さんに関しましては恋愛事情がございますので、そこはバツチリ残っております。仮契約に関しては後ほど対処します。陣が必要ですので』

き、聞きたくは無いけど……。

「わ、私達はよろしいのですか？」

『先手を打たせて頂きましたので大丈夫です』

先手？

『全ての手紙に細工をしております、封筒自体が契約の書面になっておりました。封を開けると契約完了と言う過去に流行った契約方法なのですが、この日を最後に、魔法に関わる事は制限されます。自分の能力などを使う事は問題ございませんのでご安心ください』

……詐欺だ。

別に良いけど。

私達は寮に戻った。

前田先生に唄われた楓達は、催眠効果が残っており、前田先生が各自寮に届けるそうだ。

「せつちゃん」

ぎゅっ

「な、何でしょうお嬢様？」



「む。まだお嬢様って言う。まあええか。とりあえず友達の再始動からやな。」

学園生活が終わるまで、それまではこの身を傷付けず、お嬢様を守る。

これが今日、私の胸に刻んだことだ。

Side out

Side 真名

私は自主的に残り、室内の連中を運ぶ手伝いをしていた。

「前田先生。一つ教えてくれないか？」

「何でございましょう？」

「私は職業柄、この眼が大事だね。」

（魔眼なんだけど）……前田先生は見えないんだよ。何でかな？」

「御存じありませんか？ 執事とは色眼鏡で見られる事もありますので、どの様な目で見られても良い様に、常に自分の姿に気を配っているでございます」

私の魔眼を色眼鏡呼ばわりとはね……。

しかし、見えないのは事実。

姿は見えている。

人間であればそれは変化無く映る。

魔法使いや魔力持ち、変化している者であれば

【気】や【障壁】や【真の姿】が見える。

これだけの事をしておいて、何も見えない？

ふっ、聞いた事が無いぞ そんな話。

ふざけた執事バカだと思っていたが、超危険人物だな。

「その魔眼も中々の代物かと思えますがね」

心を読まれた？ 私が？

「……驚いたな。いや、本当に驚かされてばかりだよ前田先生。ではもう一つだけ聞いても？」

「……その件ですか。お答えしましょう。あなたが思っている通り、あなたにだけは契約をしていません。記憶を奪う事も、魔法に関わることを制限するモノも何もしておりません。効きませんから」

「聞きたい事の答えで助かるけど……効かないってのは、どうしてかな？」

「秘密でございませう。ここからは30秒ごとに2千円が発生いたします」

「せ、生徒からお金を取るのか？」

「では2時間3万円で如何ですか？」

「それは支払いする人が先生に変わって、更に何か行為をする話かな？」

「……お嬢様、私の目の前に【そういった行為】おこなを行っている可能性のある方がおります。教師である私は止めるべきでしょうか？」

「知識としてあるだけだ！ 行おこなってなどいない！」

くっ、大分冷静に話が出来たと思っていたのだが、話しの主導権は握れずか……正直、疲れる。

S i d e o u t

ガチャ

「ただいま戻りました」

「あ？ ああ遅かったな……」

前田が帰って来た。

日曜だと言うのに教師の仕事だとかで朝からいなかったな。

「修学旅行の事って教師の間で話す事多いのか？」

「それはもう！ お嬢様の記録を余すことなくお伝えするには時間が少なく大変でございました。しかし、この胸の苦しさは一体……！  
ああ！ お嬢様！ 私はお嬢様を想うあまりに、恋煩いを……！」

「してねーし懐かしい構図だが、苦しいのは私が締め上げてるからだ！ お前は私を完全引き籠もりの精神不安定者にしたいのか！！  
適度の引き籠もりが良いんだよ！！ 外に出るのが怖いほどに追い込もうとすんじゃないねー！！」

「どのようなお嬢様でも私は仕え続けますが？」

「だーっ!! 今日はまだコンビニで弁当買って来る!!」

「そう言うと思いついて参りました」

「どう言う思考能力してんだよコイツは……。  
ガサガサ……。」

「実はそちらのお弁当。私が生産工場へ行き作って来たものにご  
います」

「邪魔してすみませんでしたって謝って来いっ!!」

「お嬢様、冗談でございます」

「だろうよ!! たくっ!! ……」

弁当をレンジに入れ、温めようとすると、弁当の銘柄のシールに目  
が行った。これは自然なことだ。見た目で【〽️弁当】だと、視覚  
情報を得たとしても、文字からも情報を得ようとするのは人間の癖  
みたいなものだ。

【前田特製 幕の内弁当 デンプシーロール味】

「……ま」

「お嬢様いかがなさいましたか？」

「前田……っ!!!」

次の日。

朝のニュースで【前田特製 幕の内弁当 デンプシーロール味】が供給が追いつかないほどバカ売れしていたのは無視した。

第09話「前田システムでございます」(後書き)

感想は随時受付中……グウウゝZZZ

第10話「変わり行く形でございます」

Side エヴァンジェリン

「帰れ!」

「あ~~~~~!」

ボタンツ!!

「マスター、宜しかったのですか?」

「良いに決まっているだろうが。茶々丸、言わなかった私も悪いが、今後あのボーヤをこの家に入れるな。関わるな。面倒臭い」

「京都での一件。貸しは作ったが、借りを作った覚えはない。あのボーヤ、私の弟子にしろだと? バカも休み休み言え。」

カチャン

「ん? 茶々丸、なぜ鍵を閉める。入れなければそれだけで構わん」

「いえ、私は閉めておりませんが……あ」

パッ

カパッ

ウイイイイン……ゴウンッ



「何だ何だ!？」

「この照明の色は……それにミラーボールまで……マスターこれは一体?」

「こっちが聞きたいわ!」

『ロリータの後ろに迫る影〜それは前田〜』

「貴様、どっから湧いて出た!？」

『愛の執事〜黒い稲妻〜あなたの愛人〜』

「妙な歌を止めんかー!」

「お茶をお淹れいたします」

『お構いなく〜コーヒーで結構でございます〜』

「厚かましいな!〜! いつの間にこんなものを用意した!？」

『前田システムの調整でございます。問題無いようですね。では、私は学園に行かなければなりませんので(前田システムOFF)ではお邪魔致しました』

ウイイイインツ

パタンツ

パッ

ミラーボールが天井に収納され、照明なども普段の色を取り戻す。

私は自分勝手に帰ろうとする前田を呼び止めた。

「待たんか！ ……ふー …… コーヒーも淹れている最中だ。一杯飲んでからでも良いだろう？」

深呼吸を入れ、冷静になり、いつも以上に慎重に会話をしようとした。

何も情報が得られない男だ。少しでも何か得られれば良いのだが…。

「良いでしょう。まだ時間もありますしね。しかし、エヴァンジェリンさん。花粉症なのでは？」

「花粉症でも会話は出来る。貴様に聞きたい事が3つある」

「1、お嬢様です。2、お嬢様です。3、お嬢様です」

「勝手に質問を決めるな！ 何の質問にした！？」

「1・最も尊敬する偉人は？ 2・好きな食べ物？ 3・好きな女優は？ でございますが、何か不可解な点でも？」

全てが明らかにおかしい。

私は気を取り直して再度聞いた。

「仕方ありませんね。お答えしましょう」

「ふん、恩着せがましいな。一つ目に私は京都に召喚されてあの大鬼を片付けた。しかし、貴様でも出来たのではないか？」

「さて、どうでしょうか？ 言わせて頂くとすれば、鬼退治は執事の仕事ではございません。ですが、エヴァンジェリンさんに京都・修学旅行を楽しんで頂くためには、あなたを呼び出す他ありませんでしたからね。ですのでメールを送らせて頂きました」

「ほう……それに関しては感謝している。本当に楽しかったよ。では二つ目だ。そのメールにも関する事だが、精霊の騙し方を知っていたり、私の呪いの解析をしたりと、色々 高度なモノを知っているな。貴様の正体は何だ？」

「ある時は長谷川千雨お嬢様の執事。またある時は学園教師。しかしてその実態は……！ 前田フラッシュ！ 執事の前田でございます！」

ピカーッ

……光った。

本当に何なんだコイツは。

おっといけない。こうやって流されるからいけないんだ。

「……あゝなんだ。私は、お前の事を魔法世界の住人だと推測しているのだが……」

「異議あり！ 前田は完璧を以って良しとする。証拠が提示できなければそれはただの空想でございます」

指をビシッと指された。

花粉症で目もやられているのか、【吹出し】が見えた気もした。  
カチャ

「コーヒーが入りました……裁判ですか？」

「いえ、検事の2の方でございます。先日遂にクリアいたしましたので、何を分かり合っているんだコイツ等は。」

「やはり答えられんのか。では最後3つ目だ。何故、長谷川千雨が主人なんだ？ お前は何を求めている？ 雪広の娘はそれなりにネジは緩いが、仕えるならアッチの方が良いのではなかったのか？」

「今の私のお嬢様は長谷川千雨様。それ以外は考えられません。エヴァンジェリンさんも良いと思ったのですが、絡繰さんに、そちらのチャチャゼロさんがいらっしやいますからね。」

「最初ツカラ気付イテタノカヨ？ 斬り出スタイミングヲ計ツテタ  
ンダケドナ」

人形に紛れているチャチャゼロはテコテコと歩いて来て前田の横に座った。

しかし、入れ替わる様に前田は立ち上がった。

「申し訳ございません。そろそろ学園で仕事がございますので、コーヒー御馳走様でした」

「休みの日にか？」

「教師モ大変ダナ。マア、ガンバレヨ」

ガチャ……パタン。

本当に仕事の時間が迫っていたのか。

それとも何も言えないと言う事なのか？

「あの マスター。質問に対しての答えは得られたのでしょうか？」

「いや、何一つ明確な答えは無かったな。奴がまともに話せば楽なんだが……」

ガチャ

「禁則事項でございます」

「朝比奈さんですね。分かります」

だから何を理解し合っているんだ！

【前田が帰り数分後】

「マスター。ミラーボールや特殊照明はどこにもありませんでした」

どっから取り出したんだアイツは。

自分の家なのに自分の家が分からなくなってくる。

S i d e o u t

S i d e    アルベール・カモミール

修学旅行から戻っての事だ。

アニキがエヴァンジェリンに弟子入りするって聞かなくて姐さんと一緒に行ったが問答無用で追い出された。

いやいや正解だぜ？　何で英雄の息子であるアニキが【闇の福音】なんて賞金首に弟子入りするんだよ？　悪の道だぜ？　悪の道。アニキもグレル年頃なのかもしれないな。

まあそれも失敗に終わったから問題ない。  
俺っちも煮て喰われるかもしれないしな。

しばらく途方に暮れたアニキは、夕焼けを眺めてボーっとしてた。  
姐さんはそれを何も言わずに……最初は声掛けてたぜ？　でもアニキも気が無い返事ばかりで、姐さんも見てるしかなくなっちゃまったのさ。

シューウウウウ……。

「うわっ！ ネギどうしたのよ！？ 煙出てるわよ！？ 熱暴走！？」

いやいや、アニキはロボ的な機械じゃねーんだから……。

「え？ 煙？ うわっ！ な、何これ！？」

アニキの背広の内側のポケットからの煙はすぐに落ち着いた。そこから取り出されたのは。

「これ…… 仮契約のカード…… 絵が消えてる！？」

「ちよつとどういう事よ！？ 仮契約つて期限あったの！？」

「いや、契約者同士が解除しないと切れないぜ？ しかしコイツは……。宮崎のどか嬢と刹那姐さんのカードだな……。まさかっ！！」

「何か分かるのアンタ！？」

「ちよいと失礼するぜ！（カタカタカタカタ！）……マジかよ…… 間違いなく契約が解除されてる。俺っちの口座から仲介手数料が引かれてるぜ……」

「その小さいパソコンどっから出したのよ？ ってそんな事より！ 今、本人同士じゃないと解除できないって言ったじゃない！」

「ど、どう言っことカモ君？」

第三者による契約解除の場合は仲介料は返金されてしまう。  
返金されているって事は、誰か契約を解除したヤツがいるってこと  
だ。

だが結局、謎だけが残って寮に戻る事にした。  
そこには、更なる謎が生まれていた。

「あ、アスナ……」

「このか？ 何その大きな荷物？」

「お嬢様、準備は出来ましたか？ あ、アスナさん……」

「桜咲さんも、どうしたんですか？」

「実はな……ウチ、この寮から出るんよ。急で悪いんやけ……」  
「ど、どうして！？ 何があつたのよ！？」

「あ、あわわわ。せ、せつちゃん……」

「私から説明いたします。実は……」



「えー！？ 魔法に関わらないように過ぐす！？」

アスナの姐さんは目を白黒させて驚いてる。アニキも呆然としてる。

このか姐さんが魔法に関わると危険になると今回の件で分かり、極力魔法関連から避ける生活をするんだそうだ。

「それで契約を解除したのか……でもよ刹那の姐さん。誰が契約を解除したんだ？ 契約者同士がないのに解除なんて、普通のやり方じゃできないはずだ。契約屋じゃない限りほぼ無理だ」

「それは……あれ？ どうだったか？ すみません覚えてないです」

覚えてない？ 今日の事だぜ？ ついさっきの事だぜ？

「おや？ お別れの挨拶中でございますか？」

そこにやって来たのは執事服の前田の旦那だ。

何度か助けてもらっているが、何でここに？ 別れの挨拶？

「下にお車を待たせておりますので、準備が出来ましたら下りて来てください」

「ま、待つてください前田先生。お別れの挨拶って？ 車を待たせてあるって？」

「聞いておられないのですか？ 近衛このかさんと、桜咲刹那さん。両名はこの女子寮から離れ、そこまで距離はないのですが、別の生活環境に引っ越しをする事になってます。決まったのは急な事でして本日の事ですが、それが何か？」

「学園長は？ 学園長は知っているんですか!？」

「ええ、コチラに判子も頂いておりますが？ 転居届でございます」

……書類に間違いはねえ。じゃあ、爺さん了承の上で、孫であるこのか姐さんを魔法から遠ざけようとしているのか。

「で、でも!」

「転校するわけではないので、学園で会えますが……」

前田の旦那も困ってるな。

学園長も承認してて、転居する当事者もそれを願っていて、既に転居先も決まっっていて、引き止めようとしているのは、アスナの姐さんとアニキだけだからな。

「アニキ、姐さん。仕方ねえよ。公的な書類もあるし、本人も望んでるんだし、魔法が危険なのは確かだし、学園長の爺さんも孫が大事なんだよ……契約解除の事は明日からでも調べられるしよ」

「か、カモ君……」

「このか。今度 遊びに行っても良い？」

「ええよ。でも、ネギ君だけはアカン。アカンねん……」

本当に魔法とは一切を断つ勢いだな。

まあ明日以降に調べて再契約とかパパッと済ませちまえばこっちのもんよ。

「失礼、もう一つございました。アルベール・カモミール様宛でございます」

「お、俺っちに？ 前田の旦那に様付けで呼ばれるとは……」

話す機会もほとんどないから距離感も掴めないが……。

ピラ

目の前に広げられるA4サイズの紙。

「あなたに強制送還の上、逮捕状が出ております」

「「「ええー!?!?!」」」

【罪状：脱獄 強制猥褻罪 公衆に著しく迷惑をかける暴力的不良行為等の防止に関する条例 窃盗罪 信書隠匿罪 準詐欺罪未遂 殺人教唆 強要罪 賭博場開帳罪……】

まだ書き足りないと言わんばかりに罪状は紙に書かれている。

「ど、どうにかならないんですか!？」

カモ君は、カモ君は何も悪くないんです!！」

「あ、アニキ……!！」

「ネギ先生。……こうして書類が来てしまっている以上はどうする事も出来ません。もし、もしもアルベル・カモミール様が潔白と言う事であれば、裁判にて証明される事でございます。担当検事は“御剣怜侍”様です。心して下さいませ」

ガチャンッ!!

俺っちはアツサリと小型の檻に入れられ、荷物と一緒に運ばれて行った。

ムシヨに帰る事になるとは……。しかし、あのムシヨなら把握しきれてるからな。出るまでにそこまで時間も掛らないだろう。

「言い忘れておりましたが。

難攻不落で、今までに脱獄者無しの刑務所だそうでございます」

……終わった。アニキ、俺っちがいなくても頑張ってくれよ?

Side out

Side 学園長

.....。

「では、そういった流れでお願い致します」

「.....」

ザザッ.....

パタンッ

む？ はて？ 今誰かおらんかったか？

むう.....おかしい。

最近、いや、ネギ君達が修学旅行に言ってから.....。

恐らくはエヴァをアチラに転移させてからか、記憶が飛ぶ事があるのう。

先ほど誰かこの部屋に来ていた気もするのじゃが.....。

判子の押し過ぎで疲れておるのかのう.....。

コンコン ガチャ

「失礼します。戻りましたよ学園長」

「おお高畑君か、久しぶりじゃの。今回も無事で何よりじゃ」

ずっと海外に行って貰っていた高畑君は変わらぬ表情で帰って来た。

「前田君の事ですけど、何も得られませんでした。“居た”と言う履歴だけで、やはり知人などはいなかったですね」

「むう……彼はもう問題ないのかも知れんわ」

「シロだとお考えですか？」

「そうじゃのう、生徒からの信頼は厚いし、新田先生を筆頭に教職員からの評価も高い。エヴァンジェリンも彼と話した事があるそうじゃが、前田君は人を煙に巻くのが巧い様じゃの。ただそれだけで害はないと思うんじゃよ。知人がいないのも『高校でびゅー』と言うヤツのように、過去は人との接触を避ける性格だったかも知れん」

「なるほど……学園にいた学園長が言うのであればそうなのでしょう」

「ザザッ……」

「とりあえずのう、前田君は魔法使いだと言う事までは分かったんじゃ。彼には魔法先生としても働いてもらう訳なのじゃが、ワシ以

外は知らん事になっておるのう」

「どう言う事でしょうか？ 彼は魔法先生だと？」

「そうじゃ、魔法先生じゃ。じゃが、皆には彼の事を知らないまま  
でいてもらった方が、良いと思つての。伏兵みたいなものじゃよ」

「伏兵ですか……？ チャオ超君が何かした時の為でしょうか？」

「ふおふおふお、それも含めてのう。何かあつた時の執事バトラじゃて」

「……分かりました」

ザザッ……

む？ 今また記憶が飛んだのう？

……確か高畑君と土産話をしておつたんじゃよな？

「それで、海外はどうだったんじゃ？ 楽しめたかの？」

「ははは、仕事で行きましたからね。中々楽しむ時間ありません  
でしたよ」

む？ 仕事で海外に？

何をしに行つたんじゃつたかな？

まあ無事だったからええかの。

「では高畑君は、また本日より広域指導員で頼むぞい」

「分かりました」

S i d e o u t

S i d e タカミチ・T・高畑

パタン。

学園長室を出て、久しぶりの学園を歩き、外に出る。

喫茶店のテラスで一服し、引っかかりを思い出す。

さっきの学園長……少し違和感を感じたな。

前田先生の事を『問題ないのかもしれない』と言って、

その直後に『魔法先生に伏兵として認定していた』と言う。

これは不思議な事だ。



「これは、お久しぶりでございます高畑先生。出張から戻られたのですか？」

「や、やあ前田先生。いや、悪かったねえ。突然の出張と入れ替わりでクラスをお願いしてしまつて」

気配を感じなかった？ 集中しすぎたか。

「そう言えば学園長から聞いたよ。伏兵なんだって？ 期待して良いかな？ 学園祭は大変だぞ？」 何かあれば君にもお手伝いをお願いしないとね」

「どの程度お手伝いできるか分かりませんが、よろしくお願い致します」

ふむ、試してみるか？

僕はポケットに手を入れ、居合拳を軽く撃つてみた。

シュッ

バキッ！

「……な、何でしょう？ とても痛いです（パタリ）」

「ま、前田先生！？」

くっ！ 本当に裏の無い魔法先生だったのか！？  
悪いことしちゃったな。

「いや、災難だったね。大学の野球部のホームランがあそこまで飛んでくるなんて」

「はい、ビックリいたしました。麻帆良大学の野球部も素晴らしいですね。将来が楽しみでございます。ただ、巨人には入って欲しくないですね」

「あれ？ どこファンなんだい？」

「阪神でございます。優勝した際には道頓堀へ何人も投げ込むほどのファンでございます」

傷も残ったまま、間違いないか。前田君は魔法先生で、敵ではない。

僕は屋台でラーメンを奢って許して貰った。  
いやぁ本当に悪い事をした。

S i d e o u t

『前田特製 幕の内弁当 デンプシーロール味』コチラの売れ行きが凄いと言う事で、私は今、生産工場にやって来ています。御覧下さい。工場はフル稼働をしています。コンビニに並ぶと同時に数秒で品切れ状態です。コンビニのお弁当入荷時間の問い合わせも多く中にはコチラの生産工場に……』

ブツンッ

TVを消し、私は制服に着替えて寮を出た。  
修学旅行が終わって最初の登校。

「新しい気持ちで新しい恋をするんだ がんばれ私！」

「何を言ってるんだお前は？」

「お嬢様のお気持ちを代弁させて頂いた次第にございます」

「……じゃあ、今の気持ちは？」

「一応言っておくが、今は『お前は教師なんだから先に学校へ行け』だ。」

「……そ、そんな事をお考えに！？ 街中でオイルでございませうか！？」

「何を考えた！勝手に人の考えを決めつけてホラ吹くんじゃねー！！」

「朝から元気だね長谷川」

「おっ先」

「前田先生おはようございまーす」

くそっ 何でアタシが曝し物みたいにならなきゃいけないんだ。

「ケンカだケンカー！」

「部長に50枚！」

あー今日もやってるのか。

本当にこの学校はおかしいんじゃないか？

あの留学生のクー・フェイって言うのが強いとは噂とかで知ってるけどよ。

中学生だぞ？ 中学生。

それが大学部の格闘系団体の連中よりも強いつてどんだけだよ。

「ん？ 前田。お前、顔に……痣か？ 殴られたのか？」

立ち位置が変わった事により、

前田の反対側の頬にある少しだけ青くなっているのが分かった。

「これはお恥ずかしい所を、実は昨日、大学部の方のホームランが見事に命中したのですよ。避けるのも後が面倒でございますからね」

「ワザと当たったみたいない訳の仕方だな。何だかよく分からない

いが。

日頃の行いの悪さに罰<sup>バチ</sup>があたったんだろうな」

「そうかも知れませんが。今後は気を付けましょう」

フキフキ

前田がハンカチを取り出し、顔を拭う。

青い痣が消えた。

「また化粧<sup>フェイク</sup>かよ……今回ののはどんな意味があったんだ？」

「お嬢様がどれだけ私の事を見て下さっていらっしやるのか。その確認でございます。この様な小さな事にも気付けて頂けるとは……」

今度は涙を拭き始めやがった。

「遅刻しない内に私は行くぞ」

「どこまでも付いてまいります。お風呂であつても御手洗いであつても……！」

「もっと大きな罰を受ける……！」

教室に入ると朝倉が何やら新しい情報を流している。

見た事のない先生が来ているとのことだ。

そして、子供教師が入って来ると、少しオドオドしている。

「え、え〜……。今日は研修中の先生を紹介します。どうぞ……」

ウチのクラスにつて……。

私は後ろに直立不動でいる前田を見るが、前田は目が合うと、応援を始めた。

「かつ飛ばせ〜お嬢様っ！ 外角低めでございます〜！！」

「うるせー！ 何の授業だよ！」

「まったく、思うところは無いってことか。」

「じゃあ別段、前田が副担任を辞めるとか、子供教師が辞めるとかそういう流れでは無いってことだな。」

ガラララララ〜

「失礼します」

若干、上がる様に訛りを入れながら入って来たのは髪の長いメガネの女の人だ。

「天ヶ崎 千草と言います。1か月くらいやと思いますけど、以後よろしゅうお願い致します」

「……っ！？」

「~~~~キレ~~~~ッ!!」「」「」

数名違う反応をしたな。

神楽坂と近衛と桜咲 辺りか？

後ろの席だから分かりやすかったな。

ガタツ！

「何でアンタがここにいるのよ!？」

神楽坂が勢いよく立ち上がり、研修の教師を指さす。

失礼な奴だな。それとも知り合いか？

「あ、アスナさん。座って下さい。その……学園長も全て分かった上で許可してますので……」

子供先生は神楽坂を宥める。

が、子供先生自体も何か納得が行って無い様な感じだな。

私は、職員会議とかで何か情報を知ってるかと思い、

また後ろのアホ執事に顔を向ける。目が合つと前田は手にポンポンを持ち……。

「Let's! Let's! HASEGAWA! GO! GO!  
O! CHISAME!」

(カキーンッ!) パーパーパッパッパー

「だからうるせーってんだよ!! トランペット吹くな! カキーンッって何だ!? どっから出した音だ!! 応援が古いんだよ!

「！」

「あうう〜！ 長谷川さん静かにして下さい〜！！！」

「アタシかよー！！！」

「お嬢様。ここは堪えて下さい。子供先生では判断を誤ってしまう事もあるかと思えます」

「お前は私に謝るべきなんじゃないか？」

「バレておりましたか。申し訳ございません。実は応援が手抜きだったのでございます。本来であれば、ドラムにギターにベースに吹奏楽。更には応援団員を47名追加して【MAEDA48】と言う……あ、僭越ながら私センターをやらせて頂き……」

「そこじゃねーだろー！！！」



第10話「変わり行く形でございます」(後書き)

感想は随時受付中でございます。

第11話「情け容赦無しでございます」(前書き)

前田が本気を出すと……？

と言っか本気なのか？

手に汗握ってちょうだいな！

第11話の開幕でございますー！！

第11話「情け容赦無しでございます」

Side ネギ

「すまんアルね。ネギ坊主。ワタシは弟子は取るほど出来てないアル」

「そ、そうですね…… スミマセンでした」

逃げるような感じで、クー・フェイさんにも断られた。

エヴァンジェリンさんには問答無用で追いだされたしな……。

長瀬さんにも やんわりと拒否されたし……。

はあ……。

こんな時にカモ君がいてくれたら……。

ううん。駄目だよ。頼ってばかりじゃ進まない。

自分の力で今までもやって来たんだ。何とかしよう！

でも、桜咲さんと、宮崎さんの仮契約は、間違いなく解除されてるし、

宮崎さんに至っては、僕と契約した事すらも忘れてる。

アスナさんは大丈夫みたいだけど、いつまた強制解除されるか……。  
本当に一体誰が……。

「やあネギ君。久しぶり」

「タカミチ！ 久しぶり、帰って来たんだね」

そうだ。タカミチなら……。

「タカミチ、あのね……」

「ん？ どうしたんだい？ 悩み事かな？」

「僕を弟子にして欲しいんだ！」

Side out

Side 千草

「へ〜京都〜。やっぱり関西出身なんですね〜」

「そうです。前回、修学旅行で京都来てましたやろ？ ウチここの制服を見かけてましてな、ビックリしましたえ」

「うわっ そりゃ偶然！ 千草先生も正式な教員になればいいのにな〜」

ウチは何で教師の真似ごとしとるんやるか？

今も休み時間で次の授業の準備の手伝いやとかあるんやけど……その授業の担当の前田はんは……。

「お嬢様。お茶が入りました」

「だからっ いらねーっつーの！ 授業の合間合間に来るんじゃねーよ！ ザジ、代わりに……ってもう先に淹れられて飲んでるのかよー！」

「（コクリ）」

「ザジさんはゆず茶を御所望でしたので、先に淹れさせて頂きました」

「先でも後でもいーけどよ。いらねーんだってのー！」

出席番号：25番。長谷川千雨。

この3-Aのクラスの中では落ち着きのある生徒に見える。斜に構えて現実主義にも見えるが、前田はんに対して、また他のクラスメイトに対しても興奮すると乱暴な口調になる様やな。前田はんにはアしほど強く言えるやなんて、前田はんも怒らへんし、よっぽどの信頼関係があるんやな。

しかし……。

「いらぬのなら貰っぞ」

「あ、ああ……。それ、緑茶らしいけど、飲めるのか？」

「ふんっ 前田の頭の中はアレだがな、執事としては超一流だ。茶の淹れ方もしっかりしている」

「前田の異常さが分かるのか！？ ウチのクラスにもマトモな奴が……」

「お嬢様、本日も辛口評価が光っておりますね」

「お前の事だ。お前の」

あの時の化け物もこのクラスにおけるやなんてな……。スクナを氷漬けにして粉々にしよつた悪魔や……。ええと、出席番号：26番。エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。あないな化け物がいるやなんて知つとつたら、もう少し準備整えてからこのかお嬢様を攫つたんやけどな。ま、もうどーでも良い事や。ウチの事も覚えてへんようやし、関わらんとこ。

それよりもや。アツチのお嬢さんの方が扱い辛そうやな。

出席番号：8番。神楽坂明日菜。

出席番号：13番。近衛木乃香。

出席番号：15番。桜咲刹那。

何度もウチと京都で衝突したからしゃーない思うけど……。

「な、何よ？」

「信じる信じへんのは任せるしかあらしまへんけど、ウチはもう敵

「对せえへんから、お嬢様も大丈夫ですえ？」

「ホッ……なら安心やね せっちゃん」

「こ、このかお嬢様それはちょっと理解が早すぎるかと……」

キーンコーンカーンコーン

あ、授業が始まってしまっ。

準備何もしてへんのに、これは不味いんやないやるか？

そう思って前田はんのいる教室の後ろを見やるが、もういやしまへん。

「では、今日は教科書の40ページから……天ヶ崎先生。申し訳ありませんが、後ろの方で教育実習をお願い致します」

……いつの間に。

持って来ないと行けなかった資料までも……。

Side out

S i d e    エヴァンジェリン

「どうだった？」

「お越しになるそうです」

「そうか……さて、実力はどれほどになるのか……」

「ケケケ、御主人。殺スノカ？」

「死ぬのかどうかも確認したいがな。もし、今まで蓄えてきた魔力でも落とせないなら……諦めるしかないのかもしれないな」

そう、京都に行った時の魔力も残っている。これも合わせて別荘内で使えば。

「歩く事モ満足ニ出来ナイナシテ、ソロソロ勘弁シテ欲シイゼ？」

チャチャゼロはソファーに寝そべりながら、気だるそうにそう話す。茶々丸はいつもと変わらん。

今日は前田を家の中の、【別荘】に呼ぶつもりでいる。

前田は長谷川の世話をしたら来るらしく、まだ時間はあるが……。

別荘内で前田を落とせるなら、そのまま解呪をさせる。

解呪出来ると言う確証はないが、奴なら何かを知ってるはずだ。



夢だとかに囚われている余裕はない。目の前にヒントがあれば飛びつくのが普通だ。

もし駄目なら、この呪いをかけた張本人。

ナギが出てくるのを何年でも何十年でも待つしかなさそうだが。

夜の11時を回った。

食事を終え、もう就寝という時間。

奴は家の扉を開けた。

「遅くなり申し訳ございません。お嬢様が中々放してくれませんでしたので。しかし、夜に異性を招き入れるとは、教師の職業を本日は忘れましたよう」

「そうか……こっちだ」

無駄な会話に付き合う必要はない。こちらの意思を伝えて、別荘で戦えばそれでどちらに転ぶにせよ片は付く。

「早速ベッドインでございますか？ 出来ればシャワーを浴びてからの方が……いえ、一緒に入りましょうか……おや、地下ですか？ 牢屋などのマニアックな器具などもおありで？」

前田の発言を無視しつつ、

地下室の奥にある別荘の魔法球の部屋にやって来た。

「なるほど、この中であれば1日が、この現実の時間での1時間に

なりますね」

「前田、この中で私と戦え。全力でだ。もし、私が勝ったら呪いを解け」

前田は表情を変えないままに質問をしてきた。

「私が勝った場合はどうするのですか？」

「好きにしる。呪いをかけた張本人を何年でも待つだけだ」

「前田先生。私と姉もお相手いたします」

3対1だ。これでも何があるか分からんが。

前田は何か思うところがあるのか、黙っている。コイツがふざけずに黙っているところは初めて見たかもしれない。

「ふむ、かしこまりました。私が勝てば何でも言う事を聞いてもらいますよ？」

「……ああ。お前も忘れるな。私が勝てば呪いを解け」

目の前の執事は本気で勝つ気である。

私を真祖の吸血鬼。【闇の福音】と知った上で、そう思っている。呪いにより魔力は封じられていたが、それでも数分間であれば何とか持つ。

【別荘内・レーベンスシュルト城門前】

数分間はとつくに過ぎていた。

瞬殺狙いで魔法も惜しまずに連発した。  
連携にも問題は無かった。

ズダンッ！

「ぐっ……ハアハア……」

それなのに何故だ。この男は何故息も切らさずに立っている。  
何故、私を見下している。

「アー、駄目だ。モウ動ケネーゼ……」

「マスター……」

チャチャゼロと茶々丸は魔力供給をカットした。

もう座って見ているしかできない。決まり切った結果を待つことしかできない。

決まり切った？ 何を考えているんだ私は、前を見る。目の前の男を見る。

パンパン  
手袋を嵌めている手を叩き合わせながら、その執事は余裕を持ち聞いている。

「終わりでございますか？」

……けるな。

「ふざけるな……私はもうこんな呪いなんぞに……リクラク・ララッ……」

キュンッ！

「満身に魔力も使えないとは言え、流石は【闇の福音】でございますね」

詠唱途中でアツサリと後ろを取り、前田は私を蹴り飛ばす。脇腹の骨が折れる。何も感情の籠っていない蹴りだ。仮にも教師・生徒の関係だが、死んだらそこまでと言わんばかりの攻撃が全てだった。私不死だから容赦無いのかは不明だが……。

シュンッ

「呪いが無ければ如何でしたか？」

「……逆の立場にしてやりたいところだな」

「フッ」と前田は笑い、並行して飛ばされている私の頭を掴み、城の外壁へと押し付け飛び続ける。外壁が抉れていく、私は残り少ない魔力を頭部への物理防御に集中させ緊急事態は続く。

「今までに何度、死にかけましたか？ 死に際になっても何も恐れぬように見せるその強い信念。最後まで諦めずに策を練り、隙を窺うその姿。感嘆の極みでございます」

私の無詠唱の魔法の矢をかわし、ソレを放った腕をへし折る。

「うああっ！！ ぐっ！ 貴様は……！！ 貴様は何者なんだ！！ 私が弱っているのを除いたとしても、息も切らさず、その速さに危険察知への嗅覚。ヒトでは有り得な……！！」

私の口は前田の鷲掴みによって閉ざされる。

前田は空いている左手の人差し指を立て、自分の口元に当て笑いながら言う。

「それ以上喋りますと、全ての指と爪の間に針金を刺しますよ？」

背筋が自然と冷えるのを感じた。言われただけならそんな寒気などは感じない。その行為にもだ。では何故か？ 目の前の執事が本気だったからだ。

化け物か……ふはははは。化け物が化け物と恐れるとはな……。

「そして、自分を卑下にするのもお止めくださいませ」

ズドンッ！

城門の横の石柱に叩きつけられ、身体が沈み柱に亀裂が走る。

口元から血が流れ、たまらず吐き出す。

目の前の執事は手の平を私の腹部から離し、終始同じ顔で同じ言葉

を吐く。

「終わりでございますか？」

「……ああ……ゴフツ……私の負けだ」

少しは泣き落としても考えたがな。家に来た時に言ったあの言葉。

『教師の職業を本日は忘れましょう』

あれに偽りは無く、付け加えるならば、『人の感情も忘れる』だろう。

私は前田に抱きかかえられ、城門前に下ろされた。

「御主人ヒデー状態ダナ」

「マスター……」

「やりすぎましたか。それでは治癒も遅くなるでしょうね。

『奥義！ 前田コングラッチュレーション！！』」

いつの間にか取り出されたマイクに向かって前田の謎の叫び声が反響した。それと同時に前田の胸元から関西呪術で使う式神の札が大量に舞い、規則正しく整列する。そして……。

ピーピー！ ピッピッピッ！！

ダラダンドンダン！ ダラダンドンダン！

ダラララララダンドンダン！

パーパーパーパーパーパー

「お、おい　人が動けないのを良い事に、何をしているんだ？」

先頭を歩く札は白く、後ろに続く数十枚にも及ぶ札は真っ黒だ。私を囲むように人型の札は音を奏でながら迫って来る。さながらマーチングバンドの様だ。

つて　うお！　治癒速度が早まって行く！？

「オ、動ケルヨーニナツタゼ」

「前田先生コレは一体何なのでしょうか？」

「最近久しぶりに再会した方からお札を大量に頂きまして、何かに使えないかと模索したところ、とある新聞記事が目飛び込んで参りました、『ああコレなら私目にも出来そうだ』と思い、ここに来る前に練習したのでございます」

他にも色々出来そうだろうが！！　んなことが新聞に載っているわけがない！！

それに今日練習してコレか！？　相変わらずふざけているが、ハイレベルな式神だ。

うおっ！　フォーメーションまで変えるだど！？

数分後、回復が終わると、破れた服まで丁寧に縫い合わせてお辞儀をして式神達は前田の懐に……帰らずに、城に住み着いた。損傷した外壁を直し始めているな。

「何年も旅を続けましたが、自分の家が見つかった様でございます。良かったですね」

「手に入れたのは最近だろうが！！ 城は私のだ！！ 連れて帰れ！！ ……ふう。約束だからな。私の身体でも差し出せばいいの？」

こいつの事だ。どんな事をされるか分からんが……諦めるしかないな。

「まずはコチラにて契約をさせて頂きます。エヴァンジェリン、あなたは私のお願いを今後3つ聞いて下さい。私がお願いする時は【お願いキティちゃん】と申し上げます」

私の目の前に提示される契約の魔法具。  
エンノモス・アエトスフラーギス  
鵬法璽。これ以上呪いを重ねさせる気が……。しかし、3つの願いでこの呪いは切れるのか。

「何故貴様がソレを持っているか知らんが、どの程度の願いだ？ 契約内容は先に確認したい」

「そうでございますね……。願いの1つ目以外は決めておりませんが、これだけは言えるでしょう。私はあなたの幸せを願っております」

コイツの中で、私の幸せがどう言ったものなのかが重要だが、コイツはふざけるだけで、尊厳までを侵す事はしないか……。



「契約しよう。その決まっている1つ目の願いを言うがいい」

「御主人ガ ランプノ魔人ミテータナ」

茶化すな。

パンパン！

「お願いキテイたん！ 麻帆良学園を卒業して下さい！！」

願い方が参拝方式なのは何でだ？ というか、『ちゃん』ではなく『たん』になっているではないか！ それに卒業できるわけがないだろうが！！ いや、解呪すれば学園から離れる事が出来るのか……では最短で来年の3月の卒業式で！

「では、解呪しますのでこちらにお立ちください」

言われるがままに指定された場所に立つ。何があっても動くなと言われ、その通りにする。

「って待て、何故魔力を溜めている！ ぐっ！このアホみたいな魔力は……！！」

前田の指先には魔力が集中されている。それも指一本一本にそれぞれだ。

アレほどまでの密度の濃い魔力を指先でコントロールできるのか？ 良く見ると、各指先に魔法陣が展開されている。

「説明いたしましょう。その【呪い】ですが、無理矢理に5重に渡って構成されており、一つずつ解呪しては、勝手に呪いの層が修復されて行ってしまうのでございます。ですので、修復される間も与えぬように、5連続で解呪する必要があります。と言う訳で……呼び方は【五指爆炎弾】と【五行解印】のどちらがお好みでしょうか？」

「名前も無い解呪方法なのか！？ それで本当に大丈夫なのか！？」

「私が信じられませんか？」

「日頃の行いを見直してからその台詞を吐いてみる！！」

「では、参ります！ 爆愛！ 前田フィンガー！！！」

「人の話を聞けー！！ 名前も違うではないかー！！」

パキィッ！

パキィンッ！

パリンッ！

ピキィッ！

パキィィィンッ！

呪いの壁が破壊されて行く。

そして、その手は止まらずに、私の腹を突き刺した。

ズンッ！

「ぐぐむ……（ドサッ）」

「では魔力を吸収して行きますね」

「オイオイ、何デダヨ？ 寝込ミヲ襲ウ何テラシクネーナ」

「誤解無き様をお願い致します。急激に魔力が戻りますので高熱が出る可能性があるのです。真祖なので問題ないかとも思いますが、念の為にございます。徐々に慣らしていきます。前田はアフターサポートも万全でございます」

「何から何まで、マスターを宜しくお願い致します」

聞こえてるぞ茶々丸……起きあがったら巻いてやる……ポケロボめ。と言うか、何故私は倒されたんだ……？

Side out

昨日確かに一人の理解者を得た気分だったんだが……。いや、相手が留学生だから言語の壁があったとか、そういう訳じゃないんだ。でも、間違いなく理解者はすぐ斜め後ろの席にいなながらも、遠くの存在になってしまった。

「ふははははは！ 前田！ 茶菓子を寄こすがいい！」

「こちら、お嬢様の為に丹精と媚薬を込めたクッキーなのですが……」

「そんなモンならいらん！！」

「つか、昨日までそこまで仲良くなかったたる留学生と前田。何があったんだ？」

「というか、このエヴァンジェリンはいつになくハイテンションだな。いつも寡黙という感じだったんだが。」

「マスター、お茶が入りました」

「ぬはははは！ 良いぞ！ 凄く良いぞ〜！！ 溢れてくるようだ」

「くそっ、昨日はまともだと思ったんだが、異常者の仲間入りしやがって。」

「茶が溢れるわけねーだろうが。」

「お嬢様。こちらマチラのお客様からでございます」

「気分が良いからな。お前も食うと良い。美味しいぞ？」

「だから媚薬入りだろうがよ!!」

「成分分析結果では、媚薬効果のある物質は確認できませんでした。大丈夫ですので、さあさあ」

「ロボまでも私の邪魔を!? 羽交い絞めにすんな放せ！」

「はい、お嬢様。アーン」

「するか!!」

第11話「情け容赦無しでございます」(後書き)

感想は随時受付中でございます。 by 前田・ヴァンデンバーグ・政宗

第12話「悪魔狩りの夜でございます」(前書き)

今回のメインはバトル？

前田は今回も凄い魔法を使って行くみたい？

ヘルマン逃げてー！！

第12話「悪魔狩りの夜でございます」

Side 学園長

ジリリリリリン

カチャ

「ワシじゃが？ おお詠春か」

『実は問題が起こりまして……それほど心配は無いかと思うのですが』

「ふむ……ふむ……何じゃと？ 脱走!？」

京都でのスクナの一件に関わっていたネギ君と同年ぐらいの狗族の少年。

犬上小太郎という者が脱走したそうじゃ。

いや、何か引つかかるのう……。天ヶ崎千草という名前も確か関わっていたような。

はて？ 最近教育実習で同じ名前の……。

ザザッ……



ふお！？ いかんいかん。また記憶が飛んだわい……。歳かのう？  
いや、それは無いのう。脳の老化による痴呆などは魔法である程度  
は対処しておるしの。おお！ そうじゃそうじゃ、そうじゃった。  
たまたま同姓同名で、たまたま同じく京都出身で、たまたま関西呪  
術も嗜んでおるんじやったな。本人と違うわい。となると、京都で  
暴れておったと言う天ヶ崎千草はどこに行ってしまったんじやるか  
？ まあ京都におるじやるうて、詠春に任せておこうかのう。

(カサツ)

ん？ なんじゃ？ この書類は……ふお！？ このか と 桜咲君  
が転居しておるじゃと！？ むおっ！ ワシの判子も確かに押して  
ある！！？

ザザツ……

ああ、いかんいかん。そうじゃった。魔法に関わらぬように対処し  
たんじやった。いやあ、ワシもう駄目かも。てへ

「……学園長、一人で何してるんですか？ ……キモイ」

「し、しずな君！？ いや違うんじゃよ！？ って言うかいつの間  
に！？」

「職員会議のまとめの資料を持ってきまして、何度もノックしたん  
ですけど……」

「めっちゃ引いとるー!?!」

ワシ、本当にもう駄目かも。

S i d e o u t

S i d e 千草

傘さして歩くんもめんどいんやけど、雨やったらしゃーない。  
それにしてもこの間の前田はん「式神のお札を50枚ほど頂けますか?」やなんて、何に使ったんやろか? 札なんている様なお人やあらへん思っんやけど……。まあ力になれるんは嬉しいから問題あらへんか……。

でも前田はん大変やな。教師で毎日が職員会議みたいやし、長谷川千雨お嬢さんの執事もやって、何か問題事があるようやったら解決しとるらしいし。前田はんの口聞きで学園長もすんなりウチを教育実習生として入れてくれはって、人望厚いんやな。ホンマに。京都で散々やらかしてもうとるんやで? 凄いお人やわホンマに。

はあ……そんな中ウチは……。今日も一人寂しくコンビニ弁当でも……あゝでも前田はんの弁当は工場が爆破されたとかで製造終了やしな。誰や全く、人気あつて食べへんからつて爆破する事あらへんがな。あゝ何食べよゝかな……っ!?

「……………何でや?」

帰りの川沿いの道を歩いていると犬の行き倒れを見かける。

普通の犬やない。ついこの間まで一緒に仕事しとつた犬上小太郎や……。

「面倒なもん見つけてしもたな……ドッグフード買って帰るか? 聞こえ取つたらゴメンやでゝ冗談やでゝ? しっかし弱りきつとるな」

そう言えばこの子は京都でネギ先生とかの足止めしとつてくれたはずやけど、そのあとどうしたんやろか? ここで行き倒れてるくらいやから……。十中八九、捕獲されていたところを逃げ出して来たんやないか?

まあ、バレへんかな? 一人暮らしから解放されたと思いきや、ペツトかいな。前田はんと住みたいわ。あ、そうや前田はんに相談したつたらええんやね。とりあえずこの子が目え覚めてからでも挨拶に伺わせてもらいましょか。

Side out

Side 謎のコートの没落貴族……つまり？

『犬上小太郎は懲罰により特殊能力を封じられてマス』

『気は使えますが……』

『今なら楽勝だな。どっかに行っちまったみてえだけど』

「よろしい、君達は作戦どおり事を運び給え」

『ラジャ』

「ハイディライトウォーカーに気付かれぬように」

『ステルス完璧デスう』

ゴロゴロゴロ……ガカツ！ ピシャアアンツ！

「やれやれ……では始めるか」

Side out

ちっ、雨やまねーな。

「本日は洗濯は控えておきましょうか」

「いや、だから！ 洗濯はしなくていいーんだよ！ ったく、大浴場に行ってくる」

「かしこまりました欲情でございますね。お年頃ならば仕方のない事。覚悟が出来たらお呼びくださいませ。痛いのは最初だけです」

「絶対字が違う方を考えただろう！！ 風呂だ風呂！！ 何の覚悟だ！ 誰が呼ぶかこのアホ執事！！ 本当に訴えるぞPTAとかによおー！」

「それは残念でございますね……おや？ ほっ」

「あ？ 何だよ？」

前田は窓の外を見て何かを呟いている。外は大雨っただけしか見えないが。

「これは失礼いたしました。」

何やらスーパーでお肉の特売が始まった様なので私も出ます」

「何だ？ 電波でも拾ったのか？ おかしくなったのか？」

「お分かりでございますか？ 先日購入した前田アンテナが常に働いておりますので、何か変化があればすぐに感じ取れるのでございます。特にアンテナのスーパーモーターが……！」

「はいはい。私は風呂に行ってくるぞ」

バタンツ

アンテナにモーターが付いてるってどーゆー事なんだよ？ 先日購入して、何でお前の名前が付いてるんだよ？ 私は何気ないボケに対する疑問を考えながら服を脱いで行く。

つと、多くはねーけど。ウチのクラスの連中がいるな。静かな場所はトイレぐらいしかないのか？ 便所メシも視野に入れないといけないのか！？ いやそれは私が求める平穏と言えるのか！？ って、私は何を考えてるんだ。疲れ過ぎだろアタシ。前田の所為だな。

ん？ 浴場が何やら既に騒がしいな。

【ぬるぬる君X】とか言う謎の美容物質を塗りたくっているクラス  
の連中だな。

私は身体を洗い湯船に浸かって冷静になり、TVで紹介してたとい  
う【ぬるぬる君X】を塗りたくる連中を眺めていた。

つたく、あんなもん効果ある訳ないだろ……。

又ル。

「ん？ おい！ ちょっとそのぬるぬるの中に入れてないよなー！？」

「んー？ 入れてないよー」

美容パック【ぬるぬる君X】の持ち主、最近デカ乳になって行く明  
石はそう答えるが……にしては、これ明らかに……いや、でもアッ  
チの方で使ってるのに、私の後ろの方から感じる訳がねーか……。  
いや、でもマジでコレは……。

「お おい！ ちょっと待てよ！ この水なんか絡みついてくるぞ  
！？ おわっ！ ちょっと待てお前！ そこはシャレにならねー！」

「キヤア！？」

「何コレー！？」

「いやあ〜ん！ ぬるぬる〜ッ！？」





「何の契約か分からないケド……」

「じゃあ行くぜー!」

「ロックオン」。すらむい狙い撃つデス」

「GO」……」

「っ!?!」ゴポツ!」

<汝のあるべき姿に戻れクrouカード>

「むあっ!?!」また封印されるのカヨ!?!」

「いやああんっデスウ」まだ仕事何もしてないのに」

「まあ悪役デスシ……」

<使える時があるかは不明ですがね。これからは私が主人でございます>

「了解ダゼ」

「軽いデスウ」。でも契約なので了解デスウ」

「悪役免除デスカ……」

Side out

な、何だっただんだ今の!?

小さな透き通ったガキが見えた気がするが……。疲れてるのか？  
しかし、風呂で溺れかけるとか勘弁だぞ？

「は、長谷川も死にかけた？ こ、コレのせいかな？」

「……いーから捨てる」

佐々木も死にかけてやがる。

ぬるぬるで人生を遂げるとか最悪だぞ……。

『【触手モノ】でございます』

だあああつ!!!

何でアホ執事が頭ん中に出てくる!! 触手とか関係ねーし!!

ガチャ……バタン

……散々な風呂だったな。

「つとあれ？ 前田ー？ 帰ってねーのか？ 珍しいな」

普通なら、有り得ない速さで帰って来てるんだけどな。

スーパ―に行つて、帰って来るだけで結構かかるのに買い物もして、その間に私がコンビニ行つて帰ってくるかと余裕を持って帰って来てるからなアイツ。でも今日は何だろな？

あー、やまねーかな雨。

S i d e つまり……没落貴族のヘルマンさん

ふむ……。【すらむい】【あめ子】【ぷりん】どのスライムからの  
念話も途絶えてしまったようだ。と言うよりも掠め取られたか？  
契約すらも切られているようだ。

ステルスは完璧だと言っていたが……？

見つけたのはAAAのタカミチか？ だとしたら厄介だ。

いや、その可能性は低いか。もしそうなら契約解除が説明しがたい。

ドグシュッ

「むっ……！？　ゴフッ……これは？」

ドスッ！　グサッ！　ズグンッ！

視線をおろすと胸に刺さった剣がある。

続けて両足、両腕、腹部と次々に貫いていく。

剣の形に統一性は無い。槍も混ざっている。

ザッ…ザッ…ザッ…ザッ…。

徐々に後方から迫って来る足音。この剣や槍の持ち主かな？

やれやれ、挨拶もせずに酷い事をする。

「悪魔とは人間とは違い、身体能力・基本魔力容量が違い強い。相手にするのは得策ではない。と、言われております。しかし、私が思うに悪魔とは体力が多くありますので、傷付けるだけ傷付けても中々死なず、いやはや、DMな種族と思うのですが如何でしょうか？　Mr・ヘルマン」

そして、DM扱いとは……私を知る人物。誰だ？

タカミチであれば魔法は使えないと聞くが、魔力を感じる。

それに武器を使うとも聞いた事が無い。

振り返り見ようと思って、

固定されるように刺されているため振り向く事も出来ない。

あの姿になるのはネギ君と出会ってからと考えていたのだがね……。

「日本は挨拶が素晴らしい国だと思っていたのだがね……？　一声も無く、後ろから串刺しにするのがこの国の流儀なのかね？」

「更に言うなれば、20年ほど前から召喚されて襲撃依頼を受けるケースが多いようです。等価交換さえ満たされれば、そこに悪魔と言う存在のプライドなどは無く、倒されても消滅し、悪魔の国へ還り生き続けられる。……DMの永久機関でございますね？」

人の話を聞かず、相手を詰る喋り方。私の記憶には無いかな？

「さて、そのような不審者を学園にお招きする訳にもいかないのです。ソレが、例えネギ・スプリングフィールド1人を狙っており、他の者に害が無い行動だとしてもです。ヴィルヘルム・ヨーゼフ・フォン・ヘルマン”元”伯爵」

「おや、私のフルネームを知っているとは……記憶違いで無ければ、まだこの国では名乗っていないはずなのだがね？」

私は悪魔の姿に状態を変化させ全ての剣・槍を抜き取り、悪魔パンチを振り向き様に放つ。しかし、対象者は真横に避け、突き出されている私の右拳を……叩き斬った。

「おや？ 斬れてしまいましたか……ゲームだと血飛沫が上がる程度なのですが、案外脆いんですね。泣きませんか？ 【devil never cry】だそうですね？」

「ぐぬうう！？ ……ぬっ！ 仮面を付けているとは……失礼ではないかな執事君？」

相手の顔すらも分からないのか……。  
執事の服装と言う事以外の情報は、性別と今受けている能力ぐらい

しかない。  
やれやれ、今回の召喚は貧乏クジを引いてしまったかな？

「念の為に聞いておこう。その仮面に意味はあるのかな？」

「この【キュアベリー】のお面でございますか？ いえ、小学生の方々から頂きました。15枚ほど同時に頂きまして、とても不人気な様で、有効活用するべく付けております」

有効活用ね……。

実に有効と言わざるを得ないね。

圧倒的な力量差を感じる顔も分からぬ相手が付けて、しかも服装は執事服。

これほど恐怖を感じた事は無いかも知れないね。

「さて、悪魔を消滅させるのは久しぶりなのですが……死の先を体感くださいませ。最初で最後の経験でございます。どうか安らかに……苦しんで下さいませ」

フツ、趣味の悪い話だ。

「君は私の様な悪魔に詳しいのかな？」

「そうでございますね……逆に質問ですが、【The Legendary Dark Knight】をご存知ですか？ 遠いのですがアレと血が繋がっている」

「なっ！？ 伝説の悪魔狩りの【スパイダ】だとっ！？ それは敵わぬか……」

「 気がします」

ズルッ

…… 敵わぬな。

本当だとしても信じてしまう嘘だ。

「ですが、実は悪魔の事は詳しいのでございます。エクソシストも出来るかと思えますね」

余裕があるようだね。

しかし！

ギユウウウンッ！

ガパッ！

どこでもいい！ 隙を作るために少しでも石化してしまえば……！！  
しかし、目の前の男は『その程度ですか？』と言わんばかりの魔力を込めている。

「没落貴族になったのもその程度だったからでしょうかね？ とりあえず終わりでございます。【ハイマツト・フルバースト】でございます」

【火・風・光・闇・氷の魔法の矢。各20本】

【雷の暴風】 【燃える天空】 【闇の吹雪】

いつ唱えてあつた？

これほどの魔弾を一度に無詠唱で？ いや、遅延魔法か？

ズガガガガガガガガーンッ！！  
グフッ！ ……ドサッ

これは予想外だった。まさかネギ君にこんな執事がいようとは。

「何か勘違いされているようですが、まあ良いでしょう」

勘違い？ しかし……

「消滅させるのでは無かったのかね？ これでは私は悪魔の国へ還るだけに……これからかね？」

「左様でございますね。行きますよ？」

……消滅しか道は残っていないか。

これほどまでの魔力だ。

「では、さよならヘルマン卿。【ストナーサンシャイン】でございます」

最後。魔法を放たれ、執事は仮面を取り口元に笑みを浮かべていた。



その顔は　　。

「　　！？　　フツ敵わぬハズだ……」

S i d e   o u t

あーすげー雷が光ってんなー。

さっきから窓の方からピカピカ光っては轟音が鳴り響いてるぞ……。  
アイツは無事だろうな。

うん、多分大丈夫だろう。

いや、でもこの雨だ。傘をさして、たまたま落雷が……傘に落ちて  
流石に死ぬよな？

……確率的に低いけど……仕方ねーか。

私は前田を探しに行こうと思い、ドアを開けた。  
ガチャッ

「つとお！　か、帰ってきたのかよ!？」

「これはこれはお嬢様。まさかとは思いますが、心配して探していただけるところでございましたか？」

「あ、ああ。そうだけ……違う！ コンビニに行こうと思ってな！ それにしてもお前、ずぶ濡れかと思ったんだけどよ……全然濡れてねーのな。カッパでもそこまで防げねー雨だろう？」

「これは失礼いたしました。少々お待ちくださいませ」

「あ？ あっおい！」

そう言っつて前田は部屋を出て行った。

ガチャ

「いやー大雨でございますね。いやー濡れてしまいました。さあ風邪を引かないうちに、先にシャワー浴びて来いよでございます」

「……すう……」

私は大きく息を吸った。

「お嬢様？」

「わざわざ濡れに行くやつがあるか！！ それに私は風呂にもう入ったし、何でそのネタ持ってきた！？ ホテルか！？ ホテルにでも行った設定か！？ えりか！？ 絶対言わなさそうなセリフか

！？ ああ！？」

「お嬢様。着替えたいたので後でもよろしいですか？ それとも私を視姦なさいますか？ 私も感情はございますので恥ずかしく思うのですが……」

「ムガアアアアツ！！ さっさと行けー！！」

S i d e 千草・小太郎

「はい、転入手続き完了いたしました。麻帆良中学校の1年ですが……小学校の方がよろしいですか？」

「えー学校なんて嫌や俺ー！」

スパーンツ！

「前田はんが折角口聞きしてくれてんやから『YES』か『はい』か『分かりました』しかあらへんやろが！ スミマセンありがとうございませう前田はん。中学からでええです。駄目な部分はウチが教

えて行きますさかい……」

「お住まいは、千草さんと二人暮らしで、弟さんと言う事で通してありますので」

「えー！ 一人暮らしちゃうのー!？」

スパパーンツ!!

「本当にご迷惑ばかりで、ありがとうございます ありがとうございます  
いますう！ ホレ、アンタも！」

「……ど、どーも」

「それと、小太郎君。ネギ先生と宜しくお願い致しますね。彼の周りには友人と呼べる人がいないので、【ライバル】という形でも構いません。仲良くお願いします」

「おっ！ ネギ！ ネギがいるんやな!? そこは話し分かるな  
助かるわ〜ライバルやな！ 良い響きやわ〜。早速 勝負を申し込みに……!」

スパパーンツ!

「アンタはこれから転校生として学校に挨拶や！ 麻帆良の男子中等部やから…… あ、でも先に学生服を……」

ほんまに助かり放題やわ〜。ポンポン話が決まって行くわ〜。

「では、私はこれで失礼しますね。お嬢様の夕食の仕込みをしなければならぬので」

パタンッ

「ところで。何で小太郎は関東に来たんや？ 脱走して来たんは分かったけど」

「ん？ ああフェイトに言われてな。『脱獄させるからネギを闇打ちしろ』言つて……断ったら『他の手考える』とか言つて、不安になつて自分で脱獄して……何やつたかな？ ……ってーか！ 千草姉ちゃんは何で捕まつてへんねん!？」

「前田はんに助けてもらたんや。ウチの憧れの人や……」

「どこ見て言つてんのか知らんけど……ネギの闇打ちってどないなつたんやろ？ 生きてんねんもんな？」

ガチャ

「それなら、終わっていますので、お気になさらずに」

「おわあっ!」

Side out

S i d e   ネギ

タカミチにも断られた。

そっだよ。出張とかで忙しいし……でも『魔法は教えられないよ』って少し悲しそうな顔で言ってたけど、どうしてだろう？ 父さんの仲間なら教えてくれても良いのに……。

「あーっ おった！ ネギ！ 勝負や！ 決着つけよーぜ！！」

「こ、コタロー君！？ どうしてここに！？」

「あー説明は上手く出来へんねや。でも今日からこの学園で過ごせるように許可も貰ったんや！ 京都の件もチャラやて、気前えーなー学園長の爺さん」

「そ、そうなんだ。うん。良いよ戦おう！」

「おおっ！？ 何や？ 乗り気やんかー！！ じゃあ行くでー……！！！」

スパーンッ!

「何しとるんや? スーパーの買い物頼んだやろ?」

「えーやんかちよつとぐらい別に!」

「あ、天ヶ崎さん……」

「ああ、ネギ先生お疲れ様です。ウチの小太郎と仲良うお願いします。でも今日のところは特売があるんですまへんな。ホレ!」

「うう、今度絶対戦<sup>ゃ</sup>るからなー! 覚えておけやー!」

引き摺られて行くコタロー君を見送る。

ウチの?

後から聞いたところ、コタロー君は天ヶ崎さんの弟として学園に來たらしい。何で來たんだろ? でも、誰も師匠がいない今。コタロー君がいるのは大きいかもしれない。

コタロー君に勝てる様に頑張れば……。

S i d e o u t

S i d e    エヴァンジェリン

「おい、前田。少し気になったんだがな？」

「何でしょうか？ 【お願いキティちゃん】の時間でございますか？」

いや、それはお前のタイミングだろうに……。

「そうではない。一応、言われたとおりに学園を卒業する呪いは聞  
く」

「それは良い事でございますね」

「それよりも、あのボーヤはどうしたんだ？ 京都の時までは従者  
だったはずの宮崎と桜咲の二人が……他にも魔法に関わった連中に  
違和感を感じるのだが？ 何と言うか、ボーヤを避ける様な……」

「仮契約をしていた方は契約破棄をしました。関わった方には記憶  
を一部消させて頂きました。また、魔法に金輪際関わらないように



しました」

「何でも有りかお前は……まあ、魔法に関わらんようにするのは賛成だな。面倒事にしかならんしな。ん？ 神楽坂は何故継続中なんだ？」

「あの方は少し特殊でして、気付かれずに解除するのは難しそうですね、近いうちにお話をしようかと思えます」

「そうか……」

新たに魔法の存在を知った者の記憶は消され、契約した者も解除済みか。

魔法を隠匿していく。知られば記憶の消去。魔法使いの鑑のような男だな。

「しかしだ。あのボーヤを師事する者がいないが、良いのか？」

「さあ、私には関係ない事でございますので」

「なるほど、お前の行動はあのボーヤの為にしているのではないと言う事か。お前の行動が最近分からなくてな、ボーヤを立派な魔法使いにする為の通り道レールでも敷いているのかと思ったりもしたんだが？」

「私は、お嬢様の健やかな学園生活の為に邪魔なモノを排除してい

るに過ぎません」

長谷川千雨の為？

一般人の為に？

コイツは本気で長谷川千雨に仕えているのか。

一人の一般人の為に何故そこまでする？

「御安心ください。あなたに迷惑はそれほどかけません」

「それほど……少しはかけるんだな？」

「……はい。ブツかけます」

「かなり嫌な表現になったな！」

S i d e o u t

## 第12話「悪魔狩りの夜でございます」（後書き）

感想は随時受付中でございます。

### 【元ネタ辞典】

・ < 汝のあるべき姿に戻れクロウカード >  
『カードキャプターさくら』より。  
こうして封印して、魔法のカードを増やすのだ。

・ 【キュアベリー】のお面  
怖いらしい。『キュアベリーのお面』で検索。

・ 伝説の悪魔狩りの【スパイダ】  
『デビル・メイ・クライ』より。主人公のダンテさんって人のお父さんが悪魔からしたら裏切り者。人間からしたら英雄という存在の、伝説の悪魔らしい。

・ 【ハイマツト・フルバースト】  
『ガンダムSEED』より、フリーダム先輩のチートな攻撃の前に  
タジタジw

・ 【ストナーサンシャイン】

『ゲッターロボ』より。うん、喰らったら消滅するわな。

番外 - ? 「前田の知人達でございます」 (前書き)

知ってる人は知ってる番外編。

そう！ 投稿してすぐさま削除したヤツさ！

何の反応も無かったから怖くなって削除して、  
それでも書くだけ書き足して再投稿しました。

というわけで、先に言っておこう！

今回は番外編！ でもってオリキャラばかり！

雪広の家に来た前田を描きつつ、オリキャラ達に任せました今作品。

どぞ。

番外 - ? 「前田の知人達でございます」

台もと……え？ 『ホン』で良いの？ そーゆー名前だと思ったよ。  
えっと、台本、執事の前田、番外……何て読むの？ 『ヘン』？  
……執事の前田、番外編。執事の前田が雪広家に来たところを描き  
ます……。あ、始まる！？ じゃあアリスに任せると良いよ！ 台  
本？ いらないよ！

えっとね、アレは……アレ？ ん〜といつだったけかな？  
あ、自己紹介からだね！ 私の名前は久坂<sup>くさか</sup>アリス。みんなは『アリ  
ス』って呼ぶよ。あの頃の私は雪広家に仕えて3年ぐらいが経って  
たけど私なんかまだまだでしたよ。日本語もたまに間違えるし、普  
通に話しててもたまに『変』って言われる事もあるよ。

前はロシアの田舎の ある程度由緒正しいお金持ちさんの家で、ウ  
チがメイドの家系だったから……何歳からだ？ その頃が15歳だ  
から、12歳で……おお10歳からか！ 10歳の時からブーツホ  
ルツ家でメイドやってたんだよ。でも家の事情とか、主にブーツホ  
ルツ家が世間の波の前に事業に失敗したとかで雪広家に拾われたん  
だよ。それが何年前だっけ？ おお！ 3年前か！

あ、良く言われるから言うけど、アリスはロシア人じゃないよ！  
ロシアで育ったけど、イギリスのママとメイド・イン・ジャパンの  
パパのハイブリットな子供なのさ！ ……そこ！ どーでも良くな

い！！

えっと、そんで、……えーい！ やっぱ台本少し読むよ！！

今日は新人の執事・メイドが研修を終えて雪広家の本家へとやって来たのさ。今年は5名と少ない採用だったようだけど、一人特別枠とでもいうのか、研修を今も受けている執事が一人いるらしいよ。

本来、審査や選考基準はゲンセイなもので、時間は当然のこと『遅刻』は10分前からカウントされ、それに触れただけでも不採用となるのさ。

ココだけの話、イレギュラーもあつたりする。具合の悪い老婆とかの役者を用意して、『助ける』か、それとも『審査を優先する』か。もちろんこの場合は助けるのが正解。私がそれで採用されたから間違いない。あの時のお婆ちゃんは『合格』と言いつつ終わると顔の皮を破り捨てて、ジャパニーズNINJAの様に去って行ったよ。カンドーしたね。スシ！ テンプラ！ ゲイシャガール！ どれも美味しいー！

あゝでも、今思い出せば遅刻ギリギリだったし、『もう良いや』って思ったところもあるのは内緒だよ！ バレると『スマレ』……メイドの一番偉い……超メイド？ 何か違う……そう！ メイド長に怒られちゃうんだよ！ アカネが言うには、スマレはメガネからビ

ームが出せるから、気をつけるって言われてるよ！ 角も生えるし火も吹くらしいから一番偉いのかもれないね。

さて、私の目の前にいる敷地、屋敷内の案内を受けて目を輝かせる初々しい新人さん達は、結構大変な難関を潜り抜けてきた。人に仕えるスペシャリスト』であるのさ。初々しいのは見た目だけ、指示をすればその目は真剣なモノに変わる。指示するのは私じゃないけどね。

おつといけない、話を戻そう。私が気になっっているのは目の前にいる新人さん達ではない。ここにはいないけど、雪広家に採用される事が確定している執事のことだ。そう特別枠って言う普通なら有り得ない枠で入って来る人の事なのさ。では新人さんに彼の情報を聞いてみましょう！ レポーター風だよ！

執事の もっちゃんさんの意見。キング・オブ・フツーな感じの人。

「本場イギリスで資格を取ったって聞きましたけど、かなりスゴイですよ。弱点なんて無いって思わされましたよ。僕らの場合、仕事って休みとかがあって成立する様なものですけど、【彼】は『仕事』普通の生活』って感じで、お金も休みもいらぬ様な事言ってますね」



メイドの ミオちゃんの見。 萌え萌えキュ〜ン

「え？ う〜ん。【あの人】とは私達も2日だけしか一緒に研修で  
きませんでしたけど、誰よりも優れていたと思いますね。全てにお  
いて勝てる気がしませんでした。隙つてもものが無いですし、厳しく  
怒る研修監督も【あの人】に対しては褒め言葉が出る程でした。そ  
れと、凄くカッコ良くて……」

執事の 桐生ちゃんの見。 今いる新人りの中でNO・1執事、で  
も女の人。おっぱい大きい……スミレといい勝負。スミレのよう  
にはならないほしい。

「そうですね。隙がないのは当たり前つて感じて……正直、自分が  
出来無さ過ぎてショックを受けましたね。ハハハ……。あ、いえ、  
妬みとかは無いのですが、その……カッコ良くて……あ、何でもあ  
りません!!」

どの新人さんに聞いても返つて来る答えは似たり寄つたりだったよ。  
新人さん達のレベルで行けば、少し働いて慣れば、本来の力を存  
分に發揮して一流のスペシャリストとして仕えて行けると思います。  
（もっちゃん以外）私が保証するよ。私より働ける。でも、その人  
たちが口を揃えて、明日来る執事は『桁外れに凄い』と言う。楽し  
みと言えるほど私は出来るメイドではないので、興味があると言っ  
たところだよ。……日本語合つてるよね？

とりあえず情報をまとめると、仕事は異常なほどに出来て、異性が

らは100%高評価。でも同性からは妬まれたりしないし、むしろ褒め殺し。

うそでしょ？ どうかでボロが出たり、実は女性陣はブサイク専で、かなりのブ男だったりするんでしょ？

そう思っていた時期が私にもあったのさ。

いや、初めてだよ。何がって？

パーソナルコンピューターって固まる事をフリーズって言うでしょ？あれがアリスにも起こったのさ！ アリス・フリーズ！

これでもスマレには勝てないだろう。ガクガクブルブル。おっといけない！ スマレよりも目の前の執事だよ！

「前田・ヴァンデンバーグ・政宗です。宜しくお願い致します」

そう固まってしまった。目の前にいるのは俳優さんか何かかね！？ いつの間にドラマの撮影現場に紛れ込んでしまったのか？ アリスってば女優さん？ 主演女優賞でござりますか！？

「アリスさん？ 御気分が優れぬようであれば、無理に案内をお願いするわけにも行きません」

「ふえ？ あ！ いえ！ 大丈夫なのさ！？」

目の前の物語から飛び出してきた様な前田さんに顔を真赤にして（後からセンパイに言われて更に恥ずかしかった）私はちゃんと喋れ

ずに返事をしたよ。

「それは良かった。ではあちらの方から参りましょうか」

「は、はいい（プシュ~~~~ツ）」

前田さんの笑顔で湯気をあげながら、私は前田さんの後に続き敷地内を歩いて行く。

「アリスさん。アチラが温室でございます。奥様の好きな花などが庭師の木林さんの手によって大切に育てられています。時には奥様が手入れをすることもありますね」

「な、なるほどあ〜（プシュ~~~~ツ）」

ゴスツ！

「お前が案内されてどうするー!!」

「あ痛ーツ!! う〜アカネ痛いよ〜鼻が曲がるよ〜」

「アリス、また変な言葉になってるぞ、スマレに怒られるぞ〜。

で？ アンタが前田？」

コレが私の『センパイ』とか言う東条アカネ。どうしてメイドとして採用されているんだろ？（ゴスツ）ゴメンダヨ……（さすりさすり）。えっと、この様に手が早く、メイド服も改造してスリットが入ってて、執事の皆さんは目のやり場に困ることもあるようだよ。メイドとしては荒っぽく見えますが、仕事の腕はピカイチなのです。

主に雪広家の長女である『さやか』の担当をしています。『さやか』もアカネの勢いに助けられて次期当主として日々勉学に励まれているようだよ。

アカネ曰く、「さやか？ アンタの事なんだから好きにすれば？ つて言ってるけど？」だとかで、……雪広家は大丈夫だろうか？ おっと話を戻すよ。アカネは行儀悪いけど指をさして前田さんに言い寄ったんだね。……言い寄ったの！ ふー間違えてないよ。セーフだよ。スマレに言わないでね。

「東条先輩ですね？ お初にお目にかかります」

「ほほお。噂は本当だったのね。」

もう屋敷の人の顔と名前は一致していると「

「ええ！？ そうなんで旦那！？」

「アリス、言葉遣い」

また間違えてた？ おお！ 旦那つてのは旦那様に言うのか！

あまり会う機会がないけど覚えたからには今度会った時に言うよ！ 練習しとくよ！ 『へい旦那！ お控えなすつて！』これで完璧だね！！

それはさておき、屋敷の人つて……執事の皆さんでも20名は超えているハズだし、メイドに関しては私も知らない人がいるほどのに？ 他にも警護のSPさんに、庭師さん、シェフたちにウェイターさん達。本当ならスゴイ記憶力だよ。

「そんな前田には敷地の案内なんていらんじゃない？」

「そうですね。あと数歩先には東条先輩お手製の落とし穴もあるよ  
うですし」

「落とし穴？ え？ え？」

「気付いてたんだ？ へえ〜目も良いか」

「いやいや！ 敷地内に落とし穴って危ないよアカネ！」

「さやかを落とそうとしたんだけどね〜。いや〜あの子も勘が良い  
わ 当主に向いてるわよあの子」

「さやかに変な試し方をしないで！ さやか私よりロシア語下手な  
痛い子だから、気付かずに落ちちゃっよ！ 怪我したら傷物で売れ  
ないんだよ!？」

「アリスはロシアから来たでしょ？ 私はロシア語勉強中だからし  
ようがないじゃない？ でも『痛い子』ってのは聞き捨てならない  
わよ？ 野菜か果物みたいな例えもしないで頂戴」

いつの間にか私の後ろに立っている次期当主の雪広さやか。いつも  
噂話してる時に音も立てずに後ろに立つの。それはマナー違反だと  
アリスは思うのですよ！（ゴスッ!）……（さすりさすり）ア

リス、今の怒られるところだったの？

「おおさやか！ 『キキズテナラナイ』ってどーゆー意味？ 『斬り捨てゴメンナサイ』と同じような意味？」

「アリスの方が痛いところあるからな。さやか、お茶にするか？」

「はあ、全くあなた達は……ええハーブティーでお願い。あなたが噂の執事さん？」

「さやか様でございますね。前田と申します」

「そう……私が次女あやかだったらね……。お会いできて光栄なのだけれど、私もう1週間ほどで留学しますの」

そう、私とアカネと他にも執事さんやメイドさんも付いて行くけど、さやかは武者修行に行くんだよ！ 世界各国を回って、波いる強敵を倒して最強の雪広家当主になるのさ！ スミレは担当外れるんだってさ！ やったね明日はホームランだよ！

そんなこんなで凄い執事の前田さんが雪広家にやって来たのさ！

その後の一週間は結構話したよ？ うんとね。凄く優しくして、凄くカッコ良くて、凄く前田さんだったよ。前田さんも3日間だけさやか担当になっただけけど……。

「さやかお嬢様。私はさやかお嬢様の担当では無いのですが……？」

「あら？ お父様から許可は貰ってるし良いのでは無くて？ 光栄に思いなさい。私に仕えられることは将来を約束された様なものよ？」

「あゝ出たよ出た出た。さやかの痛いところ。たまに出てくるんだよね〜【お嬢様】って言うよりも【女王様気取り】的な〜？ 取り憑かれてるのかな？」

「あゝ面倒な奴だな。まーあんだだけ勉強した後だから少しネジが外れるのかもな。普段はもう少し可愛げのある娘なんだけどな〜」

「うるさいわね外野！ 前田？ 私の言う事が聞けませんの？」

「そつでございませぬ……。そつは言っても私もこの屋敷に来て2日目でございますし、不慣れな点が多く、御迷惑をお掛けするばかりかと思いますが……？」

「そんな事ないよね？」

「ああ、大助かりだ。毎日来てくれると更に良い」

私とアカネは前田さんの用意してくれたお菓子と紅茶を飲みながらさやかさんのベッドで寛いでいる。あ、アカネ、その漫画なーに？ 【エンジェル伝説】？ 面白いの？

「はあ、アカネさんにアリスがああ状態なんですから、前田さんがいて助かって困る事はありませんわ。クビに出来れば前田さんを専属で引っ張るのですが……無駄に優秀な分 手に負えません。つて、食べカスをベッドに溢すなー！！ アリスはシートで汚れた指を拭うなー！！」

「落ち着いて下さいませ。さやかお嬢様。では、こうしましょう。謎々でもお嬢様の秘密でも何でも構いません。私に問題を一つ出して下さいませ。私が答えを出し、ソレが正解であれば、お諦め下さい」

「答えが出せなかったら専属で仕えてくれるのね？」

「さあ、盛り上がってまいったよー。ここ雪広家の雪広さやか自室。解説のアカネさんどーですか？」

「そーですね。ここは さやかさんの誰にも言っていない様な恥ずかしい事を問題にした方が、今後私達としても良い関係を築いて行けそうだと思いますね」

「あなた達は出て行きなさい！！」

ボタンッ！！



「追い出されたよー？ どーするアカネ？」

「そう言いつつ、ちゃっかり菓子皿は持って来てるんだな」

何の問題にしたのかわからないけど、前田さんはいつも通りの笑顔で私達を見送ったのさ。部屋に入るとベッドでゴロゴロバタバタと悶え苦しむさやかがいたよ。

「以上！ 中途社員だけど……社員？ アカネ、合ってる？」

「ん？ ああ、そこは『中途半端』だアリス」

「おお！ それだ！ 半端ねえけどアリスがおおくりしたよー！」

「……ああ、それで合ってるぞ〜正解だ〜アリスは偉いな〜（最初に「任せるの良いよ！」って言うっておきながら投げ捨てるとはな……流石はアリス）」

さやかお姉さまが留学して2カ月が経とうとしていましたわ。

お母様のお腹も大きくなって行き、

先生が言うにはもうすぐ産まれるそうですわ。

「もうすぐあやかもお姉ちゃんね。」

「お母様、妹ですの？ 弟ですの？ 今の内に空き部屋におもちやを沢山用意しなくては！」

「あらあら、先生が言うには男の子だから、弟ね。じゃあ、あやかに弟が出来た時用のお部屋の準備をお願いしようかしら。」

「かしこまりましたわお母様！」

「ああお待ちください あやかお嬢様！ 失礼します奥様。」

「ええ、スミレさん頼んだわね。」

私はすぐにメイドの方々に相談しましたわ。

「男の子の好きそうなものですか？」

まあ、お嬢様にも好きな子が出来たのですか？ 学校の子ですか？」

「違いますわ！ 弟が出来ますの！！」

「なるほど、奥様の……ですが、そうになると難しいですね。

男の子とは言いましたが、0歳からですからね……それに男の子」

「難しいのですの？」

「男の子の好きなモノは、やはり男の子に聞いた方が良かったと、私も子供を産んだ事がないものですから……」

「それもそうですわね！」

「あやかお嬢様……私には御相談下さらないのですか？」

お母様の寝室からずっと付いてくるのはメイド長の縁丞スミレさん

だ。  
2ヶ月ぐらい前にお姉さまと一緒に行ってしまわれたメイドのアカネさんとアリスさんにキツく言われている。

「明日か明後日にでも、さやかお姉さまの担当から外れて、お母様と私の専属になるって聞きましたの。メイド長さんはどんな方ですか？」

「メイド長？ あ、スマレの事だね！ スマレは怒ると……こう、火を吹いて闇を裂きスーパードンパルが舞い上がるんだよ！」

「アリスく勢いよく立ち上がるな。カップ割ったら さやかに付いて行けなくなるぞ。それに混ぜてるぞ、どこで覚えた……。まあでも私らには厳しかったからな。怒ると正座・説教・竹刀（まれに木刀）……それで済まない事もあるからな。……軽く酒飲むぐらい良いじゃないかよな（ボソツ）」

「そ、そんなに怖いんですの？ さやかお姉さまの担当でしたから、あまり話す事も無かったですか……」

アリスさんは「怖いよ」アリス悪い事してないのにすぐ殴るものと、自分の頭を撫でている。

アカネさんはそれを見て「悪い事してないってお前、んな事は……」  
と言いかけてニヤリと笑って、こう続けましたわ。

「いや、確かに殴るな。私なんてここに来た頃、ナイフとフォーク  
で壁に身動き取れないように磔にされて色々されたしな」

「い、色々ですの？」

「メガネから必殺のビームが出るよ！ アリス見た事ないけど、巷  
じゃ有名で、もっぱらの噂だよ！（アカネに聞いただけ）」

「掃除してる時とかは話し掛けない方が良くぞ、近づくのも避けた  
方が良いな。ほうき振り回してくるぞ、振り回すだけで竜巻が起  
こるぞ」（実際に庭の掃除中にウェイターの一人が告白して吹っ飛  
ばされてたからな、まあ嘘じゃない）」

「メイド長って凄いですのね……」

「凄いななんてモンじゃない。スミレは一人でアフガニスタンの政権  
の一つを潰した事があるんだぞ。ミサイルも効かないさ」

「アリスも聞いたよ！ もしアメリカと戦う事になったらスミレが  
出れば大統領も謝るって！ スミレには核が搭載されているんだよ  
！（アカネに聞いただけ）」

アフガニスタンとかは良く分かりませんが、国の一番偉い人も頭を下げる程の怖い人って事ですね……。

ガクガクブルブル。

「あ、あやかお嬢様？ 大丈夫ですか？ 風邪など……」

「ひゃい！ だ、大丈夫ですわ！ そこで止まってください！ 危ないですわー！」

ジリジリ……ジリジリ……

「危ない？ (何かのゲームのルールでしょうか?)」

一定の距離を保たないと怒られた時が最期になりますわ！

「じゃ、じゃあ執事の方はいらっしやいますの？」

「はい」

スタツ

「私でよろしければ相談に乗らせて頂きます」

「あなたは？……どっから現れましたの？」

「執事の前田でございます。あやかお嬢様。天井の空拭き掃除をしておりました」

脚立とかは見当たりませんけど……。

「じゃ、じゃあ前田。私の弟がもうすぐ産まれますの。沢山おもちゃを用意して喜んで貰いたいですわ。でも何を買ったらいいかわかりませんの」

「なるほど、では御用意させて頂きましょう。ですが、あやか様のお気持ちも大事なことです。何点か見繕いますので、お嬢様が決めて下さいませ。明日のお昼までにはアチラのお部屋に用意いたしますので、飾り付けや配置を考えましょう」

「ありがとうございます！ 明日が楽しみですわ！」

タッタッタッタッタッタッタッタ……。

お嬢様が元気よく駆けて行く。

「前田さん。私はお嬢様に避けられていませんか？ 凄く悲しいのですが」

「避けられておりますね。理由を知りたいですか？」

「知っているのですか！？ 流石は前田さん……教えてください」

「かしこまりました。あれは2ヶ月ほど前です。縁丞さんが、さやかお嬢様から担当を外れると決まった時に東条さんと久坂さんが、あやかお嬢様に吹き込んだのでございます。『縁丞さんは火を吹くメガネから光線が出る。殴る。シルバーで威嚇される。木刀や竹刀で怒られる。アメリカの大統領も頭を下げる程に怖い』と……もう少し言っておりますが、そんな感じでした」

「あ、あの子達……。あら？ 前田さんはそれを誰から聞いたんですか？」

「いえ、間近で聞いておりましたので」

「<sup>と</sup>止めて下さいよ！！ あゝお嬢様に嫌われたままなんて……」

「誤解を解く為に、あれは東条さん達の嘘であったと伝えればよろしいのでは？」

「それだと、今度はお嬢様がアカネさん達を『嘘つき』だと嫌ってしまうのではないですか。ゆっくり誤解を解いていくしかなさそうです」



すね……」

「なるほど、流石はメイド長、使用人の鑑でございますね。勉強になります。では掃除に戻りますので」

そう言っつて前田さんは天井に戻った……戻ったと言っつていいのだからか？

「……それは本当にどうやってるんですか？」

「企業秘密でございます」

「同じ仕事仲間ですが!？」

数日後。

「え、会えないっつてどうゆうーこと?」

「……残念だけど……あやか……」

私は弟が出来ると、嬉しさのあまりはしゃぎ回っていました……。専用の部屋まで用意して、でも無意味になってしまっつて。

ガチャッ

「失礼いたします。本日からお嬢様の身の回りのお世話をさせて頂くことになりました。前田・ヴァンデンバーグ・政宗と申します」

「……そう」

「……お嬢様。コチラを差し上げましょう。特別ですよ？」

渡されたのは1枚の写真でしたわ。見向きもしないで返そうとしましたわ。

「今はこんなの……」

「元気を出してくださいませ。お嬢様が笑っていないと、私を含め家中の者、いえ、世界中の者が心配なされます。さやかお嬢様も心配で仕事も手に付かなくなってしまいます」

その言葉に、私は写真を突き返すのを止めて、  
一目だけでも見てみようと思ったのです。そこには……

「……これは！？ 誰！？ 誰ですの！？」

「私でございますお嬢様」

写っているのは愛苦しい少年。その写真を見て、すぐに安易な想像が出来ましたわ。「弟がいたらきつとこんな……」それほどに可愛らしかったその少年。

その写真の裏には数年前の日付けが書かれていましたわ。

「今すぐこの姿にお戻りなさい前田！！ 主人の命令ですわ！」

「ん〜……お嬢様が元気になったら考えましょう」

「もう元気になったわ！ さあ今すぐこの写真の姿に……！！！」

「かしこまりました……。考えましたが元に戻るのとは不可能かと存じますお嬢様」

「なっ！ 主人の私に嘘を付きましたのね！？」

「ですが、元気になりましたね。では、お茶にいたしましょう。実は私、お菓子作りの天才でもあるのですよ？」

前田の用意したお菓子は、弟が出来た時に一緒に食べよう。私がお姉ちゃんだから、イチゴは食べたいけど、我慢して弟のお皿に乗せてあげる。その代わりこっちのクッキーは少し多めに貰うの。紅茶は甘くして……と楽しそうに計画していたモノばかり。

ケーキは甘くて少ししょっぱかったですわ。

「お嬢様。元気を出してくださいませ。私、前田。お嬢様が元気になるまで一緒におります。どうか、その素敵な笑顔で周りの者も元気にしてあげて下さいませ。お嬢様が元気だと周りも元気になります。お嬢様にはその力があるのです」

……パタン。

「流石ですね」

「これはメイド長」

「確かに、あやかお嬢様の笑顔には助けられます。最近、屋敷の空  
気も沈みがちでしたからね。……ところで、執事長の件は断わり続  
けているのですか？」

「とりあえずは、あやかお嬢様のお世話係をさせて頂きたいと返答  
いたしました。まだまだ学ぶべき点は多く……執事長と言うモノに  
興味も湧きませんので」

「そうですか。前田さんが執事長になれば、私も少しは楽になるん  
ですけどね。一人の主人に仕える……鑑なのは、もう前田さんの方  
ですね。メイドという立場で無く、ただのOL等でしたら告白して  
いたんですけどね」

「恐れ入ります」

数年後。

リリン      リリン

「前田〱。前田はどこですか？ あ、スミレさん前田を知りませんか？」

「前田さんですか？ 休みではないはずなのですが……おかしいですな」

どこへ行っても前田がいない。

鳴らせば5秒で来ると言う鈴を何度鳴らしても現れない。今までこんな事は無かったですわ……。

「あやかお嬢様いけません。こちらは使用人の……！」

「分かっています！」

ガチャッ！

初めて来た前田の部屋。

でも、物は何もなく、寂しい部屋だった。

良く本を読んでいたハズなのに、一冊も見当たらない。

そして、机の上に紙が一枚だけ残されていた。

【お嬢様へ】

「突然ですがお世話になりました。

お嬢様には沢山のメイド・執事の方がいらっしやいます。

私、前田は新しい主人を探す旅に出ます。

この屋敷での事、非常に勉強になりました。

では、探さないでください。      ばいちゃ      』

【前田・ヴァンデンバーグ・政宗】

このふざけ方は間違いなく前田。

「く〜……っ！！ 前田！ 前田を探さない！！ 手の空いている者は前田を！ どんな手を使っても構いません！！ 前田を探さない！！ 見つけ次第捕獲！ 麻酔銃までなら発砲も許可しますわ！！」

結局、雪広家の警備隊、探偵などの力も虚しく、前田の搜索は打ち

切られた。当然その後も搜索を地道に続けてはいたが、出会ったのは数カ月後の麻帆良学園だった。

「突然ではありますが本日からこの学校で教員をすることになりました。前田・ヴァンデンバーグ・政宗にございます」

番外 - ? 「前田の知人達でございます」 (後書き)

感想は随時受付中でございます。

と言っ訳で！

久坂アリス ・ 東条アカネ ・ 縁丞スミレ ・ 雪広さやか

他 新人の使用人の方々や奥様のオリキャラ達でした。

前田が霞むぐらい活きの良いのがいるじゃんw

書いてて面白いのはやっぱり、アリスとアカネ。その二人が反面教師になって雪広家の当主として修行中の さやかは割と真っ直ぐに育って行くのさ！

アリスは元ネタがいますね。

知ってる人どんだけいるか知らんけど。『ヒヤッコ』って漫画の6巻に出てくる。アリスです。『アリシア・レッド』って名前でアリスって呼ばれてる元気いっぱい女の子。やっぱり、変わった日本語使ったり、少し間違った知識を持ってる子ですねw

その他に関してはオリジナルかな。意識して書いたモデルはいない感じです。



ではでは、次回からは学園祭編！  
色々イベントが盛り沢山！！

さて、どーするかね。

と言う訳で、ネタ等も随時募集しまーす。

「こんなんどーでしょ？」でも構いません。

楽しく書けそーだったり、ひらめくモノがあれば、ネタは足して行きまーす。

この作品の感想は、前田・千雨コンビで答えて行く形式でお送りしております。中には本編にも絡んでいる事もあるかも？ って感じ  
です。感想も楽しめるよーに書いてまーす。

ではでは、待て！ 次回！！

### 第13話「これはソントウじゃないです」(前書き)

遂に!! 満を持して!! 学園祭編が始まります!! .....と、  
無意味に力説。

学園祭。それはお祭り。

前田。それは毎日がお祭り騒ぎ。

千雨。それは毎日が前田との戦い。

絶対に負けられない戦いの日々が.....あ、もう始まってるか。  
では、どうぞ

### 第13話「これはゾンビでございます」

ウチのクラスはまだ何やるか決まってるけど、大学部とかは毎年ありえないペースで次々と出し物や展示物を完成させて行く。まあ、部活なんかもやる事は決まってるから基本的には早いな。この時期になると、まだ2週間ぐらいあっても、宣伝としてクオリティの高い着ぐるみやロボットが登校して行く。

そう、今年も学園祭が始まるうとしていた。

「お嬢様、正面をご覧ください。アチラが有名な木製のエトワール凱旋門でございます。去年とは違いフランスの芸術作品で作っていらっやいますね」

「ああ見えてる。有名って麻帆良だけの話だけだな。しっかし相変わらず大学部のはすげーな。あれ？ 前田は麻帆良祭は初めてじゃないのか？ 確か去年の学園祭後ぐらいに私のとこに来たよな？」

「正式参加は初めてでございます。あやかお嬢様に仕えていた頃はお呼び頂けた事は無く、裏方に回ることしか出来ませんでしたので」

「裏方って、何をしたん……？」

「前田さん！ おはようございます…」

「…………おはようございます…………」

うおっ！ 大学部の集団に囲まれたぞ！？  
お、腕章が付いてるな。学園祭実行委員の人達か。

「今年もよろしくお願い致します！！！」  
「「「「「よろしくお願いします！！」「」「」」

何故か頭を下げられる前田だが、それを丁重に断って行く。  
残念そうな声をあげて大学部の人達は作業に戻って行く。

「おい、マジで去年なにしたんだ？  
裏方ってなんだよ？ 何で大学部の人達が頭下げるんだよ？」

「そうですね……ステージを組み上げたり、迷子を搜索したり、色々なお手伝いがございます。去年に関しては1万人参加の鬼ごっこで鬼をやらせて頂きました」

ああ……去年のシメの【学園全体鬼ごっこ】か。見てただけだが、恐ろしいもんを見たな。確かに最初は「1万人が逃げ」で「鬼は一人」って、「絶対に鬼が負けるじゃねーか！」って思ってた。

しかし、1万人を相手に謎の執事服の男が、【邪神モッコス】のお面を付けて、次々に【鬼の牢獄】と言う名の捕まった人専用ゾーンに一人また一人と投げ込んで行き、遂に鬼一人で1万人を捕まえきってしまった。小学生以下の連中は泣き喚いていた記憶も真新しい。

……って！！

「あれはお前だったのか！！？ そうだ！ あの鬼も執事服だった！！」

「お嬢様、このペースでは遅刻でございますよ？」

……この野郎。人が驚いてやってるのに。  
時間だって余裕だってーの。

『麻帆良曲芸部【ナイトメア・サーカス】開催は全日程全日、午後6時半より！！ チケットは大人1500円。学生割引1000円です。よろしくおねがいしまーす！！』

おお、ザジが空中ブランコで飛び回ってやがる。  
アイツも結構異常だよな。

おっ？ こっちに？

スタッ

「おはようございます……前田先生。よろしければ……先生も我がサーカスへ……どうぞ……（営業スマイル）」

「ありがとうございます。お嬢様2枚頂きました。2枚です」

「ああ、好きな奴でも連れて行って来い。その日ぐらい執事の仕事を休んで楽しんでくると良いさ。いやーしかしザジも笑うんだな。営業スマイルとは言え、感情とか表に全く出さないタイプだと思っただぜ。あ、いっけねーそろそろ遅刻じゃねーか」

「ハハハ お嬢様。逃がしませんよ？」

「……くそっ分かったよ。好きにしるよ」

前田はやはり私に付き纏うようだ。

教室に入ると、アホなクラスメイト達が騒ぎ立てていた。クラスの出し物をメイド喫茶にするとかしないとかで、徐々にコスプレ喫茶・イメクラ等に趣旨が変わって行く。

ダメだコイツ等。何も分かっちゃいねえ。そもそもメイドってのはな……。

私に全権委ねてプロデュースさせてみるってんだ。客の500人や1000人なんて余裕で……ええい！ もう我慢できん！！

私は制服からメイド服に一瞬で着替えて声を高らかに説明しようとした。

ガシッ

しかし、その行為は執事によって止められる。

「ま、前田？ な、何だよ？」

「少々こちらへ……」

入れ換わる様に指導員の新田が教室に入って来た。

「朝っぱらから何をやっとなるかお前達はーッ！！ 前田先生がいないと騒ぎ立てるばかりだな！！ 学園祭で羽目を外すのは分かるが、3-Aは外し過ぎだ！！ ネギ先生もネギ先生です！！」

「はううっ！！」

「全員正座ーッ！！」

た、助かったのか……。  
危ねえ。我を忘れてメイドカフェの真髓を語るどころだったぜ。

教室内は正座の連中で溢れている。小窓越しにソレを眺め、私は言った。

「どうやったかしらねーけど、これを見越して連れだしたのか？」

「いえ、メイド服姿であれば撮影をと思ひまして。クラスメイトの方々が背景と言つのもどうかと思ひまして」

前田はカメラを構えてにこやかにしている。

「……お前も正座して反省して来い」

「左様でございますか？ では……」

ガララララッ

あ、馬鹿っ！ 今開けたら……！！

「これは前田先生、学園祭の大学部の方は大丈夫でしたか？」

「新田先生。またクラスの事でご迷惑をお掛けいたしましたして申し訳ございません。大学部の方は出張中だった教授達も戻って来たようなので特に問題はなさそうでしたね」

「そうでしたか。伝達ミスでしたかな？ お手数おかけしまして。ん？ 何だ長谷川も前田先生の手伝いだったのか？ 前田先生が来てからお前も変わったな。良い事だぞ。しかし、メイドの格好までしなくても良いのにな。前田先生の指導が行きすぎたかな？ はははははは」

アハハハハ！！

……色々誤解されてるし、鬼の新田までもが前田に騙されてやがる。この学園はもう駄目かもしれない。



今日も一日平和やったな。

しかし、学園祭の出し物も決まらんと大変だな。

しっかしスゴイもんな。

学園祭本番まで2週間ちよつとあるんやで？

それなのに学園から続く道のりがもうお祭りムードやないか。  
活気があつてええね。

おお？ ここは？ 【超包子<sup>チャオパオズ</sup>】？

おお、3-Aのクラスの子らやないか……。

へえ、路面電車を改造して店やつとるんかえ……。

「俺、肉まん<sup>ニクマン</sup>とチャーハンにするわ！」

「お、小太郎アルカ、毎度アリ」

ズルッ

「何しとるんや！ 帰つてご飯あるやろが！」

「え、俺もう腹ペコやし。今日はここでええやんか」

「もしくは、隣の執事喫茶【人生のデメリット】で軽食など如何ですか？」

「前田先生。ウチの客取つて酷いアルね。小太郎また来るといい

アルよ」

言われるまで気付かなかったんやけど、路面電車の端にもう一つ店があり、クラシッくな雰囲気醸し出してる。

「ま、前田はん。お店出してはるんですか？」

「楽しそうだったので、数日間だけお店を借りたのでございます」  
教師に執事に喫茶店まで、ホンマに身体大丈夫やるか？

「執事喫茶つてなんや？ 軽食言われても結構食つて俺」

「御要望があれば何なりと、執事喫茶でございますから。不可能はございませんよ？」

「じゃあ、ハンバーガーにチャーハンにカレーライス！」

「あるかー！ 考えて喋りい！ 前田はんすみません……」

「ご用意いたしましょう。5分ほどお時間頂けますか？」

あるんか……。ホンマに不可能ないんか。

Side out

【人生のデメリット】  
なんて名前だ……。

『お嬢様。本日の夕飯は

【超包子】の横にございます【執事喫茶】でお待ち下さいませ』

とか前田が言うから来てみたら。

この店の名前、もうちょっとどこにかならなかったのか？  
分かり辛い場所にあるしよ、客こねーだろ。

「お嬢様お待たせいたしました。さぁどうぞ中へ」

前田は教師の仕事を終えてやって来た。

「この執事喫茶って、お前の仲間とかがやってる店なのか？」

「いえ、私の店でございます」

……コイツは一体何を目指しているんだろうか？

カランコロソカラソ

店の鍵を開けて前田に通されれ中に入ると、普通の喫茶店よりも落ち着いていながらも、格式張っていない楽な感で過ごせる店だった。『か私の感がおかしいのか？ 外観で感した広さじゃねーんだけど？ すぐー広く感するんだけど？』

『学園祭の期間だけ利用させて頂いておりまして、本日の今からがオープンでございます。では記念すべきお客様第一号のお嬢様。何が食べたいですか？』

『メニューとか無いのか？』

『食べたいモノを仰っていただければ、何でもご用意いたします』

無理難題を突き付けてやりたくもあるが、普通に用意しそうで怖い。

『じゃあ無難なところで オムライスとか出来るか？』

『かしこまりました』

数分後に出てきたのは、【？LOVE？】とケチャップで書かれたオムライスだった。……くそっ頼むモノ間違えたな。

『おいしくなーれ、おいしくなーれ、萌え萌えきゅ……』

『ヤメロ』

「左様でございますか。……おや？ 少し失礼いたします」

前田は店を出て……ん？ 天ヶ崎先生か。仕事仲間とかにはまともらしいからな。いつも まともでいてくれれば頭を抱える事も無いと思うんだけどな。っと、来る前にこの歪んだLOVEを伸ばして消しておくか。

ウイイインッ

と、入口の自動ドアが開く音がする……。

おい、さっきはベル式のドアじゃなかったか？

「何だ、やはりお前もいたのか」

「ん？ ああ、エヴァンジェリンか」

いつも通り不遜な態度の様な留学生のエヴァンジェリンは人の事を『お前』とかで呼び、カウンター席に座る。私も口を開けば、口が悪くなる事が多いからな。周りからは口が悪いコンビみたいに見られている可能性もあるな。

「超包子ならいつも一緒にいる茶々丸もいるだろう？ 良いのか？」

「別に構わん。そこで前田を見かけてな。……私も同じモノにしよ  
う」

カランコロンカラン

ドアが開く音がする。おい、やっぱり音がおかしいだろうが！

「前田！ ドアが自動ドアになったり、ベル式だったりどうなってるんだよ！」

「たてつけが悪いのでしょうか？ 明日までに直しておきましょう」  
たてつけが悪くて自動ドアとベル式が変わってたまるか！！

「前田。私もオムライスにするぞ」

「かしこまりました。天ヶ崎さん。小太郎君もどうぞ」

「失礼しますえ……っ!？」

「お？ 京都の時の……」

「何だ。あの時の犬か」

エヴァンジェリンの知り合いの輪が勝手に広がって行っているようだ。  
男子中等部の知り合いか？

コトツ

静かにエヴァンジェリンの前に置かれたのはオムライスだ。  
ケチャップで【MOE MOE】と書かれている。  
エヴァンジェリンはそれを見て、前田を睨みつける。  
それが正しい反応だ。

「おいしくなーれ、おいしくなーれ、萌え萌えきゅ……」

「殺ルゾ？」

前田は少し残念そうな顔をしてカウンター内に戻って行った。

「ま、前田はん！ ウチも！ ウチもオムライスでお願いします！」

「千草ねーちゃん元気やな。あ、俺はさっき言ったヤツで」

数分後。

「お待たせいたしました。どうぞ」

コトツ

天ヶ崎先生の前に置かれたのはオムライス。普通のオムライス。ふわふわ玉子で、パセリが添えられていて、ケチャップはオムライスの楕円形に対して交差するように楕円形を描いて掛けられている。

「……え？ ……え？」

今度は天ヶ崎先生が残念そうな顔している。オムライスと前田を見比べて、疑問は解決できたのか分からないが、スプーンを手にとった。

まさかな……？ 「萌え萌えキューン」ってやって欲しかったとか？  
まさかな……。前田なんか惚れる奴の気が知れない

「じゃあ、私は先に帰ってるぞ」

「かしこまりました」

天ヶ崎先生達は先に帰って行った。

店に残っているのは前田とエヴァンジェリンだけだ。

エヴァンジェリンはノンアルコールのカクテルを飲み始めた。

私は帰ってブログの更新でもするか。

ん〜……今思えば、客は全く増えなかったな。

前田って人気はあるはずだから客もそこそこ来るかと思ったんだけどな。

まあ超包子には敵わないか……。あれ？

賑わっている超包子。そして、私は視線を執事喫茶【人生のデメリット】に向けるが、見当たらない。目を擦ったりもするが見当たらない。

「店が……無い？ あれ、だって今……あ？」

あった。薄暗くて見えなかったのか。

あ〜これなら客も気付かないわな。

……あれ？ でも来た時はアツサリ見つけられたよな？ あ、街灯も無い場所だからか。来た時はまだ明るかったからな。



……そうだよな？ ま、いつか。

Side エヴァンジェリン

トクトクトク……

カチャ、スチャ……

シャカシャカシャカ……

スツ……トクトクトクトクトク……

「どうぞ」

カクテルグラスに注がれる淡いピンク色の液体。  
口に含むと、爽やかな香りが抜けて行き、  
程良い甘さを残し、喉を通って行く。

「うむ、イケるな」

「ありがとうございます」

「それで？ 死体の話だったか？ 人形ではだめなのか？」

「人形ですと、どうしても質感などが目立ちますので」

「まあ生身と人形の肌では全く違うがな……」と言っか、何に使うんだ？」

昨日だったか。コイツは『死体を持ってませんか？』と聞いて来た。仮にも教師が仮にも生徒である私にだ。学園内でだ。アホか全く。勿論そんなモノは持ってない。それを聞かれた時に聞き返しはしたんだが、タイミング悪くボーヤが「あのおゝ弟子に……」とか言ってきたので投げ飛ばしてうやむやになってしまったからな。

「左様でございますか。では造るほかありませんね」

「お化け屋敷とやらに本物の死体を使う気だったのか？  
まだクラスの出し物も決まって無かっただろう？」

「いえいえ、出し物は決まっておりますませんが、クラスは全員参加しないといけませんので、修学旅行の時はどうにも難しかったのですが、今回は間に合いそうなのでございます」

……また良からぬ事を考えてるのか。

Side out

「ふぁ……あふう……」

何だろう？ アラームはまだ鳴って無いが眼が覚めてしまった。二度寝も出来ない感じだが、しかし良く眠れなかったな。何て言うか……常に見られている気がして……。

私はメガネをかけ、ベッドを出ようとする。

「っ！？ ギャーーーーーッ！……！」

しかし、部屋の変化に驚愕し、ベッドから転げ落ちた。  
ドタンッ！

ガチャ

「お嬢様、大丈夫でございますか？ 何やら大きな物音が……お嬢様！？ ……よもや、お嬢様……私を置いてこの様なお姿になってしまうとは……」

ベッド横に倒れる私がいるのを知ってか知らずか、前田は部屋中にあるゾンビの一つに手を置き、涙を流している。

「……………何をしやがった前田」

人形だと理解した私は汗を拭って前田に声をかけた。

「ああ、お嬢様の声が今も聞こえてくるようです。ああ愛しき主よ……グッバイ・マイ・ラヴァーでございます。最後にお嬢様のパンツをもう一度洗濯しとうございました」

「聞こえてんだる前田！！ この不気味なゾンビは……！ ゾンビか！？」

「はい、これはゾンビでございます」

「あーもう！ そんな事はどうでもいい！！」

何で私の部屋に7体もゾンビの精巧な人形があるんだ！！」

「伝承によりますと、【戦士の瞼の下、大いなる瞳になりし時、なんぴともその眠りを妨げる事なかれ】とありますね」

「クウガかよ！！ 全然関係なさそーな伝承を引っ張ってくんじゃねーよ！！ それに！ 私の眠りを妨げてんじゃねーよ！！」

時計を見ればまだ30分は余裕がある。

私は前田からのふざけながらの説明を受けながら、ゾンビが7体並ぶ居間でコーヒーを飲んでいた。

「クラスの出し物はお化け屋敷に決定した？」

「これはお化け屋敷用のゾンビなのか」

「左様でございます」

昨日の多数決だと、クーフエ・長瀬・明石・春日・大河内・ザジの6人で、メイドカフェと同数で決まらなかったと思ったが……。

「もう一人増えたのでございます。相坂さんでございます」

「相坂？ どのクラスの奴だよ？ 他のクラスを足したらダメだろ」

「いえ、転校生でございます。本日より登校でございます。クラスの方々にはあやか様よりメールを送って頂きましたので伝わっているかと思われます」

また大変な時期に転校してくるんだな。

「って待て、私にはメールが来てないぞ？」

「サプライズパーティーでございます。本日はお嬢様の誕生日よ……」

「誕生日じゃねーし！ それにゾンビで祝うパーティーって何だ！！  
呪うの間違いだろーが！！」

「おお！ 字も似ておりますね。流石はお嬢様」

「まったく……。」

『アア……』

ビクウツ！！！！

背中に電流が走ったかのように痺れる感触を覚える。  
突然ゾンビの1体が呻き声を上げたからだ。

「少し凝った作りになっておりまして、油断した状態になると呻き  
声を上げる設定にしております」

「今は切れ！！」

『怒っちゃダメだよ。お兄ちゃん』

……。隣  
隣のゾンビが声を上げる。すげー可愛らしい声で。  
どっかで聞いたこともある様な声だったな。

「この様に、驚いた後にホッとさせると言う、妹萌えの方の為に  
対応できるように声優を雇いまして……。」

「見た目がバイオでハザードなゾンビが妹とか最悪だろ!!」

### 第13話「これはゾンビでございます」（後書き）

感想は随時受付中でございます。

・前田は去年の1万人参加の鬼ごっこで鬼だったらしい？  
あなたのハート捕まえます！！ 執事は大変なモノを盗んで行きま  
した！！

・前田の店がひっそりとグランドオープン！  
あなたの人生の欠点お答えします。執事喫茶【人生のデメリット】。

・Q・【これはゾンビですか？】A・【これはゾンビでございます】  
ゾンビ・ゾンビ・ゾンビ・ゾンビ・ゾンビ・ゾンビ大家族

では今回は、地味幽霊が転校生として入ります。  
ですが、ほぼ無意味なので、アツサリ行きます。  
あくまでメインは千雨さんと前田のコンビなので。

引き続き、ネタ・感想募集中。



第14話「学園祭の準備でございます」(前書き)

今回は、

- ・地味幽霊、人生を得る
- ・アスナ、幸せを再度掴み始める
- ・世界樹伝説の噂

の3本でございます。どうぞ

## 第14話「学園祭の準備でございませす」

Side 相坂さよ

皆さんの周りに……

悪い子じゃないけど、

ちよつと目立たないと言うか、  
存在感がないって言うか……

いるのかいないのか わからない子っていませんか？

いますよね？

クラスに一人くらいそーゆー子って……

実は私もそーゆータイプの一人なんです。

なにせ 私……

幽霊ですから。

『「そんなあなたにコチラの商品！ 見て下さい前田さん。この肌触り どうですか？」」

「うわっ！ コレ本当にゾンビですか？ 凄く良い感触ですわ〜」

「そうでしょう!? 実はコチラのゾンビ、あの墓荒しで有名な研究機関。【はいぱー前田研究所・なう!】で開発された新素材を採用してるんですね〜」

「なるほど〜!! あっ! でもコレ高いんじゃないですかあ〜?」

「そこもお任せ下さい! 限定8体、8体までは無料で提供いたします! 更に更に!! 今回は一体のみ、完全な人造人間ホームクルスとしてお届けいたします」

「わあ〜っ! 本物の女の子みたいですわ〜! ゾンビに囲まれる美少女! なんか神秘的ですわ〜!」

……………。

えっと、この人は前田先生です。このクラスの副担任をしています。執事服のカッコいい人で、長谷川さんを『お嬢様』って呼んでます。でも、お嬢様って呼ばれる割には委員長さんみたいにお嬢様言葉じゃないなって思います。あ、でも委員長さんは前田さんの前の主人らしいです。世界は広いようで狭いです。

えっと、ネギ先生の授業の時は私の事を呼んでくれなくて、前田先生の授業の時は必ず私の名前も呼んでくれます。何故でしょう? いつも誰にも気付かれずに寂しいので、個人的にはとても嬉しいです。

…………… 見回してもやっぱりクラスにはもう私しかいなくて、と言うかもう暗くなってきたのに。いつもなら颯爽と帰って行くのを何度かこの窓から見てたんですけど、何故か今日はゾンビのテレビショッピング風な何かを一人二役で説明してくれています。右手にマイクを握りしめ、左手に人間にしか見えない人形を抱えて…………… 学園祭の練習でしょうか?

「と言う訳で相坂さん。こちらの人造人間ホームクルスを差し上げましょう。今回はサービスとして、魂の定着をさせて頂きます。金利手数料・全額は【じゃぱねっと前田】が負担いたします」

わ、私が……見え……見える訳ないですよ？

そうだよ。そんなわけないよね。

何かの劇の練習かな？ 【ゾンビ売りの先生】とか？

「【ゾンビ売りの前田】の方が良いかもしれませんね」

えっ？

私の声が……？

「はい、聞こえております。相坂さん。あなたに人生をお持ちしました」

そう、昨日ここで私はこの身体を得て、今日からこの麻帆良学園で学生生活を再スタートする事になった。

「という訳で、ネギ先生はいつものように新田先生からご指導を頂いておりますので、私が司会進行を務めさせていただきます。……麻帆良の道突き進め。青コーナーより転入生の入場です！！ 背番号1番、右投げ右打ち、サード、『相坂さよ』さんでございます！！」

「……かあわいい……っ！！」「」「」

アツサリ受け入れてくれるクラスメイトの方々。

こんな紹介されたのも初めてで凄く感動的でした。

後から聞きましたけど「そりゃそーだろうよ、そんな紹介普通ねーし」って長谷川さんが言っていました。それでも嬉しかったです。

「その制服どこの？」

「もう女子寮にいるの？」

「綺麗な肌だね」

質問攻めも夢のようです。

私がこんなに構って貰えるなんて。

私を見つけてくれた人……前田先生……（ポツ）

今年は……いつもより楽しい年になりそうです……

「よかったな」

「？ マスター、相坂さんと知り合いだったのですか？」

「えっ」

エヴァンジェリンさんが私に声をかけてくれる。

以前から目が合う時があると……勝手に思っていたけど、もしかすると見えてる人だったのかもしれないです。

あ、私の身体はすぐに馴染みました。

他の7体と同じようなゾンビと思ってましたけど、人間と全く変わらない身体みたいです。他の7体はクラスの出し物の飾りに使われるみたいです。なんてたってゾンビですから。

えっと、この身体はお腹が空きます……全部言います。

食べることも、その……色々と出す事も出来るんです。

これなら私、あと10年は戦えます！

「本来であればロケットパンチもブレストファイヤーも撃てたのですが、地球温暖化の影響もございまして、省かせて頂きました」

……本当だったら、あと100年ぐらいは戦えたみたいです!!

とりあえず、今はクラスの皆さんと一緒にお化け屋敷を作っています。

『アアアアアアッ!!』

「「「「「ギヤーツ!!」「「「「「」

「そろそろ慣れたら〜？ そう言うシステムなんでしょ？ 良く分かんないけど」

釘宮さんは冷静に、怖がる私と鳴滝さん姉妹、和泉さんに宮崎さんを諭します。でも安心して切っている時にゾンビが叫べばこっちも叫ぶと言うものです。

『あ〜お兄ちゃん！ 私のプリン食べたでしょ〜！？』

『アアアアアッ！』

『あらあら、お兄ちゃんは酷いわね〜。はい、お母さんのあげるわ』  
『では母さんには僕のプリンをあげようかな』

『おやおや、では私のプリンを海老造にあげようかね』

『こらこら、そしたら婆さんのが無くなるではないか。ワシのを食べい』

『ガアオオオオオオンッ！！ フハハハハ！ 犯人ハ俺ダアーツ！』

「あー、まあた変に連動し始めた〜」

「溢れる家族愛だね〜」

「いや、でもゾンビだし」

「て言うか、最後の犬？ ペット？ 最後の本当に何？ 喋らなかつた？」

「前田先生〜これどうにかならぬんですかあ？」

そう、このゾンビの人形さん達。……人形にしては凄くリアル過ぎて撃ち倒した方が良くも知れないほどのゾンビさんですが、お兄ちゃんゾンビが叫ぶと、妹さん。お父さんお母さん、お爺ちゃんお

婆ちゃん、……ペット（？）が勢揃いしてしまう事があるみたいで  
す。あれ？ いつの間に名札が？

お爺さん：A - B - Z O

お婆さん：アホ毛

お父さん：海老造

お母さん：キューティ・ジャイ子

お兄さん：エビゾー

妹ちゃん：ヤン・デレ子

ペット？：D i o 助

だそうです。誰が名前付けたんだろ？

「お嬢様。少し行って参ります。この様なお姿でお辛いでしょうが  
……おや？ 名前を変えたのですか？ お呼びしても？ ありがとう  
うございます【デレ子】お嬢様」

「それはゾンビでアタシじゃねーだろ！！ さっさと直してこい！  
！」

前田先生は長谷川さんに蹴られながらコツチにやって来ます。

「お待たせしました。

ここを……こうして……これでどうでしょうか？」

前田先生がゾンビの頭部や腕、腹部などを指先で優しく突いて行く。  
それだけで何かが変わるのだろうか？ それは分からないけど前田  
先生が持ってきたゾンビ大家族だから私達では仕様とかは分からな  
い。



.....。

『アアアアアッ！！』

『お兄ちゃんどいて！ ソイツ殺せない！！』

『お兄様。どうしてお弁当食べてくれないの？ お腹一杯？ ……』

そう

『兄あにい？ このハンカチ誰の？ そう、あの女の……』

『兄ちやま。一緒にテレビ見よ！ え？ 彼女と電話？ あの女だ

ね

『にいやく。トイレ……一人で行って？ あの女の所為だね？』

『兄貴！一緒に買い物行こうよ。あ、うん……。邪魔な女

……』

ドグシュッ！！

.....。

「「「「怖っ！！！！」「」「」

「『ん？間違えたか？』 って顔してんじゃねーよー！！ さっさと

と直せー！！」

「左様でございますね。やはり妹は12人いた方が……」

「そこじゃねー！！ 【怖い】のベクトルが違っただろーが！！」

ふふふ、何だかんだ楽しいです。  
つてあれ!? 名前が変わってます!?  
12人の妹にもピッタリっぽい名前です!?

『仲良しゾンビ みんな合わせて7人ゾンビ』  
取れた腕・取れた足も縫い直して』

「おい前田!!  
なに指揮してんだよ!! ゾンビを歌わせてねーで直せ!!」

「もう少しで何か掴めそうなのですが……かしこまりました!」

ふあああ! 今度はゾンビさん達が整列して右に左に踊ってますう  
〜!?

「そのネタもヤメロ!! うおっ無駄にウメエ!」

何だか息ピッタリな執事とお嬢様でした。本当に楽しそう。  
そのクラスという輪の中に私もいられる事が凄く幸せです。  
うん、がんばろう。

S i d e o u t

S i d e   アスナ

最近のネギはおかしい。

いつからかって言うと、多分京都から帰って来てからだと思う。

確かに色々と原因になりそうなおかしい事はあった。

仮契約が勝手に切られていたり、魔法に興味津々だった人達も、こ  
と魔法に関しては距離を置く様になった。桜咲さんも木乃香も寮か  
ら離れた。そう、全てネギを避ける様に。

ネギは師事する人を今も探しているけど、誰からも了解の答えは貰  
えないでいる。でもその姿を見ても、私は最近『可哀相』だとか『  
どうして誰も協力してあげないの？』って思わなくなってきた。

お父さんを探す為とか、魔法使いとして立派になって気持ちは良い事  
だと思う。でも、私はそれに違和感を覚え始めていた。

そう、最近のネギはおかしい。魔法使いとして？ 10歳の子供と  
して？

ううん。そうじゃない。人としておかしいんだ。

少し前に私はネギに言ったことがある。

「最近のアンタ酷いわよ？」

先生の仕事、ほとんど前田先生に任せっきりじゃない」「

これに対してネギは何も言わなかった。  
聞いているのか聞いていないのかも分からなかった。  
いつもならそこで私は叩いても分からせただろう。  
でもそんな気も起きなかった。

ネギは教師の仕事を放棄しているかのように、一人で師匠探しをして、自己流で修行とかをしているようなのだ。立派な魔法使いってそういう事？

「アスナ君、こんなところでどうしたんだい？」

「た、高畑先せ……！！！」

私は一瞬で顔を変色させただろう。顔はもう火の車状態。  
でも、声の方に振り向くと、顔は通常の色に戻った。

「……前田先生ですか？」

顔の見た目は高畑先生そっくり。声もそっくり。でも、私の前にいるのは高畑先生の良く出来たお面を被った執事服の踊っている人だった。

「おや？ 声もマネたつもりでしたが、どこでばれたのでしょうか？」

「服です服！ それからその動きも！ 高畑先生はそんな風に踊って登場しません！」

「左様でございますか？ 夢ではもう少し激しく『チチをモゲ』をバクミュージックに踊り狂っていたのですが」

どんな夢を見ているんだろうか？ 前田先生って少し遠い。

「お面いらいますか？ ……それとも本人が欲しいですか？」

「……え？」

「例えば、高畑先生がアナタのモノになるとします。代わりに何を失っても後悔はしませんか？」

私が高畑先生の事を好きなのを知っているのは、この人の事だから不思議という事は無い。でも、こんな話を私にしてくるのは不思議ではあった。

「もしネギ先生が心配ならばご安心ください。彼の事なら大人が守ってくれます。しかし、魔法を知らない人が近くには危険ですし、魔法を隠匿すると言う大人達も近寄り難くなってしまう。今がその状況でございます」

前田先生もネギの事考えてくれてるんだ。

確かにただの中学生の私がネギの傍にいても……京都ではもう少しで鬼に殺されるとも思ったし、今なら魔法に関わるって事が危険なものも分かる。木乃香も桜咲さんも寮を出ちゃったし……ネギを避け

る。ううん、見て見ぬフリをしてあげるのが一番いいのかもしれない。

「……さっき言った。『何を失っても』ってどういう事ですか？」

「魔法に関わることを全てを記憶から失うのでございます。ネギ先生の事も子供先生と認識し、魔法使いだとは思わなくなります。あなたを守った人達も同じことを考えておりました。辛い事を何もかも忘れて平和に暮らして欲しいと」

ざわっ

……なに今の？ 若い頃の高畑先生と小さい頃の私？

『幸せに暮らすのです。お姫様、全てを忘れて……ね』

京都で見せてもらったネギのお父さんの写真のオジサマもいた……。

『……幸せになりな嬢ちゃん』

や……嫌……。

「無理に思いだす必要はございません。思い出しても辛いだけ。それはパンドラの箱の様に希望が残っていることも無い記憶の箱でございます。幸せになりますか？ 命を賭けて不幸の海へと沈みますか？」

「私は……幸せに……なりたいです」

それが誰かも思いたせないけど、きっと私にとって大切な人達。だから信じられる。前田先生が言ってる事は本当だって、私は誰かに願われた幸せを手に入れなきゃいけないのかもしれない。魔法を忘れ、魔法に関わらず、幸せに……。

……。

あれ？ 私、どうして女子寮前の広場に？

あ、そうか……。高畑先生に告白するために学園祭に誘おうとしてたんだっけ。緊張しすぎて眠っちゃったのかな？ ん？ 緊張し過ぎると眠っちゃうのかな？

あ、もうこんな時間？

確か、今日は泊まり込みでお化け屋敷の準備をしないと……。

私は時間も無い事に気付いて携帯を取り出し、登録されているアドレスから『高畑先生』を選び通話のボタンを押した。

「あっ……た、たた高畑先生ですか？ わ、私です。ハイ、アスナです……。いえ、はい。あの……学園祭なんですけど……先生の

予定は？」

S i d e o u t

ガチャ

「ただいま戻りました」

「ああ……時間も余裕があるな。  
じゃ、行くぞ。お前の所為で遅れた分もあるんだからな」

どこに出かけていたか知らないが、前田が部屋に帰って来た。  
今日は泊まり込みで作業しないと終わらない。  
今日は学園祭の前々日。時間は夜8時を回ったところだ。

「一応確認するけどよ。お前、自分の役割分かってるよな？」

「はい心得ております。準備の手伝いでございます」

よし、いつもこうやって真面目に返事すりゃあいいのにな。



「それから、お嬢様のお世話でございます。そして行く行くは……」

「付けたすな！ 行く行くはなんだ！！ はあ……面倒臭えな……」

お化け屋敷の状態としては、入口とゾンビ。それから内装が2割ぐらいしか終わってねえ。学園祭前日も徹夜してとか、徹夜2連発だけは避けたい。メイドカフェならもっと楽に指示出しも出来るが……。

教室に辿り着くと、他のクラスも結構徹夜して作業している。サワサワ ヒソヒソ と声飛び交う。

「トンカチ気を付けて、音立てないでよ」

「無理……ッ」

「うふふふ、忍び込んで泊まり込みってなんかワクワクするね」

しねーっつの！ ねみーよっ！

私はペンライトを啜えながら作業を進めて行く。

「うう……泊まり込みは前日以外は禁止ですのに。3-Aの委員長ともあるう私がこんな規則破りを……」

委員長は嘆いているが、仕方ねーだろ間にあわねーんだから。

しかし、あの子供教師はいねーのか。人手が欲しい時にいねーな。

「つーか最近見ねーな。英語も前田がやってるし……辞めるのか？  
……まさかな。まあどっちでもいーけどな。」

「ああでも前田は手伝ってくれますのね。……前田と夜遅くまで一緒に……朝まで……前田、そろそろベッドに」

「うわっ 委員長が暴走しかけてる」

「申し訳ございませんあやか様。教室に用意しましたベッドには既にエビゾーを配置済みでございます」

お前も答えてんじゃねーよ。

「(来たよ！ 新田！)」

「(サンキュー！、みんな隠れる！)」

隣のクラスの奴が知らせてくれる。

私達は一斉に立て看板などの陰に隠れた。

コツコツコツコツ……

新田が来た。懐中電灯の光が教室内を照らして行く。

「(おわっ 長谷川もう少し詰めて)」

グイッ

「(ちよっ ま……あ)」

とすっ

「(あ、悪い。バランスを崩しちまっ……)」

「(ああ、お嬢様が私の胸に飛び込んでくる日がこよつとは……)」

なっ!?! 前田……!?!

だきっ

「(ッ!?!?!?)」

「(幸せでござります)」

ぎゅっ

「(は、放せよ……おいつ)」

「(しっ……お嬢様。お静かに、敵はまだ近くにあります)」

「(何の敵だ!?!)」

「よし、行った。みんな作業再開」

「……っ！ 千雨さんドサクサに紛れて何をそんな嬉しハズかし  
ハプニングを……代わって下さい！！」

「いーんちょ 声でかいよっ」

どくっどくっどくっどくっ……

ビックリしただけ、ビックリしただけ……。

落ち着け、落ち着け……。

「もう少しで何かが出せる気がしたのですが……」

「何を出す気だったんだ!？」

「長谷川も声デカい」

早朝。学園祭の前日だ。

これなら今日は徹夜しなくて大丈夫だろう。

クラスの何人かは部活の手伝いの方へと消えて行った。

「徹夜明けで元気だなーあいつら」

「お疲れですね。そんな時はコチラ。【ドーピングコンソメスープ・  
お味噌味】コチラをプスツとして頂きますと……」

「しねーよ。コンソメで味噌ってなんだよ」

「左様でございますか？ では、栄養ドリンクなど如何でしょうか？」

「ああ、それなら貰う……【リポビタミンM】って……Dじゃねーのか？」

「御安心くださいませ、M属性になるという意味では無く、前田のMでございます。どちらにしてもお嬢様は既にE……コホンッどござい」

「……まあ良いけどよ。いや！ よくねー！ 眼を光らせるな！」

「左様でございますか」

何をがっかりしてるんだよ……。

「あー前田先生！ 先生は学園祭予定あります？」

「これは和泉さん。基本的にはお嬢様のお傍にいますが？」

いなくていいんだけどな。私は栄養ドリンクを開けて飲んだ。

「そっかー。じゃあ長谷川は前田先生に告白するの？」

「ブーツ!！」

「はい! お嬢様の毒霧攻撃出ましたー!」

「違いーだろ!！」

「じほつじほつ! な、何で告白しなきゃいけないーんだよ……じほつ」

「あ、コレ知らない?」

和泉が持っていたのは【麻帆良スポーツ】という新聞。通称：麻帆良スポ。怪しいネタが多く、この新聞の記事を本気で信じてる奴はどんだけいることやら……。

『世界樹伝説は真実? 22年に一度、その真の力が発現する……。学園七不思議研究会調べ』と、書かれた欄を指す和泉は興味有り気に私の顔を覗き込んでくる。

世界樹伝説ってーのは、あれだ。古いギャルゲーにあった様な設定で、伝説の木の下で告白すると叶うっていうアレだ。何故か麻帆良学園の世界樹もソレと同じ伝説っつーか、デマがあったりする。

「アホか、こんなの信じる奴が……」

「ムムム……こ、この記事は本当ですよ!？」

あぶねーのがいたよ。

「委員長、信じるなよ。デマに決まってるだろ？」

「そ、そんな事言つて千雨さん！」

前田に告白して一人占めするつもりですわね!？」

前田は私が嘔き出してしまい汚した壁を磨いていた。

「ふざけんな、何で私がコイツを!! お前もなんとか言え!!！」

「はい。私はお嬢様のことしか考えておりません！」

「そーじゃねーだろ!!！」

「くっ、負けませんわよー!!！」

「あわわわわ、私も参加していいーデスクかー!？」

転校生の相坂も乱入してきやがった。

「これ以上話をややこしくするなーっ!!！」

第14話「学園祭の準備でございます」(後書き)

感想は随時受付中でございます。

ネタ・アイディアも募集中でございます。

感想があると書く気力・自信につながります。

あなたの一言でフリスタと前田が変わって行きます。

えっしゅ (爆)



第15話「明日は学園祭です」(前書き)

学園祭編には入っているけど、学園祭は始まっていない毘!

## 第15話「明日は学園祭でいじめます」

S i d e    ネギ

『最近のアンタ酷いわよ？』

先生の仕事、ほとんど前田先生に任せつきりじゃない』

そうアスナさんに言われたのはいつだっただろうか？

僕の目の前には仮契約のカードがある。今までに仮契約をしたのは3人。効果が切れたカードは3枚。そう、遂にアスナさんの仮契約も切れてしまった。アスナさんもこのかさんに続く様に寮を出た。何も教えてくれなかったけど、魔法に関わるのはもう止めるって言った。魔法に関わらない方が良いのは分かる。でも、何度も助けてくれたのに、何も言わずに避けられるようになるなんて……。

学校にもあまり行ってないな……行っても新田先生に怒られるし……それに誰も呼びに来たりしないから良いのかもしれない。前田先生がいるもんね。

ぐ……

お腹減ったな。

でも、何かを食べるのも、食べるモノを用意するのも面倒だな……。ついこの間まではこのかさんがやってくれて、このかさんがいなくなっただけからはアスナさんがフレークとか簡単なモノを用意してくれ

てた。今は、僕しかない。

魔法の師匠は結局まだ見つからない。いや正確にはタカミチに断られてからはもう一人で頑張るしかないか。って思った。一応エヴァンジェリンさんにもう一度だけお願いしに行ったけど、問答無用で投げられた。前田先生と話してたから邪魔しちゃったかな……。

「……あ、前田先生？ そうだよ！ 前田先生がいるじゃないか！」

エヴァンジェリンさんと初めて戦った時も飛んでたし、高度な転移魔法も使ってた。僕のお父さんの事も知ってるみたいだし。魔法に一般人を関わらせるのは避ける人だったみたいけど、今の僕なら誰とも契約してないし、魔法と関わった人は今回に関しては都合よく僕を避けてる。

「おかえりなさいませお嬢様……申し訳ございませんネギ先生。当店【人生のデメリット】は女性のみのお店。また女性同伴での入店とさせていただきます。男性の方だけです……」

執事喫茶。【人生のデメリット】

学校が終わると前田先生はここにいるって聞いて、新田先生から指導を受けた後に、僕は店に来た。店に着くまでに1時間もかかったけど、結局探し始めた場所にあった。どうして見つからなかったん

だろう？　つと、それよりも今は……。

「あ、あの違うんです。ぼ、僕……僕にまほ……！」

「前田くおかわり」

「私もだ」

「はい、お嬢様　エヴァンジェリンさん。前田汁のおかわりでございますね。少々お待ちください」

「メニューだと【前田特製ジュース】って書いてあんだけど！？」

「……そう言う訳でございます」

「どう言う訳だ！！」

……む？　ボーヤじゃないか。学校を辞めたかと思っただぞ？」

エヴァンジェリンさんが僕を目を細めて睨んでくる。やっぱり前田先生と親しいんだ。だとしたら前田先生は少なくともタカミチぐらい強いのかな？　エヴァンジェリンさんの従者じゃないって言うてたもんね。

「エヴァンジェリンさん……どうしてここに？」

「はっ、ここは店だぞ？　それにこの執事の腕は確かだ。まあ口からは意味不明な事ばかりだが……。学校帰りに目の前の超包子が満員なら来ても良いだろう？　ボーヤこそ何しに来た？　学校にも最近は来ないじゃないか。教師の仕事も出来ないなら国に帰った方が

良いんじゃないか？」

「う……そ、それは……」

「エヴァンジェリンさん。担任の方にソレはいけません。卒業に響きますよ？」

「わ、分かった。……ふう……悪かったなボーヤ」

「はい、大変結構でございます」

卒業？ 卒業してもエヴァンジェリンさんは呪いがあるから意味がないんじゃない？ あ、でも、今僕を庇ってくれた？ やっぱ前田先生なら。

「ネギ先生」

「は、はい……」

「（魔法に関わるお話でしたらお嬢様もおりますので別の日にして下さいませ）」

「で、でも……。そもそも、どうして長谷川さんが前田先生の【お嬢様】何ですか？ 前田先生なら長谷川さんなんて必要ないんじゃない……」

僕は何気ない疑問を口にした。

そう、それがいけなかった。

ガシッ！

「今のは聞き捨てなりません ネギ先生。私にとってお嬢様は絶対のお方です。それを不要と語るのは他人であるネギ先生に言われる筋合いはございません。ご訂正をお願い致します」

「あ、あう………」

「お、おい前田！？ あ、相手は子供だろ！？ 担任の仕事が負担になって怒ってるのか！？ な、なあ、その手を放してやれよ………な？」

長谷川さんは話しを聞いていた訳では無く、僕に掴みかかった前田先生を止めようとする。僕は固まっていることしか出来ない。

……スッ

「失礼いたしました。しかしネギ先生。踏み入れてはならない領域というモノがございます。本日はお引き取り下さいませ」

パタンッ

あ、汗が止まらない。本気で殺す気だった？

京都で会ったフェイトの比じゃ無かったかもしれない。

今のは僕が悪かったかも知れないけど、前田先生はどうして長谷川

さんを……。

Side out

あー……マジでビビった。

あんな前田初めて見たぞ……ましてや10歳のガキに掴みかかるなんて。

「ま、前田？ その……まだ怒ってるか……？」

「お嬢様。微塵も怒っておりません。今でしたらイージス艦を指先一つでダウンさせる自信がございますが、大丈夫でございます」

「め、メチャクチャ怒ってるじゃねーか！ お、お前が怒るなんて……初めて見たぞ？ 教師って大変なのか？ ストレスとか……やっぱり、3-Aは特殊だから……」

「いえ、大変なのは心でございます。

日々募るこの想い……誰にも止められません」

……そ、そんなに溜め込んでたのか。教師って精神的に来るってテレビとかでもたまにやってるしな。

「お嬢様への愛が止まりません！！ ああ！ こんなに近くにいると言つのに！！ ああ、ペロペロしとっございます！！ しかしお嬢様には悟られてはいけないこの気持ち！ 伝わってはならないこの気持ち！！ 執事の前田の葛藤は続くのでございました」

ズルッ

「私の心配した気持ちを返せ！！ ガンガン悟られてるじゃねーか！！ 物語風に語ってんじゃねーよ。ったく……その……何て言うかよ……マジで大変なら相談ぐらいしろよ？ 私じゃ何も解決できないかも知れねーけど、聞くだけなら出来るからよ……」

「……」

ん？

何だ？ 新しいリアクションだな？ 少し止まったぞコイツ？

「お嬢様が私を心配してくれていらっしやいます！！ 好きになっ  
ていてございます！！ 好感度ポイントが溜まっていております  
！！ ラブラブになっ……！！」

ゴスッ

「失礼いたしました。どうぞ、イチゴのミルフィーユでございます」



「ああ、コレ食ったら先に帰ってるからな」

「かしこまりました」

ふー、いつもの前田だな。

ストレスじゃないとしたら、子供先生にキレる要因って何だ？

……例えば、例えばだ。あの子供教師もおかしい一面を見せる時があった。

くしゃみしたら神楽坂の制服が脱げたり、いきなり近くにいた連中が子供教師に尽くし始めたり、ドッジボールの時も高等部のユニフォームが破けたり……。あーダメだ。思い出しただけで異常性が高過ぎる。『変態子供教師です』て言われた方が納得しやすい。

前田も京都の時とかはもう異常と言えた。

そう言う繋がりがあるのか？ 京都であった前田の異常ともいえる動き。

飛び降りたり、光ったり、ロープを垂らしてすぐに背後に回っていたり。

何て言うのか……超能力的な……馬鹿らしいか こんな考え……。

「……………」

「な、何だよ？」

エヴァンジェリンは頬杖つきながら私を眺めている。

私の後ろの方に飾ってある邪神モッコスの仮面ではなく私を見てい

る。  
つーか、もうこの仮面には去年の鬼のイメージしか湧いてこねーよ。エヴァンジェリンは私を眺めながら、感情を表に出さぬように、と言うよりも何気なくといった感じで口を開く。

「いやなに、どうしてお前なのか。私も気にはなっているのだがな」  
「どうして私なのか？ 何の話だよ？」

「お嬢様申し訳ございません。私、夜8時からの番組を録画するのを忘れておりました。急げば間に合うかもしれないのですが……お願いできませんでしょうか？」

前田は思い出したように私にそう頼んできた。  
コイツでも何かを忘れる事ってあるんだな。  
私は時計を見ながら答えた。

「ああ……何チャンド？」

「6チャンネルでございます」

「本当にギリギリだな。先に帰ってる。あー荷物は任せた」

「かしこまりました。よろしくお願い致します」

カランコロンカラン

エヴァンジェリンが言っていたのは何だったんだろう？

私はそんな疑問を思い出す事もせず女子寮に通じる桜並木を走った。

寮に着き、自分の部屋に入り、靴も揃えずに脱ぎ散らかし、  
すぐさまレコーダーを操作する。時間は19時59分。

「ふう〜間に合ったかあ……6チャンで……って予約してあるじゃ  
ねーかよ……」

そして、ちょうど番組が始まる。

前田のやつ、何を撮りたかったんだ？

S i d e    エヴァンジェリン

「本当にギリギリだな。先に帰ってる。あー荷物は任せた」

「かしこまりました。よろしくお願い致します」

カランコロンカラン

窓の外を長谷川千雨は駆けて行く。

「ふふふ、お前のお嬢様は可愛げがあるな。最初の頃なら『何で私が……』と断られていたんじゃないか？」

「お嬢様はお優しい方でございますから」

私は食後のデザートをパクつきながら前田を見る。

「その様な目で見られても、私の身体はお嬢様だけのもので……」

「誰がそんな事を言った！ ふんっ……何故、帰らせた？」

「逆に問いましょう。何故巻き込もうとされたのですか？」

「巻き込む？ ああ、そう言う事か。そのつもりはなかったが、すまなかったな。しかしそれだと大きな疑問が残る。お前が長谷川千雨という小娘にこだわる理由は何だ？」

一般人で魔法は使えない。魔法を知らない。日常会話や思考から察するに3-Aという異質なクラスに呆れ、現実を求める節がある。そんな長谷川千雨。それを『魔法に関わらせるな、巻き込むな』と

目の前の執事は言う。これほどまでに長谷川千雨にこだわるこの執事は、ハッキリ言って正反対の存在だ。

異常とも言える程の魔力・知識量。ふざけていながらも的確な状況判断に実行力。この世界からしたら非日常が当たり前の世界から来たであろう存在の執事。……魔法世界から来たと言つのは私の推測の域を出ないが。

「……エヴァンジェリンさん」

「何だ？」

目の前の執事はグラスを磨く手を止めて少し視線を落としている。ここまでまともになるとはな……、余程の理由が聞けるのだろう。

「……嫉妬でございますか？」

「……は？」

「お嬢様だけではなく、私も見て！」というところでございますか！？ 『私にもこだわって！』ということではございませうか！？ まだ諦めていらっしやらなかったのですね？ まさかお嬢様だけで無くエヴァンジェリンさんまでも私を好きになっておられるとは……。しかし！ 何度も申し上げますが、私とあなたは教師と生徒！ 前田ポイント（ ）をいくら貯めようとも、この壁は決して……！

「L（L知ってるか？ 前田は、嘘しかつかない。私はMでございます）」

「アホかーッ！！」

結局いつもと同じではないか！

カランコロんカラン

「マスター、遅くなり申し訳ありません。超包子の片づけが……あ」

前田の店に来た茶々丸が見たのは、  
私がカウンター越しに前田の胸元に掴み掛かっているところだった。

「邪魔が入ってしまいましたね。続きは学園祭の誰もいない保健室  
で……」

「ま、マスターをよろしくお願いします」

「待て！ 前にもあっただろうこの展開！！ 戻ってこい茶々丸！  
！ おい！ 話を聞けーッ！！」

カランコロんカラン

「……ヤレヤレでございますね」

「誰の所為だ！！」

ジャジャジャーンジャンジャンジャー  
チャンチャンチャカチャンチャカチャカチャン  
『風雲児！ 人斬り鍋將軍！！ ぶらり途中下車にて候』

三味線や尺八と言った様々な和風な楽器の音が流れ番組は始まった。  
はあ〜時代劇かよ……。ん？ 途中下車？

【第7話：我慢は良くない。解き放て！】

10分後。

<お主、世田谷の駅で見かけた……。そうか、刺客であったか！>  
<ふっ、バテては仕方ない、いざ尋常に都営浅草線で……。！>  
<待つが良い！ 双方Suicaをしまうのだ。今回は東海道新幹  
線に乗ってもらおう！>

更に10分後。

< くな！ 私に指定席に乗れと申すか！？ >

< くくく、私は一向に構わぬぞ？ >

< 番組予算の問題でグリーン車は駄目だったのだ。指定席で勝負じや！！ >

更に更に10分後。

< お主！ 指定席でひじ掛けを奪うとは！！ この外道め！ >

< ふはは！ 何を躊躇う必要があった。このひじ掛けは目的地までワシのモノよ。フハハハハ！ >

終了時刻5分前。

< ぐ、ぐむ…… ひじ掛けはワシのだからな！？ 取るでないぞ！？ >

< さつさとトイレに行くがよい。(ワシの差し入れしたお茶を何も考えずに飲みおって、哀れな刺客だったな) >

『次回！！ 第8話【俺は太陽の子！】すべからく見よ！！ シャ  
キーンッ  
』

エンディングのスタッフロールが流れていく。



……最後まで見ちまった。……これは何だ？　ワケが分からない。  
プロデューサーは？　監督は何を考えている？　何故誰も止めなかつた？　時代劇かと思いきや電車が出てくるし、番組予算を話すドラマって何だ！？　それに何なんだこの戦いは！！？　そして次回は番組が変わってるんじゃないか！？

ガチャ

「ただいま戻りました。ちょうど終わってしまったようですね。おや？　お嬢様、制服がシワになってしましますので、着替えの方をされた方がよろしいかと存じますが」

「あ、ああ……」

長谷川千雨は前田の方を振り向いた。

そして、その時に流れた

【特別監修：M A E D A・ヴァンデンバーグ・まさむね】  
というスタッフロールを見逃していた。

それが前田本人なのか、はたまた別人かと言われれば不明としか言えない。

見逃してしまっている以上、もちろん今回ソレを知る術も無く、その後のドラマ内容を見ることも無いため、闇に葬られることになる。

S i d e 超 鈴音

学園長達の会話を傍受し、世界樹の魔力が今年に早まったということが分かったネ。準備は滞りなく進んでいるネ。多少の混乱はあるかもダケど、世界を救うためネ。

そして、私は今、下手を打って目下逃走中アルね……。

ジジッ……。

「くっ 迷彩を簡単に破られた。マズイかな……？」

バシッ！

まずい、落ちるアルネ……！

『ボン太くん。発進！』

「ふもっ！」

ぼすっ

……な、何やら柔らかいモノに抱えられて助かったアルね。

「ふもっ！ ふもるるっふもっ！」

「え、えっと何アルカ？ 落ちてきて済まなかったアル」

「ボン太くんは別に怒っているわけではございません。『大丈夫だったか？ 女には世界はいつも厳しい。漢の背中に隠れているんだな』と言っております」

前田先生アルね。と言つか翻訳出来たのは何でアルカ？

「ふもっ！」

着グルミはそう言っ飛んでいく。飛んで？

「な、何て言っていたアルカ？」

「『次回もよろしく！』 だそうですね」

……ヒーロー番組みたいアルね。

「おっと、少し下がっててくださいませ」

前田先生はそう言っ魔法の矢を空に向けて放つ、同時に花火も上

がり目立ちはしない。その矢は追手の影を仕留めていた。

数分後。

「前田先生。超鈴音はずっと一緒に？」

「そうですね……。」

かれこれ1時間ほどは見かけてから時間が経っておりますかね？」

「そうですね……。」

魔法先生はその言葉を信じつつも私から視線を外さずに去って行く。

「う、嘘言つて良かったアルカ？」

「私の大事な生徒ですから助けるのは当たり前でございます。それに嘘は申しておりませんので。」

嘘を言っていない？ …… 1時間前から私を目視していたアルカ？

ステルス迷彩も間違いないかかっていたアルカが……。まさかネ。

「はっはっは、前田先生は嘘しかつかないアルね。ところでさっきの着ぐるみ君は？ 大丈夫だたアルかね？」

「飛行ユニットも付いたかなり高価なパワードスーツですから大丈夫

夫でしょう」

パワードスーツ……。大学部の造ったものではないネ。一体誰が……？

「おとと、お礼をさせて欲しいね。受け取ってもらえるかな？ 前田先生が魔法使いなら、魔力次第で有効に使えると思うネ」

「懐中時計でございますか。ありがたく頂戴します。では頂いてばかりでも悪いのでコチラを差し上げましょう」

そう言つて前田先生は何かのスイッチを渡してくるネ。

「何のスイッチかな？」

「学園祭の最終日開始時に押してみると良いでしょう。凄く盛大な花火が上がりますので」

「そ、そんな大事なスイッチを生徒に渡して良いアルか!？」

「生徒の手で始めてこそその学園祭でございます。最終日ですがね」

「うーん……。やっぱり貰えないアルね。前田先生が押すと良いネ」

「左様でございますか？ 申し訳ない気持ちでいっぱいでございますね」

照れ笑いを浮かべて前田先生はスイッチを懐にしまった。

「あーいたいた。」

前田、前夜祭が始まるぞ〜お前が行きたいって言ったんだろぅが」

主人の長谷川さんも来たネ。

私は礼を言っつてその場を後にしたネ。

明日は遂に学園祭が始まるネ。

前田先生は魔法先生だから仲間は難しいかもしれないアルが……。私の目的を知つて気が変わつてくれると嬉しいネ。

S i d e o u t

「お嬢様ご覧ください。世界樹が輝いております」

「ああ、何で光るんだかな〜」

いつもは最終日に光らせている世界樹を今回は学園祭の前日から光らせている。どうせ樹に何か仕込んでるんだろぅけどな。

「明日からの学園祭。楽しみでございますね。いつお嬢様から告白されても問題ないようにと考えておりますが、実際に告白されるとなると慌ててしまうかと思えますね」

「しねーよ。安心したか？ される前提で話してんじゃねーよ」

まあ言っても無駄だろうけどな。

私は光る世界樹を眺めながら、

この後の学園祭に起こる事なんて何も考えてなかったんだ。

第15話「明日は学園祭でございます」(後書き)

感想は随時受付中でございます。

次回からは遂に学園祭が始まります。



第16話「そして学園祭でございます」（前書き）

最近更新ペースが良さげ。でもただ休みの日が集中しただけ。  
もうすぐまた遅くなるさ！！

さてさて、もうすぐ夏ですね。一足先にお化け屋敷を楽しみませんか？

突っ込みどころ満載の学園祭！（いつもっすかね？）スタート！  
では、どうぞ。

## 第16話「そして学園祭でございます」

『只今より、第78回 麻帆良祭を開催します!』』

拍手と共に遂に学園祭が始まった。

しかし、何故私はここにいるんだろう？

前を見れば巨大な恐竜が歩き、後ろを見ればメカっぽいものから着ぐるみまで多種揃っている。そして、私の周りには……。

「ふも〜ふもふもふもっふも〜」

「「「「「ふも〜ふもふもふもっふも〜」「「「「「

「ふもっふもっ!」

「「「「「ふもっふもっ!」「「「「「

おかしい……どう考えてもおかしい。

朝起きたら学園祭の当日だったのは分かる。

だが何故、このネズミだか熊だか分からない人形共と歩かなきゃいけないんだ……。

「お嬢様はやられないのですか? ふーもーふもふも……」

「やらねーよ」

「お〜!? 長谷川じゃん! パレード参加してんの?」

「ああ……」

訳も分からずな。

「まあ良いけどお化け屋敷の交代時間には来てよね」

「分かってる……」

「お嬢様。パレード終了時刻に1時間ほど遊び歩きまして戻るとちよつと良いぐらいの時間でございます」

計ってるのかよ。

「朝飯も食ってないんだけど？」

「こんな事もあるつかと！ どうぞ」

前田が取り出したのは、サンドイッチとコーヒーだった。

「いや、ありがたいんだけどよ。今お前その着グルミから取り出さなかつたか？ その背負われてる大きいリュックから。中の人のかじゃ……」

「最後尾のボン太くんだけは補給専用なのでございます。気力は10下がりますが、弾薬エネルギー共にMAXまで回復いたします。補給したボン太くんもレベルアップしますし……」

何の話をしてるんだ……コイツ等はボン太くんって名前なのか。先頭の奴だけオレンジ色で、他のがネズミ色なのは何か意味があるのか？ まあどーでも良いけどよ。

もしかもしゃ……美味い。

Side 保健室のポニテ先生

「へ〜。凝った作りをしてるね〜。中等部も中々やるわね〜」

「あ、先生どうです？ 今なら割と空いてますよ？」

私の名前は……あ、聞いてない？

まあ麻帆良学園で保健の先生をやってるポニテ（仮）よ。

巡回しながら怪我人とかも見てるんだけど、大学のサバイバル同好会が率先して適切な処置をするから仕事も無いわけよ。だからこうして生徒達の活躍に目を向けているわけだけど。お化け屋敷ね〜。何年ぶりかしら？

順番が来て中に通されると、そこからは3つの部屋に分かれるようだ。怖さは3段階。さてどれにするべきか……。ゴシック？ 日本  
の怪談？ それとも一番怖そうなヤツ？

どんっ！

「僕こつち〜！」

「あ、すみません！ この子ったら……あ、待って待って！ もうっ！」

つと、後ろで待っているはずの親子が入って来てしまったようだ。私は先を譲って、もう少し検討しようと思ったのだが……。

カタンッ

「え？」

私が背中を預けたのは第4の扉で、そこが開いてしまった。そう、これは私のトラウマになった話である。

ゴツッ

「あいたたたた……え？ ここは……？」

見渡す限り真っ暗な廊下。いや、非常灯だけが点いている。薄暗い廊下をとりあえず進む。戻れば良いだろうって？ そのドアが消えてたら進むしかないでしょう？

今思えば噂の天才って言われている超さんがいるクラスだ。こういう事が出来ても不思議じゃない。天才って言うのは末恐ろしいわね本当に。

一つ目の扉を見つける。私はそこに入ると割と明るい部屋だ。そこにはタイプライターがあり、『記録したければどうぞ』と書いてある。

何を記録するって言うのよ？

「えーとじゃあ……（カシャカシャカシャカシャカシャ……）」

静かな部屋にタイプライターの打つ音だけが響く。

「……これで良いか。これぐらいなら別に良いわよね？」

部屋を後にして出口を探す。

うわっすごっ！ 階段とかもある。本当に3-Aのクラス内？

パリーンッ！

バサッバサッバサッ！！

「えっ！？ カラスがガラスを突き破って……！？

うわきゃーっ！！ デカい蜘蛛！？（ガシャーンッ！）こ、今度

は何！？

『アアアアアアッ！』

「き、キヤーーーーッ！……」

走る！ とにかく走る！ ゾンビだ！ マジでゾンビだ……！

ドチャッ

うえ〜、何か湿ったモノにぶつかった〜……。

『グウウウウウ………』

「デカイゾンビ!?!」

『ガアアアアアツ!?!』

「嫌アアアアアアアアツ!?!」

「伏せて下さいませ」

私の進行方向からそう指示する声が出た。誰だか知らないけど助けてーっ!!!

私はヘッドスライディングするように前のめりに飛んだ。

ドガンッ!!!

ば、爆発した?

私は顔を上げると大きな金属製の筒を肩に担いだ執事がいた。女性教員と言わず、女子生徒、大学部にまで人気と名高い執事の前田先生だ。

「ま、前田先生!?! あ、アレは何なんですか!?! それはなんですか!?!」

「はい、前田でございます。タイラントでございます。ロケットラ

ンチャーでございます。Rocket Launcherでございます」

え、何で最後の2回言ったの？ しかも2回目には発音良く。

「よもや一人目のお客様があなただとは思ってもありませんでした」

あ、じゃあ普通にお化け屋敷の一環なんだ。危うく現実世界がバイオハザード起こしたかと錯覚した。何てリアルな……。まあ落ち着いたわ。

『アアアアアツ！』

「ひいつー!!」

『あーお兄ちゃん。また違う女の人といる!』

…………え？

何今の声？ 凄く可愛い声…………。

「エビゾーの妹でございます。一応設定では義理の妹なので問題はございません」

「何の問題ですか!？ エビゾーって!？」

「ところで先生。タイプライターで書いた内容なのですが…………」

「あっ、そ、それは…………そのお願いできますか？」



【名前と呼ばれますように。ついでに再登場も希望】

「かしこまりました。『ポニテ先生』」

「それ違います!」

「これは失礼いたしました『最終回：ポニテ先生』」

「出番もう無し!?!」

その後、数分して何とか最後のドアを見つけてることが出来た。もしこれがまた違うドアだったらと思うとゾツとしてしまう。

ガチャ……バタンツ

「で、出れた……し、死ぬかと思った……」

「お疲れさまでした。

出番はもう無いかと思えますので、速やかに掃けて下さい」

「酷っ!」

そう、これが私のトラウマ。もう私の出番は無かったのです。

Side out

S i d e 龍宮真名

「フー……」

スコープを覗き、拡大表示される標的をみる。

引き金を一度引く。すると一人動かなくなる。まるで引き金と糸で繋がっている人形のように、引き金を引くと糸が切れていく。

これで7人目か……。

くだらない仕事の割に報酬が高くて喜ばしいが、こつも告白生徒が多いと面倒ではあるな。

ライフルから身体を離し、私は再度探査を始める。  
先ほどからこの繰り返しだ。

ふむ……少し落ち着いたか。

「世界樹前で告白しようとする狙撃されるといっつも噂でも立ったか

な？」

「それは仕事が楽になる噂でございますね」

びくっ！

「ま、前田先生か……驚かさないうで欲しいね。登ってくる音は聞こえなかったけど？ それに気配も……」

「騒がしいと生徒を指摘する教師が音を立ててはいけないかと思いますか？」

それは行き過ぎな教師だね。

この人は本当に謎だよ。

「今日はお嬢様は良いのかな？」

「ええ、大丈夫でございます。少し戻りすぎまして登録が終わり暇を持って余していたのでございます」

戻りすぎ？ また何か起こしているようだね。

「しかし龍宮さんよろしいのですか？ 12時の方角、距離423メートル地点。1時の方角320メートル地点。4時の方角105メートル地点。最後の対象は陰で見えない場所でございますが、告白生徒が出そうですね？」

「はは、冗談を……（ピピピピッ）……機械よりも正確なレーダーでも完備しているのかな？」

私は全てが見える地点に飛び、高台から狙撃する。

ドンッ！ ガシヤコッ！

ドンッ！ ガシヤコッ！

ドンッ！ ガシヤコッ！

「（パチパチパチッ）お見事」

いや、だから音無し気配無しで後ろに立たれると困るんだが……。いつの間について来てたんだ？

「しかし、ライフル先端を屋根の外に出しての狙撃は如何なものでしょうか？ 緊急でしたし、誰にも気付かれないかとは思いますがね」

「むっ……仕事に手を抜いたつもりはなかったが気を付けよう。忠告ありがとうございます」

「いえいえ。おや、あれは……借りますね」

「あ、先生？」

前田先生はライフルを構えて狙撃して倒れた人を心配している人に銃口を向けた。告白されていた人だ。保健医の先生じゃないか？ 何だ？ レーダーにも反応は無いが……？

ドンッ！ ……ガシヤコッ！

撃った……。しかも命中した。狙撃も出来るのか……。

「ふう、出番を増やそうとは侮れない方でしたね。ありがとうございました。おや？ 10名近く一斉告白が行われそうですね。」

えー……？

ピピピピピッ

本当に来た。

私は反応のある広場に飛ぶ。

魔眼発動！ これで絶対に外さん！

ドガガガガガガガガガガガッ！！

「映画の撮影です。お気になさらずにー！」

「……おお……（パチパチパチパチ……）」

「あれ……龍宮君？ どうしたんだいこんなところで……？」

「せ、芹沢部長」

「おやおや、以前のパートナーのソックリさんでございますね。さあ盛り上がってまいりましたー！」

ど、どこまで知っているんだこの執事は……。

「丁度良かった龍宮君。今日はこの場所で君に話したいコトがあったんだ」

「……………!?!」

「実は俺……………君のコトを……………」

「……………」

ふう……………少し辛いな。だが……………。

「……………ありがとうございます先輩、お気持ちだけ受け取っておきます」

「え」

ドンッ

「おおっと芹沢君ふつとんだ〜！ ガッツは足りていたが相手が悪い〜!」

「前田先生。私の戦場に男は無用だ。だから……………面白そうにムービー撮影は止めてくれないか？」

「クラスの皆さんに報告しようかと思ったのですが……………左様でございますか……………非常に残念です。おや？ 時間も頃合いの様ですね。では私はこれで」

「頼むからそのカメラは置いて行ってくれ!!」

パレードが終わり、前田に連れられて私は……

「って待て！ ソッチは……おいっ！ 前田！ 私は……！！」

「後悔先に立たず。そして、しない後悔よりも、する後悔でござい  
ます」

前田に連れて来られたのは、チェックはしていたが参加はしまいと  
考えていた【麻帆良祭？コスプレコンテスト】会場だった。自分の  
ホームページでも出るか悩んでいるとは書いたけどよ……。

「ほ、本当に勘弁してくれよ前田！ 頼むから！ おい！ 私の言  
う事なら何でも言う事聞くんじゃねーのかよ！！」

しかし、前田は私の手を放さない。

前田は歩き続ける。力強く引かれる手は痛くは無いが振りほどけな  
い。

そして、前田は振り返らずに口を開く。

「お嬢様。私はお嬢様の言う事を、それが正しいことであれば何でも聞きます。何でも願いを叶えてみせます。ですが誤った決断、間違ったことなどを聞き入れる訳にはまいりません。何でも言う事を聞くならば機械でも十分でございます」

「機械にしる生身にしろ執事はいらねーっての！！ どうしてなんだよ…… 委員長の執事やってれば良かっただろ……？ 何で私なんだよ？ ウチのクラスならもつと良いのが沢山いるだろ……？ 私みたいに写真補正して綺麗になるんじゃないやなくて、元から美肌で、顔も、スタイルも、性格も良い奴がいるだろ……？」

自然と私の声は沈んでいく。

出たとしてももう無理だ。テンションは底を打った。

前田は止まる。

私はホツとした。私の話を聞いてくれたからだ。しかし……そこは既に会場だった。

「私がついておりますお嬢様。絶対に大丈夫でございます」

「な、何を根拠に言ってるんだよ！！」

「お嬢様が信じて頂ければ全てが思いのままでございます。お嬢様は私を引き当てた60億分の1の存在。その運を、御自身を、私を信じて下さいませ」

『えー、時間になりましたのでコスプレコンテスト参加者登録を締め切らせて頂きます。参加者の方はバックステージにて待機して下さいませ』



さい。観覧の方はステージ前にお集まりください』

「し、締め切られちゃ仕方ねーよな。ははは、残念だったな……」

しかし前田は懐中時計を取り出し、時間を確認すると「少々お待ち下さいませ」と言って、人混みに向かって歩き始めた。

「あ、おい！？ ……何なんだよ？」

「お待たせいたしました」

「うおっ！ お前今、アツチに向かって歩いて……」

「登録が完了しました。さあ参りましょう」

は？ いや、ちょっと待てよ！ んなわけねーだろ！  
受付の人間はもういなくなってたじゃねーかよ！

私は何故か着替えさせられ、前田を隣に溜め息をついた。  
参加者じゃないのに勝手にバックステージ入って怒られんじゃねーのか？

数十分後。

『続きまして！ エントリーナンバー15番 噂の執事さんとお嬢

様コンビ！ キャラクターはビブリオン敵幹部【ビブリオ・ルーラ  
ンルージュ&オリジナル執事】の登場です！ ではどーぞ！』

マジかよ……。

「では行ってらっしゃいませ。どづぞ」

「いや、待……！」

トンッ

私はステージに一人押し出され、観衆の目を浴びる。

ざわざわ ざわざわ

「おいアレ」

「ちうちゃんじゃねーの？」

「ちうちゃーん！」

「う……？ あ…あの…その……」

ざわざわ ざわざわ……

「あ…うつ…私……す、すいませっ……」  
「ぐめんな…さ…い」

私は顔を両手で隠した。

ダメだ！ 絶対力才真っ赤になってる。やっぱり私、人前に出るの  
ダメなんだって！ ぐっ やべーよオイ！ 客引いてるよ！ で、  
でもキャラの台詞も何も出て来ねえ。マズイ、マズイって！ ちう  
のファンもかなり来てるハズなのに！

どうしようどうしよう。 なな なんとかしなきゃ。 部屋でモニタ  
ーに向かっているやっっている時はあんなにテンション上げられるのに人  
前に出るとどうしてこんな……。

遂に私は座りこんでしまった。

自分が震えてるのが分かる。 抑えようとしても止まらない。

「わたし……ご……ごめん……なさいっ……」

本物のちうがこんな情けない奴だって知られちゃったら……それも  
これもあのアホ執事の所為だ！ 前田が無理矢理……むりやり……  
前田……どうして私一人なんだよ……？

< くない後悔より、する後悔でございます >

前田……！ 助けろよ前田！！

コツコツコツ……

靴の足音と共に会場はざわめきを取り戻す。

そして……

「お待たせいたしました【ルーランルージュ様】お茶の時間でござ  
います。……おや？ 今日泣いていらっしやるのですか？ 毎日  
申し上げておりますが、お嬢様が悪を働かなければ、人と言つモノ  
は自らの悪を分かってくれないのです。お辛いでしようが、もう少  
し耐えて下さいませ……（ぎゅっ）私がついております。……いつ  
までも」

「す、すげー……」  
「……ワアアアアアアツ!!」「……」

私は前田に抱きしめられ、そのままステージから抱えられたまま掃けた。

『これは凄い!! 一つの劇を見ているかのようにでした!! ルーランルージュの悪に対する気持ちを深く表現した一つの劇! 会場もこれには大満足!! おおっとここで情報! 知っている方もいるかと思いますが、今のは【ちうのホームページ】でお馴染みのネットアイドルランキング1位のちう様でした! ……では続きましてエントリーナンバー』

### 【ボックスステージ】

「流石でございますお嬢様。嫌だ嫌だと言っていた割にはノリノリでのキャラ設定にすると、合わせるのに苦労しました」

「……分かってて言ってんだろっ?」

「何をでございますか?」

「(ドスッ!)……怖かったんだから……本当に……」

「……申し訳ございません。ですが、とても素敵でございました。いえ、今もこれからもとても素敵でございます。お嬢様」

「（ボスッ！）……うるせーよっ。……でも……一応礼は言っておく」

「はい、それがお嬢様らしいかと思えます」

「ふんっ」

『では優勝は満場一致で15番！ 執事の前田さんで決定です！！』

「……………ワーーーーッ！……………」

「全く……前田には敵わねーな……………」

私は前田に惜しめない拍手を……………っておい！！

「おかしいだろうが！！ 何でお前だけが優勝なんだよ！！？」

私はステージに上がり前田の胸倉を掴んだ。

「ああ、お嬢様とスキンシップ……………？」

『仲良いですね〜。コスプレ仲間というだけの関係では無く……………？』

「はい、もう少しで結婚を予定しております」

「嘘付けーっ!!」

私は正式に優勝トロフィーを貰い、カバンにしまった。ふと、通路に設置されている時計を見る。時刻は予想以上に進んでいて……。

「ま、前田！ お化け屋敷!!」

「そつでございますね。お化け屋敷で『きゃー前田私オバケ怖い』などと言って抱きつくお約束の時間でございますね」

「違うわアホ!! 何で私のセリフ棒読みだ！ クラスの出し物だよ!! 私を担当の時間だ!! あーやべえ！ もう30分も過ぎてるじゃねーか！ あー今からでも行かないと……」

「お嬢様、大丈夫でございます（カチツ）」

ポンっ……と、前田に肩に手を乗せられると、私は奇妙な感覚に瞬間襲われた。何と言ったらいいのか、全てが回ったかのような感覚だ。

「……っ！ 何が大丈夫なんだよ！ 時間！ やっぱりコスプレなんかに出なければ……!! ……あ、時間が……?」

前田は懐中時計を見ながら答える。

「時間を見間違えていたのではないですか？ まだ数十分は余裕が  
ございます。さあ何か食べ歩きながら戻る事にしましょう」

「ど、どーなってるんだ？」

### 【3 - A : お化け屋敷】

私は時計の見間違いとして認識し、クラスに向かった。  
うおっすげー行列だな。あれ？ 前田はどこに行った？ まあいい  
か。

一応ランクは3段階あって、

#### 全年齢対応の【ゴシックホラー】

恐怖度： かわいさ… ?度…

#### 15歳以上推奨の【日本の怪談】

恐怖度： かわいさ… ?度…

#### 18歳以上推奨の【学校の怖い話】

恐怖度： かわいさ… ?度…

私の担当するのは一番怖いランクの【学校の怖い話】だ。私はガラ  
スを叩いているだけで良いので楽な仕事だ。1つの教室だけでこれ  
だけの部屋が用意出来たのは天才・超 鈴音の科学力のおかげらし

い……あいつも相当の異常者だよな。大学行けば良いだろうがよ。

つと？ あれ？ 何だ？

「なあ明石、この隣の部屋ってなんだよ？」

「え？ あー、何か緊急追加とかで……あれ？ 誰が担当してるんだっけ？ おっと、いらっしやうい 長谷川準備準備！」

私は何も書かれてないドアを気にしながらも自分の役割に戻る事にした。

「ふむ、表札を忘れていましたね」

その執事は誰に言うでもなく【学校の怖い話】の隣の何も無い扉に表札をかけた。

覚悟があれば全年齢対応【人類絶滅直前級にゾンビだらけ】

恐怖度…

かわいさ…

？度…

MAED

A…



重火器扱える方 有利。 サバイバル知識のある方 有利。

「ふむ、これで間違えては入って来ることは無いでしょうし、入って頂ける勇気ある戦士達も入って来るでしょう。……おや？ 入りますか？ ふふふ、覚悟はよろしいですね？ では、どうぞ」

カチャ……ギイイイ……バタンツ！

そしてまた一人 また一人と、室内へと消えて行った。

第16話「そして学園祭でございます」（後書き）

感想は随時受付中でございます。

アイディア・ネタ・要望も聞ける範囲、ぶち込める範囲でぶち込んで行きます！

前田が執事らしい事を……。ふう……。何か熱いモノがこみ上げて……。あ、こない？ そうね。そうよね。

名前も知らない保健のポニテ先生。ネギま！の10巻で告白されるソレっぽい人を出してみた。多分美人さん。でも長続きしないタイプだと思われる。と、勝手に想定した。何を言われてもこの人だけは今回だけw

前田が例の時計を使い始めております。気にせず見守りましょう。えー……。

あと、ほとんど意味無い報告。第2話『少し過去の事でございます』で、最初に前田が出席を取ろうとするシーン。修正したけど、さよの事を『相坂』じゃなくて『相川』って言った。地味幽霊さよ坊ごめんなさい。

第17話「まほら武道会でございます」（前書き）

えー、この前田さん小説。魔法世界編に行くかどうか悩んでいましたが、

多岐にわたる理由により行かない事にしました。

まあ 始まりの魔法使いとか、

色々書きたいこともありましたが、この旧世界での千雨たんEND  
だけで行きます。と考え中。

では、学園祭もまだ序盤か……あれ？ でも魔法世界に行かないなら。これ終われば終わりになるのか。長いようで短かったな……さらば前田（まだ早い！）

あ、でも もしネタとかあって面白そうだったら続けるか考えてみますね。

ではとりあえず第17話どぞ。

## 第17話「まほら武道会でございます」

Side エヴァンジェリン

なんだ？ 学園祭が始まる前から多少は感じていたが、学園祭が始まってからと言うもの、見られている様な感じを強く受け始めた。魔力を解放して確認を取りたいが、魔法先生どもにバレると面倒だから私はそれを放っておくことにした。

学園祭1日目。夕方6時を過ぎた頃だった。

いつもの執事を見かけて声をかけた。

「前田じゃないか。どこに行くんだ？ お嬢様は良いのか？」

「これはエヴァンジェリンさん。お嬢様でしたらクラスの手伝いでございますね。私はコチラの方にいかなければなりませんので」

前田は【まほら武道会】と書かれているチラシを見せてくる。

「執事ガ 才嬢様放ツテ置イテ参加スルノカヨ？」

「何だ？ 賞金でも欲しいのか？」

「そう言う事にしておきましょう。お嬢様には無償で仕えておりますので、様々な面でお金は必要でございます。資産運用などで20年分は余裕でありますかね」

「スゲーナ。酒デモ奢ツテクレヨ」

「黙ってるチャチャゼロ。それだけ金があるなら参加の必要はないではないか。しかし一千万か。最近の学園祭では聞かない額だな」

「エヴァンジェリンさんも新しいヌイグルミでも欲しいのですか？」

「なら一千万もいらんだろつが！！　しかし、そうか武道会か……」

「興味がおありですか？」

少し前に　この前田のおかげで呪いも解けた。ジジイやタカミチ達　魔法先生にバレると面倒なのでバレない様にほとんど魔力はカットして今まで通りを演じているが……。

正直なところコイツに興味がある。まだ呪いの契約の絶対命令権が2つあるが、一向に使用してくる気配は無い。執事喫茶に誘ったりもしてくるし……。何を考えてるんだ？

「いや、まさかな。私が前田を好きになるなどということは……しかし、これが恋なのか？　私は長谷川千雨が羨ましいのか？　…

…前田！　私と付き合ってくれ！！　という感じでございますか？」

「……どう言っ感じだ……」

「ケケケ、御主人ノ声ソツクリダッタナ」

「ふん……興味があるのは間違いないがな。そうだ前田。私もその武道会に出ようじゃないか。もし私と戦う事になって、私が勝ったら真面目に全てを話してもらうぞ？ 私の質問に全て答える」

「ケケケ、一方的過ギルナ」

「良いですよ。では、私が勝った場合は」

「は？ 何を言ってるんだコイツは。  
何でお前がそうしないんだ？」

S i d e o u t

S i d e 小太郎

「は〜どこ行っても凄いやなモノばかりやな〜」

「小太郎はんはクラスの方は大丈夫なんか？」

「ああ格闘大会に出る言うたら見逃してくれたわ」

俺の解答に千草姉ちゃんが溜め息をつく。なんやねん？

「10万円ぐらいの賞金の格闘大会やなんてシヨボイらしいえ？」

「シヨボイて！？ 強いヤツおらへんの！？」

千草姉ちゃんが言うには、イベント事の賞金は100万円前後が妥当らしい。その分レベルも高い訳やけど。10万円の賞金だから弱小団体が主催しているとの事だった。

「がっかりした矢先のことやった。大会の会場に来たら【予選会会場の変更】という張り紙があったわ。電車で移動せなあかん場所に変更やなんて……せやけどもうとつくにエントリーしてもうたしやな……。」

「電車には乗れるか？ お金は足りるか？ 困ったらすぐに連絡するんやえ？ ウチはまだ見回りせなあかんから行けへんねやけど……ウチの子頼みますえネギ先生？」

「あ……はい」

「分かった分かったわ！ ……過保護過ぎんねん。なあネギ？」

さっきからずーっとついて来とるネギは元気が無い。

どないしたんやコイツ。

「まあエントリーは済んでもつてるからとりあえず行こうや」

「……うん」

でも着いた場所は凄い人混みやった。

「オイオイ！ ホンマにここか！？ 場所間違っへんか！？」

「格闘大会でございましたら合っていますよ」

前田の兄ちゃんを見つけた矢先にネギは俺の後ろに隠れた。  
何かあったんか？

「前田先生やないか。どないなつとんねん？」

「複数の格闘に関連する催し物をM & a m p ; A。つまり合体させ  
たわけでございます。ちなみに賞金も1千万円」

「い、一千万ーッ！？ 前田先生は何でおんねん？ 大会の運営と  
かか？」

「いえ、お嬢様の執事を無料奉仕し続けるための資金に充てさせて  
頂く為に、私も参加しようと思った次第でございます。まあ困って  
もないのですがね」



なら出んなや……。おっと入れる様になつたみたいやな。

『ようこそ！ 麻帆良生徒及び 学生及び 部外者の皆様！！ 復活した【まほら武道会】へ！！ 突然の告知に関わらずこれ程の人数が集まってくれたことを感謝します！！ 優勝賞金は1千万円！！ 伝統ある大会優勝の榮譽とこの賞金 見事その手に掴んで下さい！！！！』

【報道部部长】という腕章を付けた姉ちゃんが説明を始める。そして代わって主催者が話し始めるんやけど、アレってネギの生徒やなかったか？

『 飛び道具及び刃物の使用禁止！ ……そして呪文詠唱の禁止！！ この2点を守ればいかなる技を使用してもOKネ！！』

ひゅー。すげー事 言つたな。

「おや？ クーさん、龍宮さん、長瀬さんも出られるのですか？」

「あいあい」

「遊びの大会で1千万ならボロい儲けだからね」

「こんな大会は滅多にないアルよ」

「楓姉ちゃんも出るんか……相手にとって不足ないわ！」

「おい前田。私も出るのを忘れてないだろうな？」

げっ！ 真祖の……！！

「忘れてないですとも。楽しみにしておりますよ」

「……そうか」

でも魔力封じられ取るんならただの10歳の女の子やんな？

「エヴァンジェリンさんなら今はもう何も封じられておりませんか？ 全力全壊覚悟でお気をつけて」

……マジで？

「ネギ君達が出るなら僕も出てみようかな」

「た、タカミチも……？」

おおうでもこんだけ強そうな奴が出るんやったら来た甲斐あったわ。

S i d e o u t

Side ネギ

ダメだ。勝てる訳が無い。

エヴァンジェリンさんに、龍宮さん、楓さんにクー・フェイさん、それにタカミチ。戦う理由も無いじゃないか……。早めに倒されて、強い人がいたら弟子入りを頼んでみる事ぐらいしか出来ない。

『ああ、一つ言い忘れてるコトがあったネ。この大会が形骸化する前。事実上最後の大会となった25年前の優勝者は……。学園にフラリと現れた異国の子供。【ナギ・スプリングフィールド】を名乗る当時10歳の少年だった』

……！？ 父さんが……？

『この名前に聞き覚えのある者は……がんばるとイイネ』

父さんがこの大会で優勝を……。？ 僕と同じ齢で……。

「コタロー君！！ 僕出るよ！！」

「え！？ お、おういきなり元気になったな！？ って言うか当然やるが！！」

呪文詠唱がダメならギリギリのところまで、もしくは詠唱を先にして、遅延魔法にしておけば勝機はある。至近距離で出せば誤魔化せるだろう。

S i d e o u t

S i d e 謎のフードの人物

20名1組のバトルロイヤル方式。

A～Hの組み分けとなっており、各組2名が明日の本選に出場できる。

つまり明日の本選では16名が優勝賞金を巡って戦う事になる。

ふふふ、中々粒ぞろいの大会ではありませんね。

アチラの方はカンフーですか。気も何も使用せずでアレとは……。  
気を覚えたら人間の域を余裕で超えそうですね。お隣の巫女は素晴らしいですね。褐色でありながら巫女とは、新しい扉を見つけられそうです。

その隣のE組ですか。ほお……分身ですね。師はいないかもしれませんが、光るもせんが、中々の練度ですね。狗族の少年もまだまだですが、光るものを感じますね。

ふふふ、あそこは問題なさそうですね。タカミチにエヴァンジェリン。あの組だと他に敵う人がいるか怪しいでしょうね。しかし、キティ……相変わらずの趣味の服ですね。スク水とセーラー服……猫耳と尻尾とメガネも用意しておきましょうか。

あれは……機械、ロボットですね。中々技術の進歩とは目覚ましいものです。隣にいる人は一般人ですね。アチラの方と予選は突破できるでしょうね。

しかし、問題はあそこの執事服の男。アレほどまでに隙だらけの人物を見たのはいつ以来でしょうか？ ワザとああしているのが見て取れますね。かなりの要注意人物ですね。一緒にいる着グルミも……かなりできますね。動き難さを感じさせずあの連撃……それでもまだ実力を隠している。本選のくじ運を祈る限りですね。

他にもチラホラと『裏』に該当する人物がいますが、上手くこなしていますね。流石は麻帆良学園関係者と言ったところでしょうか。

さて、問題はこの少年。師がいればこうはならなかったと思います……仕方がありませんね。少し手伝いましょうか。いやはや、あなたの子とは思えないですねナギ。

S i d e o u t

S i d e    タカミチ

「ぐっ……広域指導員の高畑か……てめ、今……何しやがった……」

「悪いねもうちよつと修行して来てくれ」

「ハツハツハ、いやー楽だ楽だその調子だぞタカミチ」

「あんたもやってくれよ、楽勝だろエヴァ？」

「メンドクサイ。それからタメ口やめろ。私はアッチの組を見るので忙しいんだ」

アッチの組？ ……ああ、前田先生か。エヴァも丸くなったもんだ。前田先生は確か、長谷川さんに仕える資金に充てるとか言ってたけど、

無料の執事って言うのもお金はかかるんだね。

「前田島シーパラダイス!!」

おお？ 一瞬見えなかったぞ？

「ふもつぷ〜!!」

アツチの着ぐるミ君もやるな〜……。誰だろう？ ウチの学生じゃないな……。

Side out

「ふもつ！」

「あ？ 私にか？ くれるのか？」

「ふもつぷ〜！」

ボン太くんとか言ったか。一匹だけ違う色違いのオレンジ色の奴にチケットを貰った。憶測で行けば間違いなくボン太くんの集団の指揮官というかボスというか元締めみたいな奴だろう。

「お嬢様、良かったですね。今お調べしたところ、そちらのチケットはプラチナチケットになっておりまして、今からの入手は困難を極めております。売るのも勿体ないかと存じます」

この【まほら武道会】と書かれたチケットがね〜？

「ちなみに、賞金狙いで私も出場しております」

「はあ？ お前が格闘技かよ？ 本選に出れるのか？」

「ま、前田先生が出るんですか！？ あうあう私も行きたいです」

「これはこれは相坂さん。

では、コチラを差し上げましょう。入場チケットでございます」

「あるのかよ」

「ええ、ボン太くんに先を越されてしまいましたので、お嬢様にお渡しする事は出来なかったのですが、いつどのタイミングで渡すのかハラハラドキドキのラブ臭MAXでございました」

変な臭いを作るな。

そっか……前田も持ってたのか。私に渡そうと……。

「ん？ 賞金とか言ったな？ いくらなんだ？ 優勝で100万ぐらいか？」



「一千万でございます」

なっ一干ま……

「使い道といたしましては、お嬢様のコスプレ衣装から生活費、学業にも充て、余すことなくお嬢様の為に使わせて頂きます。なんと購入するパンツは487枚!!」

「一千万に驚く間を寄せ!! それにパンツ買い過ぎだ!!」

「お嬢様、このような場所でパンツパンツ言い過ぎでございます」

「お前だっ!!」

ぼむ

「あ?」

「ふもふも……」

「何て言ってるんだよ?」

「『パンツは素晴らしいモノだ。穿いてよし穿かなくてよし。そこにパンツはあるのか? それともないのか? それは穿いている本人しか分からないが、周囲の人間としてはその興味をそそられる。パンツを馬鹿にするな。パンツを馬鹿にしたものはパンツに泣くこととなるふも』だそうでございます」

「嘘付け！！ そんなに長いセリフじゃ無かっただろっが！！ お前が言ってるんだろ！？ そーだろ！？ 最後に語尾で『ふも』付けた意味もねーだろ！？ おいこっち見る前田！！ 前田ー！！」

「なるほど、相坂さんは生前の記憶が無いのですね？」

「はいそうなんですよ」

何の話してんだよ！！

「お嬢様。こちらがトーナメント表でございます」

「表だけ見ても何も分かんねーよ。って、コレ……ウチの担任も出るのか？ 最近見ないと思ったら格闘技でもやってたのかあのガキ？ つーかウチのクラスが多いみたいだけだよ」

「そして、生き残ったのはお嬢様だけだったのでございます……」

「変な語りを入れるな。出ねーし」

【まほら武道会 トーナメント表】

1 回戦 第1 試合

佐倉愛衣 × 犬上小太郎

1回戦 第2試合

前田・ヴァンデンバーグ・政宗 × 大豪院ポチ

1回戦 第3試合

クー・フェイ × 中村達也

1回戦 第4試合

田中 × 高音・D・グッドマン

1回戦 第5試合

ネギ・スプリングフィールド × クウネル・サンダース

1回戦 第6試合

エヴァンジェリンA・K・マクダウエル × 山下慶一

1回戦 第7試合

龍宮真名 × 長瀬楓

1回戦 第8試合

ボン太くん × タカミチ・T・高畑

2年の時に担任だった高畑先生も入れて、更に一応知り合いに該当されるボン太くんも合わせたとするならば半分が私の関係者になってしまう。

そんな大会に1000万円？ 確かに異常に分類される奴もいる気

もするけどよ……。エヴァンジェリンとか確か茶道部だろ？ 何で武道会なんだよ？ ロボか？ ロボの維持費か？

「ふもふもっ！」

「あ？ 今度は何て言ってるんだ？」

「『参加者は集まる時間だ。俺は先に失礼するぜ』と言っておりますね。私もそろそろ行かなくてはなりませんね。では」

そう言っつて執事とボン太くんは龍宮神社の奥へと消えて行った。絶対まともな大会じゃねーだろコレ。

私はパソコンで調べながら会場の客席に向かった。

Side エヴァンジェリン

『おはようございます選手の皆様さん！ ようこそお集まりいただきました！ 30分後より第一試合を始めさせていただきますが！ ここでルールの説明をしておきましょうー！』

昨日に引き続き麻帆良大学の報道部部长が司会を務めている。

こう言う時は朝倉あたりが出張って来ると思っていたが、どうやら前田の話は本当だったらしい。関わった連中は魔法に関わらないように記憶を消し、魔法に関する事からは避けさせていると。龍宮は除外していたと言うが、元からそれなりの長瀬に、前年度の格闘大会優勝者のクー辺りは魔法が関わっていたとしても効果は薄れたか……まあ腕試しなら問題ないだろうしな。

桜咲は出ていないが……ふんっ ツマラン奴になったな。

まあ悪くは無いが。

「ハイ！ 質問です！ 呪文とかよく分からないんですが、技名は叫んでいいんでしょうか！？」

『えっと……どうでしょう？』

『技名はOKネ』

「良かった！」

呪文詠唱の禁止と刃物・飛び道具の禁止か……。モノの投擲まではOKと言う事だが……。

「ふもっ！ ふももももっ ふもっ！ ふもるる。ふもっ？」

『なるほど。どうでしょう？』

『いや、何て言っていたか分からないネ……部長さんは分かったアル

か？』

『あ、はい。』重火器は当然駄目でしょうが、ゴム弾とかはどうでしょう？』と言う事ですね』

何で理解できたんだ……あの報道部長と言う奴も別の意味で異常だな。

『ゴム弾アルか。命に別状が全く無いと言う事が証明され、対戦相手が許可するのなら特別に許可するネ』

「ふもっふ！」

「なあ前田」

「はい」

「あの着グルミは銃も使うのか？」

「その様でございますね」

グルミ

「解析完了しました。間違いなく人の命を奪う事は出来ません」

工学部の人間が解析して去って行く。素早い仕事だ。

ハイテクとか言うのは分からんがな。

「ま、待ってくれ！ 私のも調べてくれ！！」

「良いですよ。借りますね」

ピーピーッ

「こちらは当たり所によつては危険なので……」

「そ、そうか……」

龍宮が銃を使えなくてガツカリしている。

「ボン太くんの銃には常に【てかげん】が備わっていますので、殺してしまう事は有り得ないでしょうね」

「その【てかげん】とか言うのが本当だったとして、何故お前がそれを知っている？」

「さて、どうしてでしたか……？」

ああ、それよりも覚悟しておいた方が良いかと思えます」

「何をだ？」

また前田は答えない。

しかし、その答えは試合場に出た時に理解する羽目になった。

S  
i  
d  
e  
  
o  
u  
t



第17話「まほら武道会でございます」(後書き)

感想は随時受付中でございます。

前書きで書いたとおり、ネタがあれば考えます。  
では、また次回。

第18話「八百長大会?でございます」(前書き)

しばらくぶりですね。

風邪で喉を痛め、頭痛に関節痛に 熱との戦い負けているフリスタ  
でございます。

今回はまほら武道会の1回戦の半分ぐらいまでをお届けします。

へーちよ。……あ、どぞ。

## 第18話「八百長大会?でございます」

S i d e    ? ? ?

「お待ちしてりました」

「……また大きくなったかしら?」

金髪のロングヘアをアップにしているスーツ姿の女性は目の前で出迎えてくれているメイドに対して身長ではなく、胸囲に關して思うところがある様だ。歳で言えばメイドの方が5つほど上なのだが、失礼な物言いは上下關係によって許されている……と言うよりは一種のコミュニケーションである。

「開口一番のセリフがそれですか……。取り敢えずはおかえりなさいませ。お荷物をどうぞ、イギリスは如何でしたか?」

「うむ。くるしゅーないよ。荷物を持ちたまへ」

「ああ、御苦労だったな乳デカメイド長」

「あなた達を勞つてないわ! 自分で持ちなさい!」

後ろに続いて現れる金髪の少女と茶髪の女性もメイド服だ。スーツ姿の女性の荷物を含めてキャリアケースを転がしている。そのメイ

ド達に対して黒髪のポニーテールメガネのメイド服の女性はハッキリと答える。

普通なら「メイドさんがこんなところで珍しい」と周囲の人間から写真を撮られることもあるかも知れないがそれは無いに等しい。何故なら今は麻帆良祭の最中。どこもかしこもコスプレや着ぐるみで溢れかえっている。メイド服の女性が珍しいと言う事は無く、露出が少ない分、逆に恥ずかしがり屋の方には入門用のコスプレとも言えるのかもしれない。

「あなたは……またメイド服を改造して……」

「こつちの方が動きやすいんだよ」

茶髪のメイドさんだけは確かにおかしい。スカートにスリットが入っている。メイドさんの生足がチラチラと素敵に覗いている。その隙間をチラチラと周囲の者から見られているが本人はいたって気にしないようだ。

「前田はどこかしら？ この学園で教師をしているのでしょうか？」

「あやか様のお話ですと間違いなく。……ですがどこにいるかまでは」

前田を探しに来たであろうメイド2人とその主人であろう人物。それを案内として待ち構えていたメイドさんはとりあえず知ってそうで尚且つ身内の元へ向かった。

「スマレ！ スマレ！ あれ見たい！」

【第3ステージ 2日目・公演】

『麻帆良戦隊！ まほ レンジャー！！』

特捜戦隊まほレンジャー！

「あなたは何しに来たんですか！！」

「やーい初っ端から怒られてやんの〜」

「おかしい！ 栄養が胸にしか行ってないよ！ 普通成長すると怒りん坊も治るのに！ ぬおお〜放せ〜替え歌で有名な霧崎ツカサのモノマネの子が歌ってるの〜！！」

「はいはい、前田を探すんだから行くわよ〜。本人だったら私だつて止まるわよ」

S i d e o u t

「だから『気』だって『気』！！」

「はあ？ 何言ってるんだ。バカじゃねえ？」

「今回の大会はスゴイって」

「えー？」

「昨日の『遠当て』見てなかったのかよ！」

「あんなんイカサマに決まってるじゃん」

「バツカ 達人の間じゃなあ……」

会場である龍宮神社のプラチナチケットのシートは満員御礼。有る事無い事としか思えない噂が大声で飛び交っている。私はモバイルパソコンで今大会を少し調べてみた。

【『遠当て』の使い手に突撃インタビュー 『気』は実在した！？】

パソコンに表示されている この自称ケンカ三十段の豪徳寺とか言うリーゼントが芸人なのか、マジモノなのかは知らないが、私は前者と捉えて溜め息交じりにパソコンを閉じた。

「ふん、そーゆーことか。どんなイカサマショーになるやら……まあマジな格闘技の試合見るよりは笑えて楽しめるかな」

と思った矢先に第一試合は中学一年と二年の戦いから始まった。おいおい……イロモノ系全開じゃねーかよ。しかし、勝負は第二試合にすぐに移った。……今のはワイヤーアクションだよな？ だって10メートル以上は軽く上がったしよ。そんなサーカスショーも合わせた様なモノに賞金1000万で本当にいいのか？

「ぶつぶつぶつぶ……」

「そうでござるな！ 流石シングルナンバーは言う事が違うでござる

るな！」

ん？ なんだ？ 一際ウザい会話が聞こえてくる。

「で、でもさっきの飛んだ娘も可愛かったんだな……」

「ぬわあ！ 脱退するでござりゆか！？」

「噛んでる噛んでる」

「そんな事よりもだ。我らが女神が早く現れないか興奮を隠しきれないぞ」

「そう！ 我々はあの方を見に来たのだ！ 先ほどの娘の様に飛んでコチラに飛んでくれば、握手もしてくるかも知れんでござる！」

会話から察するにアイドルの追っかけと言うか、ファンクラブの人間の様だ。しかし、何なんだコイツ等は……痛々しさMAXじゃねーか。誰かアイドルでも探しに来たのか？ 試合表を見る限りアイドルなんて……ボン太くんの中身とか？ いや、まさかな……じゃあ龍宮・長瀬辺りか？ 中学生らしからぬ奴らだしな……あとは外部の人間なら分からねーな。

「それでは第二試合を始めます！！ 噂の執事教師 前田先生！  
執事は戦闘者バトルに成り得るのか！？ 会場内販売所にてサイン入りプロマイド販売中！ 一方、前年度『ウルティマホラ』でご存知の方もいらっしやるでしょうか？ 惜しくも3回戦で膝を付きましたが、その拳が甦るのか！？ 大豪院ポチ選手！」

サイン入り……誰が買うんだよあのバカ。

「キヤー！ 買いに行かなくちゃ！！」

「試合終わってからダツシユね！」

「あーここに来て正解だったわ！！」

売れるのかよ……。

『では第2試合 ファイト 開始！！』

前田にクチビルゴーレムが突っ込んでいく。中国拳法のような衣装に身を包んだその男の動きは正直カンフー映画のそれに見えた。

『ラツシユラツシユ！ 凄まじい連続攻撃！ 前田先生は手も足も出ないのか！？』

私の位置からは前田の動きが見えていた。攻撃を避けたり受け流したりしながらゆっくりと右手でピースサインを作り、親指も開いて顔の方に持つて行く、そして人指し指と中指の間に前田の右目が来た時。

「前田マジ狩るビーム」

ちゅどーん

『……っ！ ポチ選手が や、ヤムチャの様に！？ カウントを取ります！ 1、2……』

いや、カウントとかじゃなくビームの正体をだな……。



「いやー出たぜ前田さんのマジ狩るビーム！」

「ああ！ 去年の鬼ごっこを思い出すぜ！」

「胸が熱くなるな！！」

誰か突っ込めよ！！

「お嬢様見ていて下さいましたか！？ 死ぬかと思いましたが、死に際の脳裏にお嬢様の悩殺ポーズが出てまいりまして、走馬灯とでもいうのでしょうか？ あれのおかげで勝つことが出来ました！」

「相手の方が死にそうだったけどよ、サイバイマンにやられたボロクズみたいになってたぞ…… 走馬灯が見えるとしたらアツチだろ。それに走馬灯は今までに経験してきたこと見てきたものだろうが。変な記憶を持つんじゃないよ」

『おおーつと！！ 中村くん、吹っ飛んだあ〜！！！！ おおつとまだ大丈夫みたいだ！ 流石はここまで勝ち残った戦士です！ しかし〜！ クー・フェイがあ捕まえて！ クー・フェイがあ画面端！ クー・フェイがあ近づいて！ クー・フェイがあ決めたー！！』

クーによって中村達也という選手が飛んでいく。

画面端って何だ？ ウメハラ？ 何だそれ？

中村という選手が飛んで水面に落ちるのを見て、疑問を投げてみる。

「なあ前田。この大会はどこまで本気なんだ？」

「そうでございますね……私が学園長室で学園長を手懐けるぐらいには本気でございます」

本気度0か……イカサマだらけかよ……。

そして試合は次々に進んでいく。

『それでは第4試合を始めます！！』

Side 高音・D・グッドマン

全く、なぜ私がこの様な大会に出なければならぬのか……。ナギ・スプリングフィールドの息子のネギ先生。彼の様子が最近おかしいから隠れて確認して欲しいと言われ愛衣と一緒に参加しましたが……。あれほど根暗な子供とは思いませんでしたわ。学園祭前の呼び出しにも応じず……。いえ、子供ですから別に構わないのですが。立派な魔法使いの息子と言う自覚もなく毎日ブラブラとしているだけだなんて……。正直、幻滅しましたわね。愛衣は負けてしまったし、私も適当に切り上げて告白生徒の阻止に戻りませんと。

『それでは第4試合を始めます!』

「ええっと、田中さんでしたか。私は今大会に興味はありませんの。ですので立ち合いは強く当たって流れでお願いしますわ」

「……了解致シマシタ。デハ初動はパワー全開デ<sup>マックス</sup>」

「へ……?」

田中さんが大きく口を開くと、そこには大きなレンズの様なモノが見えていた。

キュイキュイ……チュン!  
ピーーツ!!

「きゃあああつ!?!」

「うおお! 何だアレ!?!」

「田中の口からビームが!?!」

『機体番号』T・ANK・3『愛称』田中さん『工学部で実験中の新型ロボット兵器です』

『ロボットなんですか!?! てゆーか、ビームはルール違反じゃ…』

『私の弟になります』

「」「」「おお〜! うんうん。なるほど〜ロボットなら納得だ」「」

「待てーてめーら!?! どー考えてもおかしーだろアレ!?!」

普通の思考をお持ちの方が突っ込んでくれています、  
それで戦いが終わるわけではなく……。

「お姉様ー!!?」

「ひいひいつ！ ちょ…待って…死んじゃうつ…」

「LOCK ON」

ピピィ…バシユバシユツ！

「おおー！ ロケットパンチだぜ!？」

「スゲー!」

「やっぱロボつつたらこーこないと!」

「やるなー工学部!」

「おにえっ お姉様ー!!」

Side out

Side あやか

「あああつ！ 何ということでしょうっ！ せつかく前田からチケットを貰ったのに見にいけないだなんて！！ くううっ ハメラれましたわっ！ だからあの人達クラスの仕事を夕方に戻したんですのねっ！ それにしても格闘大会だなんて前田のどんな勇姿が……！ なぜ誰も大会のことを言ってくださらなかったんですのー！？」

「しょーがないじゃん。前田先生が出るの知ったの今朝なんだから」

「ウチらも行きたいもんなー」

「うん……」

「キイーツ！ 誰か代わってください！！」

前田が朝くれたチケットは手元にある。でもクラスの出し物の参加によって見に行くことが出来ない……。何てもどかしいのでしよう！！

ガララララッ

「失礼。こちらに雪広あやかはいますか？」

「うわっ綺麗〜……」

「いいinchよ呼んでるよ？」

「すごい美人さん」

「さ、さやかお姉様！？ アリスさんにアカネさんも……」

そう、雪広家の次期当主として各地を転々と勉強で渡り歩き、最近

では大きな仕事もこなしているというメールをくれる私の姉ですわ。それに付き添いとして行動している問題児メイドのお二人も……。

「久しぶりねあやか。コスプレ？ 似合ってるけど……少し露出が過ぎるのではないかしら？」

「いや。アレぐらいで丁度いいんだよ。前田も鈍感だからな」

アカネさんは変わってないようだ。

「お？ あやかソレ何？ 何のチケット？」

「アリス言葉遣い！」

アリスさんは私の持っている格闘大会のチケットに気づく。スミレさんに怒られつつも相変わらず妙な勘が鋭い人ですわね。私はこのチケットの有効な会場に前田がいることを伝えた。当然チケットは譲らない。譲れませんわ。

「いいんちよのメイドさんたち？」

「これなら ご指導いただいてメイド喫茶でも成功したかも知れないね」

「そうだね」

「そ、そんな事より！ 何しに帰ってきたんですの！？ 次のお帰りは年末になると……」

「あゝ、スミレのメールで知ったのよ。前田が教師として麻帆良マホウにいるって。正直な話ね、前田がいた方が仕事が捗る筈なのよね。それで口説き直そうと思ってね」

「す、スマレさん!?!」

私の専属にもなっているメイド長のスマレさんに話を振っても、「申し訳ありません」と言う顔と共に頭を下げることにしかしない。

「スマレだって好きな人がいるって知ったら嬉しくて書きたくなるわよ。そう怒らないのあやか」

「め、滅相もございません! わ、私は別に……!! そこ! ニヤニヤしない!?!」

まただ。私の周りの人は前田を連れて行くこととする。

私のすぐ近くから遠ざけようとする。

前田の意思次第だけど……さやかお姉さまが本気になったら……。

S i d e o u t

何がロボット兵器だよ! なんもん日本で作っていいのかよ!?!?  
てゆーかビームって……明らかにAIBOとかの技術レベルを超え

てるじゃねーか！！ 変だろおい！

『あああっ！ 善戦空しくついに捕まってしまった！！ 田中選手  
のビームが直撃ー！！ 高音選手は大丈夫かー！？』  
『残念ながらまだ出力不足で大丈夫ですー。命に別状はありません』  
『残念！？』

「もう怒りましたよ！  
今から私の真の力を見せてさしあげます！ このでくの坊！！」

そう反撃を宣言する聖ウルスラ女子高の2年生。  
しかし、その姿は……ほぼ裸も同然であった。

「いけません！ あのようにながれては……くっ！ お嬢様も脱ぎ  
ましょう。さあ！ こ、これは！ パンツに染みが……」

ゴスッ！

「アホか」

「デハ、流レデ引キ上ゲマス」

「い、いやあああああっ！！？」

こうしてロボットの田中は木の葉の様に宙を舞い、  
水面から浮かび上がって来ることはなかった。

「カメラカメラ！！」

「あれ！ カメラ使えねーぞ！？」



「動け動け動け動いてよ！ 今動かなきゃ何にもならないんだ！！」  
アホばかりだ……。

「もうお嫁に行けないーっ！！」

『大変なハプニングがありました。……では、第5試合の前に傷付いたリングを修復いたします。麻帆良大土木建築研の手際の良さを  
お楽しみください！』

「お、おいアレ！！」

「まさか……本物か！？」

「うおおおおお〜待っていたでござる〜！！」

何だ？ さっきまで黙っていたうるさい奴等が復活したぞ？

「これはエヴァンジェリンさん。お茶をご用意しましょうか？」

「ああ、頼もうか。控室に誰も戻って来んからな。直に見た方がいい  
と思うて来たのだが……な、何やら凄く視線を感じるのだが？」

「それはそうでしょうね……カチャカチャ……コポコポコポ……」

「どついう事だ？」

「どつぞ」

「あ、ああ」  
「む、すまん」

前田はそう言ってお茶を淹れて私とエヴァンジェリンにティーカップを渡して来る。そして、観客席にむけてメガホンを握った。

『大変長らくお待たせいたしました！　こちらが麻帆良に舞い降りた天使。下界に降りた事によりその白い羽は汚れてしまいました。その美しさは変わりません！　EMKの会員の皆様方どうぞ愛でて下さいませ！！　エヴァンジェリン・マクダウェル様です！！』

「「「「「うおおおおおおつ！！！！」「」「」」」」

『さあ御一緒に！　Go to EMK！　Go to EMK！　Go to EMK！』

「「「「「Go to EMK！　Go to EMK！！」「」「」」」」

よくよく見るとのぼり旗を掲げたアホもいる。【エヴァたんを愛でる会：EMK】と書かれているようだ。

私は右手にメガホン。左手は天に突き上げ観客を煽る前田に説明を求めた。ちなみに名前を呼ばれたエヴァンジェリンは固まっているようだ。

「な、なあ前田？　何やってるんだそれ？」

「御存知ないのですか？　こちらのお方こそ、今　麻帆良においてスターの座を駆け上っている超麻帆良シンデレラ！　エヴァたんなのです！！」

「前田 貴様アツ!! あのサイトは潰して……!!」

「誰がそのような事をすると言いましたか……もう少しスターの自覚を持って頂きたいものです。ちなみに会員数は先ほど10000を超えましたので、ファン感謝祭を勝手に行ってあります。具体的に言えば隠し撮り写真の販売をさせて頂いております」

「勝手に行つな!!」

「僕の事も叱って下さい!!」

「その御美足で踏んで下さい!!」

「脇! 脇の写真を!!」

「ああ! こんな時にカメラが!!」

「動け動け動け動いてよ! 今動かなきゃ何にもならないんだ!!」

『そのこの集団!! 格闘大会中に別の催し物を開かないでください!!』

ステージ修繕中の筈ですが、何やら騒がしいですね。それはさておき。

「次は私達の試合ですね」

「……はい」

ネギ君は何やら入れこんでいるようですが……。

「緊張しているのですか？ ふふふ、まさか初戦で当たるとは思っていないかったのですがね。戦えるだけで目的は果たせますので別に構いませんが……」

「え？ それは、どういう……？」

ゾワ……。

「全力で来いよ？」

「……えっ！？ あ、あなたは僕の……！！！」

『お待たせいたしました！ リングの修繕が終わりましたので第5試合を開始します！ 子供教師で噂のネギ・スプリングフィールド選手！ 最近は鬱モードなのか見かけることも少なくなっている様ですが、この大会で鬱を晴らす事が出来るのか！？ 片や謎のロボのクウネル・サンダー選手！ ふざけた名前の実力はいかに！』

S  
i  
d  
e  
  
o  
u  
t

第18話「八百長大会?でございます」(後書き)

感想は随時受付中でございます。

彼女達が帰って来た!?

というわけで雪広家のオリキャラ達が麻帆良にやってきた……。前田が連れて行かれちゃう? まさかあゝ。まさかね……。

【今回のネタ】

・霧崎ツカサのモノマネの子

本物じゃないけど、ここにも登場。超微小クロスだ!! このモノマネの子は替え歌が好きらしい。ちなみに前田の持って来た本棚にも小説として存在する裏設定。

・立ち合いは強く当たって流れでお願いします  
八百長問題ですね。

・ウメハラ

詳しくは知らない。格ゲーのかなり強い人らしい。KEN×チュンリーは凄い。

・「動け動け動け動いてよ! 今動かなきゃ何にもならないんだ!」  
「!」  
言わずと知れたシンジ君。最低だ僕。

・『さあ御一緒に! G O t O E M K ! G O t O E M K

！  
』

懐かしいね。いつか出さなきゃと思ってはいましたが、そうですか。1000人を超えましたか。凄い人気だ。【殺】という文字は額に書かない！

ネタも募集中。……色々痛いんで休みます。……はい、痛い子でもあります。

第19話「執事の正体?でございます」(前書き)

そろそろエンディングに向けて進めて行くか。

あ、魔法世界編いります?

今回は、「前田って何さ?」その答えの一部が今明かされる!

お嬢様のパンティーおーくれ!



第19話「執事の正体?でございます」

「アイツは……アルビレオ・イマ!」

「知ってるのか?」

エヴァンジェリンはステージに上がったロープの人物を知っているようだ。海外での知り合いなのかもしれない。

「アルさん……出てたんですね」

高畑先生も知ってるのか……。有名人か?

「おや、これは高畑先生。試合を控えているのによろしいのですか?」

「いや、そう言う訳ではないんだけどね。前田先生はとりあえず初戦突破おめでとう」

「ありがとうございます。お嬢様のために粉塵爆発の勢いで頑張ります」

その勢いで粉々になって飛んで行ってしまえ。

S i d e    ネギ

「私の名前はアルビレオ・イマ。千の呪文サウザンドマスターの男……ナギ・スプリングフィールドの友人です……がしかし、私の事は登録選手名通り、クウネル・サンダースとお呼びください。気に入ってますので」

「は　はあ」

父さんの友人。この人なら……僕の師匠に……。

「第1回戦から当たるとは思いもしませんでした……やはり、クジを弄っておけばよかったですね。それはさておき、これで……私も10年来の友との約束を果たす事が出来ます」

『これは……！　本のようなものがクウネル選手を取り巻いて行く！　謎のフードを被ったクウネル選手はマジシャンだったのかー！？　つとおお！？　これは一体何の光だー！』

アーティファクト……！

『これは！　クウネル選手フードを脱いで意外や意外！　渋目の才

ジ様だったとは……』

「あなたは……タカミチの師匠の……」

S i d e o u t

試合開始とほぼ同時にロープの男が大量の本を空中に漂わせた。手品と呼ぶには大がかり過ぎる。ロープを脱いでスーツ姿を曝したかと思えば、飛んで水面に向かって何かをしゃがった。アレは噴水とかじゃねえ、水面に爆弾でも落としたような水飛沫だった。パソコンが壊れたら弁償させてやる。

「お嬢様、濡れ濡れでございますか？ 御着替え手伝いましょうか？ 風邪を引かぬように人肌で温めてから……」

「よし黙ってる」

邪魔が入った。冷静になれ、目の前で起きている事は何だ？ 曲芸か？ マジモノか？ あのガキはどうなってやがる？

「僕はやっぱり控室に戻ってるよ」

「何か思い出されましたか？」

「うん……少し 前の事をね……」

そう言っつて高畑先生は去って行く。

「何かあつたのか？」

「ええ、つい今しがた出たスーツ姿の方は、高畑先生の師匠に当たる漫才師なのでございます」

「嘘付け。……高畑先生が生徒だった頃の先生とかか？」

「まあ、近いものがありますね」

要点を得ない回答だな。しかし、仮にそうだとしたら変な関係だな……いや、うん。心底どーでもいいな。今はそれよりも試合だ。

『水煙が晴れてきました！ おや？ クウネル選手またフードを被つてどういうつもりだー！？』

そして、またもや頭を覆っていたロープは外れた。そこには白い鳩を大量に羽ばたかせる赤毛のイケメンがいた。……手品師だったか？ あながち前田の言つた漫才師も当たらずとも遠からずとか……いや、それは無いか。

「くっ！ 手品であれば私も得意でございます！ お嬢様ご覧くださいさい！ ストリングプレイスパイダーベイビーでございますー！！」

「それは手品じゃねー！ 張り合っな！！ どっから取り出した！  
！」

「……………試合を見なくていいのか？」

エヴァンジェリンがステージを見つめたまま私に声をかける。冷静な奴がいると本当に助かる。みんなバカばかりだ。私は今、ステージで行われてるのがマジなのか、トリックなのか判断するのに忙しいんだ。

「どうやらあのガキの親らしいな。って待てよ！！ 人が完全に入れ替わってるじゃねーか！！ 年齢もかなり若くなっ たし髪の色も長さも！！」

「ナギ……………ちっ アルビレオめ、ふざけおって」

「おや？ エヴァたんはナギ・スプリングフィールドにゾッコソラヴでは無かったのですか？ キャーこっち向いてー！ 状態ではないのですか？」

「たん は止める、否定はしないがな……………それは前の事だ。今はどうでも良い」

「左様でございますか」

横からそんな どうでもいい会話が聞こえてくる。そんな事よりも、目の前に映っているのは映像だろうか。間違いなく視界に入っているのはCGではないだろうか。人の身体から電撃が走る。吹っ飛ばされる。そんな光景を目の当たりにして、周りは凄いとしか言

わない。おかしいのは私なのか。それとも世界全体なのか。あのガキは何なんだ。実は電撃ポケンだったのだろうか？ 目に黒い太線を引かれた黄色のネズミが思い浮かぶ。親も親だな、空を飛ぶわ殴る蹴るわ……マジで親か？ おっと、ここまでだな。

S i d e    ネギ

「遅延魔法か……まあまあだが、魔法つてバレても良いのか？ さつきから雷の暴風を乱発してるけどよ」

父さんは僕のストックさせていた『雷の暴風』を受けてなお余裕でいる。対魔法防御を取っていたのは分かるが、それを防ぎ切るなんてなんて凄いんだ。これが僕の父さん。これが千の呪文の男。

少しでも長く、1秒でも長く、あなたとこうしていたい。

ああでも……これが終わればまたあなたはいなくなってしまう。

父さん。僕    いつかあなたに……

<無理です。    B A D    E N Dですよ。    ネギ・スプリングフィール

ド>

「え……?」

誰だ? 僕に念話を飛ばしてきたのは……。バッドエンド?

「試合中に余所見は感心しねーな息子よ。天才で最強無敵なお父様の拳骨で目を覚ますと良い」

しまった!

ドゴッ!!

折れた…… 咄嗟に防御で出した左腕なのか、防御が間に合わずに脇腹が……? どの骨かも認識できない……。呼吸が上手く出来ない。駄目だ。最後まで気を失わずに何かを教えてもらいたかったのに…… 僕は……。

「ありゃ、まずつたな…… 予想以上に耐久性が無いな…… まあ聞こえてたら聞いとけ息子よ。お前はお前になれ。俺に憧れる気持ちも分からんでもないがな。じゃあな」

Side out

『クウネル選手勝利ー！ ネギ選手から何発も放たれた雷の様な光線や風！ その父親と思われるクウネル選手は空を飛んだー！！ 素晴らしい戦いに拍手をどうぞー！ では土木建築研の皆様よろしくお願い致します！』

場内は今の試合内容に歓声を上げている。確かに凄かった。有り得ないことの連続だ。映画以上に映画だったモノを見た気分だ。これは……。

「……前田、今は魔法か？ 空に向けて飛ぶ雷とか、空飛ぶ親バカとか」

「……はい。お嬢様には何とか知られぬようにと手回しはしていたのですが……流石お嬢様でございます」

それはもしかして先ほどのヨーヨーとかの話しか？ アレで騙される奴がいるなら紹介して欲しいくらいだ。

「いいのか？ 隠すとか言っていたが」

「エヴァンジェリンも知ってたのかよ……まともだと思ってたんだけどよ……」

私の疑問にエヴァンジェリンは鼻を鳴らしてそっぽを向く。

「お嬢様が御自身で気付いたのであれば、私は隠す事は致しません。ですが、必要以上に関わらせる事は避けさせます」



「お前の所為で関わって来た事もあるんじゃないだろうな？」

「……時空をとらえました」

そう言っつて前田はどこからともなくケーキセットを取り出す。

「もついいわ！！　今マジで壁から取り出したたる！！」

「漫才コンビが……私は試合だ。ではな」

エヴァンジェリンを見送ると、前田は視線をエヴァンジェリンに固定したまま話し始めた。

「エヴァンジェリンさんは人間ではございません吸血鬼です」

「はあ？」

「そうですね、愛らし過ぎて　そうは思えないですよね」

「そこじゃねーよ。吸血鬼って、血を吸う牙の長いアレだろ？」

「はい、アレでございますね。それも真祖と言われる最強種でございますから、人間であるお嬢様が軽々しく声を掛けると消されてもおかしくないのでございます」

「そんな危ねー奴なのか！？」

「ですが、御安心くださいませ。私、エヴァンジェリンさんの弱味

を握っておりますので、お嬢様には手出しできません。それにエヴァンジェリンさん自身もお優しい方なので問題ないでしょうが……」

「弱味って……少し良いか？ あー……ここじゃ無い所で話したい」

「まだ試合は残っておりますが？」

「大体分かったから良い。お前の試合までなら良いだろう？」

そう、私は今『魔法』と言う存在を認識した事によって、こいつに聞かなければならない事がある。少し前にはぐらかされたが、今だから聞ける事。私にはその資格がある。

『山下選手一撃ー！！ 弱い！ 弱過ぎるー！！ エヴァンジェリンさんの通りすがりの様な拳に膝だけでなく頭も付いたー！！ 最弱だー！！』

『可哀そうな声が響き渡っていたが、気にしない。』

ザジさんが店番を代わってくれましたわ。すぐに助っ人も来るから大丈夫だと言って、何とお優しいクラスメイトなのでしょう。

「こちらでございます」

お姉さまはチケットをオークションで購入した。龍宮神社で行われている格闘大会に向けて私達はスミレさんの案内で足を運んでいた。

「待った。見つけたわ」

「見つけたって会場はまだ……え、前田？」

そう、前田がいましたわ。千雨さんと一緒に歩いて、アレは学生棟の方に向かってる。世界樹広場で止まり、話し始めましたわ。

「おお〜？ 告白？ 前田さん告白されるの？」

「いえ、どうやら違いますね。何かを説明している様子ですが……」

アリスさんの疑問に冷静に分析するスミレさんは否定の答えを出す。見る限り、千雨さんが前田に大声で何かを言っているみたいですが、何を言っているのか、この距離では聞き取れませんわ。

「あやか、アレは？」

「長谷川千雨さん。前田の今の主人ですわ」

「へえ〜アレが……どこかのお嬢様って風には見えないけどね〜」

「長谷川千雨様。ごく一般家庭のお生まれですね」

スミレさんは何やら書類を取り出して確認するように流し読む。相変わらずアナログな人ですわね……。そして、前田達は教室等に入って行く。距離を取りつつ私達は後をつけましたわ。

「あれ？ 確かにお化け屋敷の方に来たと思っただけだな……」

「アカネの策敵から逃れるなんて……流石は前田ね」

「よしアリス。動物的勘で探せ」

「うい！ アリスレーダーによると犯人は後ろだよ！！」

「これはこれはあやか様。そしてお久しぶりでございます。さやかお嬢様。スミレさん、アカネさん、アリスさん」

「「うおわっ!?!?」」

「「「っ!?!?」」」

アリスさんとアカネさんは声を出して驚いている。いつの間後ろに回ったのかしら……。

「ほ、本当に後ろから現れるなんて流石ね前田」

「恐れ入ります。本日は如何なさいましたか？」

「私の執事に迎え入れようと思ってね。言い値で良いわよ？」

「「「!?!?!」」」

メイドの3人は驚く。私も少し驚きはしたけれど、少し安心もした。そう、前田はお金ではないのだ。仕える主人の器と云うか、前田自身が感じる何かなのだ。

「申し訳ございません。私は今、別の主に仕えておりますのでお受けする訳にはまいりません」

そこに現れたのが、その主である千雨さんでしたわ。

「おい前田……さっきの話だけだよ……ん？ 委員長に……ソックリさん？」

Side out

世界樹広場で前田は止まる。

「『世界樹伝説』という噂がございますね」

「あ？ ああ、あの麻帆良スポーツのデマ記事だろ？」

「実はアレ、マジでございます」

「……さっきの試合を見た後だとよ、すげー信じたくないんだが信じられる面があるんだが……マジか？」

「お嬢様のパンティーおーくれ！ とかは駄目なのですが、恋愛に關しては呪いクラスに効いてしまうのでございます。告白しそうな方には学園祭の間は眠らされるように、学園にいる魔法先生という方が秘密裏に行動しております」

「最初のはワケわからんが……仮に誰かがお前に告白したら付き合  
い始めるのか？」

「ええ、私でもその呪いから逃れるのは難しいでしょうね……例え  
ば今 私がお嬢様に愛の言葉を囁くのならお嬢様の御心は私のモノ  
になってしまうのです。では、試してみましようか」

「試すな！！ ……っーかよ、お前なんで私の執事になったんだよ  
？ 仮にマジでこのデカイ樹の呪いがあったとするなら、それを使  
わないのは何でだ？」

「……場所を変えましょう。こちらへ」

向かった先は私のクラスだった。そこには見慣れない奴等が店番  
していて、ザジがちょうど部屋から出てきたところだった。

「食べていいですか？」

「……駄目」

「駄目ですか……」

「なるほど、クラスの方々は武道会に行ってしまったわれて、ザジさんだけが店番を……サーカスの人達と言う事にしておきましょう」

「……ん」

何で私の方を見て食べる食べないの話をしたかは分からないが、クラスの連中はザジに全てを押しつけて行ってしまったようだ。私もサボってよかったのか？ ざけんなよ？

「ではお嬢様こちらへ」

前田に案内されたのはいつのまにか出来ていたゾンビ部屋だった。中に入ると薄暗い廊下が続いているのだが、前田はスイッチを入ると非常灯のみの空間に電気は全体的に点いて明るくなる。

「ゾンビの営業は中止ですね。ここならば誰も入ってきませんし、聞かれる事もございません。何なりとご質問下さいませ」

改めて私は頭の中を整理する。先ほどの武道会は魔法と言うものがマジで存在していた。あのガキの親が勝ち上がった事によって、次の試合からもヤバそうな感じしかない。

「前々からおかしいとは思ってたんだ。エヴァンジェリンもそれなりにおかしいとは思ってたけどよ。ウチのクラスにああいった連中は何人ぐらいいるんだ？」

「ネギ先生を抜いて考えますとそうですね……20名を超えますね」  
「はあ!？」

「ですがご安心くださいませ。今は5名ほどです。関与しないようにしておりますので」

”しておりますので” ね。

「前田はさつきチラツと話に出た『魔法先生』ってやつなのか？魔法に関わらないようにするとかの仕事とか……」

「良い目の付け所でございます。事実、何人かの方に対しては魔法に関わらぬように致しました。ですが違います。私はお嬢様の道筋を作るために道に置かれている小石を取り除いたに過ぎません」

私の道筋……。おいおい、まさかな。私が凄い能力とか持つてるとかのトンデモ理論じゃねーだろうな。

「それもご安心くださいませ。確かに魔力に適用できるお嬢様ですが、お嬢様が本気で魔法を学んだとしても今のネギ先生の足元ほどには及ばないでしょう」

適用できちまうのか……。それはそれで嫌だな。私はこの退屈な現実が好きなんだ。それを壊されるだなんて真っ平ごめんだ。つーか人の心を読むな!

「失礼致しました」



「だから読むなっつーの！ ……じゃあ、私は平々凡々でいいんだよな？」

「私からすれば世界最高のお嬢様なのですが…世界基準ということでしたら、その評価もやぶさかではございません」

「普通の基準でいいんだよ……じゃあ何で私なんだ？ 私に仕えて私の道筋を作って、お前は何が目的なんだ？」

「失礼を承知で申し上げますが、平々凡々だからこそお嬢様が必要なのです。そして、お嬢様の願いである『現実』を守る事にも繋がります。この世界に魔法は必要ないのでから」

「どついう事だよ？ お前も魔法使いなんだろう？ この世界に魔法はいらないって、お前が言って良いのか？」

「重ねて訂正いたしましたよう。私、魔法使いでもございません。と言いますか…人間でもないのです」

……はい、『人間じゃない』入りました！。

つてえ！ 待て待て待て！！ 人間じゃない！？ 人間離れしてるのは認めるぞ。でもそれは行き過ぎだろ！？ 私のまともな思考能力が崩壊しちゃう！！

「お、お嬢様落ち着いて下さいませ！ いきなり脱がれては困ります！」

「脱いでねーよ！！ ……お前のおかげで落ちついちゃうな。あー、じゃあ最初に私のとこに来た時のメールは……」

「はい、分かりやすく言いますと、催眠に近いメールを送らせて頂きました。クリックを促しました。何年間か人間の主人を探しておりました、何人かの方に仕えました。お嬢様ほどの方はいなかったので。全てを客観的に見る事が出来るのはお嬢様だけでした」

「人間じゃないお前とそれが何の関係があるんだよ？」

「それは　　おや、時間切れの様ですね。何者かが近付いておりますので、またの機会にしましょう。お嬢様はそちらから出て下さいませ」

「いや、おい！」

前田はそう言つて奥へと進んで行く、何故に別々に出る必要がある。それに最後まで話せよ。あー面倒臭え。いや、冷静になれ。人間の格好して人間じゃない奴なんて……エヴァンジェリンもか……いや、でも前田からしか聞いてないぞ。全ては前田の嘘なのではないだろうか？　そうすれば全て謎は……解けない。あのガキは現に魔法なるものを使った。あー畜生。納得いかないが納得するしかないのが腹立つ。

……いや、まだ望みはある！　超だ。あの天才が関わつてる試合なんだからどんな舞台装置や仕掛けが備わつていても不思議じゃない。客寄せの見せ物だ。前田はそれに加担して私にドツキリを仕掛けようとしている……のかもしれない。くそっ自分で考えていながら自信が無い。

仮に本当の事だしよう。前田が人間じゃないとして、私に何をさせる気だ？　……喰われるとか？　……有り得る。化け物と言え

ば人を食うのがほとんどだ。可能性で言えば有り得る。今のうちにどうにかして私は前田から離れるべきではないだろうか？

お？ 前田の声がするな。もう部屋の外に出たのか。ショートカ  
ットでもあるのかこの部屋は……。

「おい前田……さっきの話だけだよ……ん？ 委員長に……ソック  
リさん？」

「千雨さん。あ、こちらは私の姉の……」

「前田の今の主人ね。雪広さやかと言います。よろしくね」

「はあ……委員長のお姉さん」

そこにいるのはスーツ姿で委員長にそっくりな人だった。委員長  
を更に美人にした感じだが、似過ぎだ。これだから金持って奴は…  
…遣伝子操作でもしてるんじゃないだろうな？ ミスユニバースと  
かでも驚かないし、それすらも霞んじまうぐらいに美人だ。委員長  
ももつ少し成長すればこうなるのだろうか……。

「突然だけど長谷川さん」

「はい？」

「前田を貰っても良いかしら？」

「え？ はあ？ 願っても無い……（ビシッ）（じゅっ）」

「お嬢様！？ 大丈夫でございますか？ ああこれはいけません」

「て、てめえ……今、私の首に手刀か何かを……（ビシッ）……」

「申し訳ないのですが、お嬢様はお疲れの御様子。代わりに申し上げますと、お嬢様は『前田が傍にいないと死んでしまう病』なのでございます」

だ、誰が信じるんだこのアホ執事……今しかチャンスは無い！  
こいつを差し出せば私はまたハッピーライフを。

「そう……だったんですの……」

委員長のアホー！！！！

「それならば仕方ありませんわね……人の命には代えられませんから……」

委員長の姉もアホか！！？

「ん〜？ 聞いた事が無い病名だけど〜？」

いいぞチビメイド！ そのアホな主人どもに説明してやれ！！

「バカだなーアリス。依存症的なモノも命に係わる事があるんだ。それに前田だから その依存度も大きいに決まってるだろ？」

「あーなるほどねー……アリス納得！！」

すんなよ！！ 無い胸張ってどうすんだよ！！

「さやか様」

おお！ 最後の皆だ！ 一番まともそうなメイドさん！！

「ここに直行しているのがバレた様です。一度お屋敷に戻りませんと、旦那様がお怒りのご様子です」

「お父様？ ったく子離れしなさいよね。まあ愛する妹の顔見に来たのが本来の目的だし？」

くそがー！！ コイツも持って行けー！！

「嘘付け！前田が欲しい欲しいって言ってたじゃんか」

「言ってた言ってた」

「主人を茶化さない！！」

茶化さんでもいいから持って行ってくれ！ 欲しいならやるから

！！

「チケット無駄になっちゃったわね」

「プレミアついて割と高かったんだけどな」

「アリスのお金じゃないから気にしないよ？」

「アリス！ 全く……何も変わって無いんだから……では前田さん失礼します」

「では、そろそろ戻るとしましょうか」

「私も行きますわ前田」

「うう……チクシヨウ……」

『 8 …… 9 …… 10!! この試合、ダブルノックダウンとし、勝者なしとさせていただきます!! 』

歓声が響き渡る。両者ともに担架で運ばれているが、龍宮と長瀬の試合か……長い試合だったな……。

「ふもっ！」

「あ？ ああ、次の試合はボン太くんと高畑先生か」

「ボン太くんは『この試合の勝利を君に捧げる』と言っております」

「着グルミ風情が何を言ってるんだか……」

前田が引き剥がせない事は前から分かってはいたが、コイツの目的を知るのが重要だな。笑顔を崩さずに、修復されて行くステージを眺める前田は視線を固定したままお茶や菓子の用意をしている。うん、人間じゃねーな。動作に迷いが無さ過ぎる。

「おいふいーですう」

「相坂いたのか……」

「いましたよー。二人してどっかに行っちゃんですから心細く試

合見てるしかなかったんですよ？ でも次の試合は楽しんでみられそうですね。ボン太くんですから」

確かにアレは着グルミだからな。白熱した試合展開になるとも思えない。コメディーだ。

『土木建築研の手際によって今、ステージが復活！ 凄まじいスピード！ 1級建築士を目指している方も是非 麻帆良大学・土木建築研へ！ では第1回戦・最終戦を始めます！！』

ステージに向かい歩いて来るスーツ姿のメガネ。そう高畑先生だ。そして、着グルミのボン太くん。

『たった一人で学園内の幾多の抗争 バカ騒ぎを鎮圧し付いたアダ名が『死の眼鏡・高畑』！！ まさに最強の学園広域指導員！！』  
そして対するは 大人気のボン太くん！ 学園内のイベントとして『ボン太くんを探して一緒に写真を撮ろう！』も実施中！！ この試合、ボン太くんの要望により『武器使用願い』が出ましたが、高畑先生はこれをアツサリと承諾！ 最強VS武器。勝利はどちらの手に！！？ では1回戦 第8試合！！ Fight！！！！』

ダンッ！！

第19話「執事の正体?でございます」(後書き)

感想は随時受け付けております。



第20話「集団的失格者でございます」(前書き)

総合評価2500を突破。

感想100までもうすぐ。

PV65万hit!

で? みんな誰が好きなのよ?

お嬢様? 駄目だ! それは前田のだ!!

## 第20話「集団的失格者でございます」

### 【第1回戦 最終試合】

その頭には「01」と記された角付きの軍用ヘルメットがあり、胸にはライフル弾も通さないと云う驚異のタクティカルベストを装備していた。そんな彼の戦闘能力は昨日の予選会を見ていた者なら分かるであろう。そして、今回が初見と云うことであれば見てみると良い。彼の戦いを。

「ふもっふ！」

「ははは、お手柔らかに頼むよ」

高畑は手を差し伸べ握手を求める。しかし、ボン太くんはそれを払いのけた。

「ふもるる！」

「『貴様は戦友ともではない。馴れ馴れしくしないで貰おう』と言ってます」

高畑は今大会の司会を務めている報道部長を見ながら。何故通訳できるのか不思議に思ったが、目の前の着グルミの対戦相手を下に見ていた事を詫びた。予選を勝ち上がったのだ。油断はできないと思っ直した。思っ直したのだが、目の前の存在を見つめるとどうに

も気が削がれてしまう。そう、その姿は非常にファンシーだった。

「「「「「ボン太くん頑張ってる!!!」」」」」

声援を背に彼は進む。戦場と言う名のステージへ。隣を歩く男には負ける訳にはいかない。何故なら彼はボン太くんだからだ。応援してくれる子供達のためにも膝をついても、倒れても、負ける訳には行かない。と、まあそんな事を考えているかどうかは分からない訳だが、ステージは修復され、報道部長は再びマイクを握った。

そして、今大会初の入場テーマが流れた。

高畑のテーマと言う事で用意されたそれは、どこぞの執事が運営側に届け出たものだった。合わせる様に司会の報道部長は対戦組合せの紹介を始める。そこに『チチをもげ』というセクハラな歌が流れようと揺らぎはしない。そこには語るだけに尽力を尽くす仕事人の姿しかなかった。

『たった一人で学園内の幾多の抗争 たかバカ騒ぎを鎮圧し付いたアダ名が『テスマガネ死の眼鏡・たかはた高畑』!!! まさに最強の学園広域指導員!!!』

そしてテーマは入れ換わる。そこで高畑は気付く。これは入場テーマソングで、さっきの音楽は自分のテーマだったのだと。周囲の目を見れば明らかだ。明らかに、どん引きされている。僅かながら司会の報道部長もボン太くんよりにポジションを取っているように見える。高畑は目を閉じ、心の中で涙を流した。自分のテーマソングだけでなく、切り替わったボン太くんのテーマソングがカッコ良過ぎたからだ。そのギャップに高畑は泣いた。

【The eye of the tiger】が流れる中、ボン太くんは右手を突き上げてステージに上がった。

『そして対するは 大人気のボン太くん！ 学園内のイベントとして『ボン太くんを探して一緒に写真を撮ろう！』も実施中！！』この試合、ボン太くんの要望により『武器使用願い』が出ましたが、高畑先生はこれをアツサリと承諾！ 最強VS武器。勝利はどちらの手に！！？ では1回戦 第8試合！！ F i g h t！！』

ダンッ！！

開始の合図とともにボン太くんの手に握られたH & a m p ; k USPは火を吹いた。しかし、高畑はそれを何かで弾いた。ゴム製の銃弾はステージに転がる。

「ふもっ？」

「模擬弾とは言え危ないな〜やっぱり許可しない方が良かったかな」

ポケットに手を入れたままの高畑は一筋の汗を流しながら笑顔を浮かべる。観客席側にある実況解説席には予選敗退者の男が高畑をバカ呼ばわりしている。【居合い拳】それが銃弾を防いだ技の名前だ。とても素早く、居合い切りの要領で拳を出すと拳ほどの大きさの衝撃波だけが飛んで行くのだと言う。

「ふもももももも〜！！」

ボン太くんは銃をその場に捨て、高速機動で高畑に急接近する。その速さは驚異だった。瞬動を超える程の早さだ。その足音さえなければ縮地に肉薄した動きであった。

「速いつ！ だけど、そうはいかないよ」

高畑は少し飛び上がり、先ほど防御で使用した居合い拳を攻撃に使用した。

ここで3試合前を思い出した観客は少なくないだろう。子供教師とその父親と言った図式での試合。一度ロープを脱いだ男は今の高畑と同じようなスーツ姿で、同じ様に飛び上がり水面に向けてそれを放った。今だから分かる。アレもこれと同じ技だったのだと。

「ふもっ!?!」

横に側転してボン太くんは避ける。すぐさまどこから取り出しているのかは不明だがCA870 MAD DOGショットガンを抜き取り、引き金を引く。すかさずリロードしてもう一度引き金を引くが、高畑は回避する。

私の目の前では、元担任教師と学園祭からの知り合い(?)のボン太くんが激戦を繰り広げていた。ボン太くんの銃火器は避けられ、高畑先生の見えないパンチ。(隣の方に座って解説しているリーゼントが言うには【居合い拳】。使ってるバカを見たのは初めてらしい)

「おいおい……マジかよ……なあ前田。アレも魔法使いの類なのか？」

「高畑先生に関して言えば間違いありませんね」

ボン太くんは知らないってことなのか？ まあ着ぐるミで銃使ってる時点で、魔法使いと言われても釈然としないものはあるな。

「ふももももも！！」

「さあ！ ボン太くんが再び距離を詰める！！ 既に4回は同じ光景を見ておりますが……っ！！ 捕まえた！ 遂にボン太くんが高畑先生を捕まえましたー！！」

場内がざわめきで埋め尽くされる。

「銃だけじゃないのか？」

瞬間、高畑先生がくの字型に折れた。ボン太くんの拳は高畑先生の腹部を突いていた。そこから連撃。連撃。連撃。ボン太くんの拳により、高畑先生のスーツ腹部に拳の皺がおびただしく出来上がる。

「がはっ！」

高畑先生の声にならない悲鳴が漏れる。そして、顎が上がった瞬間にボン太くんのアッパーカット、いや昇龍拳が決まった。

「き、決まったー！ ボン太くんの連撃！！ これには高畑先生も膝を折ったー！！ カウントを取ります！ 1…2…」

「ふもっふ〜！」 ジャツキーンッ！

「……ボン太くん！！」「……」

どこから鳴り響いたかも分からない効果音と共にポーズを決めるボン太くん。それを観戦しているボン太くんのファン（主に子供と大きいお友達）はここぞとばかりに声援を送っている。

「決まったのか？」

「いえ、高畑先生は魔法先生の中でトップクラスの方でございます。あの程度では軽いダメージしか与えられないでしょう」

『5…っ！ 立ったー！！』

「いやぁ……効いたよ。やるなー……でもここまでだ。着グルミ君だと思って油断してたけどね。やっぱり男（？）同士の戦いとしては失礼だからね。少しだけ僕も本気を出そう。左腕に魔力。右腕に気」

「む……着グルミ相手にアレを出すのか……ボン太くんと言ったか」

エヴァンジェリンは知っているようだ。……コイツも人間じゃなくて吸血鬼なんだよな……。なんかもう滅茶苦茶だな私の周り。

ゴウッ！！！！

「ふもっ！？」

高畑先生から突風が吹いた。次の瞬間、ステージの中央にはデカイクレーターが出来上がり、ボン太くんはそのクレーターの中にいるようだ。会場中がざわめきの渦を巻き起こしている。

「こ、これはー!? パンチなのか!? まるで大砲の着弾だー!」

「おおおおー!!」

「すげえー!!」

「流石はデスメガネ高畑だぜー!!」

「ああー!!」

「ええーっ!?」

ぐああ! 何でもかんでもノリで納得するんじゃないー!! ウチのクラスに限らず、この学園の奴等はバカばっかで、ああ〜!! ! 今のは本当にどう考えてもおかしいだろう!! あのガキと親バカの試合と同じようなもの見ても疑問すら持たなくなりやがって!! 雷とかじゃなく、パンチでクレーターで来てるんだぞ!?

「前田、今の凄い音は何でしたの? ボン太さんは無事でしたの? 私まだ一緒に写真を撮っていないのですが……」

「大丈夫かと思いますが」

大丈夫なわけあるか!! クレーターが出来るパンチの直撃を受けてるんだぞ!? 無事なもんか! 早く着グルミから出してやって保健室連れて行った方が……!!



「……ぼ、ボン太くん……」「……」

……ちっ！ ファンのガキどもが不安がってるぞ。勝利を私に捧げるとか言ってたのはどーでもいいけどよ。ファンをがっかりさせちゃまずいんじゃないのか？ お前も何だかはしらねーけど普通じやねーんだろ？ ……立てよ！！

「ふも……ふも……」

『た、立ち上がったー！！ 中の人などいない！！ ボン太くんの背中がそう物語っています！ しかし、そのフラフラとした満身創痍の身体で高畑先生に勝てるのか！？』

「無理だよな……」

「ああ、この試合止めた方がいいんじゃないのか？」

「勝負は見えたぜ、初めは良かったけどよ……」

「こりゃもう弱い者いじめだ……」

「しっかし、デスメガネの野郎、本気だぜ」

「ボン太くん負けちゃうの……？」

客席からは悲観の声が上がっている。高畑先生のパンチを何とか回避し続けているが、最初の頃の機動力は無い。避けていられるのが不思議なぐらいだ。

「はわわ……ぼ、ボン太さん……」

委員長と言い相坂と言い、ボン太『さん』と呼ぶのに抵抗は無いのか。そんなどーでもいい事が頭を過った瞬間。ボン太くんは吹っ飛ばされて水面に沈んだ。

「……決まりましたね」

「ま、負けだつて言うのかよー！」

いつの間にか私までもボン太くんを応援していた。その事に気づいてない私は声を荒げて前田に異議を唱える。違つたろつて、ボン太くんは負けてないだろつて……。そして前田は頷いて答える。

「はい。そして、ボン太くんの勝利でございます」

なん……だと……？

どつぱーんっー！！

『ボン太くん水面から噴出！！ な、何やら輝いているように見えますが……水飛沫の所為でしょうか？』

「ふもも！ ふも、ふもるるー！！」

『ここでボン太くんのフィニッシュ宣言！！ 追い詰められていたボン太くんがここに来て最後の攻撃宣言をしました！！ 良い子のみんな、大きな声で応援しましょうー！！ セーのー！！』

『「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」』

「ふもっふー！！」

ボン太くんは間違いなく光つてる。何の発光か分からないが、間違はなく光っている。人によっては水飛沫の所為に見えるかもしれない。だが水飛沫ではない。私はその光を知っている。アレは京都



『「「「「「ボン太く~~~~ん!!!!」」「」「」』

「ふもつふ!!」

「か、完全に悪者だね……さて……」

何てフィニッシュ宣言されたのかは分からない。だが、秘策・打開策があると言うことだ。着グルミは手に多くの黒い歪な楕円形の物体を持っている。それをステージ周囲の水面に向けて投げる。爆音と共に水飛沫が一気に上がる。

「観客への目くらしか……?」

「ふもつ!」

もう一つ、ボン太くんは小さい缶の様なモノを僕の足元に向けて投げていた。スモークグレネードだ。煙を出すだけの代物だけど。僕の視界は1メートル先も見えなくなる。ボン太くんが近付いてくるなら足音で分かる。高速接近してくる気配は無い。

いや、足音が聞こえてくる。……複数!? 1や2の数ではない。7か8はいる。あの特殊な足音が僕の耳に響いてくる。

「ふもつ（アルファ・ゴー!）」

「なっ!?!」

気付かなかった。前方からの足音が一気に減り、後ろからの足音に、右からの足音に、左からの足音に変わっていた。そう、囲まれていた。

「ふももー！」

ドゴッ！…

「ぐうっ！…？」

Side out

ダンッ！ ジャツキッ！ ダンッ！ ジャツキッ！  
ダンッ！ ジャツキッ！ ダンッ！ ジャツキッ！

煙が晴れた先にはボン太くんがショットガンをリロードしては引き金を引いていた。その先にはうつ伏せに倒れている高畑先生のお尻があった。

『こ、これは一体何があったー！！？ ぼ、ボン太くんストップ！  
ストップ！！ カウントを取ります！！ 1…2…3…』

「ふもっふ、ふもるる。ふもっ」

「『国へ帰るんだな。お前にも家族がいるだろう』と、言っておりますね」

「銃器を使っていた奴が言うセリフじゃねーな……」

「しかし最後は気持ち良さそうでしたね。高畑先生」

「それじゃあ変態じゃねーか……何があつたんだ……？」

しかし、そこにいる全員答えを出すことは無かった。

前田は微笑み、エヴァンジェリンは苦笑いを浮かべている。恐らくでいえばこの二人は何があつたかを何らかの方法で理解しているんだろう。

『…9…10!! ボン太くんの勝利!! 大人気のボン太くんはデスメガネすらも凌駕した!! 第2回戦もご期待ください!!』

前田の言う、魔法先生のトップクラスの高畑先生は立ち上がって来なかった。

「いやー凄かったなボン太くん」

「ああ、でも凄すぎじゃねーか？」

「流石に今のは人間技じゃねーよ。さっきの子供先生のもそうだったけどさ」

「大会側の演出じゃね？」

「え、じゃあ何？ 今の全部作りモノ？」

「全部とは言わねーけど。信じられねーよな」

やっとか。やっとまともな意見が出始めたか。心細かったぞ。う

ん。まともな神経してる奴が増えてくれると私も助かるぜ。

「でも面白かったよな」

「ああ、作りモノでも良いよな」

全くコイツ等はー！！！！

「お嬢様、百面相の練習でございますか？」

「うるせー異常者代表！」

私は軽い虚脱感を味わいながら何気なくステージを見ていた。どうやら真面目に高畑先生は意識を失っているようだ。すげーな着ぐるミ。まあ銃を使ってたけどよ……。

「おい、担架持って来てくれ。高畑先生運ぶぞ」

「ああ、まさか高畑先生が倒れるとはな……」

「ふもっ」

「え？ 自分に任せろって？」

「ふもっ」

ボン太くんはステージ上で動かない高畑先生に向けて拳銃を構えた。

「ちよっ！！？」

ダンッ！

止める間もなく、引き金は引かれた。そして、高畑先生は何か黒い幕に覆われる様にして……消えた。

「消え……っ!？」

手品まで出来るのかよ……。もう何が起こっても驚く事が出来なくなってきたぞうだ。

「【ムーンサルト・バック・フリップ】でございます」

「凄いですわ前田!?!」

「凄いですよよく分からないくらいぐるぐる回ってますよ!」

「いつまでヨーヨーやってんだお前は!?!」

Side 火星人

「き、消えた……?」



ハカセと私は薄暗い部屋で、武道会の状況を映しているモニターを眺めていたネ。高畑先生が消えて行く姿を見て、一つの思い当たるモノを共に想像したヨ。

【強制時間跳躍弾（B・C・T・L）】

それは、この学園祭の切り札の一つ。もしも、もし仮に私の計画を止める者がいたとしたら。そんな時の切り札だ。3時間先へ跳ばす弾丸。それは私の頭脳があつて作られ、この学園祭の期間だけにしか使えないモノだ。

「それをボン太くんが……助けてくれたのはいいが、何をする気力ネ？」

「知り合いませんか？」

「中身が変わっていないければネ」

計画に支障が出るとすれば厄介ネ。仲間に引き入れようにも言葉が通じないようじゃ困るネ。今からボン太くんの翻訳機を作るとか……時間が無いネ。

「ところで失格にしますか？ 明らかに色違いも合わせて7体いましたけど……」

そう、一般のカメラは妨害の術式が施されているから撮影などは出来ないが、このモニターから見る限り、ボン太くんは水面から水飛沫と共に6体出てきた。その後はスモークも出て分かりづらかったが、凄まじい高速の連撃の一部がハイスピードカメラに捉えられていた。

「ウム、武器は認めたけど、集団攻撃は認めてないネ……失格ヨ！」

S i d e  
o u t

第20話「集団的失格者でございます」（後書き）

感想は随時受付中でございます。

ボン太くんの正体。あの人だと思いませんか？

その期待。裏切られる事になるかも知れませんか？

ちなみに中身は魔法世界に行くか行かないかで決まります。

第21話「優勝とパンツでございます」（前書き）

はい、お久しぶりです。

感想は100件を超え嬉しく、しかし一時的に総合評価2600を超えたんですが、だんだん減りまして残念ぐっすんなフリスタでございます。

今回で、まほら武道会が終わります。

相変わらず戦闘描写は苦手なので、前田らしさに走りましたとさ。

では、ごね。

## 第21話「優勝とパンツでございます」

酷いもんだ。

これが1000万円の賞金の大会と言えるのだろうか。

2回戦……というか、決勝戦が始まるうとしていた。

ここまでで失格言い渡された選手が1名。そして、棄権を申し出る選手が2名出た。失格を言い渡されたのは今この龍宮神社の入り口で写真を取られまくっているボンタ君だ。失格の理由は複数人で試合に出ていたと言うのが主催者（超）の意見らしい。

「仕方ありませんね」

「はっ、タカミチは良い様だったがな。くっくっくっ……」

前田とエヴァンジェリンはボンタ君が舞台上に複数いたことを知っていたのだろう。エヴァンジェリンの笑みが止まらない。どれだけ高畑先生嫌いなんだよ。

棄権を申し出たのは子供先生に勝った『クウネル』という男と、ウルスラの金髪『高音』という高校生だ。

あのガキの親だという噂の『クウネル』というローブの男、オッサンの姿になった後に、あのガキに似た若い赤毛の兄ちゃんにもなった。アレが父親と言うなら信じるが、変装の天才と言われても首を傾げてしまう。そんな男の棄権の理由は『目的は果たした』と

のことだ。……目的って公の場でDVか？

もう一方の、麻帆良学園聖ウルスラ女子高等学校2年の『高音』という生徒は……まあ脱げたし？ 精神的な理由かとも思ったが、こちらにも似たような棄権の理由で、『目的の対象者が敗退した』という理由だ。ワケがわからん。タイミング的に考えてあの子供先生か高畑先生かボンタ君が対象なのだろう。まあ、どうでもいいがな。

そして、犬上小太郎という、この前 前田の執事喫茶で見かけた男子中学生と、クーフェイは前田の前にあっさりと敗北した。そう、最早前田の前に残っているのはエヴァンジェリンだけなのである。

「しかし、アルビレオ・イマが棄権したのは予想外だったがな……」

「キティ。貴方 力を取り戻しているでしょう？」

「ぬわっ！？ アルビレオ・イマ！！ いきなり出てくるな！！」

……いつの間に来たんだ？

「お嬢様お下がりください。この男……私以上に変態の匂いがします」

よし、ならお前も離れる。

「友との約束を果しましたので今回はこれで終わりです。それに、呪いの解けた貴方と戦っては、この姿も軽く消されてしまいますからね……しかし、貴方の その呪いとも言える術式を解いたのは誰でしょうか？」

クウネルは前田に視線を向ける。……イケメンかも知れないが、胡散臭さも醸し出している男だな。というか、何故前田を見る？ 呪いって何だ？

「ふんっ、やっと自分で解くことに成功したんだ。ジジイにも卒業すれば麻帆良から離れても良いと言われたからな、卒業すれば好きにさせてもらおうぞ」

「自分で……？ ふむ……あなたは前田……政宗さんでしたか？」

「前田・ヴァンデンバーグ・政宗でございます」

「その名前……偽りなく？」

「頂いた名前に偽りなどありませんが？」

前田の名前？ 確かに変わってる気がするけどよ……。偽名なわけねーよな？ エヴァンジェリンとそのクウネルだかアルビレオだかの名前の男は二言三言話して去っていく。

そして、決勝戦が始まったのだ。

「うおおおおエヴァたん！！」

「萌えろ！ 萌えろ俺の小宇宙コスモー！！」

「Go to EMK!! Go to EMK!!」

「しかしEMK名誉会長殿と我らが天使エヴァたんが試合することになるとは……」

「これって格闘大会ではなかったでござるか？」

「それは違います！ これはEMK主催のエヴァジェリンさんのお披露目の場でございます！！」

前田がEMKとやらの会員どもに否定の声を上げている。それこそ違うだろ。勝手に格闘大会の場を乗っ取るな。

「私が勝つたらそのEMKとやらも解散してもらおう……」

エヴァンジェリンは口調こそ穏やかかもしれないが、表情は『殺す』と物語っている。そりゃそーだわな。しかし、吸血鬼ね。前田ってマジで人間じゃねーのか？ そうだ。そもそもそこだよな。いつも嘘ばかりだから、『人間じゃない』って点も嘘かも知れない。

『数々の敗者を超え、棄権者、さらには失格者まで出た今大会。ついにその頂点が決まる時が来ました！！ それでは、麻帆良武道会！！ 最終試合を開始します！！ その実力は本物！ 数々の難事件もこの執事先生に任せれば万事解決！！ 前田・ヴァンデンバーグ・政宗選手！！』

／ おおおおおお／！！／  
／ キャー！！！！ 前田先生！！！！／

難事件は更なる難解な事件とともに解決されているけど……つか事件？

『学園のアイドルの道を駆け上がるシンデレラ！！ ファンも1000人を超えた！！ 次は歌かダンスか！？ 麻帆良中等部3-A エヴァンジェリン・マクダウェル選手！！ さあみなさん一緒に！！ Go to EMK！！』



＼ G o t o E M K ! ! G o t o E M K ! ! /

「止めんかー！ー！！！」

『では、Final Battle……Fight！！』

Side エヴァンジェリン

『では、Final Battle……Fight！！』

「くっ……まあいい。ここで貴様を倒せば済むことだ」

「そうですね。では、参ります」

開始直後、前田が一気に距離を詰め、飛び蹴りをかましてくる。しかし、私はそれを鉄扇で受け止める。そのまま前田の足を絡め捕り、組み伏せた。更に動けぬように糸で足と手を固定してやる。

「おや？ これは糸ですか……」

「この場で魔力を使うのは避けてやろう。貴様のお嬢様のためにな。しかし、私が勝てばその理由も全て話せ」

「ふおおおおおつ！ 幼女強えええつ！！！」

「エヴァたん萌えー！ー！！！」

「それとアレも何とかしろ！！！」

「かしこまりました。エヴァンジェリンさんが勝てばそうしましよ  
う。しかし、この糸……このような縛り方は誰から教わったのです  
か？ 食い込んで何やらイケない気持ちになってしまつのですが…  
…これは確か亀甲しば……」

「そんな縛り方しとらん！！ っ！」

はっ とした。一瞬緩ませてしまつた隙をついて前田は気も魔力  
もなく解いてしまった。コイツも魔力など使わずに戦うということ  
か。

「さて、エヴァンジェリンさん。先ほどの攻撃で読めました。あな  
たのそれは合気柔術。鉄扇も使用し技の幅が広がっていらつしやる  
ご様子。そして、糸。いや、実に素晴らしい。魔力がない状態でも  
ここまで戦える方は他に中々いないでしょう」

む？ 何だ？ 棄権でもするのか。しかし、たった一手で全て読  
まれるのは癪だな。まったくふざけた執事だ。

「しかし、糸を使ったのは不味かったですね」

「何だと？ どういう意味だ」

前田がクイツと指を動かす。私の左腕が上がる。

「なっ！？」

「頂戴しました全て」

いつの間に！？  いつの間に糸の感覚が消えていた！？

「棄権なさいますか？」

魔力を使えば容易に解けるが……それでは勝ったことにならない。というか、魔力を使いあつたら勝てる可能性も減る。麻帆良全体を破壊してもいいというなら良いが、前田だけを倒すとなると、魔力が足りなさすぎる。魔法もバレる規模になるだろう。

私は鉄扇を使い、糸を捻じる。その出来た隙を使い糸から脱出した。

パチパチパチ

「お見事です」

……勝てないということか？ この男にはお互い同じ条件下になつても勝てないということなのか？

「棄権したほうが身のためですよ？」

「ふ、ふざけるな！  なぜ負けを認めなければならない！！」

「さようでございますか？  では失礼して（クイツ）」

前田が指を下に動かす。

スルスルスル

＼ お？ ……っ！？ オオオオオオオオオオッ！！？ /

「……何だ？」

特に変化は起きていない。しかし観客は間違いなく私たちを見て歓声を上げている。

「下をご覧ください」

下？ ……そこには、短くなっていく黒のショートパンツがあった。そう、それは私の衣服だ。

「っておい！！？」

「さあさあ！ どうします！？ 脱がされてしまいますよ！？ 少しずつ少しずつ短くなっていき、お子様パンツが見られてしまいますよ！？」

＼ お子様パンツ！ お子様パンツ！！ ！

「誰がそんなもの穿いてるかー！！」

「なっ！？ は、穿いてないのですか！？」

＼ ざわざわ ざわざわ ざわざわ …… ！

「そーゆー意味じゃない！！」

「予想以上の嬉しさ！！ 露出展開スピードあーっぷ」

「ってコラ！ 進めるな！ 止めんかアッ！！」

『こ、これは汚い！ 前田選手の非情な攻撃がエヴァンジェリン選手を襲う！！ いいぞ！ もっとやれ！！ 下から攻めるとは分かっているうー！！』

「貴様！！ 私の幸せを願ってるのかも全て嘘か！！」

「こつこつという幸せもあるのでございます。あー幸せ」

「お前が幸せになってどうする！！ 棒読みじゃないか！！ って止めないか！！ くっ！ 分かった！ 分かったから！！ 私の負けだ！！ 棄権する！！」

『受け付けません！！ さあ！ パンツまであと5センチか！？ 張り切って行ってみましようー！！』

「どいつもこいつも ふざけるなーッ！！」

Side out

繰り返しになるが……。

酷いもんだ。

これが1000万円の賞金の大会と言えるのだろうか。

「すごい試合でしたわね」

「そうですね〜大興奮でしたよ！！　とくに最後の試合なんか……」  
委員長と相坂はとりあえず満足しているようだ。  
相坂に関しては別の意味で興奮しているようだしな……。

確かに別の意味で凄い試合だったけどな。

まともな試合は最初のほうだけで、最終試合は脱衣試合になっていた。

結局、エヴァンジェリンは残り1センチで止められ、優勝した前田の頭を殴りまくっていた。前田はそれを笑顔で受け止め続けた。何気ないいいコンビなのかもしれない。

お？　もしかして、エヴァンジェリンに前田を渡しちまえばいいんじゃないか？　どうにかして奴らを引き合わせる方法はないだろうか？

そんなことを考えていると授賞式が始まっていた。超　鈴音が今大会の総括している。

『　そして、エヴァンジェリン選手の下着がもう少しで見えそうだったのは非常におしかたアルネ！　「殺すぞ貴様ー！！」　優勝者の技量はまさに学園最強……いや、世界最強といっても過言ではない！　今大会主催者として大変満足のいく内容だったヨー！！』

エヴァンジェリンの叫び声が新鮮だ。吸血鬼という話がマジか嘘かは分からないが、結局アイツも私と同じ側の人間なのかもしれない。

『尚、あまりに高レベルな……或いは非現実的な試合内容のため、

大会側のやらせではないかとする向きもあるようだが……』

／ざわっ……／

『真偽の判断は皆様に任せるネ　選手及び観客の皆様ありがとう  
！！　またの機会に会おう！！』

／ワアアアアーツ！！／

／またやるんだろー！？／

／ウソでもホントでもいーよ！　スゲー　ショーだったぜ！！

／

／来年待つてるぜー！！／

来年か……もういいだろ。映画とかだけで十分だぜこんなのはよ。

『さあ　大会主催者　超　鈴音から優勝、前田・ヴァンデンバーグ・  
政宗選手に優勝賞金1千万円が手渡されます！！』

お？　記者が大勢駆け込んできたぞ？

「よし！　カメラ動くぞ！」

「麻帆良スポーツです！！　前田選手　優勝のご感想は！？」

「1千万の使い道は！？」

「ありがとうございます1千万はお嬢様のパンツを購入する資金に  
充てさせていただこうと思っております」

「という事は、前田選手のご主人様はパンツを……その穿いてい  
ないと？」

なんてアホな会話をしているんだろう？

「確認してまいります。少々お待ちくださいませ……」

「っておい！ こっちくんない！ 人混みが多すぎて逃げ場がねえんだよー！」

「お嬢様。失礼ですが今日はパンツを穿いていらっしやいますか？」

「いつも穿いていらっしやるわボケー！」

「前田！ 私も穿いているわー！」

「私も穿いてますー！」

お前らは答えていい！！ つーか私もだ！！

「恐れ入りました……困みにお色の方は……？」

「この変態執事ーッー！」

「そ、その……薄いピンクですわ」

「白ですー小さいピンクのリボンが付いてますー」

答えていいっつーのー！！

「お待たせいたしました。残念ながら穿いていらっしやるようすで、申し訳ございません」



「そうですね。それは残念ですね。」

「聞こえてるぞ！ 何が残念だ！！」

「では、パンツだけに1千万を？」

「いえ、数日前に再度計算したところ497枚でこと足りそうなので、残りの金額は生活費や学費の方に……。」

「もうこの学園はバカばかりだ……。」

第21話「優勝とパンツでございます」(後書き)

感想は随時受付中でございます。

第22話「どストライクでございます」(前書き)

## 第22話「どストライクでございます」

Side 超 鈴音

優勝は前田先生ネ。フッフ、面白い。あのエヴァンジェリンをも手の平の上で踊らせるとはネ。仮にも副担任とは思えない勝ち方だたケド。まあ盛り上がったから良しとするネ。

そして、この大会。期せずしてネギ先生にも有益なものとなたようネ。本物の実体ではないとはいえ、憧れの父親に会えて良かったかた……。まあ、さつき聞いた話によると肋骨が数本折れているようだガ、あのクウネルという男。アルビレオ・イマが何とかしてくれるだろうネ。

「待ちなさい超君<sup>チャモン</sup>」

これはこれは魔法先生が5人とは、中々厳しい警戒態勢になたネ。しかし、遅いネ。世界樹の魔力が満ちているこの学園祭期間にカシオペアがあれば、君達に捕まることはないネ。

それでも、高畑先生がいなのは“あの時”ボン太君が確実に時間跳躍弾を撃ち込んだからに違いないネ。……そう考えるとボン太君にももう一度会いたいネ。まあそれはさておき……。

「これはこれは、皆さんおそろいで……お仕事御苦労様ネ」

「君は要注意生徒の度を超えている。魔法使いの存在を公表するなどどんでもない事だ。今度こそ連行させてもらおうよ」

「フフ……古今東西、児童小説・漫画でも魔法使いはその存在を世間に対し秘密にしている……という話が多いネ。何故かな？ 私から逆に聞こう。何故君たちはその存在を世界に対し隠しているのかな？ 例えば……今大会のように強大な力を持つ個人が存在することを秘密にしておくことは人間社会にとって危険ではない力？」

「ガンドルフィーニ先生は反論してくるネ。正義の魔法使いネ……。そんなものに何の価値があるというの力。そんなものが“あの世界”で何が出来るといふの力？ そうネ、あの世界にしないための過去を作らなければいけない。」

「なっ！？ それは逆だ！ 無用な誤解や混乱を避け現代社会と平和裡に共存するため我々は秘密を守っている！ それに強大な力を持つ魔法使い等というのはごくわずかだ！」

「秘密を守る……正義が何も救わずして何を守るんだろうネ？ 自分の見える範囲だけを守るだけで、苦しんでいる人が大勢いても耳を貸さないのが魔法『先生』と言えるのかネ？ まあ今の段階では何を言っても無駄ネ。強制的に認識させる必要があるネ。」

「……と、とにかく。多少強引でも君を連れていく」

「ふむ……出来るかな？」

「捕まえるぞ！」

「この子は何をしてくるかわからない気をつける！！」

「ハッ はい！！！」

「フ……」

カシオペア起動。

「3日目にまた会おう魔法使いの諸君」

さて、私を止められるかな。

……前田先生はこちらに着かないにしても、魔法先生側に着くこともないだろう。

今までに盗聴で録音したモノを聞く限り、長谷川サンを魔法に関わらせないようにしたいようだケド……もし仮に邪魔をしようとしても一人では何も出来ないだろうネ。

Side out

前田がインタビューを受けている間にウチのクラスのロボ、茶々丸が私のパソコンを覗き込み『魔法』に関して口を出してきた。何となく繋がってくるな。そうだ。コイツはほとんどあのエヴァンジェリンと一緒にいる奴だった。エヴァンジェリンが吸血鬼という話も信じたわけではないが、『魔法』存在を知っている茶々丸。そして、常に傍にいるエヴァンジェリン。ソッチ系で繋がりがあってもおかしくはない。

「あー、その何だ？ 超科学に、最新魔法……か？ そんな話をされても私は……」



でも、色々あり過ぎた。京都の修学旅行に行く前までだったら『ドッキリ』で信じたかもしれないが、今は『魔法』と言われた方が、スーッと入ってきてしまうほどに色々あり過ぎた。

「……ですの、もし長谷川さんが前田先生と一緒に超さんを止めるということであれば、敵対することになります」

「な、何で私が戦うんだよ。一般人だつーの。つーかなんだ？ アンタはソッチ側なのか？」

「はい、生みの親の頼みとあつては断れません」

「ふうん……」

こいつ、本当にロボットなのかよ。本人から言われると何とも言えない重苦しさが来るなこれ……。

お、webページが更新されてるな。小さく子供先生の記事もあるな。

『ウワサの子供先生涙の極秘プロフィール』

『大会出場の理由』

『行方不明の父を探すため』

けっ、興味ねーよ。教師の仕事なんて前田がやってるじゃねーか……まともじゃないことが多いが。それに父親探したらソッチに専念しろよな。まああのクウネルとかいうのが父親らしいし？ 見つかったんだしもう大丈夫なんだろ。



お？ また更新があるな。……うおっ前田の優勝で埋め尽くされやがった……。

『前田選手の賞金の使い道は全額お嬢様へ!!』

『パンツを穿かないお嬢様の流儀！ 前田選手へのムフフな挑発か!?!』

『パンツお嬢様降臨！ 約500枚ものパンツを手に入れる!!』

「ま、前田……!!!!」

「お嬢様？ 如何なさいました？」

「前田選手！ そちらが前田選手のお仕えする御主人様ですか!?!」

「今日はパンツは穿いてるそうで!?!」

「穿かない日はあるんですか!?!」

ギヤーツ!! 記者を連れてくるんじゃないねー!!

「おい 長谷川千雨。これを前田に渡しておけ。頼まれていたものだ」

「飴玉？」

私は記者どもから逃げる際にエヴァンジェリンから飴玉の沢山入った瓶を受け取る。青と赤の飴玉しか入っていない。ってことは市販のものじゃないな。色のバリエーションがなさすぎる。ってことはこれは魔法のアイテム的なアレか？ いや、考えすぎだ。茶菓子で前田がエヴァンジェリンに預けていたとか、そういった感じで返されたようなものだ。……たぶんそうだ。

私は走りながらその瓶の中身を訝しげに眺めていた。っと記者の足音が近づいてきやがったか……ん？

「お嬢様。記者の方々には追われるほどに人気がアップしたのですね。ちうたんファンとして心よりお祝い申し上げます」

「いつの間に戻ってきやがったこのアホ執事！！　そもそもお前のせいだろうが！！　記者は！？」

「はい、とりあえずのところ撒きました。数分は大丈夫でしょう」

「ふう、そうか」

私は人気のない路地裏に入り、走るのを止めた。

「あー無駄に疲れるな……　ったく」

「飲み物を買ってまいりましょう。しばしお待ちを」

そう言っつて前田は去っていく。

そして、私は重大なミスを犯してしまった。自然な流れで先ほどエヴァンジェリンから預かった瓶の蓋をあけ、1つ口に放り込んでしまったのだ。いつも前田の菓子を食ってるせいで口が寂しかったのか、たまたま出た疲れのせいなのかは分からない。とにかく私は飴を1つ食べてしまったのだ。口に入れた瞬間にハツとした。その驚きで飴を飲み込んでしまう。そして、それと同時に私の体は……。

ボンッ

「んなあつ!？」

幼女化していた。

……あ、ありのまま今私に起こったことを話すぜ？ 私は食べる気のなかつた飴を間違つて食べて、驚いて飲み込んだ。その瞬間に幼女化していたんだ。な、何を言ってるのか分からねーと思うが、私も何が何だか分からねー……。頭がどうにかなりそうっつーか、体自体がどうにかなっちまってやがる。非現実的な魔法なんて信じたくはねー。だが、その信じたくないモノの片鱗を味わってる最中だぜ……。

服はブカブカで脱げ落ち、とりあえず私はしゃがみ込んだ。冷汗が止まらない。ど、どうしろと？ とりあえず人通りはない狭い道だ。今現在は大丈夫だ。服を抱えてダッシュか!? どこへ!? でもこのままでいるのも無理だろ!?

コッ…パシャンッ……

「っ!?! ……ま、前田……」

気が動転している私のもとに前田が戻ってきた。手に持つ飲み物を落とす、いつもある意味で冷静さを失わない執事は、驚きのあまり……。

「どストライク!!!」

抱きついてきた。

ドゴッ……!!

「ふざけんなー！！ 何だこの飴はー！！ 元に戻せー！！」

「青い方を食べたのですね。いやあ分かってらっしゃる。流石はお嬢様です。人心の掌握に長けていらっしゃる！！ 最高です。あ、パンツは白だったのですね？」

どぶっ！ どぶっ！ どぶっ！

私は前田の腹を殴り続ける。

「うるせーうるせー！！ 説明しやがれ！！」

「とりあえず、こちらにお着替えくださいませ。こんなこともあるうかと、衣装も御用意いたしておりましたので」

前田が渡してくるのは麻帆良の小学生の制服一式だった。何故ランドセルまで……。毎回ながら用意が良すぎやしねーか？ ああおい？

「じゃあ、時間が経てば元に戻るんだな？」

「はい、名残惜しいのですが、戻ってしまいます」

それなら良いか。というわけでもないが、何だよ！？ 青で小さく、赤で大きくつてメ モちゃんか！？ メル ちゃんなのか！？

しかし、冷静に……なりきれんが、落ち着いて考えれば、中々すげーなこれ。ちうの妹として売り出すか。



第22話「どストライクでございます」(後書き)

感想は随時受付中でございます。

番外 - ? 「時軸の違う主でございます」 (前書き)

今回はかなり短めです。

結構前に【PALUS 様】より提案のあった『他世界のキャラに仕える編』つてのがあったと思いだし、今更ながら見終わった『まどか マギカ』これ、組み合わせない手はないでしょ。って思い、さわりだけを展開しました。

これを書くかどうかは反響次第だね。

今日も前田はわけがわからないよ！

番外 - ? 「時軸の違う主でございます」

Side とある時間軸の違うお嬢様

「僕と契約して、魔法少女になってよ」

願いを何でも1つ叶える事が出来る。

そんな事があつたら何を引き換えにしてもって、そう思いますか？

そんな願いがありますか？

どんな願いだつていいんです。

『お金持ちになりたい』でも

『有名人になりたい』でも

『あの人と両想いになりたい』でも、何でも良いんです。

でも、願いを叶えるためには魔法少女になって魔女と戦わなくては  
はいけないんです。

私には、そんな大きな願いなんてありません。



「鹿目まどか……関わらない方がいいわ」

でも、私にも何か出来るかと思って……。

「では、私と契約して『お嬢様』になつて頂けませんか？」

契約には差し出すモノは何もいらぬ。ただ、この人のお嬢様になるだけ。

特別な力なんて与えられない。戦う力なんて与えられない。

この人を私の執事にするだけで、この人が私を守るために戦ってくれる。

この人が、皆を守ってくれる。

「では略式ですが、こちらの方にサインを頂けますか？」

私は迷わなかった。

「よろしくお願ひします前田さん」

そう、この執事のお兄さんは『前田政宗さん』執事服のカッコいい人。

笑顔を絶やさない素敵な人に見えました。

「お嬢様。今日のパンツはこちらの色が良いかと思えます」

「あ、ありがとうございます……あのやっぱりここまでしてもらっているのはちょっと……」

「……さ、左様でございますか。大変申し訳ございません。やっと見つかった主人に浮かれ過ぎたようです。これは死んでお詫びを……」

「うわーっ!? ロープ! ロープを首にかけないでください!! 分かりましたから! 分かりましたから!! 色だけ! 色だけ決めていいですから!!」

「お嬢様……なんと慈悲深きお言葉……」

「まどか? 何騒いでるの?」

「あつ! お母さんだ!! か、隠れてください!!」

「その点は大丈夫でございます」

「一人で何騒いでるのよ? さっさとご飯食べに来なさい冷めちゃうわよ?」

「え? あ、うん……え?」

隣の前田さんは笑顔のままにいる。見えてない……?

少し変態さんみたいな人ですけど……でも、この人こそが、これ

から先に待ち受ける私の……うっん、みんなの運命を変える執事さんでした。

Side out

「明日で学園祭も終わってしまうのですね」

夕暮れを眺め、前田はそう漏らした。

「ああそうだな」

私はテキトーに答え、立ち止まる前田を置いて行こうとした。

「お嬢様。ここは『何かあったのか？』と聞くシーンでございます」

「めんどくせー……。何かあったのか？」

「はい！ 少し昔の事を思い出しまして！！ 少し長くなりますがよろしいですか！？ ありがとうございます！！ その昔、ワルプルギスの夜という魔女を相手に戦った一大決戦！！ 挑むは前田ただ一人！！ 一人では決して勝つことなど不可能と謳われた魔女に前田は挑んだのでございます！！ 手にパンツ握る戦いの火蓋は今、切って落とされたのでございます！！ 前田がまず取り出したるは種も仕掛けもないマジックハット

！！」

またわけの分からん設定が始まったぞ……。許可してねーのに喋

りだしやがったし。すげーイキイキしてるし……。

「どーでもいいけど……私のパンツをマジで握るな……！」

スパーンツ……！！

ただ今、ちびちう状態により、パンツも穿きかえられています。

「さて、そろそろ薬の効果も切れる頃合いです。どうぞ、こちらの試着室へ……こちらが、解除薬でございます」

「解除薬？　なんだそれ？」

「はい、こちら魔法薬などの効果を解除する薬でございます。これで強制的に元のお姿に戻す事が出来ます……おや？　震えておりますが、寒気でも？」

「最初から飲ませろ……！！！」

番外 - ? 「時軸の違う主でございます」 (後書き)

感想は随時受付中でございます。

えーと、無駄に言ってみるか。

えっとこの『まどか マギカ』in前田を見たい人は感想の【良い点】で

【はいはい前田前田】  
と書き込んで下さい。

普通の感想は【一言欄】でお願いします。

それが10件超えたらやってみる。

あ、ただし。これは先に言って置きますが、この『まどか マギカ』はこのネギま！編が完結しないと書けません。ネタばれがありますので。

あ、それでも『まどか マギカ』も最後の方まで行かないとバレないのか……。同時進行もありなのか……。更に更新遅くなるけどね！！

その辺も読者様に任せます！！ 感想欄で思いの丈を語ってね！！

### 第23話「暗躍する執事でございます」（前書き）

沢山のアンケートご回答ありがとうございます!!  
はいはい前田前田は24ポイントを獲得し、エントロピーを凌駕しました!!

でも、まだまだ書いてないからね。

その点に関しても後書きでアンケしなきゃいけない点があるからね。

もう少し待っててね。

さてさて!!

『このパンツ好きの変態執事が凄い!!』

って言うランキングがあつたら1位の小説!!

……だと思っ!!

さて、このお話で色々と分かってくるのよ!!?

ボン太くんの正体とは!?

アスナとタカミチの未来は!?

ザジと前田の関係とは!?

怒涛の連発解明の回！！  
でも解明しない点も！？

## 第23話「暗躍する執事でございませぬ」

学園祭2日目。 14時頃。

「お嬢様、こんなに小さくおなりになられて……昔を思い出しますね。今とは違いやんちゃんなお嬢様は、ところ構わず走り、よく転んでは旦那様を困らせたものです」

完全100%捏造の記憶を披露するのは当然ながら前田だ。完璧な執事だと思っただか？ 残念前田でした！ ってわけだ。そもそもこの小さい姿になったのもこの前田がエヴァンジェリンにメルちゃんの赤と青の飴を頼んでいたせいだ。

とりあえず今は着替えて『ちびちう』としてやり過ごしている。ちうの妹としてある程度の見返りは確保しておくとする。っと、委員長じゃねーか！？ 私は見知った顔を見かけて、今の自分の姿を見せまいと姿を隠す。バレるとは思わないが念の為だ。

「あら前田、千雨さんと一緒じゃありませんの？」

不用意な事言っただけじゃねーぞアホ執事……。

「これは あやか様……何やらお急ぎのご様子ですが、何かございましたか？」

「ええ、さやかお姉様も戻りましたし、久しぶりに家族が集まってお客様もお呼びして晩餐会ですわ。今は着替えなどの準備を急いでいますの。……もし、前田も時間が許すのなら戻ってきてても誰も文



句は言いませんわよ？」

おー！ 大チャンスじゃねーか！！ しかし、この姿のまま委員長に声をかけても……前田！ 何とか首を縦に振れ！！

「申し訳ございません。お嬢様のお傍にいなければ、お嬢様の命の危険がございますので」

「あ……依存症の……」

アホー！！ 依存症の設定を引つ張るな！！

「もしよろしければ、千雨さんも一緒に構いませんわよ？」

「お嬢様は何より普通の日常を欲する方ですので、申し訳ございませんが……」

お前が普通の日常を崩す張本人だろうがー！！ あー……委員長が行つちまう。何かこの学園祭中に何回か前田を引き剥がすチャンスがあつたが……ことごとくこの執事に妨害されてないか？

「気のせいでございますお嬢様」

心を読むなつてーの！

「ん？ ありや神楽坂か？ それと高畑先生……」

髪を下ろした神楽坂はかなり印象を変えていた。神楽坂は何故か知らんが高畑先生が好きだ。周知の事実だ。オッサン趣味だ。素材は良いが趣味の路線は理解出来ん。もったいねー話だ。

「お嬢様。教師と生徒の恋愛に関してどう思われますか？」

「あ？ んなもん駄目に決まってるだろーが……」

「それは何故でしょうか？」

「何時になく真面目な顔だな……。まあ単純に世間体の問題だろ。双方の親もそうだろうけど、色々な眼が付きまとうだろ」

「周りの誰もが祝福していてもでしょうか？」

「誰もが祝福ね……。」。

「ん〜、高校を卒業したら結婚とか、そーゆーのなら良いんじゃないの？」

「なるほど……。やり過ぎましたか……。微調整をしなければ……」

何だ？ 前田があの人を見て何かを呟いたみたいだが、よく聞き取れなかった。まーどーでもいいことだ。

「ふもっ！」

と、そこにやって来たのはボン太くんだった。

「なるほど……。それで試合のチケットをお嬢様にお渡ししたのですね」

「何の話だよ？ さっきの武道大会の話しか？」

「ふもふも！」

「大浴場での一件を謝罪しておりますね」

「大浴場での一件？ 何の話だ？」

いや待て……そもそもどーしてボン太くんはこの姿の私を、私が小さくなってる事を知ってるんだ？

パシヤッ！

「ふもつふ！」

「サービスだそうです」

ボン太くんとこのツーショット写真を撮られた。何かイベントやってるんだっけか？

ザザ……ザー……

やっとアスナ君に会えた。なんて綺麗になっただろう。

前田先生が言うには最近女子寮を転々として、暇な時間があれば一人暮らしの部屋を探しているらしい。ここはやっぱり前田先生に言われたとおりに、アスナ君は僕が引き取った方がよさそうだね。

ザザ……ザー……

「流石デスメガネ……」

「あの人数を十数秒で……」

つと気付いたら見知らぬ不良グループを寝かせてしまった。

「たたた！ 大変だー！！ サーカスの動物達が逃げ出したー！！」

「お……」

「なっ……！？ ゾ……キリン！？」

全く、デートどころじゃないなこれは……。更に工学部のロボテイルノも暴走した。この学園は事件が起きない事はないからね……。

そして、夜のパレードを二人で見る。そんな時間になっていた。僕は場所を移動させて貰い、人気のない建物の屋上にやって来た。

「大事な話があるんだアスナ君」

「……はい」

「僕と一緒に暮らして欲しい。今はまだ学生だから住まいを提供するだけになってしまふけど。高校を卒業したら。僕と結婚してほしい」

「た……たかはたセンセイ……」

その笑顔に浮かぶ涙が答えだった。一生放さない。大事にしよう。魔法使いと言う仕事も辞めて、幸せな家庭を築こう。

ザザ……ザザ……

Side out

さて、パレードも終わった頃に私は、前田に『解除薬』という元に戻す薬を受け取った。最初から渡せてんだよ！ 代わりに前田の腹には膝蹴りを入れてやった。効果の程は見えない。ちくしょう

……。

元の姿に戻ると前田は教師の仕事があるらしく去って行った。すぐ戻るとか言ってたが、まあどーでもいい。私は一人学園祭の街並みの中を歩き、帰ろうと思った時にメールが来た。隣の席の明石からだ。珍しいというよりも初めてだ。何故ならアイツのアドレスなんて知らないからだ。件名に「明石ゆーなだよ！」って入って無ければ分からなかった。

……天才の送別会？ 今からかよ！？

Side 超

【量子力学研究会―（大学）】

「そうかー家の都合なら仕方ないが……突然だねえ残念だよ」

「ちゃ 超君が転校とは本当かね！？ せめて今のプロジェクトが終わるまで待てんかのう……君がおらんとウチは……」

「スマナイ教授。研究データはしっかりまとめておいたヨ」

【お料理研究会一（7号店）】

「そっかー超がいなくなると今後の経営が心配ねえ」

「五月がいればお料理研も超包子も大丈夫ネ」

【東洋医学研究会】

「いつでも戻ってきて下さい超会長!!」

「会長の席は空けて待ってますからね!!」

一通り回ったカナ……クラスにはクーにしか伝えてないケド……。

「超……」

「皆さんにお別れは済ませてきましたか？」

茶々丸とハカセが私の帰りを待っていたネ。茶々丸もいつの間にか随分とAIが進歩してるネ。

「でも超さん良いんですか？ このまま作戦を続けると……助けてもらった前田先生にも迷惑かかるんじゃないんですか？ 前田先生

は長谷川さんを魔法に関わらせないようにしてるんですね？ モロバレになっちゃいますよ？」

「仕方無いネ。あれからしばらく観察もしてみたケド、こちらに付くこともなさそうだ。どんな目的かは分からないガ、あの人に目的があるように私も目的があつてここに来たネ。誰にどう思われようと構わない。私は私の目的を果たすまでネ」

「くつくつく……なかなか良い心意気だ超 鈴音」

「エヴァンジェリンさん!!」

「マスター!!」

ほう…… 箒で飛ぶまでに魔力も回復しているようだネ。

「安心しろ 明日も祭りだ。酒の肴に見物させてもらうだけだ。ただこれだけは言っておいてやろう。仮に前田がお前達と敵対するようであれば、数分が限界だろう。魔法だとか科学だとか、そんなモノはお構いなしに排除されるぞ。お前の得意な分野であろうともな」

確かにその能力などは底が知れない魔法先生だケド……。

「随分と評価してるんだネ？ 仮に敵対したとして、倒してしまつても問題ないカナ？」

「はっ、それは素晴らしい。存分にやってくれ。その時は加勢しようじゃないか。追い打ちをかけて一度はボコボコにしてやりたいところだ。茶々丸は貸してやる。壊すなよ？」

「ありがとうございます。マスター……(ピピッ)(……超。メールが来



ました。前田先生からです。すぐにここに来るそうです」

「ほう？」

面白い。このタイミングで何をしてくれるのかな？ 魔法先生のネットワークで私を止めるように言われた力。それとも私の計画を知った力。いずれにせよ主人の為に魔法の存在を隠匿する気力ナ？

「こんばんは超さん。それから……エヴァンジェリンさん。学園祭なので浮かれるのは分かりますが、浮いてもらっては困ります。飛んだ幼女でございますね。卒業に響きますよ？」

「ぐむっ！？ ……わ、悪かった……」

エヴァンジェリンさんが素直に箒から降りてくる。2段構えで上手い事言ったネ。卒業に響くと言っても、呪いで出来ないのにネ。可哀そうに。

「私に何か用力ナ？ 前田先生」

「申し訳ございません。盗み聞きをしてしまいました……学校をお辞めになるそうです」

「そうだね。家の事情だよ」

「左様でございますか……不肖 前田。このようなことしかできませんが、受け取って下さいませ（パチンツ）」

ガシツと掴まれる私の両腕。それはボン太くんだったネ。

「ふもふも！」

いや、だから何を言ってるのか分からないネ。ボン太くんは跳んだ。いや、飛んだ。くっ！！ カシオペアを……ん？ 速度はかなり抑えられている……ゆっくりと下ろされて……？ ハカセや前田先生達も追ってくるネ。これは一体……？ 着地点には複数の気配があるネ。

「（龍宮たのむネ……）」

「（了解した）」

龍宮は着地地点に現れるが。ここが決戦の地ということだろうか？ いや、それにしても場所を変えた意味が分からない。さっきの場所の方が民間人は少なさそうな場所だが……？

＼ パパン！ パパパーーンツ！！！ /

複数の破裂音。それはクラッカー。そして、現れた複数の影は……

＼ ようこそ！ 超 りんお別れ会へ！！ /

「お………？」

前田先生は既にコップに飲み物を注ぎ、食べ物を用意している。執事らしい働きをしているネ。……良い先生だたヨ。長谷川さんの件は悪いケド、半信半疑な知識も全て信じるように、魔法は強制認識してもらつネ。

Side out

＼カンパーイツ!!! /

「さあ！ 今日も朝までブワーツと騒ぐよー!!」

「いえー……」

「いや、マジで寝ないと誰か死ぬぜ アイツ等」

いつから寝てねーんだっつー話だよ。学園祭開始2日前の準備からだろ？ 私はまあ徹夜とか慣れてるし、仮眠は取ってるけどよ……。明石とか佐々木とかは不眠不休で遊び倒してるだろ!?

前田は……飲み物配って料理用意してと……ふむ、まともに来るじゃねーか。今はザジに料理を用意してるな……何か話してるけど、あいつ等はどんな関係なんだろうな……? ってさっきから何だこいつ等は!? ザジが連れてきた奴らだろ!? 近い! 近い!

S i d e ザジ

前田先生がお肉を切り分けてくれる。こんなに沢山の料理を用意したのは前田先生らしい。相変わらず規格外な人だ。

「ザジさん。先にお断りを入れておかなければなりませんね」

「……？」

「明日は邪魔しないで頂きたく思います」

「邪魔した事無いです……？」

「京都で私の足元に障害物の魔法を使いましたね？」

「……バレてました？」

私は宮崎のどか と ネギ先生が仮契約を結んだ時の事を思い出す。確かに前田先生はそれを妨害しようとしていて、更に私はそれを妨害しようとした。規格外な人だけれど、独断でネギ先生も必要だと思ったからだ。でも、前田先生はネギ先生の契約を全て白紙に戻した。一人でケリを付けるようだ。

「はい。恨みがあるのも分かりますが……」

「恨んでないです……でも……姉は前田さんの事が……」

そう、私の姉は前田先生の事を……。

「ぎゃー!!! 放せー!!!」

っ!?! 長谷川……千雨……。

「助けを呼んでますよ? 前田先生」

「……ふう。 ああ! お嬢様!? 私も混ぜてくださいー!!  
どうかパンツは私に!」

「お前は呼んでねー!!! パンツをやる話もしてねー!!!」

楽しそうで何よりだ。本当に楽しそうにしている。心の中ではぎ  
っと別の表情を持っているハズなのに……。

S i d e o u t

第23話「暗躍する執事でございます」（後書き）

お嬢様。感想は随時受付中でございます。

さて、魔法世界に行きますか！！（おい）

行かないとか言っても変化はあるもんだよ！ 前田行きまーす！！

さて、前回から連発して申し訳ないが、アンケートにお答えください！！

まどマギ編での前田の主人は【まどか】それとも【ほむほむ】それとも【ティロフィナーレ】それとも【残念！ さやかちゃんでした！】それとも【アニコ】どれがいいですか！？（名前に悪意なし！ 本当だよ！？）

選ぶ主人によって長くなるか、短くなるかも変動しますが、要するに誰が好きなのよ！！ って話です。（違うか？ 合ってるよね？）では今回も感想欄の【良い点】で『はいはい』の後にキャラクター名を入れてください。

（仮）良い点：はいはい残念さやかちゃんでした。  
とかね。好きに入れて良いですよ。『はいはい杏子杏子』とかね。

一言に普通の感想を頂ければと思います。

何とぞ！ 何とぞよろしくお願いします！！

第24話「学園祭最終日でございます」（前書き）

さあついに始まります学園祭最終日！！

でも残念なことに千雨お嬢様は本日ほとんど休み状態でございます。

ちったあ周りにも目を向けてみようかってわけです。

ボケとツッコミが少ない分、今回はネタ祭りとなっております。



## 第24話「学園祭最終日でございます」

Side ????

「ちゃんとマスターの御主人様に謝れたデスう」

「このスーツ脱ぐのも久しぶりだな」

「マスターから連絡……」

「ダミーシステムに切り替えて再起動デス？」

「再起動ってどうやるんだ？」

「言語モードを一度切り替えると強制終了……その後もう一度言語モードを『ボン太くん語』に戻す……」

「ダミーシステムってーのはなんだ？」

「データ届きました。流石マスターですう」

「ではインストール後に再起動します……」

「「おお~~~~~!!」「」

Side out

学園祭の2日目が終わろうとしていた。クウネルさんに骨折などを治してもらい保健室で寝ていた僕のところにはメールが来ていた。超さんのお別れ会らしい。家庭の事情による転校。仕方のない事だ。

保健室を後にして僕は学園祭の街並みをボンヤリと眺めていた。そして、もう一通メールが来た。超さんからだ。『魔法について』話したい事があるという内容だった。魔法がバレた。僕はそう考えて、次の日 学園祭最終日の早朝。断る事無くメールで指定された場所へと来ていた。

「よく来たねネギ坊主」

「超さん……魔法について……」

「フッフ、私のお別れよりもそっちの事ネ。最初の頃とは随分と変わってるじゃないかネギ坊主？」

その言葉に僕は罪悪感等は何も感じなかった。それほどまでに僕は強くなっているのかもしれない。精神を安定させる。常に冷静である事は優れた魔法使いの在り方だと教わった事がある。僕は少しずつ前に進んでいるのだろう。アスナさん達とは別れてしまったけど、その分『<sup>マギステル・マギ</sup>偉大なる魔法使い』に近付いているんだと思う。

「まあ良いネ。着いて来ると良い……」

言われるがままに暗い通路を進んでいく。地下に入り、下水路を進み、狭い通路を通り、何分も会話も無く歩く。やがて、大きな扉の前にたどり着く。

「ここは……？」

「ネギ坊主。私は魔法使いの存在を全世界に公表しようとしているネ。『魔法使い』からすればそれは禁忌とも言える行為なのかもしれないが、君にとってはどうかナ？」

「だ、駄目に決まってるじゃないですか!？」

「どうしてかな？ 魔法の存在が公表されれば、君は師事する者を探す事は容易になり、何者かに邪魔される事も無くなる」

この人は……僕の状況を全て知っている……。

「超さんあなたは一体……」

「正直に話そう。私はネギ坊主の子孫で、未来から来た人間ネ。茶々丸の様なガイノイドが作られるのはこの世界ではまだまだ先の話…… オーバーテクノロジーと言われる科学知識。それを持って私は来たネ」

確かに、僕は機械とかは詳しくないけど、人間ソックリのロボットだとかはあんなに精巧に作られていない。でも、超さんが作っているモノはどれも今の新聞やテレビで入ってくる情報よりもかなり進んでいるモノだ。僕の子孫とかは信じがたいけど、未来から来たという事に関しては可能性を否定しきれない。

「でも、時間跳躍……？　あり得ない。そんな魔法なんて……」

「最新魔法と最新科学ネ」

そう言つて超さんは懐中時計を取り出す。

「ネギ坊主。何でも良いネ、私を身動き取れない魔法を放つてみると良い……私は瞬時に抜け出して見せるヨ」

言われるままに僕は超さんに向けて拘束の魔法を放つた。

「……魔法の射手　戒めの風矢！！」

何本もの拘束の風が超さんの動きを封じる。京都で会つた白髪の少年もこれで一度は捕まえた……これから瞬時に逃れるなんて事は……。

「この通りネ。ネギ坊主」

声は真後ろから聞こえた。そして、目の前の拘束は対象が消え一気に締まる。

「まさか……どうやって!？」

「これが魔法と科学の力だヨ。私は事が済めば未来に帰るネ。それがお別れの理由ネ。そして、魔法が世界に公表された時、君を邪魔する障害は無くなる。君は自由に魔法使いとして父親を探せるだろ  
う」

魔法を公表しても僕の邪魔するモノは無くなる。

「……僕は何をしたら良いんですか？」

「ネギ坊主は魔力だけは一級品ネ。きつとアレを上手く使えるはずだヨ」

ゴゴゴゴゴゴゴゴ……

大きな扉は開かれる。そこには大会にも参加していた田中さんが……ずらりと並んでいた。

「あ、あれは……!?!」

しかし、更に奥に存在する大きなモノ。それに僕は目を奪われていた。

「アレに乗り込んで指定ポイントを落とすとして貰いたいネ。アレは他に5体あるガ、他が駄目な場合でも、ネギ坊主の魔力を乗せたアレが1体でも指定ポイントを落とせば、魔力バランスは多少悪くなるとはいえ、条件はクリアーできるはずネ」

アレに乗る？

それは……巨大なロボットだった。

「僕がアレに乗って、この指定ポイント……世界樹の周りにある『魔力溜まり』へ行けば、仮に他の場所が占拠されていなくても……?」

「ほぼ確実に他の指定ポイントも強制的に占拠状態になるはずだヨ。」

ネギ坊主の潜在魔力はそれほどまでにあるようだしネ。他のポイントにも干渉できるはずヨ」

僕ので…… 全世界の魔法使いの存在を…… そうすれば僕は……  
父さんの……。

S i d e o u t

S i d e 超 鈴音

騙して悪いと思うケド、私には未来を変えろという目的があるネ。

許して欲しいネ。ご先祖様。

「ネギ坊主。簡単な操縦方法を教えるネ。操縦席はこっちヨ」

「は、はい」

フフフ、もうその気のようにだネ。

「基本的にはイメージするだけでOKヨ。歩く事だけをイメージし

て進むと良いアル。仮に妨害があつた時は、この操縦桿に魔力を込めて防御、または攻撃のイメージをするとその通りに動くはずヨ」

「イメージ……」

「目標はこの地点ネ。目標は常にセンターに入れておくコト。これ重要ネ」

「目標をセンターに入れてスイッチ……目標をセンターに入れてスイッチ……」

何かおかしなスイッチが入つたようダガ……。まあ良いネ。集中してくれた方が助かるヨ。

「作戦は夕方からネ。それまでは自由にしていヨ」

「目標をセンターに入れて……」

もう聞こえてないネ。

さて、ここの鬼神・ロボット・T・ANK・3は誰にも知られないままに來れたネ……これで確実に未来は救われるはずヨ……。

S i d e o u t

「と、言うわけでお嬢様」

「どーゆーわけだ？ ふあああ……んっ！ あゝ眠いゝ」

「あ、お先にこちら朝食でございます。クラスの皆様とどうぞ」

「ああ……また暗記パンかよ……」

今日は学園祭最終日だ。昨日は超のお別れ会をやつて、クラスの連中はやつと疲れて眠つた。死人は出なかつたな。まだ7時にもなつて無い早朝。他の連中は眠つたままだ。そんな3・Aの教室に前田は紙を1枚持つて起きた私のところにやつて来た。

「『火星ロボ軍団VSプロジェクトM』？ 事前に参加者を募つている状態で、参加資格の無い方は御観覧・ご声援をお願いいたします？ 何だこれ？」

「ご説明させていただきます。去年の学園祭の締めは1万人鬼ごつてございまして。今年は委員会の方も多忙を極め、どんな締めが良いか悩まれていらつしやいました。そこで私 前田の立案させていただきますいただきましたのがコチラの企画なのでございます」

ほゝこれまたB級臭のする企画だな。

「参加者は既に集めておりまして、お嬢様には申し訳ないのですが、観覧する側となります」



「かまわねーよ。しかし、何やるんだコレ？」

「はい。火星ロボ軍団は『学園の世界樹を狙う悪の組織』と言う設定で、超さんの最後のお仕事で沢山のロボットを用意して頂きました。田中さんを覚えていらっしやいますか？」

「田中？ 昨日の武道大会の背の高いグラサンのロボか？」

「はい。あれが大量にあります。他にも巨大ロボット兵器などもございます」

……なんだ？ ボト ズ実写版でもこの麻帆良でやるのか？

「そして、プロジェクトMは『火星ロボ軍団から市民を守る』という設定で、私が代表者になっております」

うわー最悪。絶対何かあるだろこれ……。Mって前田のMだろ。

「そのような怪訝そうな顔も素敵ですお嬢様。ではお嬢様、申し訳ございませんが本日は後夜祭まで離れさせて頂きます。ですが、お手洗いや ご入浴と言うことであればすぐに駆けつけます……」

「いらんわー!!」

前田は少し肩を落として教室を後にした。アホかあいつは……。しかし、参加者がもう決まっているって言うのは少し引掛かるな。毎年の事を考えると、『全員で楽しもう』みたいな感じで締めるはずなんだけどな？

S i d e    エヴァンジェリン

ギシッ……

早朝。床の軋む音で私は目を覚ました。

ぼやけた視界に入って来たのは執事だった。

パンパン！

「お願いキティたん！ 今日1日、私の命令に絶対服従してください！……」

「ちよっ！？」 ガバアッ！！

一気に目が覚める。勢いよく身体を起こすと、そこには前田が以前に契約した残り2つになっている強制命令権を発動していた。これで残り一つにはなったが……。

「おはようございます。はい」

「ぐっ……おはようございます」

「元気がないぞ〜？ もういつか……」

「もういいわ！！ 貴様！ 何という内容で契約したんだ！！」

私は無理矢理に朝の挨拶をさせられ、次の『もう1回』を何とか回避する。

「内容の確認でございますか？ 『今日1日だけ言うこと聞いてね？ 聞いてくれないと泣いちゃうんだから！』でございますね」

「変わってるではないか！！」

「朝から元気でございますね。朝食の用意が来ております。どうぞ」

そうだった。茶々丸は貸し出し中だからいないんだっただな……その点は感謝せねばならないな。チャチャゼロも一人で遊び歩いているようだ。まあ良いだろう。学園祭期間だけだからな。そう考えながら私は下に降りる。

「おはようございます〜！」

「今日はお招きいただき光栄ですわエヴァンジェリンさん」

居間にいたのは3・Aの雪広あやかと、この前まで幽霊だったホムンクルスの相坂さよだった。

ドゥッ

「前田！ 何でこいつ等が私の家にいる！！」

「お嬢様に挨拶をすませこちらに来たのですが、何やら着いて来たようでした。申し訳ございません。私としたことが気付きませんでした」

前田の後を気付かれずに……？ そんなことが可能なのか……？  
雪広に相坂……こいつ等は一体……？

「前田、来る途中でコンビニで買ったアイスはどこにしまいますの？」

「前田先生が一番悩んでましたよね。アイスの味」

「チョコミントとチョコクッキーでいつも悩んでしまうのでございます」

「一緒に仲良く来てるではないか！！」

「エヴァンジェリンさん。混ざりたいのですか？」

「殺すぞ アホ執事！！」

テーブルからは良い香りが漂ってくる。ご飯・味噌汁・キュウリと大根の浅漬け・鮎の天ぷら。くっ！ ここだけは完璧だということに……！！！！

「さあ、どつぞ」

「いただきます」

「いただきますわ」

「い、いただきます……」

むっ美味しい。やはり出汁と「いい」飯のツヤといい、「いい」の作る飯は美味しい。

「そして鮎の天ぷらか……麻帆良に来てからは一度も食べていないな……（ぱくっ）」

……ポロポロ……ポロポロポロ……

「え、エヴァンジェリンさん！？ どうしたんですか〜！？」

「泣いていますわ！？ 前田これは一体！？」

「なんちゅうもんを食わせてくれたんや……なんちゅうもんを……こんな美味しい鮎は食べた事が無い……。いや、そやない、何十年か前に食べた記憶がある。美味しい、ほんまに美味しい……これに比べると今まで食べて来たモノはカスや……」

「ええ！？ エヴァンジェリンさんがおかしな事言ってます！？」

「関西弁になってますわ！？」

「エヴァンジェリンさん。その鮎は京都由良川の鮎ですよ」

「ああ！ そうだったんですか！？」

「どういふことですか！？」

「私が合気柔術をチンチクリンのおっさんに習っていた時に、良く食べたがこの鮎やった……修学旅行で京都に行った時も食べへんかった……もう何十年も食べとらん……懐かしい味や……美味しい鮎や……」

つてうおおおー！ー！いつー！！

勝手に涙が出るぞ！？ 何だこれは！？ 確かに不味くはないぞ。だがな、これほど涙が出るほどに美味しいモノでもない！！ 勝手にわけのわからん演技が始まるし、何なんだこれは！？

「何十年もつて……エヴァンジェリンさん私達と同じ中学生なのに……私は まあ……アレですけど……」

「ハルナさんに聞いた事がありますわ。私達のような年頃になると掛かる人がいると言う特有の病気……厨二病」

誰が病気だー！！

数十分後。雪広と相坂は満足したようで帰って行った。学園祭最終日を楽しんでくるらしい。

「……おい前田」

「はい。如何なさいましたか？」

「なんちゆうことをしてくれただ貴様は……私が痛い病気扱いされたぞ……」

「黒歴史でございますね」

ドガッ！

「それで何しに来たんだお前は……」

「はい。プロジェクトに参加してもらおうべく参上いたしました」

前田は私に紙を1枚見せてくる。『火星ロボ軍団VSプロジェクトM』と書かれている紙だ。学園祭の最終イベントか……これは超鈴音が火星ロボ軍団ということだろう？ どうしてコイツは超の計画を知っているんだ……。

「どこまで知っているんだ？」

「恐らくは、全てでございます」

毎回思うな……こいつがまともな執事だったらと。しかし、超達の敵側として戦わなければならんのか。面倒な事だ。

「まあそのような事はどうでもいいではございませんか。お着替えを手伝いましょうか？」

「いらん!!--」

しかし、『今日1日絶対服従』という呪いを発動しているのだから、着替えを『見せてください』とか『手伝わせて下さい』とでも言えばコイツは喜ぶんじゃないのか？ その辺に手を出さないあたり、やっぱり悪い奴ではないのだろうな。

「なるほど、手を出さないのも失礼というわけではございませうか……」

「心を読むな！ 考えるな!!--」

「パンツ見せてください」

「子供かお前は！！ ほら……あ……」

命令めいれいのせいで見せてしまった。恥ずかしくはないが……無性に腹が立つ！！

「パンツだー！！ パンツ様にご降臨なされたー！！」

……やっぱりただのアホだな。立った腹も治まった。

S i d e o u t

大学部のとある研究室。

「『頼んでいたモノ』を引き取りに来たんやけど？」

「天ヶ崎先生ですよ？ 聞いてます。こちらへどうぞ、もうすぐ充電も終わるかと思えますので……」

頑丈そうな扉を開けるとそこには真っ白な人型のロボットのようだった。



「まさか超さんのレポートや残してあるデータを見ただけでここま  
で出来るとは……本当に何でも出来るんですね。あの先生は」

「これが前田はんの言ってた必要なモノ……」

「はい。身長130センチ。質量54kg Advanced  
step in Innovative Mobility」

人間で言う顔の部分は黒く覆われているが、奥には大きな円が二  
つ薄らと浮かんでいる。恐らくあれが目に対応するのだろう。

「その改良型。かなりのハイスペックですよ。戦争でも起こす気で  
すか？ まあ、それほどまでに高性能な機体ですよ。最新のAI。  
エンジンとも言える部分には二トロ等も使われています」

「なんや科学はよう分からへんけど……持つていくんかいな？ 5  
4キロやったらあの時の石像達よりは軽いけど……」

「いえその必要はないですよ。充電が完了すれば通常稼働で48時  
間は動きますし、仮にフルパワーの稼働状態でも14時間は自立し  
て動けます。      っと、充電完了ですね。お待たせしました。

これこそが、人類の希望      『ASIMO』です」

## 第24話「学園祭最終日でございます」（後書き）

感想は随時受付中です。

しばらく前にあった、【マイク様】からのご提案『ムダツモ無き改革』ネタでASIMOを登場させました。割と重要かも？ 分かる人は分かるかと思いますが、京都の前田忍軍で『ライジングサン』をやったわけですね。これで、「ああasimoも出したいな〜」って思っているところにこの提案と学園祭。行くしかないでしょうよ！

さてさて、ネタ解説行くかい？

ボン太くんの中身は今まで『スライム3人娘』でした。っと前回でわかってたよね。武道大会で光った解説はするかわからん。まあ前田の御加護的なアレだw

久々登場ネギ少年。アンチにするつもりはないですが……どうなるだろうか？ シンジくんになってるなw

エヴァンジェリン京極さんw 『美味しんぼ（8巻・鮎のふるさと）』よりw

もうこのシーン大好き〜www

さて、もう一つだけ。

まどマギ編だね。

さやかちゃんが本当に残念さやかちゃん状態。悲しい。

そしてマミさんがトップに躍り出た。……ここで最大の問題点が発生。

まさか、マミさんがトップに出てくるとは考えもしてなかったから、全く構想が出て来んよ？ どうすんべかな……。。

個人的には杏子ちゃんの方が可愛いと思います！！

あーキュウベえ殴りて……。。

ちなみに活動報告でも載せましたが、現状の段階ですと、

まどか…………… 1

ほむら…………… 5

あんこ…………… 4

マミ…………… 6

さやか…………… 残念さやかちゃんでした！

投票してない人がいたら受け付けます。例によって『はいはい』  
で感想欄に投票してください。ユーザー名で分けるしかありません  
ど、2重投票はダメよ？

では次回も！ 前田前田！

第25話「空浮くお嬢様でございます」（前書き）

親方！ 空に大好物の幼女が！！

パー！ 俺に任せろ！！ オメーは引っ込んでろ！！ バルス！！

あー長いです。いつもの倍ぐらい？ 1・5倍ぐらい？ 書いてます。

お腹減ったな。おでん食べたい。

では、今回は、幼女たちの絡みを少しだけお楽しみください。  
ほんの少しだけけどね！！

## 第25話「空浮くお嬢様でございます」

Side 世界樹広場 13:00頃

『注目 注目ー!!』

『最終日学園全体イベントのお知らせだよー!!』

人が集まりやすい世界樹広場。そこには3-Aの生徒達を中心に  
ピラ配りが行われていた。

「いやー、前田先生も忙しいね」

「観覧者側の通行整備しか出来ないけど、頑張ってお手伝いしないとね」

「前田先生からの初めてのお願いだからね」3-A「ファイト!!」

「オオー!!」

「あれ? 何で今更 学祭全体イベントの宣伝なんかしてんの?」

「去年の鬼ごっこがスゴ過ぎたんで今年はかくれんぼでいくとか言  
つてなかったっけ?」

「どうぞ」

「お、こりゃどうも……えーと何々……あっ! これって去年の鬼  
役の人が総合プロデューサーってこと!? ヘー、噂の前田先生だ  
つたんだあの鬼……面白そうだな」

「参加できないけど、観戦ゾーンで楽しみ下さいってあるね……」

「内容変更か。そりゃそうだよなー学園全体かくれんぼはつまら

なそーだもんな。あの時の人がプロデューズの方が参加型じゃ無いにしても楽しめそうだよな」

「あ、特例があるよ？ 今日の15時までには女子中等部の3-Aのお化け屋敷『ゾンビ部屋』に入った方は参加資格があります……だってさ、どうする？」

「是非参加して下さいね」

「は……はい！」

「え！？ 行くの！？ じゃあまずお化け屋敷だね！！」

Side out

Side 3-A『お化け屋敷』

13:30頃

お化け屋敷は4つのコースで構成されているが、最高難度とも言える『ゾンビ部屋』のみが大行列を作っていた。他の『学校の怖い話部屋』や『ゴシックホラー部屋』などは案内する生徒は出払っており、営業しているのはゾンビ部屋のみということと、行列の理由は『最終イベントへの参加資格を得るため』という事で、主に男性が多く、危険も伴うという理由から、女性の入室は割と少ない。

「本当に大丈夫なんですか？」

「はい、出口は別にありますので2分おきに随時次のお客様を通してしまつて大丈夫でございます」

（あー噛まれたー！！ 俺に構わず先に行けー！！）

（分かつたー！！）

（もう少し考えてから行つてくれー！！）

（ぎゃー！ 俺も噛まれたー！！）

（お揃いだね）

（気持ち悪いわー！！）

中からは叫び声や、戦う音が聞こえる。このゾンビ部屋、中にはナイフからロケットランチャーまで各種武器を取り揃えており、ゾンビと戦い生き延びるのが攻略条件となる。勿論、実弾なわけはない。

「まあ、入った方には申し訳ないですがね」

「????? ……どういうことですか？」

「いえ、何でもございません。では綾瀬さんここはお願いいたします」



S i d e o u t

S i d e      エヴァ      14:00頃

スタツ

「前田、こっちは準備出来たぞ」

「確認しましょう。パンツは穿いておりますか？」

「穿いとるわアホ執事!!」

「では大丈夫でしょう」

「待て！ 確認するのはパンツだけなのかお前は!!」

「ああそれから……飛んできましたね？」

「ぐっ……悪かった……飛べる様に戻ってからはつい嬉しくてな……  
……。それで？ 私は何をするんだ？」

「あの時言った通りでございます」

「武道大会の時の約束か？」

武道大会の時。私は前田に『私が勝つたら全てを話せ』と言った。すると前田は交換条件を出してきた。『では私が勝つた時はお嬢様をよろしくお願いいたします』と、いつも一緒にいるコイツの事だ。何故離れるのかが分からんし、自分で守ってやればいいではないか。何故自分でやらないのかが不明だ。

「まあ契約もあるからな……構わんが……では、私は戦わなくても良いということか？」

「はい。その代り、人形契約ドールをお願いいたします」

「人形契約だと？ どの人形とだ？」

「そろそろ来られるかと思えます」

「あゝおつたおつた。前田は〜ん」

やって来たのは天ヶ崎だった。京都弁を使う女教師だ。京都でスクナを召喚したアホだな。何で麻帆良で教師をしているかは……まあ前田絡みだろう。

「連れてきましたえ。この子がASSIMOですえ」

『マサムネ様……：……ここが決戦の地でございますか？（ピポ……）』

「ええ、その通りです」

『マサムネ様。そちらが私のマスターでございますか？（ピポポ…）』

「はい。こちらこそがあなたの主人となるエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル様でございます。同じ身長的主人ではありますが、契約を以ってあなたは更なる進化を遂げる！！……可能性があります」

「勝手に話を進めるな！　なんだそのロボらしいロボは！」

「こちらはASIMO<sup>アンモ</sup>と言います。本田技研工業が開発し、超さんが使用したオーバーテクノロジーをカウントしなければ、世界初の本格的な二足歩行ロボットでございます。予測運動制御によって重心やゼロモーメントポイントを制御して自在に歩くことができ、階段の上り下り、旋回、ダンスなども可能。親しみやすさを考えたデザインを採用しておりますね。ASIMOという名称は『Advanced Step in Innovative Mobility：新しい時代へ進化した革新的モビリティ』の略であると本田技研工業は説明しているそうです。　まあそれは建前で、こちらのASIMOはあらゆる面で改造されております。最も得意な分野は麻雀でございます」

「長い長い！　ハイテクなモノは全然分からんから説明は止めてくれないか？　それに麻雀が得意な分野とは……必要無いではないか……？」

「では契約をしてください」

「話を聞けー！！」

前田の1日絶対命令権により勝手に契約が進められていく。何で私がこんな口ボを……。

「よろしいでしょう。これにより電力供給のみならず、エヴァンジェリンさんの魔力供給でも稼働できるようになりました」

『今後ともよろしくお願いいたします。マスター・エヴァンジェリン』

「名前で呼ぶな。マスターと呼べ……チッ……」

「こんなの居なくとも良いというのに……。しかし、私は長谷川千雨のお守りか。」

「そうヤサグレないくださいませ。こちらをお返しいたします。」

では、エヴァンジェリンさんは1・お嬢様は絶対死守。2・こちらをお嬢様に飲ませて一緒に写真を撮る。これを守って下さい」

「待て待て……命令権があるから契約は仕方ない。だから被害が無いように守るのは構わんが……2つ目はなんだ？ 青い方を飲ませて小さくして何で一緒に写真を撮らなければならないんだ？」

「読者サービスでございます」

魔法に関わらせるのは避けるんじゃないのか……？ 読者とはなんだ？

「では、私は少し学園長室へ行ってまいります。念の為に人手をお借りしてきましょう」

『借りる』……ね。実はコイツ、あのジジイすらも自分の支配下  
においてるのではないだろうな……？ ふん、まさかな。

Side out

Side 麻帆良湖 15:00頃

そこには特設ステージが出来ており、次々と……ゾンビが出てき  
ていた。

『アアアアアア……!!』

『駄目だよお兄ちゃん 敵はアッチから来るんだよ』

『うわあああ!! ゾンビが出てきたぞー!!!!』

『萌えボイスで喋るゾンビもいるぞー!!!!?』

『あの汚い女の所為でお兄ちゃんは……!!』

『ヤンデレボイスもいるぞー!!!!?』

『俺の妹演じてほしいけどゾンビは嫌じゃー!!!!』

現れたのは数百体のゾンビ。そして、マイケル・ジャクソンのスリラーのBGMがステージから響き渡る。ステージから溢れ出し、湖周辺にも陣取ったゾンビたちは左右へと踊り始める。

『お騒がせしております。こちらは麻帆良祭実行委員会です。間もなくこの地区は麻帆良祭最終日特別イベント【火星ロボ軍団VSプロジェクトM】の戦場となるため、封鎖されます。実行委員の指示に従って、押さない・駆けない・興奮しないで、観戦地区へ移動してください』

Side out

よくよく考えたらよー……。今 私の置かれてる立場っていうか、なんと言うか……。凄く不味い状況なんじゃねーか？ 前田と離れたのは私にとって非常に、ひっじょおくに素晴らしい事のはずなんだが、昨日の事を思い出してみると、今の私が置かれている状況って非常に不味くないか？

茶々丸との会話を思い出してみるとだ。あのロボ子はこう言っていた。「超は魔法使いの存在を全世界にバラそうとしている」と、

その時は「ふーん」ぐらいにしか捉えられなかったが、魔法と言うファンタジーなモンが現実の一般常識になっちまったら……空をホウキで飛んでいく幼女。手から火を放ちそれを水の壁で防ぐストリートファイター。喋る動物達……。そんな非現実的な映画の様な数種類のワンシーンが頭に浮かぶ。

「ありえねー!!!」

そうだよ！ 不味いだよ！ しかも少し寝ぼけてたせいか朝は詳しく聞いてなかったけど、この『火星ロボ軍団VSプロジェクトM』って、Mは前田側だとして、火星ロボ軍団ってよくよく考えたら超だよな！？ ロボの田中とか言うグラサンの奴が何体もいるんだろ！？ 他にもいるんだろ！？ 武道大会でもウルスラの女子を裸にしたロボだろ！？

非っ常にヤバイ!!!

あんなのが何体もいるんじゃ、この麻帆良は裸祭りになっちまうし、恥ずかしかつてる間に魔法なんてものが横行する非現実世界が現実世界に成り変っちまう!!! 自分で言ってるわけわかんねーけど、今までの事をトータルで考えると……割と真面目にヤバイよな？

ザッ

「ここにいたのか長谷川千雨」

「エヴァンジェリン……!? な、なあ！ 今って結構不味いのか？ 私がおかしいのか？ 超がロボット軍団を引き連れて……」

「ん？ なんだ、お前はまともだな」

まとも……？ 何だ？ やっぱりあり得ないのか……考え損か。  
なら良いん……。

「お前が考えている通り、超 鈴音がこのイベントで勝てば、魔法は全世界に知れ渡る。くっくっく、魔法使いの世界は大慌てだろうな」

……まともじゃねー！！ つーか今更ながらコイツ飛んできたし  
！！

スタンツ

『マスター。飛ぶのは反則でございます』

「はっ、主人に説教する気か？ 中々速いではないか。しかしな、茶々丸は飛ぶぞ？」

エヴァンジェリンに遅れながらも付き従うように現れたのは白いロボットだった。それはテレビとかでも見た事がある様なロボットで……って！ HONDAのASIMOじゃねーか！！ 子どもと追いかけてこするシーンはテレビで見た事あるが、あんなに跳躍したり速いスピードで走れるものなのか！？

「まあ良い。お前は自由行動して敵を迎え撃て。私はこの小娘を守らねばならないらしいからな」

『かしこまりました マスター（ピポ……）』

「長谷川千雨。これを飲め」



「あ？ バツ……！ これって小さくなる飴だろ！？」

「くっ！ 抵抗するな！ 私が卒業できなくなるだろうが！ 言う事を聞け！」

わけわからん事を言うな！！

「写真を撮つたらすぐに解除する！ だから飲め！！ 私だつてこんな事はしたくない！！ だが、私の卒業の為に飲め！！」

そう、その飴玉一つに、この小さな女の子の命運が……って！  
んなわけねーだろ！！ つーかコイツ 力強ええー！！？ そう言えば武道大会準優勝者だコイツ！！

アーーーーーッ！！

Side 学園長室

17:30頃

ザザ……ザ……

「では、この資料を頭に叩き込み、魔法先生へ通達してくださいませ。葛葉先生もよろしくお願いいたします。それから学園長、高畑先生ですが」

「うむ、分かったぞい……」

「ええ、分かりました……」

ザザ……ザ……

ガチャ……パタン。

むっ……誰かと話をしていたような……。いや、いかんいかん。今は超君を止める策を伝えねばならん。……はて？ この策は誰が考案したモノじゃったか……？ ああ前田先生じゃったな。しかし、中々練られた策じゃな。流石は陰で動いてくれる優秀な魔法先生じゃ……ふむ、問題無いじゃろう。

「葛葉先生。よろしいかね？」

「はい。召集命令は出しました」

数分後。緊急で呼びよせた魔法先生達が揃う。

「むっ？ 高畑先生がおらんぞい……？」

ザザッ……

あーそうじゃったそうじゃった。魔法先生を辞めたんじゃった。幸せな家庭を築くには確かに仕事を続けるのは酷な話じゃろうて……しかし、学園祭終了までは手伝ってほしかったがのう……。

「さて、緊急で集まって貰って悪いがのう。超君が動き出したそうじゃ。情報によると彼女は世界樹の魔力を使い、我々魔法使いの存在を『強制認識』させるつもりのようにじゃ」

／ ざわざわ ざわざわ…… ！

「随分と用意周到な計画のようじゃが、ワシらは何も気付かんかった。ある筋の情報が無ければ危ないところじゃったな。今でも危険には変わらないが、たまたま最終イベントを前田先生が変更して一般人は参加できんようになっておるようじゃ、各員はイベント参加者として超君の作戦を防いでもらいたい」

「あの、学園長。どこからの情報なんですか？ 確かに超 鈴音は要注意生徒として注意をしておりますが……」

「前田先生じゃよ。皆に説明しておこうかの。前田先生は魔法先生じゃ、高畑先生をも超える力を持っておる。今までは陰で動いて貰っておったが……この緊急時じゃ、しかして他には漏らさぬようにのう。彼の立場は出来る限り明るみにしてはならぬ」

／ ざわざわ ざわざわ…… ！

「この6体の巨大生体兵器というのは……?」

前田先生から話題は移り、魔法先生から資料への疑問が浮かび上がる。そして、別で前田先生と話していた刀子君が解説し始める。

「どうやら学園地下に封印されていた無名の鬼神を科学の力で使役するつもりようです。巨大魔法陣生成の魔力増幅装置として使うものと思われます」

「しかし、数が問題だ……前田先生の情報によると2000以上なんでしょう?」

「しかし、本国からの応援も間に合わんじやろう。心してかかるがよい。超君の計画を阻止出来なければ世界が変わる。諸君全力でこの作戦にあたってくれ!」

＼ハッ!!!／

Side out

S i d e 麻帆良湖

18:00頃

湖には変化が表れていた。湖から続々とロボット群が現れていたのだ。その数、数千数百に上る。それを阻むように浮浪者のようにうろつろと蠢く群衆もいる。ゾンビだ。そして、『人』がいないこの地区を含め、学園祭区画全体にアナウンスが流れた。

『こちらは麻帆良祭実行委員会です。ただ今、麻帆良湖より学園祭最終日イベントが開始されました。参加者以外の方は速やかに観戦ゾーンへと移動してください。尚、『ボン太くんと写真を撮ろう』  
『女子中等部3-Aのお化け屋敷』の営業は終了となりました。繰  
り返します  
』

S i d e o u t

S i d e 超 鈴音

18:10頃

ふむ……ゾンビが阻む力……。

「確か、ゾンビ部屋は前田先生の管理下にありましたね」

監視映像から麻帆良湖特設ステージを見る限り、あれほどの……いや、今も増え続けるゾンビたちが収容されていたようなスペースはないネ。恐らく3-Aのゾンビ部屋から、あのステージのバックヤードに転移出来るような転移魔法陣が出来上がっているに違いないネ。

「私達の敵は前田先生ということになるかな？　ハカセ、魔法先生に動きは？」

「茶々丸はシステムの掌握に入ったようですが、まだ対策は打たれないようですね」

魔法先生はまだ気付いていないのか……？　学園長も？

「あ、対策され始めたようです。でも、茶々丸の相手ではなさそうですね。いや待って下さい！　他の魔法先生も世界樹広場から続々と現れ始めました」

「茶々丸の方は明石教授達かな？　すると、やはりゾンビは前田先生の独断で配備されているかも知れないネ……そして、学園長はやつと気付いたというコトカ……いや、もしかすると前田先生が手回しをした可能性があるか……」

「鬼神の投入開始しますか？」

「ウム……作戦変更はなしネ」

S i d e o u t

Side 世界樹広場脇、特設メインスクリーン  
30頃 18:

「さあ！ 大変なことになりました！！ CGなのか！？ 現実なのか！？ 今年の麻帆良祭は気合の入り様が一味も二味も違う！！ それもそのはず今回の最終イベント企画立案者は噂の執事先生！ まほら武道会でも優勝を搔つ攫い、生徒からの人気ランキングは不動の1位！！ 先生からも人気があるぞ！！？ その名も前田・ヴァンデンバーグ・政宗先生！！ 火星ロボ軍団からこの学園を守るため、お嬢様のパンツを守るため、絶賛活躍中だ！！」

＼ キャー！！ 前田先生ー！！ /

報道部部長の腕章を付けた生徒は解説席に陣取り、この最終イベントを盛り上げていた。スクリーンに映るのはゾンビとロボの戦い。どっちが正義か分かったモノじゃない。そして、火星ロボ軍団に巨大な援軍が現れた。

＼ おおおおー！！！！？ /

「こ、これもゲームの演出なんですか！？ これはスゴイ！！ ご覧いただけますでしょうか！？ 全高30メートル以上あるか

と思われる巨大火星ロボが1体：2体：3体：素晴らしい！！こ  
れにはゾンビもタジタジか！？』

『ふもっふ』

『ふも！』

『ふもっ！！』

そして現れる助っ人集団。その名も【ヒーローユニット】この学  
園祭を盛り上げ、陰で支えてきた戦士達が巨大火星ロボに立ち向か  
う。

＼ あー！瀬流彦先生だー！？ /

＼ 刀子先生もいるぞー！！ 美しい御御足ー！！ /

『さあ！ 出てまいりましたヒーローユニット！ 学園祭最終日に  
華を添えるべく先生達もノリノリだー！！』

Side out

Side ネギ

18:40頃



ゾンビだらけじゃないか……。やっぱり超さんは正しいんだ。僕達が正義なんだ！

僕は魔力を込めて、機体の口から武装解除のビームを放つ。

薙ぎ払われるゾンビたち。

ははは……。簡単じゃないか……。

これなら世界樹までなんて楽勝だよ……。

ズズンッ！！

「な！？ 何だ！？」

機体がグラついた。操作の精霊を総動員してカメラを切り替える。機体の足元だ。そこにはボン太くん部隊が右足に集中して攻撃を展開していた。

「くっ……。！ 邪魔だよ！！」

軽く足を振る。それだけでボン太くん達は振り払える。いや、回避しただけか……。それでもいい。かすり傷なら全然問題ない。

ズシンッ！！

「なっ！？」

ボン太くんの部隊はまだ拡散している。カメラを再び切り替える。そこにいたのは見た事のない白いロボットだった。機械が苦手な僕

にも一目でわかるロボットらしいロボットだった。しかし、ボン太くんぐらいに小さい。いや、ボン太くんよりも少し小さいぐらいだ。しかし、その小さなロボットの一撃でこの機体がグラついた。

『（ピポ！）アシモ・グリーンフラッグ！ お受け下さい！ アシモ七大兵器が一つ！』【ASIMOホームラン！】（カキイイイインツ！！！！）』

ズドンツ！！！！

そのロボットが背中のバックパックからバットらしきモノを抜き取ると、バランスを崩した足に、すかさずフルスイングした。そして、僕が乗る機体は。

「そ、そんな！？ 飛ばされてる！？」

飛ばされた。それは世界の王貞 とも言って良いほどの絶妙なポイントを打ち、振り抜き、機体を湖へと吹き飛ばした。

「くっ！！ これだけの質量は……！！！」

僕は機体を浮遊させる事が出来ずに、湖へと叩き込まれる事になった。

S i d e o u t

「なあ……これって箒に乗って浮いてるよな？」

「浮いてるな」

「……つまり飛んでるよな？」

「飛んでるな」

あー……現状を説明するぞ？ 私も良く分かってないんだが、エヴァンジェリンに飴玉を飲まされて、幼女にされ、写真を撮って、さあ解除薬を飲もう！ ってところでコイツは「そっちの方が私より小さくて良いな。そのままにいる」って言われた。詐欺だ。身長差があつて首が痛いんだとよ……ってそーじゃなくて！！ 最悪そこは納得しよう！ この姿は時間が解決してくれるしな。問題はその後だ。何で私はコイツにしがみ付いて箒に乗ってるんだ？

「落ちても足場は作つてあるから大丈夫だぞ？」

「そーじゃねーよ！！ 何でお空の上で観戦しなくちゃいけねーんだよ！？」

「下は戦場だ。上ならまだ戦闘はさほど激しくないからな。守りやすい、というか何もなくて済む。というか楽だ。理解したか？」

「してねー！！ 何で飛んでるんだってーの！！ 守るとかどーと

か良く分かん事言いやがって！」

「うるさい小娘だな……飲むか？」

「その小娘に酒を勧めるな！ お前も中学生だろうがよ！！？」

「聞いてないのか？ 私は何百年も生きてる吸血鬼だぞ？」

あーそーだったな！ そんな設定だったな！！ 畜生！！

「ほら見てみる、ゾンビ共が姿を変え始めたぞ？ 良い肴になるではないか……」

することも無く、寒空のなか落ちないようにしがみ付く事にも慣れ始め、言われるがままに下を見る。ビームっぽい光で攻撃されるゾンビたちは……人間か？ 人間の肌色になって行っている。

「どーなってるんだ？」

「ああお前の眼ではこの距離では見れないか……チャチャゼロとアシモの視界を同期させてやろう」

目の前に薄らと地上の風景が浮かび上がる。ああ私までもおかしな眼を持つようになった。これは何だ？ 死神と寿命の半分を引き換えに手に入れてしまったのか？

「あのゾンビ共は元は学園内の生徒がほとんどだったようだ。恐らくロボ軍団のビームは人体に影響は無いものの、概念武装や衣服は剥ぎ取る効果があるようだ」

何言ってるんのコイツ？ と、思いつつも視界に映るモノを見る限り、確かにゾンビがビームに当たると、人間の姿になり、気を失って倒れて行く。ボン太くんの部隊が次々にそれを回収しては安全な場所へ運んでいるようだ。

「なあ、CGじゃねーんだよな？」

「ふん、分かった上で保身のために聞くな。実際は理解しているんだろう？ これは現実だと……まあ魔法を知らない・知りたくないお嬢様からしたら理解に苦しむかも知れんがな……」

理解に苦しむっつーか、理解したくないけどな……。

「ほう……面白くなってきたぞ。見てみるがいい、ゾンビ共が消えていくぞ」

消えていくというのは、その言葉通りだった。ガトリングガン等で装備した人型ロボの田中が撃つと、当たった奴は黒い球体に覆われて消えていく。

「何だ？ まさか死んでんじゃねーよな！？ さっきの話の限りだと、あのゾンビは人間なんだろう！？」

「安心しろ。時間を跳ばされているだけだ」

「何だそれ？」

「原理は知らんがな、アレに当たった奴は3時間先にならないと戻ってこないらしい」

タイムスリップか何か!? 助けるドラ もん!! 主にアタシを!! この異常なほどのファンタジーから!!

Side 龍宮 真名 19:00頃

最大の難関である高畑先生はいない……か。すると、次点で難関となると葛葉先生がいるあの付近か……思ったより楽に進みそうだな。

「楽に進む仕事などありませんよ?」

「前田先生!? お、驚いたな先生……毎回、どうやって後ろを取るのかな?」

「いつの間に後ろを取られた!? 不味い! この人が相手では……!」

「秘密でございませすマナマナ」

「マナマナ!?!」

しかし、この転移魔法符と時間跳躍弾があれば……！

「このお札ですか？ 学生の身分で高い買い物ですね……没シユートです」

「いつの間に!？」

「それから、拳銃も預かっておきましょう。学校に持って来ないよっに」

「あー！ それは仕事道具で!!」

「ああ、それからローブ姿というのはあまりウケがよろしくないの……失礼します」

「そ、それは……!？」

それは、T - A N K - 3の頭部だった。そして、その頭部から光線が私に放たれた。

「なっ……脱げ……!？」

「すみません。3時間先までお別れでございます」

前田先生はT - A N K - 3の頭部を捨てると、私から奪い取った銃の銃口を笑顔で私に向け、引き金を引いた。

「3時間後はほぼ裸ですね……復元地点にはカメラを用意し録画予約をしておきますので」

「頼むから止めてくれー!!」

黒い幕につつまれ、私はほぼ裸の状態でリタイアした。

S i d e o u t

S i d e スライム3人娘

19:00頃

世界樹広場は現在封鎖中だ。脇にある広場では巨大スクリーンを前に多くの生徒が観戦し届かない声援を送っている。そんな中、世界樹は発光をしている。そして、その木の根元にオレンジ色の着ぐるみが置かれている。

【インストール完了】

「や、やっと終わったデス」

「長かったぜ……マスターに怒られちまうぜ!」

「再起動かけますよ……」

【システムダウン】

「ボン太くん語に切り替えて……」



「動けー動くんダー！」

「この子が動いたらすぐに次の仕事デスクへ大変デスクへ」

【F.M.O.F.F.U.B.I.O.S】

【HUMAN68k OS】

【Memory Check . . . 640KB】

【Setup . . . .】

【System Check . . . .OK】

【SASI Interface . . . .72MB HDD】

【Dummy System . . . .OK】

「やりましたあ〜」

「次の仕事行くぜ！」

「急ぎます………」

「フモッフ〜!!!」

ガキーンッ!!!

そして、ボン太くん（中の人などいない）は湖へ向けて走り始めた。

Side out

第25話「空浮くお嬢様でございます」（後書き）

感想は随時受付中でございます。

というわけでー！！

アシモホームランを使ってみた。どんな技か知らないからテキストだったりする。

あと、アシモカウボーイもあるよね。……何それ怖い。

今回は『24』かのような？ 時間を区分けしてみた。あまり意味はない？

今回の重要そうで、さほど重要じゃなさそうな案件。

タカミチが魔法使いを辞めるそうです。

ボン太くんがダミーシステムで再起動しました。

エヴァにゃんとASIMOがドール契約を交わしました。

さて、アレに関しては『まどか』と『ほむほむ』に1票ずつ追加されましたとさ。

なので

まどか…… 2

ほむら…… 6

あんど…… 4

マニ…… 6

さやか……残念さや（以下略）

となっております。まだ書いてないよう仕事で忙しいんだよ

更に10月13日から10日間ほど別の店にお手伝いしに行かなきゃならんで更に更新ペースは遅れる事に……！？ 評価が落ちて行く事に悩むフリスタでした。悲しい……。

では、また次回！！

第26話「科学・電気」でいきます」（前書き）

今回で学園祭編は終了です。

では、さようなら。

## 第26話「科学・電気」でございませう

S i d e 超 鈴音

ふむ……。学園結界はそろそろ落ちるようだネ。茶々丸の方はほぼ作戦完了力。しかし、魔法先生は半数以上が残っている状態。そして、不確定要素の突然の発生。ゾンビ・ボン太くん・ASIMO。対策として茶々丸タイプと羽付きを全機投入した事により、数的には押し返し始めたネ。しかし、鬼神兵がまだ1体も指定ポイントを占拠出来ていないとは……。

「これもあなたの想定範囲内かな？」

前田先生

「おや、お気づきでしたか？」

独り言に対しての返答があり、ゾクリとしたモノを感じる。

「学園祭をここまで盛り上げるとは、いやはや流石は天才と言われるだけのことはございますね。ご家庭の事情で学園を去ってしまうのが残念でなりません。本日でしょうか？ 未来へお帰りになるのは」

私はカシオペアによる疑似時間停止を起こし、前田先生の背後に回る。そして、特殊弾を使用した拳を当てようとするが……。

「ご覧下さい、参加できずとも楽しまれている学園の皆さんのお顔を……素晴らしい」

私の更に背後に！？ カシオペアを使いこなしている……！？

「前田先生は……私を止める気カナ？」

「ええ、お嬢様の平穩の為に」

「長谷川サンなら前田先生がいない方が平穩なんじゃないカナ？」

「これは手厳しい。（パチンツ）こちら、私の切り札でございます」

ズシャンツ！！

「フモッフ〜！」

ボン太くんが飛来してきた。しかし、違和感を感じる。ボン太くんの眼が赤い。

「ご紹介しましょう。ボン太くんダミーシステムでございます」

「どこまで手を用意してるのかな？」

「切り札は最後まで隠しておくものでございます」

……っ、それでも……この場で諦めるわけには行かないネ……！

シュンッ

「おや……まあいいでしょう」

私は偽時間停止を再度使用し、飛行船の上へと跳んだ。

「超！ ……どうしましょう？」

「……とりあえず、学園の人達に危害だけは加えないようにして、ある程度説明しなければ混乱してしまうネ」

私は巨大立体映像の出力による投影を始めた。

『フハハハハ！ 楽しんでるかネ 学園内の諸君！ 私がこの火星口ボ軍団の首領にして悪のラスボス超 鈴音ネ。前半のゾンビ君達による攻勢は驚いたガ、こちらにも悪の誇りがあるネ。驚いたかな？ 小さなお子さんから手を離さないように気をつけて楽しんでほしいネ』

S i d e o u t

デカイ立体映像が浮かび上がる。それはウチのクラスの超 鈴音だった。昨日はお別れ会を開いたはずなのだが、やはりと言うべきか、魔法という存在を全世界に知らしめようと行動を起こしたようだ。ああ、前田軍が負けたら魔法は周知の事実となり私の平穩は永久に滅する。しかし、前田が勝つたら勝つたで私の平穩は探し当てるのが難しい。そんな私の気も知らずに下の方では、そのデカイ超を見て大騒ぎになっている。

「わー！ デカイ超りんだー！！」

「巨大立体映像……？」

「え？ え？ 何で超りんが！？」

「超包子の社長のー！？」

「麻帆良の最強頭脳！！？」

『ちなみに！ 君達 観戦者の命運を握るヒーローユニットも既に私の部下が半数以上を始末した！ さあプロジェクトMの攻勢で我らを止めることが出来るカナ？ 健闘を祈ろう！ ちなみに今回のロボ軍団は全て麻帆大工学部と超包子の提供ネ 『世界全てに肉まんを』超包子をヨロシクネ 』

『さあ！ 遂に現れました悪の大ボス超 鈴音！ ここで特別参加企画が発動！ 一般観戦者の方の参加OKです！ 超 鈴音を発見した方には特別報奨金をプレゼント！！ さあ、そして！ 超 鈴音を止められる者がいるのでしょうか！！？』

『お待たせいたしました』

超 鈴音の立体映像に対立するように現れたのが、噂の執事。前田・ヴァンデンバーグ・政宗 その人だった。……ふざけるな畜生。何でお前までデカく立体で現れるんだよ。



「何をやっとするんだあいつは……」

「私を知るか……」

エヴァンジェリンの呆れた口調に、私は頭を抱えて答えた。「知らん」と。

『さあ！ 現れましたプロジェクトMの代表！！ その名も……！』

『前田・ヴァンデンバーグ・政宗！ お嬢様の存在に心奪われた執事でございます！』

『そして！ この立体映像も前田先生によるお手製の最新装置！！』

『敢えて言わせて頂きましょう、【前田システム】と！』

どうなっちまうんだ……私の運命。幼女化されるわ、空を飛ぶわ、非現実的な魔法というモノに巻き込まれ、逃げ場も無く……あれ？ 涙が出てこねー。こんなに苦しいはずなのに……。

『前田先生。私は必ず事を成すネ。その為に今まで生きてきたのだカラ』

『私もお嬢様の為にその計画を全力で捻じ伏せましょう』

全力で捻じ伏せた後に、消えてくれねーかなアイツ。

『あ、そうそうお嬢様』

「む？ お前に対してみたいだぞ、長谷川千雨」

公共の場で何を言うつもりだあいつは……。やめてくれマジで、マジで完全引き籠り生活になっちまうから。外が怖くなっちまうから……。

『お嬢様はそこで、御自身の運命を指をくわえてご覧いただきたく思います』

「悪魔かあいつはー！！！！ 絶対何か企んでるだろう！！ 悪の組織の大幹部か大首領じゃないか！？ あいつこそ火星ロボ軍団に相応しいだろう！！」

「おもしろそうだな……」

何か言ったか少女吸血鬼！

## Side 世界樹広場

6体の鬼神兵が徐々にその身を世界樹へと進めていた。そして、

その中の1体に学園の魔法先生であるはずの子供先生もパイロットとして乗り込んでいた。

「これ以上、計画に遅れを出すわけにはいかない……」

しかし、どの鬼神兵もゾンビの度重なる攻撃、魔法先生による攻撃により、腐食し、ボロボロになっていた。

ズシャン！

「くっ！ 残り僕を含めて5体か……」

何度もホームランを打たれ、何度も麻帆良湖に沈められた。既に鬼神兵のエネルギーは切れている。それを動かしているのは何度も「動け動け動いてよ」と叫んだ結果の暴走と、ネギ本人による魔力供給によるものだった。

魔法先生である ガンドルフイーニ・神多羅木・葛葉 刀子・シスターシャークティ・天ヶ崎 千草 等はその戦闘スキルを存分に発揮していた。それも、ヒーローユニットという枠組みが出来た事による恩恵でもあった。周囲の小型兵器などは主に魔法生徒である高音・D・グッドマンや佐倉 愛衣を筆頭に相手をしていた。

しかし、やはり魔法というモノは精神力を多く使用する。それにより、各員にも疲労や限界というモノが見え始めていた。

「すみません！ 僕はここまでです……！」

「瀬流彦！！ チツ……むおっ！？」

「はあく鬼神兵言つんも、中々堅いもんやねえ」

「集中してください！ もう少して鬼神兵も倒せるはずですよ！」

「高畑先生がいれば楽なんだろうけどね……ニクマン・ピザマン・  
フカヒレマン……！」

そこにASIMOがやって来た。麻帆良湖での戦闘は大体片付いたのだらう。

「フモツフー……！」

そして、ボン太くんのダミーシステムも現れた。

「フモツフ！ フモルル！ フモモ……！」

『畏まりました。ASIMO七大兵器の一つ！！ ASIMO・カ  
ウボーイ……！』

ヴオオオオオオオオオオオ……！！

流れ始めた鈍い音。地の底から響いて来るような深い音が世界樹  
広場に響き渡る。

そして その時。マシンは野生の咆哮をあげた。

カキイイイン……！ パン……！ パン……！

「魔神……」

ガンドルフィーニはASIMOのバックパックがパージされたのを見て、そう呟いた。魔法使いにとって、『機械』というモノは少し違和感を覚えるモノだ。逆に科学的な視点から見れば魔法も同様といえるわけだが、魔法使いの立場で見てもそのASIMOという機械にガンドルフィーニは憧れに近いものを感じていた。

それもそのはず、ASIMOはただの機械ではなく、かの有名な真祖の吸血鬼。エヴァンジェリンとドル契約を交わした機械でもあるからだ。そのマシンは魔神に他ならなかっただろう。そして、その圧倒的な力を前にして、ガンドルフィーニは自らを抑えるように、隠すように興奮した。

V12 DOHC 48バルブの奏でるHONDAミュージック  
!!!!!!

そして、ASIMOカウボーイ。それはASIMOのバトルモードの切り替えだった。HONDA XR250の改造車。それはオートバジンだった。これを取りこなす事は常人には不可能だった。それを可能とするのがパワースーツに身を包んだファンシーなダミーシステム。

「フモッファー!!!」

ボン太くんだった!!!

オートバジンのビーグルモードに跨り高速で走り抜けるファンシー兵器。しかして、その目は獲物を逃がさんとする紅い目をしていった。

ショットガンにバズーカ。更に部下のボン太くん達による援護攻撃もある。ボロボロだった鬼神兵たちが抗うすべも無く、膝をつき、その使命を全うできずに次々と鬼神兵は崩れ落ちた。

「僕の邪魔をするなー!!」

「フモツフー!! (アルファー・ゴー!)」

そして、ネギが乗る鬼神兵もまた障害ではなかった。

鬼神兵から投げ出された少年。それを驚愕の顔で迎える魔法先生達。

「ね、ネギ君!？」

「そ、そんな君が魔法を世界にバラそうとしていたなんて……!!」

「超 鈴音に与したのか……」

「僕は……僕は……僕はあああああー!!!!」

オーバードライブ  
魔力の暴走。その少年が得意とする風と雷は吹き荒れた。その場にいるどの魔法先生もその披露し切った身体では止める手立ては無い。

『マサムネ様の命により、あなた方の作戦は捻じ伏せます……(ピポ)』

下の姿に戻ったASIMOは構えを取り、一気に距離を詰めた。迎え撃つは、少年の得意とする遅延魔法による『雷の暴風』

しかし、エヴァンジェリンをマスターに構えるASSIMOにも魔力がある。その瞬動術は完璧だった。中国拳法による肘打ちから、よろめいた子供に容赦なく打ち込んだ。

鉄山靠！！

容赦なく学園の建物の壁にめり込まれたネギは、なんとか起き上がる。

「ぐっ……ロボットなんか……」

『確かに私はロボットかもしれませんが、日本人でございますよ？（ピポポ……）』

「い、今だ！ 取り押さえるー！！」

「は、はい……」

Side out

Side スライム3人娘

ここは学園から少し離れた敷地。金網に覆われたその建物には進入禁止等の看板があり、嚴重に力ギなどが幾重にも取り付けられていた。

しかし、そんな嚴重さもなんのその。スウツと入れてしまつ3匹の仲好しスライム娘ちゃんたちがいたのです。

「そう！ アタシらは怪盗キャッツアイ ダゼ！ 名前も変えるか、アタシは瞳な！」

「危険なセリフ禁止……瞳は私……」

「これで良しデスウ。私は泪ですかねえ」

「これで良いのか？」

「この銃弾の力で跳ばせるらしいデスウ」

「それじゃあ……」

カチツ

ギユオオオオオオッ！

3人娘はサングラスをかけて、その建物が黒い幕に覆われるのを見ている。

「おおおお〜デロリアンが旅立つぜ」

「マーティ【電気設備室】って書いてある……」

「ドク〜そんな事言っちゃだめデスウ」

バジジジジイイッ！！！！

激しい電撃と共に建物は消えた。そう、3時間先に。



「アーンツ!!」

「効果範囲が広すぎた……」

「いやあ〜ん ただでさえ出番少ないのに〜!!」

そう、3人娘と共に。

Side out

一気に暗くなる街並み。

「停電か？」

「十中八九、前田だろうな」

そりゃそつだ。

「ん？ なぁエヴァンジェリン。もう少し上に行けるか？」

「何だ？ 少しは受け入れて楽しくなり始めたかお嬢様」

んなわけねーだろ。上でも何か光ってるのが見えたんだよ。

「あー見つけちゃった……」

「確か特別報奨金が出るんだったな。どうするんだ？」

報奨金ね……。まあ貰える物は貰っておくか。

「（ピ）……あ、イベントの超 鈴音発見したんですけど……はい、飛行船の上です。麻帆良中等部の3-Aの長谷川です。え？ ああ、はい……失礼します」

「なんだって？」

「中等部だから現金は無理だけど、食券で対応だよ」

「何だツマラン」

まあ金貰っても使い道がな……。まあ食券も前田がいる以上は使い道がないわけだが。

「なあ、アンタから見てどっちが優勢なんだ？」

「前田だ。圧倒的な差だな」

じゃあ、魔法がバレる。つまり現実が「ようこそ非現実！」ってな事にはならないわけだ。しかし、超も超で麻帆良の天才頭脳と言われたり、テストの点数も満点以外取った事がないような奴だろ。

大学教授も舌を巻く天才だ。異常さは間違いないがあるが、そんな天才に前田が勝てると言うのか。本当に前田って何なんだ？ この前のアレ信じてないんだけどよ……マジで人間じゃねーのか？

Side 超 鈴音

フツと下の街並みは暗闇に包まれた。

「これもアナタの仕業かな？ 前田先生」

「超！！ 電気が！ 学園全体が停電に！！」

「分かってるねハカセ。見えてるヨ」

ハカセの言うとおり、もう灯という灯は世界樹と学園内にいる人達の携帯電話の灯ぐらいしかない。停電にして何が……。

「ッ！！？」

停電してはシステムに必要な電力は無いに等しい。そして、システムを掌握中の茶々丸も！！？

「茶々丸！！ 茶々丸！！ 返事をするネ！！」

『超 鈴音……私は無事ですが……こちらの作戦は失敗です。結果は落とせませんでした』

スタツ

「未来科学。素晴らしい。心が躍ります。……ですが、悲しきかな。天才も電力が無くては……そうですね。恐らくの目算ですが、魔法がバレたとしてもこの学園内。効果を薄くして広くしたとしても半径30キロ圏内が限界でしょう。当然 効果も期待は出来ない」

その目算は恐らく正しい。しかし、電気設備を直してしまえば。

「その設備施設が3時間先に飛んでいたとしたら？」

「ナ……？」

「苦労しましたよ？ あれほどの時間跳躍弾を確保するのに……さて、このスイッチ覚えてますか？」

それは、カシオペアの代わりに前田先生がくれようとしたもの。でも私はその受け取りを拒否した。

「確か盛大な花火が上がると言っていたスイッチだったカナ？」

「左様でございます。さて、最終イベントが開始されてから2時間30分が過ぎたところでございます。こちらのプロジェクトMの軍勢として残っているゾンビは総撤去いたしました。そちらの火星口

ボ軍団の鬼神兵を除く軍団は何体残っているでしょうか？」

「データとして稼働しているのは213体ネ……」

もう分かってしまった。そもそも時間跳躍弾が盗られていた事を私達が気付かないわけがない。危険物なのだから管理は徹底している。カシオペヤが説明書も無く完璧に使用出来るわけがない。ではこの人はどうやって銃弾を大量に手に入れたのか。どうやってカシオペヤを自在に操っているのか。何の説明もしていないハズなのに、私が未来から来た事を知っているのか。きっとこの人は別の次元で私を……全てを知っている。

でも！ 退くわけにはいかない！！ 私は何度も何度も時間停止を超える。何度だって前田先生の後ろを取り3時間先へ送ろうとする。

「残像でございます」

「っ！！」

「す、凄い！！ これがカシオペヤ使用者同士の戦い！！ 計算以上です！！」

使用者同士？ ムキになっている子供の様な扱いをされているヨ。

何度だって……何度だって……。

そして、悟る。いや、最初から分かっていたことだ。この人には絶対に勝てないと。万に一つも可能性は無いと。どこかで分かっていた。

「押すと良いネ……もう私の負けという事は分かっているヨ」

「超!?!?」

「では（カチツ）」

そのスイッチは爆破スイッチだったに違いないネ。

「いいえ。花火でございます」

瞬間、213の数はこの飛行船に急接近し、魔力の光を帯びて、輝かしい光となり散った。地上ではその花火に大きな歓声が上がっているのが分かる。

「……完全に敗北したヨ」

「近いうちにあなたの問題は解消されるでしょう」

「どうやってカナ？ 最も効率的かつ効果的な策は今回破られたヨ？」

「私はその為に来たのですから」

「……あなたは本当に何者なのカナ？」

「今はただの執事でございます」

今は……ネ。

S i d e o u t

一斉に花火が打ち上がる。それに伴い街中で暴れていた火星ロボ軍団も停止した。鬼神兵の残骸も消えて行った。

世界樹が一番の輝きを放ち、その光も真つ暗な夜空に打ち出した。

無事終わったか……？

ボンツ！

「おわっ！？ 解けた！？」

「元の服を着ておいて正解だっただろう？ 感謝しろよ？」

「そもそも飴玉を飲ませなければ問題無かっただろうが！！」

「だから言っただろうが！ 飲ませないと私が卒業できないからで……！！」

飴玉飲ませて卒業の進退が決まるなんて聞いた事ねーよ。

私は筭から地上に下ろしてもらい、少し平衡感覚を失いフラフラ

としてしまっ。

ズシャンッ！

『マスター戻りました（ピポポ……）』

「ふもっふっ！！」

「ふもふもっ」

「ふもっ！」

「多い多い！ こっち来んじゃねー！」

「お嬢様。ただ今戻りました」

「ああ……つとと……」

フワッ

「ちよっ！？ 何してんだおろせ！！」

ドカツ！ バキッ！

「フラフラしていらっしやっただので、このままお送りいたします」

何度殴っても前田は私を下ろす気配がない。

「エヴァンジェリンさんも如何ですか？ 本日までなんですすよお店を借りているのが」

「執事喫茶か、行くつじゃないか」



「待て待て！ 電気はよ！？」

パツ……パツパツパツ！！

「点きましたね」

「タイミング良すぎだろうがよ……」

こうして、私の非現実世界入りは回避された。

だが、『その時は』の話だったんだ。

そして、夏休みが始まる。

## 第26話「科学・電気」でございます」（後書き）

感想は随時受付中でございます。

というわけで、超の作戦は電気が無ければ成功率ガタ落ちの回でした。

そのうえで、ボン太くんやオートバジンと化したASIMOでフルボッコ。

今回は平凡な話を書いて、そのまた次回に魔法世界に行きたいかなんて思ってます。

つまり、次回で第1部が完結する予定。

頭の中だけのテキトーな構想ではの話ですから、変更の可能性もあります。

では、また次回。

第27話「お嬢様の疑問でございます」（前書き）

ども【フリスタ】と書いて【うつ病患者】と読む者です。（ちよつと嘘）

- ・今回は、お嬢様が考えに考え、少し崩れます。
- ・天ヶ崎先生が暴れだします
- ・エヴァンジェリンさんがキレます

でもって、夏休みに入るので。  
でもって、今回はかなり長いです。

## 第27話「お嬢様の疑問でございます」

「おいしくなーれ、おいしくなーれ、萌え萌えキュ〜ン」

そんな呪文を聞いたのは昨日の深夜だっただろうか。前は未然に防げたが、今回はやはり疲労困憊といったところで、その呪文を止める事は出来なかった。呪文を唱え終わった人物には「遣り遂げた」と言う様な満面の笑みが窺えた。そして、意気揚々と隣の席に用意した皿にも呪文を唱えようとするが。

「ヤルゾ……？」

そちらの金髪の少女に関しては、疲労というものはほとんど見受けられず失敗に終わったようだ。金髪の少女はオムライスと付け合わせのサラダを食べ終わると、遅れてやって来たガイノイドに連れられて帰って行った。

超 鈴音が去った学園祭最終日。それは既に過去の事と告げるかのように次日へと日付は変わっていた。流石に眠気がMAXになっていた私は執事喫茶で例のオムライスを食った後、エヴァンジェリンを見送ってカウンターで寝ていたはずなのだが……。

「おはようございます。お嬢様」

「あ？……あぁ」

どうやって私は女子寮コウに戻って来たのか。意識が無くとも身体が

覚えていて、自力で戻って来たか？ それとも魔法という非現実世界に触れてしまった私の下に妖精さんのモノがやって来て、私のベッドに運んだのだらうか？ それとも。

「ここまで運び、何度も苦悩しお着替えをさせようと思ったのですが、自制心と言いましようか、理性とでも言いましようか、それが私を邪魔をしてお嬢様は事無きを得たわけでございます。…もう数センチ右であれば宿屋の主人より「昨晚はお楽しみでしたね」とのお言葉を頂けるはずだったのですが……」

やっぱりこいつか。こいつが私をここまで運んだ犯人らしい。そして、聞いてもいない事を答えてくる。良く分からないが、もう少し右だったら私はこいつに丸裸にされていたようだ。ありがとう前田の数少ない理性。さよなら宿屋の主人。二度と現れるな。ここは女子寮であって宿屋ではない。

「お着替えを御用意しておきます。まずはお風呂など如何でしょうか？」

「ああそうする」

シャワーを浴びながら私は昨日までの事を整理する。魔法をバラそうとした超の計画は前田の用意した軍勢によって防がれた。学園祭を行っている敷地の至る所に点在していたボン太くん達。エヴァンジェリンを「マスター」と呼んでいたASIMO。ウチのクラスの出し物の第4の部屋とも言える隠し部屋に存在していたゾンビ共。というか数百数千に渡って増えてたし。それに「魔法先生」と呼ばれる学園教師達もいたな。

ボン太くんは武道大会でもあのデスメガネを倒した実力者だ。数

多くの伝説も語られる高畑先生を倒した事はその実力の程を物語っている。まあ失格だったわけだが。高畑先生の実力は、ある程度分かっているつもりだ。去年と一昨年に遠巻きに見ていたからな。乱入してきた暴走族的な連中を一人で沈めたり、大学部の連中も高畑先生が出てくればすぐに納まり所と知る。それに一人で勝ったボン太くんはやはり強いのだろう。……いや、一人じゃなかったから失格になったのか。

それからASIMOだ。私がCMなどで見知ったASIMOとは、充電式の貸し出しロボで、走ってもそこまで早いわけじゃないし、ロボットだからと言ってロボットアニメよろしく的な感じで変形をすることも無い。ましてや中国拳法を使う様な人型決戦兵器でも無かったはずだ。そもそも喋るなんて事は有り得ない。というか限度を超えている。いや、限度を超えていると言えば全てに措いてそうなのだが。その異常と言える全てをアレはやってのけた。

そして、「魔法先生」と呼ばれる教師陣だ。指パッチンでミニ火星ロボを真つ二つにしたりするヒゲグラヤ、刀を目にもとまらぬスピードで振るうメガネ教師。京都の修学旅行にも同行していた瀬流彦先生は巨大ロボの進撃を止めていた。そして、この学園に来て間もないウチのクラスの京都弁実習生の天ヶ崎先生もいつものタイトなスーツから着崩した着物の様なモノを着て、お札の様なモノで戦っていた。あれらがCGなどではなく、ましてや「ヒーローユニット」なんて肩書きで誤魔化せるようなモノではない事は明らかだった。……まあ、この学園の連中は能天気な連中が多く、いやむしろ私以外がそうなのではないかと疑うほどにCGだと信じているだろう。それを超は、その存在を世に認識させようとしていたらしい。

「……何でだ？」

ボディソープの泡を洗い流した私は湯船に浸かって……ふと、思う。

そうだよ。そもそも何で魔法と言うモノ。魔法使いと言う存在を全世界に認識させようとしていたんだ？ あーゆー天才って言うのはメルヘンチックな存在なのか？ いやいや、それもおかしい話だ。超は事前にあーゆー存在を知っているのだからメルヘンチックならそうで構わないが、メルヘンの欠片も無い現実味を帯びた戦いだっただ。人的被害はほとんどないにしろ、街は崩れ落ちた場所も少なくない。普通の道だつて巨大火星ロボの歩いた跡によつて目茶目茶だ。舗装しなおしをしなきゃならんだろう。メルヘンチックな思考の持ち主だと言うなら、あれを世に知らしめる必要なんてなさそうだ。未来からやって来たという人間が魔法をバラそうとしていた。その理由は……。

「お嬢様。こちらにお着替えを御用意しておきます」

音も無くいつの間にか風呂のスリガラス越しに現れた執事。

「本日の下着は薄いピンクのお色を御用意いたしました。この様な天気が良い日にはより一層お嬢様の美しさが引き立つ事でしょう」

「わ、わざわざ口に出すな！　つか、見えねーから！　引き立つても見えねーから！」

「失礼いたしました！　まだ使っておりませんでした！」

踵を返したであろうそのシルエットを全力で私は止めた。

「待て待て待て！！！！　使うな！！　つか、何に使うっつーんだよ

「!!」

「失礼しました。一瞬我を失いかけました……おのれ理性め」

よし理性、そのままそこにいろ……。

そんな前田は180度内容を切り替えるように口を開いた。

「未来とは今の延長線状ではありませんが……」

そう、突然トーンを変えて前田は口を開く。それは私がたつた今まで考えていた事だった。そうだ。未来だ。超は未来で何かがあったから過去げんさいの世界に来て、壮大かつ大迷惑な作戦を立てたのではないだろうか？ 私はそう思った。では、その未来に起こった事柄はなんなのだろうか？

「超さんのいた未来に繋がるとは限りません。未来は常に白紙なのです」

あ、すげー良い事言ってるぞこの執事。前田じゃねーみたいだ。「未来は自分でつかみ取るモノ！」とかそういうことを言いたいのだろう。よくある展開だが嫌いじゃない。そうだな。超が未来から来ても、私が年取って会うってわけでもねーだろうし、超の未来の問題とやらにはち合わせる事もあるとは言えない。

「だとするならば、私が今ここでお嬢様のパンツをどう使おうと、白紙の未来であるが故に怒られる事も……!!」

「怒られる未来みちを作ってるじゃねーか!!」

「ガーーーーンッ!!」



口で言ったよ。ゆっくりと私の下着を籠に戻して行く前田のシルエットが見受けられる。その動きはまるで叱られた子供のようにだった。何コイツ。

「何度か聞いてるけどよ。お前って違う人に仕える気にならないのかよ？」

「お嬢様こそが至高とっておりますので」

迷惑極まりない話だ。

「今まで数多くのお嬢様に仕えて参りました。しかし、お嬢様以上の方はどこにもいらっしやらなかったのです」

「どーゆー意味だよ？ 私は凡人だし隠れオタクだし家も普通だぞ？」

お嬢様のパンツ〜月曜は白〜火曜は黒〜金土日は穿きません〜

そこに嫌な携帯の着信メロディが割り込んだ。それは前田の携帯だった。前田は私に一言「少々失礼します」と口にし、携帯電話に向けた言葉をいくつか出し始めた。そこは真面目な執事……いや、前田の口から『学園祭』『ネギ先生』『会議』等のキーワードが出てくる電話相手との会話から察するに、真面目な教師だった。

とりあえず、その着信メロディが失礼だと突っ込んでおくとする。

とりあえず、その隙の様な間に私は思考をまた巡らす。

そつだ。根底から覆すとすれば私に「執事」なんてモノは不

要とする存在だ。コスプレで見る事はあっても、本物を見る。ましてや雇うなんて事は有り得ない。仮に宝くじが当たったり、親が株で大儲けをしたとしてもまず執事なんて雇う事は無いだろう。不要なのだから。

そんな執事の前田は私の下に現れた。まあワンクリック詐欺みたいなモノだったが……。私の執事になる前は委員長の執事だったよ。うだが、何故私のところに来たのか？ その理由は何も分かっていない。では逆に考えてみよう。何故私のところに来るまで「お嬢様」と呼ばれる存在に仕えてきたのか、何故転々と鞍替えをして来たのか。前田は「執事」という一点だけを見ればその優秀さは素人でも分かる。委員長が言うには「執事長」というかなりのレベルにも相応しいらしい能力を持っているのは間違いないだろう。ならば素行の悪さとかは「クビ」に繋がるとは考えづらい。それに私以外には大体が好印象を残す前田だ。更にクビという宣告を受けるのが難しいのではないかと思えてくる。となれば 今までの奉公先は、委員長の時のように自ら退職してきた。と考えるのが妥当だろう。

……何故？

ふと、閃いたように「魔法」という言葉がどこかに引っ掛かった気がした。その引っ掛かりを手繰り寄せるように私は思考の角度を少し変えた。

魔法が使える。魔法をバラそうとした超を止めた。更に前はどうかだっただろうか？ 人間とは思えない早さで私より後に帰りながらも、私より先に帰り晩御飯の準備を整え終わっているなんて事はほとんどだった。雨の日はどうだった？ 雨に濡れないなんて無理な雷雨の日だって1滴も濡れることなく帰って来た。京都では例の場所から飛び下りて一瞬で私の後ろに戻って来ていたなんて事もあつ

た。魔法が使える事は明白だった。

……尚の事 私って前田と関係なくないか？ そうだよ。確か前田が言っていた事を信じるとするなら、ウチのクラスには“そのゆー存在”つまり、“魔法に関連するヤツ”は現在5人ぐらいいるらしい。どいつもこいつも異常にしか思えないから「誰か」とは分からないが、そいつらに「お嬢様」をやって貰ったほうが良いんじゃないのだろうか？

「お嬢様。申し訳ございません。大変な事が起こりました」

その言葉に私はスリガラスの奥のシルエットに視線を戻す。

「あ、ああ なんだよ？」

「ネギ先生が近いうちに国に戻られるようです」

「……はあ！？」

まさかとは思ったけど……。本当だったなんて。

数ヶ月前から匿名のメールが定期的に来ていた。そこには「件名：ネギ・スプリングフィールドに関する報告書」と書いてあり、その報告書ごとにナンバリングが施されていた。確か彼の卒業証書には『日本で教師』をするように浮かび上がったと聞いた……。その経過報告書と思わしきものが何故、私宛に届いたのかが不明だった。けど、そこには信じ難い事が書き綴られていた。人心を操る『惚れ薬』の生成。一般人に対する魔法の度重なる使用。もう収監されているが、脱走したオコジョと様々な計画行動を起こしていた事。そして、昨日届いた最新の報告書には血の気を引かせる事が書かれていた。

【魔法を全世界に公表しようとした】

魔法界のテロリストも真っ青になる大事件だ。成功例は今の世界を見れば分かる通り一つも無い。ただその一文が載っているだけの報告書なら誰も信じないし、失笑さえ浮かぶだろう。けれど、その報告書には無駄がない綿密な計算、計画内容が事細かに記載されていた。

「これを……阻止したというの？」

ネギ・スプリングフィールドという英雄の息子の行動に嘆く事と共に湧き上がって来たのは、そんな完璧とも言えてしまう計画を阻止したという存在に対する恐怖にも似た小さな興奮だった。

そして、私に特命が与えられたのはそのメールが来た日の夜のことだった。

「わ、私が護送役で……見逃せと……？」

……一体何がどうなっているのだろうか？

S i d e o u t

S i d e    ネカネ

日々の生活に慣れてきた。ネギはもう社会人なのだ。だから手紙が最初の頃だけしか書く暇がないというのは仕方のない事なのだろう。そう自分に言い聞かせて数カ月を過ごしてきた。初めは中々気落ちする感情を隠せなかった。それに持ち直すのにこれほど掛かったのは、毎週送られてくるはずの手紙が毎週送られて来なかったからだ。明確に毎週手紙を書く約束したわけではない、それでもあの子とはどこかで繋がっている気がしていた。それが途絶えたのが何よりも辛かった。

コンコン。

ガチャ。

「はい？」

「ネカネ・スプリングフィールド？」

ある日の早朝にその人達はやってきました。

この地域ではほとんど見かける事はないスーツ姿。サングラスをかけた男性の二人組だった。用件は淡々と語られた。「ネギ・スプリングフィールドの罪状」という事だった。

「え……？」

思考が追いつかない。

ネギが……テロリスト？ ネギがオコジヨに……？

嘘だ。あの子は教師をやっているだけのはず……。はじめは手紙をくれると言ったけど、こちらには通しか手紙は来ない。その手紙が途切れた事ですら自分を押さえることしかできなかった。

「では、我々はこれで」

事務的に去って行く二つの人影。

ネギは新世界に移送されて、誰にも知られずにオコジヨにされる。

その事実の破片だけが、私に突き刺さっていた。

S i d e o u t

Side 麻帆良学園・教会・地下30階層

秘密の入り口から螺旋階段を延々と降りて行くと長い通路が現れる。通路を進めばそこはファンタジーとしか言えない様な地下施設が広がっている。地下で育つはずのない多くの大木は世界樹の根とも繋がりがある様にその姿を鈍く輝かせている。それもそのはずこの空間は世界樹と繋がっている。と言うよりも、麻帆良の敷地の地下には広大な施設がある。

そんな地下30階層では学園祭の後処理が行われていた。

「ここまでで間違いがあったかのう？ ネギ・スプリングフィールド」

麻帆良学園の学園長は資料の全てを読み上げると、奥に座る少年に声をかけた。資料の内容はネギ・スプリングフィールドと言う少年がこの麻帆良学園にやって来る前から用意されていた。

何百枚にもなるその資料を読み上げた学園長は冷めきってしまったお茶を啜った。

単純な資料の内容としてはこうだ。

メルディアナ魔法学校卒業。……日本で教師の啓示が現れる。

麻帆良学園に着任。……禁薬の生成・所持：ホレ薬（2度に亘る）

脱獄したオコジヨを困い行動を開始。……仮契約数名（解除済）  
超 鈴音と結託し魔法使いの存在を世界に公表せんとする。（未遂）

「答えてくれんと進まんでのう……。君はこの学園に教師としてではなく、魔法を世間に公表するためにやって来たのかのう？」

「……違います」

繰り返される質疑応答。同じことの繰り返しだった。話は進む事がない。何故なら、ホレ薬を使用し所持していた事、また、一般人に魔法を悟られ、仮契約を結ぶこともあった。それは全て学園祭の日の為の布石だったと言われても仕方のない事だった。

では、いつからその計画は始まっていたのか？ それは2年と数カ月前に遡る。超 鈴音が麻帆良学園に入学した際、この時系列ではその時点で計画は始まっていたのだ。ネギ・スプリングフィールドは英雄の息子。そこを利用されたのか、または自分から超 鈴音に賛同したのかは不明だ。しかし、彼が卒業証書に細工をして日本にやって来たときえ疑いの眼は張り巡らされていた。

ゴウン……

縦に開く様にその重々しい扉は開いた。そこには執事服の人物がいた。

「大変お待たせいたしました」

「ま、前田先生！」

「来てくれたか前田君。すまんのう休みの日に」



「いえ、後は引き継ぎましょう」

学園長はその場を後にする。入れ替わりに現れた執事は、椅子に腰かけ、微笑みを絶やさずに口を開いた。

「では、今後についてお話いたしましたでしょう。とりあえず自国にお戻り下さい。そして、魔法の国へと逃れると良いでしょう。逃げ出すタイミングさえしくじらなければ、あなたは逃げ切れるはずです」

ネギは目の前にいる執事が言っている意味が理解し切れなかった。

「あなたは……僕を助けるんですか？」

そう、この執事は別段ネギ・スプリングフィールドを助ける様な行動は一切行つて来なかった。ただただ自分の主人の道に転がる石ころを道端に避けるようにして来ただけだ。それが今になって犯罪者という烙印を押された英雄の息子に逃げ道を用意している。理解がしきれない。

「あちら側で逃げ切れれば何とかやっていけるはずです。ただし、こちら側には戻つて来れないでしょう」

「あちら側……？」

「あなたのお母様の故郷でございます。また、あなたの父親が英雄となった世界でもあります。こちらをどうぞ、航空チケットでございます。まずはウェールズにて、こちらの女性に会うことです。当日は空港でお待ちいただいている筈ですので

「

S i d e o u t

S i d e エヴァンジェリン

「くあ〜……茶々丸〜」

「マスターおはようございます。今マスターの分のお茶もご用意致します」

私は毎朝のように「ん〜」とだけ返事をして居間の椅子に腰かけた。

……「マスターの分も？」『も』と言ったかコイツ。

私は目を擦りながら静かな音を立てて置かれたティーカップを取り、その発せられた言葉を考えてみる。その答えは目の前にあった。

「……長谷川千雨？」

一瞬 前田かと思ったが、私の前に紅茶を用意されていたのは、前田の主人に当たる長谷川千雨だった。

「よ、よお……私にも意味が分からないんだが……」

戸惑う長谷川は紅茶を飲むわけでもなくただティースプーンでかき混ぜているだけだ。

「前田はどこだ？ キッチンにでもいるのか？」

「いえ、前田先生は長谷川さんを預け、すぐに学園に向かわれました。こちらはマスター宛のお手紙ですが、お読みになりますか？」

「いらんいらん。どーせ不可解なことしか書かれていないだろう」

しかし、預けてって……。

「捨て犬ならぬ捨て主人か？」

「誰が捨て犬だ!!」

「ほう、小僧が強制送還か」

「強制送還？ いや、国に帰るだけだつて……」

はっ、こいつは何を言っている。嫌と言うほど理解したんじゃないのか？ この世界には魔法があって、あの坊やは魔法使いの一人で、魔法使いとしてはやってはいけない事をした。その結果が強制送還だ。更に言うならあの歳だ、オコジヨにされるんじゃないか？ それは変えようのない事実のはずだ。

そして、何を会話するでもなく休日であるその日。私は多少の疑問しか浮かばなかった。だが、目の前の小娘がとんでもない爆弾を抱えていることを知るのは夏休みに入った直後だった。

S i d e o u t

例の子供先生は国に帰ったらしい。なぐんか先生達も慌ただしい感じだったみたいだけどな。まるで「犯罪者が逃げた！」みたいな空気すら感じられた。まあどーでもいいけどな。突然過ぎたから前田から話を聞いた時はびっくりしたが、思い返してみれば私には何にも関係が無いニュースだった。

それから私に待っていたのは面倒な期末テストぐらいなものだった。面倒と言っても感謝したくもねーけど前田の効果もあってなのか成績は上々、クラスの学年別のランキングも2位とかなり良かった。で、私の引き籠り夏休みがやっと始まると思った矢先に……これだ。

「夏休みに入りましたら、しばらくお暇を頂戴いたします」

前田はそう言っていた。つまりこれはアレだ。前田が私の下を離

れるって事だ。マジで一人で夏休みを堪能できるってわけだ。これほど嬉しい事はない。

「しかし、その間のお嬢様の生活が不安でなりません」

「大丈夫だよ。食券も大量に学園祭で手に入れたしどうとでもなる」

「いえ！　そこで強力な先生に用心棒を依頼してございます」

「時代劇の見過ぎだ……」

いや、あれは時代劇ですら無かった気が……。

「では、よろしくお願いいたします」

「かしこまりましたえ」

え？　この京都弁は……実習生から正式採用された天ヶ崎先生だった。確かこの人も魔法関係者……何？　この人が私に対して何をするんだ？

「当然ながら、お嬢様の食事や炊事洗濯など全般的にやって頂きます」

「前田はんの言う事やったら何でもやりますえ。小太郎も長瀬さんのところに預けましたし、何の問題もあらしまへん」

やるなよ！！　アンタ教師だろうがよ！　何でこのアホの一声で全て従っちゃうんだよ！？　アンタより10歳は若い小娘だぞ！？　何で下働きする気満々なんだよ！？

「天ヶ崎先生は別にメイドだったわけでも、下働きをする人間ってわけじゃないんだ……でしょう!？」

「前田はんの言うことは絶対ですえ」

何それ。怖いを通り越して気持ち悪い。何でこんな変態執事の言う事なんて聞いてしまうんだろう？ しかも前田に関する事じゃなくて、私の事なのに。っーか私も気がひけるわ。

「そう仰らずに、お嬢様の中で私、前田の株価が最高潮に達しているのは分かりますが、どうかこの場はそのお気持ちを沈めて頂きたいかと思えます」

「沈める気持ちも持ってねーよ！ 株もねーし！」

「それから、もしもお困り事があったりしたらエヴァンジェリンさんを頼って下さいませ。お嬢様のお願いでしたら、彼女は必ず聞き入れてくれることでしょう」

吸血鬼の幼女に頼むなんてことは無い気がするんだけどな……。

しかし夏休みに入ると、前田は前々から言っていた通りに去って行った。

「千雨お嬢様、抹茶アイスですえ」

「え、あ、はい……」

……居心地悪っ！！

何で教師が私の部屋と一緒に生活して、私の世話をしてニコニコしてんだよ！！ 前田の時は……アレだったからアレだけど……天ヶ崎先生は何とも居心地が悪い！！

ってという日が1週間ぐらい続いて、私は限界が来た。

飯が不味いわけではない。同じ女だからパンツがどーのこーのって言うのも無い。だが、何か足りない。前田には全てにおいて遠く及ばないのだ。当然だ完璧な執事であるわけでもないのだから。そもそも前田が完璧すぎたんだ。そのことを肌で感じ、私は前田が憎たらしくなり……一発引っ叩いてやりたくなり、天ヶ崎先生に直接聞くことにした。

「え、前田先生おすか……？ えっと……ちょっと遠くに行っておりましたなあ、その……今月～と言うか、来月にも帰ってこれるか分かりまへんのやあ」

「ふん、会いに行けばいいじゃないか」

「なっ！ どっから出てきやがった吸血鬼幼女！！」

「冷凍されたいのか小娘（ビキビキ……） ふん、まあ良い。前田は今『魔法世界』に行っている。私はたまに貴様の顔を見に来るよ。うに言われているから来ただけだ。ふむ……問題なさそうだな」

まほっ……せかい？

「まあいい。邪魔したな、行くぞ茶々丸」

「はい、マスター」

魔法世界……？ 夏休み明けても戻って来ないかもしれない？  
何で？ つーか魔法世界って何だ？ ネズミの夢の国か？ ランド  
か？ シーか？

「真祖の吸血鬼はんから話を聞いてから安心しておすな〜？ それ  
は私も前田はんには会えないのは寂しいおすけど……」

目の前で天ヶ崎先生は何か喋ってるけど……なんかどーでもいい  
つーか。この気持ちは何だ？ いや、あたしも変態じゃねーから  
よあ、「パンツパンツ」言われなくて気が楽なんだぞ？ だけど……  
…そーだよ、飯が一気に変わったし！ 話しかけられ方も違うから  
その変化に戸惑ってるだけだ！ そもそも前田なんていない方が私  
にとつて幸せに決まってるじゃねーか！ そーだよ何故喜ばない方が私  
谷川千雨！！ 別に恋人でもあるまいし！ こ、恋人なんて尚更あ  
るわけがねー！！ アホか私はー！！

「寂しい……魔法世界に行ったことは分かっている……でも夏休み  
明けでも戻って来ないかも知れまへん……」

ん？ なんだ？ 天ヶ崎先生は何をブツブツ言ってるんだ？

「でもウチだけ行っても前田はんにお嬢様のお世話で怒られてしま  
うやろし……ああ、そうやあ（ニタァ〜）」



うわっ、悪役の笑顔を作りやがった。この人も前田が絡むとおかしくなるからな……。ん？ つーかなんだ？ なんだそのお札みたいな紙は？ 何で近づいて来る？ おい？

「お嬢様と一緒にいきまひよかあ〜」

「は？ どころ……むうっ！？ もがぁー！！！！？」

そして、私は口に紙を張り付けられ、両腕両足共に拘束され、世話を任されている筈の人間によって拉致された。

Side エヴァンジェリン

夏休みに入ると同時に前田は旅立って行った。行先は魔法の国らしいが、何しに行ったのか、また長谷川千雨を置いて行った理由も分からん。まあ魔法に関わらせないようにするため。と言う理由だろうが、その理由も分からん。謎だらけだ。

「は〜しかし前田がいないと平和だなこの学園生活も」

「前田先生は何故魔法の世界などに行かれたのでしょうか？」

「そんな事は知らん。しかし、これで一時的とは言え前田の呪いの事も忘れて過ごせるといふモノだ。あと半期だけ我慢すれば私も自由の身だ。くくくくく」

前田からは特に面倒事は頼まれていないからな。1週間ぐらいに一度、長谷川の顔を見ればそれで良いらしい。顔を見て何が変わるわけでもあるまいし、それに長谷川千雨が引き籠るのは分かりきっている事だ。茶々丸に茶菓子でも持って行ってもらえば事足りるといふモノだ。私もこの夏休みの間にまた京都にでも出かけてみるか？

「……ア」

「ん？ どうした茶々丸？」

茶々丸は茶菓子をテーブルに置いた瞬間に顔をあげた。

「マスター……千雨さんが……拉致されているようです」

「……はあ！？」

「前田センサーの恩恵を受けているので間違いは無いかと……」

いつの間にそんなセンサーを取り付けたんだ……。

そして、私の夏休みの京都旅行プランは崩され、長谷川千雨を追跡すると言ふ無駄な行動に出なければならなくなった。そして、それも速攻で片付いた。私だって休みが欲しいからな。学園を出る直前で京都でスクナを呼び出したアホ女が……

「天ヶ崎先生ですマスター」

天ヶ崎が猿のぬいぐるみ風の式神に長谷川千雨を運ばせていたの  
で、凍らせて止めた。

「ぶはっ！ 危うくこっちが凍らされるところだったぞ！！」

ビキビキキキッ……

うるさいお嬢様だ。本当に前田にはどういう利点・有益な存在に  
映っているのかが気になるところだ。しかし、私にもそうだ京都市  
こうと言う目的がある。ここは気にせずに拉致を阻止しただけで良  
しとしよう。

「え、エヴァンジェリン！」

「何だ？ 私とて暇では無いぞ？」

「わ、私を前田のところまで連れて行ってくれ！」

バカなことを。それに私が長谷川の言葉なぞ聞くわけが……（ド  
クンッ）

「ああ、分かった」

……何でだ。何で私が長谷川千雨の言う事を聞かないといけない  
んだ！！？

Side out

猿のぬいぐるみの手から落ちた私は茶々丸によって拘束していた札を剥がされて行った。ちらりとぬいぐるみを見ると、そこには力チンコチンに凍った猿のぬいぐるみがいて、天ヶ崎先生は意識を失っていた。

ペリッ

「大丈夫でしたか長谷川さん」

「ぶはっ！ 危うくこっちが凍らされるところだったぞ！！」

エヴァンジェリンは額に筋を浮かべてイラついている。今度は私  
が凍らされるのでこれ以上はやめておこう。しかし、こんな目にあ  
ったのもそもそも前田の所為だ。余計にイライラして来た……一発。  
いや、何発も殴らにや気が済まん。

『それから、もしもお困り事があったりしたらエヴァンジェリンさ  
んを頼って下さいませ。お嬢様のお願いでしたら、彼女は必ず聞き  
入れてくれることですよ』

そこで手を貸してもらおうとしたら武道大会も準優勝で吸血鬼とか

言う現状の中で異常者暫定チャンピオンのエヴァンジェリンなわけだが……マジだろうな？ 私の言う事なんて聞かねーんじゃねーだろうな……。

「え、エヴァンジェリン！」

「何だ？ 私とて暇では無いぞ？」

「わ、私を前田のところまで連れて行ってくれ！」

あー言っちゃまった。駄目なら死んだな。あ、HDDの中身消去する前に死んじまうぞこれ……。

「ああ、分かった」

……聞いたよ。

「え？ じゃ、じゃあ明日出発するとして、今日は一緒に飯とか……食べないか？」

前田がいたから一緒に食っただけだ。私には敵意までないにしても、そこまで好印象を持ってない……と思われるエヴァンジェリンの事だ。断るだろう。

「分かった。茶々丸に用意させよう」

……聞いたよ。しかも用意してくれるってよ。

「な、なあ？ 正直に言ってくれ、何でも言うこと聞くのか？」

「聞くに決まっているだろう」

……何でだよ。

「って何でだー!!」

「うおっ!? いきなりなんだよ!？」

「マスター。こちら、以前お預かりしていた前田先生からのお手紙です」

「嫌な予感がするが……なんて書いてある?」

「『学園祭で約束いたしました【お嬢様の事を頼みます】と言う内容に期日を設けておりませんでしたので、この契約は私が切らない限り永続となります。ねえどんな気持ち? ねえねえ今どんな気持ち?』と、クマさんが左右にステップしている絵と一緒に書かれています」

「前田——————!!」

その日、私以外が前田に対してキレているのをはじめて見た。

## 第27話「お嬢様の疑問でございます」（後書き）

感想は随時受付中でございます。

はい、というわけで、前田が単独行動で魔法世界に行きました。

ネギはオコジヨにされそうですが……退路があるようで……？

で、お嬢様は前田を追う事に決めました。恋心からかムカついて殴りたいからかは気持ちの整理がついてません。

エヴァンジェリンさんに関しては、学園祭中に「前田に1日だけ絶対服従」の日が設けられました。その時に約束した、『お嬢様の事をよろしく願います』という契約が、期限設定が無かったため前田が解かない限り、長谷川千雨の命令・お願い事は従わなければなりません。相変わらずの詐欺行為です。

さてさて、次回からは魔法世界編ですね。

……がんばろう。

第28話「お嬢様夏休みでございます」（前書き）

聞いてくれ皆!!!

この作品のお気に入り登録が1000件を超え!

更に総合評価が3000を超え!

そして! PVが1000000を突破した!!

ありがとうございます同士諸君!!! しかし! 残念なお知らせがある!

今回の28話だが、前田が出て来ない!!! 悲しいが分かってくれ  
!

今回はお嬢様が日本を出るところまでを書いたぞ!

こっちの方が夏休みだろ! ってこって、前回のタイトルと入れ  
替えましたよっと。



## 第28話「お嬢様夏休みでございます」

【絡繰茶々丸 の場合】

夏休みに入った直後。前田先生は魔法の国へと向かったようだ。絶対的なお嬢様という位置づけの長谷川千雨さんを置いて行くと言うのが違和感を覚えさせる行動ではあったが、私に一つのセンサーを渡して旅立って行った。そんなセンサーを組み込むために、私はハカセの下に来ていた。

そこに待ち受けていたのは『New Body』だった。センサーの取り付けだけを依頼していたはずがなぜ……。

「どう茶々丸。ニューボディは？」

「ハイ 問題ありません」

問題はない。センサーも機能し始めた様で、長谷川さんの位置が分かる。高感度なセンサーだ。しかし何故、長谷川さんだけを特定できるのだろうか……。

「超からも預かっていたデータも元に、今の我々に可能な極限まで性能をUPさせたよ。ほら、『瞬動術』も理論上可能なはずだから早速テスト行くよ」

昨日、前田先生からマスター宛に残された手紙を開封しマスターはお怒りになった。可愛らしいクマさんかと思っただが、何が問題だったのだろうか。

「あ、そうそう茶々丸。ネギ君とお似合いの10歳ボディもあるけ

ど？」

「いえ、このままで結構です。それから八カセ。ネギ先生は国に帰られていきます」

「え？ あ、そうなの？」

たいして興味も持たない感じで八カセはテスト観察ルームに入っ  
て行った。私は様々な疑問。データを処理しつつ着替えて、新しい  
少しコンパクトになった身体を確かめるようにテストルームに足を  
運んだ。性能が上がっているならば良いと思う。

### 【長谷川千雨 の場合】

「こっちに困り顔お願いしまーす」

「え〜〜？ こつですかー？ わかりませーん（><）」

「伝説の14話のあのポーズお願いしますっ」

「こつちに笑顔を」

東京ビッグサイト。夏と言えばまずはココだ。こんな感じで、こ  
のコースは当たり前だよなー。人前に出るのも悪くねえ ニヒヒヒ

こりゃ きっかけを作ってくれたあのアホ執事にも多少は感謝  
を……。

「いたな長谷川千雨……もう良いだろう？ そろそろ前田をだな……」

ビクーンッ！！

「ここ、『東京国際展示場』（とうきょうこくさいてんじじょう）は、株式会社東京ビッグサイトが運営するコンベンションセンターとなっております。通称は運営会社名と同じ東京ビッグサイト中央区晴海にあった東京国際見本市会場を1996年に移転し、現在の東京国際展示場となったようです」「そんな無駄知識なんぞいらん！ おい長谷川千雨！ 前田を殴りに行くのではなかったのか!？」

「カワイイー！！」

「お友達ですか?!」

「なんのコスですか?」

「踏んで下さ〜い!」

「何故貴様らがここにいる!？」

そしてこんなところでフルネームで呼ぶんじゃねー!!」

「前田センサーを搭載した今、長谷川さんの行動は予測済みです」

そのセンサーへし折ったるか!! つつーかそもそも!! ロボ娘の身体が明らかに小さくなってるだろう!!?」

「ハイ、ハカセにコンパクトにして頂きました。性能も向上しております。それから、センサーは内部にありますので折るのは難しいかと……」

「ロボが心の声を読むなー!!!!」

「（いましたわー！ 確保なさいー！）」  
「ハッ！」

「すみませんこっち笑顔を……（どんっ）うわっ」  
「何だよあんたら？ なっ、おい！？」

何だか騒がしくなり、私はソツチに視線を向けた。そこには黒服・サングラスの集団と指示を飛ばしている本物のお嬢様の姿を見つけた。

「委員長？ あ？ 何だ？ 何だ！？ 何だア！！？」

#### 数分後

「前田が長谷川さんの下を離れるなど考えられませんか……何をしましたんのですの？」

「知るか！！ そもそも何で私は縛られなきゃならないんだよ！！」

「馬鹿共が……面倒をかけさせるな」

黒服集団に襲われたかと思いきや、エヴァンジェリンが黒服集団を積み上げるように撃退した。更に縛られているロープもナイフも無くスッパリと切断していた。委員長は両手を上下にわたわたさせて私とエヴァンジェリンに言い寄ってくる。駄々っ子が……。

「エヴァンジェリンさんもエヴァンジェリンさんですわー！ エヴァンジェリンさんも前田が好きだからと言って私を除け者にしなく

ても良いではありませんか!?!」

「誰がそんなこと言った(ビキビキ……)前田は故郷に一時帰国しただけだ」

あ? そうなのか? あ、いや、そうか。嘘か。エヴァンジェリンですら前田の事は理解不能な上に情報も無いはずだ。そう言うてたしな。そうになると、尤もらしい嘘で委員長を帰らせるのが最善と言うことだろう。

「前田の故郷……? どこですの!?!?!?」(ギュピイイイインツ!?!?)

「うおおおおお!?!?!?」

おお……委員長が吸血鬼幼女を押ししている……。結局、エヴァンジェリンは「イギリスらしい」とだけ伝え、委員長を帰らせた。

「では行くぞ」

「ちよっ! 着替えさせる!」

「む……分かった」

あ、言うことは間違いなく聞くんだな……。

【相坂さよ の場合】

ミンミンミンミン！

夏休みに入りました。幽霊の時、去年なんかだとずーっと教室でペン回しなどを嗜んでいましたが、今の私にはこの身体があります。教室はそもそもポルターガイストさんもいらっしやるようですし、怖くて中々一人では居辛い環境です。

前田先生は長谷川さんを置いて海外に行っちゃったらしいし、別に深く友達付き合いしたわけじゃないから……やっぱり私の行動範囲は学園敷地の外と言うわけにも行かず、麻帆良のコンビニに来てしまいます。前田先生に用意してもらったこの身体も中々のもので、幽霊だったころのように暑さなどを感じない逸品です。だからコンビニには行ってもすることがないし、買うモノも無い。そうなるのが当然、いつものようにコンビニの前でボーっとしてるのが何故が一番落ち着くわけで……。

そもそも前田先生が長谷川さんから離れるとは意外だった。連れて行くか、留まるかのどっちかかと思っていたけど、実家が海外なのかもしれない。……いやっ！前に仕えていたお嬢様が海外にいて実はソナナ事に!？

ふう、やっぱり暇だな……。誰かクラスメイトの人でも来ないかなー……。

「……………(じー……)」

っ!!!? ビクウッ!!

いつの間にか視線を注がれていて、気がついたら、そこにはザジさんがいました。この人も前田さんの知り合いらしいですけど、いづから知り合いとか、どう言った知り合いとかは分かりません。

「……………(じー……………」

「あ……………」

「う……………」

「一覧の通り無口なので、聞こうにも聞けず……………って感じですよ。」

「……………」

「……………(じー……………」

「あ、あの……………ど、どござお座りになりますか?」

「(コク……………」

ザジさんの連れてきた得体のしれない何かに囲まれ。私は食べられそうになりながらも、ザジさんの隣に座っていることしかできない。

「食べてイイスカー」

「う……………」

「ダメ」

長谷川さんか委員長さんか前田先生助けて……………」

「あら、ザジさんと相坂さんではありませんの？」

「委員長さんーん！ー！（抱きッ）」

「ど、どうしたんですの！？ あ、そうそう。私これから家に戻るのですが、寮に残っている方は花火をやるそうですよ？」

「……………」

「そんなこと言ってザジさん花火買ってるじゃありませんか？」

え？

「……………」

「そうですね。今度は私も参加出来ればいいのですが、楽しみにしておりますわ」

普通に喋ってます？ 私がおかしいのでしょうか……？ ザジさんは委員長さんと普通に会話と言つモノを成立させているようです。

「あーザジさんに相坂さんー！ 花火の話聞いたー？」

「行くよー！ー！」

「（コク…………）」

で、でも私なんかが行っても良いのでしょうか……？  
グイッ

ザジさんは私の手を引いて、少し頬を緩ませた気がした。

「……………ハイッ」



荷物をまとめて……。

「あれ？　ロボ娘は行かないのか？」

「茶々丸か？　新しい身体でメンテナンス等もあるらしいからな。  
なあにソイツがいる」

ウイイイイン

背後から嫌な音が聞こえる。

「お荷物お持ちいたしますマスター。長谷川様（ピポ……）」

That is a ASSIMO. それはASSIMOです。  
…… ASSIMOって何さ。やっぱりレンタル契約じゃなく、前田  
の、若しくはエヴァンジェリンの私物と化していると言うことだろ  
う。金はよ？　いくらだよ。維持費は？　もう疑問しか浮かんで来  
ねえ。

「……あー……なあエヴァンジェリン」

「何だ？」

「魔法の国は良いとしてよ……科学兵器って持ちこんでも良いのか

「？」

「『安心ください長谷川様。ワタクシは紛うこと無き』maid  
in Japan』すなわち。日本人でございます（ピポ……）」

いや、ピポピポ言ってるのがよ……。

「更に言うなればワタクシは現在省エネモードで稼働中。つまり通常の愉快で楽しいなコンパニオンロボットになっているため、兵器ではございません（ピポポ……）」

ロボットって言った！今コイツ自分でロボットって言った！！

「細かい事を気にするな。行くぞ」

「あ、ああ……」

電車を乗り継いで空港に到着。ASIMOを荷物に詰め込み、問題無く通った。何で？普通止められるんじゃないのか？「ASIMOはちよつと……」的な感じで止められないのか？まあ通つちまつたもんは仕方がない。

私は手荷物検査を終えて、ほんの一足先にチェックを終えたエヴァンジェリンの下にやって来た。ペットボトルもよく分からん機械に通されて、私の手元に2つ返って来た。

「ほら、自分で持っていたら良かっただろうが……」

「ふんっ、あの変な機械が気味悪いだけだ」

魔法使いと言うモノはやはり科学的なものが苦手なのだろうか？いや、そうすると絡繰茶々丸やASIMOの説明がつかないか？いや、理解できずとも、会話などが成り立てばいいのだろうか？

そんな疑問を抱きながら、私はペットボトルのお茶を口にして…。

「ブフウツ!!?」

「な、何だいきなり!?!」

空港の滑走路に『MAEDA LOVE』と、前田がデカく描かれたジェット機がある。盛大に噴き出してしまった私は、咳き込みながらなんとかガラス越しのそれに指を向ける。

「けほつけほつ……あ、あれだ……」

「……雪広あやかだろっな」

そつだあんなモノ用意するのは委員長以外ないだろう。あー、更に前田を殴る気持ちが膨らんで来たわ……。

そして。

(あれ? 私は何故『魔法の国』に行こうとしてるんだ? 前田なら帰って来てから殴ればいいじゃん)

そう気付いたのは、英国は『ウエールズ』に着いてからだつた。

私は自らの足で非現実へと進んでいた。

第28話「お嬢様夏休みでございます」(後書き)

感想は随時受付中でございます。

第29話「メルヘン皆無でございます」(前書き)

ネギが夏休み前に魔法世界へ。

前田が夏休み入った直後に魔法世界へ。

千雨が夏休みを少し楽しんでから魔法世界へ。

彼等は巡り会うのでしょうか？

魔法世界編はじまります。

## 第29話「メルヘン皆無でございます」

S i d e    ネギ

麻帆良ではあと1週間ほどで夏休みに入るだろう。

「……お久しぶりねネギ君。こんな形で再会するなんて残念だけど、時間も限られてるわ。行きましようか」

魔力を封じられ、空港まで見送られ、逃げ出す事も出来ないままに僕はイギリスに帰って来ていた。空港には既にマクギネスさんが待っていた。ここまでは前田先生の言うとおり。もし、話された内容に間違いがなければ、この人が僕を魔法世界に連れて行き、僕に隙を見せてくれる筈だ。

「行きましようか」

マクギネスさんの後に着いて行くが、これは隙ではない。後ろに気配を感じる。僕はまだ逃げ切れない。魔力を封じている効力は、腕の呪文の痣を見る限り3日間。これを使い切り、隙を見逃さずに逃げ出すしかない。

あの日、前田先生に指示されたことは2つ。魔法世界に入った時のマクギネスさんの隙を逃さない事。逃げ出したらこのピアスを着ける事。ピアスには認識障害も少しばかり備わっているらしい。だから、今つけたら逆に怪しまれる可能性が大だ。あくまでも逃げ出してから、一瞬でも僕を見失ってから、と言う事だ。

後は指示通りに逃げだせば、僕は処罰から逃れられるらしい。そして、その後は父さんの事を存分に調べて追う事が出来るらしい。全ては計画通りに進めば失敗はしないはずだ。

学園側からは今回の事件は魔法世界には伝わっていない。その為に騒がれる事はないが、『ネギ・スプリングフィールド』という名前は目立ちすぎるために、偽名も用意されていた。今の僕の名前は「アレックス・デイノ」という名前らしい。パスポートなどもそれで通してある。

「ネギ！ ……ネギ……」

「ネカネお姉ちゃん……」

電車を乗り継いでウェールズに到着する。そこは僕の故郷で、当然、ネカネお姉ちゃんがいるわけで……僕もお姉ちゃんも名前を呼び合う以外は特に言葉を紡ぎ出す事も無かった。「おかえり」などと言われるはずもなく。また、「ただいま」などと言える立場ではない。

お姉ちゃんは少し痩せた……と言うよりもやつれた気がする。僕のせいだろう。心配掛けさせて、こんな形で帰国することになって、失敗をすればオコジョにされるであろう僕。

「ここからは私一人で大丈夫です。ご苦労様です」

マクギネスさんが、そう僕の後ろに言い放つと、後ろにあった監

視の気配は消えた。一泊だけメルディアナ魔法学校の地下に泊まる。まだだ。今はまだ魔力も封じられているし、逃げ出したところで、すぐに捕まるだろう。明日早朝で魔法世界のゲートを通るらしい。僕はゲートを通り、魔法世界に入ってから行動を起こす。

濃い霧が立ち込める早朝。マクギネスさんにただひたすらに着いて行く。あれからネカネお姉ちゃんにも、魔法学校の校長であるおじいちゃんにもあつていない。会っても会話はないだろう。こちらから話す事はない。あの日、前田先生に説明されたことを冷静になつて考えてみれば当然のことだった。

魔法使いの存在を全世界に公表する。これに加担したことは間違いないし、僕の意志で加担したことだ。ならば失敗した先に待つのは罰を受ける事だけだ。しかし、前田先生はそれを回避させようとしていた。ただのオコジョになつては父さんの事を調べることも、追うことも出来なくなる。天の救いだ。これを受けないわけがない。

濃い霧を抜け、100人近い魔法使いの姿が広がっていた。ストーンヘンジを囲むように転送の時刻を待っていた。

「分かつてるわね？ ……アレックス君」

マクギネスさんは僕の偽名で声をかけて来た。

その声は少し震えているように感じた。

「アチラに着いたらですよね？」

今度は言葉も無くマクギネスさんは頷いた。マクギネスさんから



したら「犯罪者を逃がしてしまった」という立場になるわけだ。本人からしたら逃がすつもりでこの場にいるのだ。その気持ちは測り知ることはできない。

時間になり、ゲートが解放される。一瞬光ったかと思えば、そこはもう違う空間へと転送されていた。僕は予定通りマクギネスさんが受け取って来たりユックを受け取る。仮に僕が本名を告げていたとしたら、その名前から少なからず対応に追われこの場で足止めも発生する様だ。

「あ、スミマセン。靴紐が……」

「早くしなさい……」ご苦労様です」

「「ご苦労様です」」

そこに黒いローブ姿の二人組が現れる。こちら側の誘導係。監視係だろう。僕は靴ひもを締め直すと言う名目で少ししゃがみ込む。

「彼がアレックス・ディノです」

「かしこまりました」

「外に飛空艇を用意してありますので」

偽名はアチラにも伝わっている。僕は今しゃがみ込んでいる。ローブ姿の二人組は両方ともマクギネスさんと話している。マクギネスさんは僕に背を向けている。ここしかない。ズボンの裾を少し上げ、隠し持たされていた『座標軸固定済みの転移魔法符』を抜き取った。

「ではこちらへどうぞ」

なっ!?!? 貴様!?!」

「待て!!」  
「くっ!!」

発動した転移魔法符は魔力を通さずとも、瞬間的に僕を別の場所へと転移させていた。

S i d e o u t

S i d e ????

「し、しかし姫様!? この方は……!!」  
「良いのです。下がりなさい」

パタン。

納得がいかない、しかし主人の命は絶対という気持ちで豪華な扉は静かに閉められた。部屋に残されたのはローブ姿の角とエルフの様な耳を生やした褐色の肌をした女性と、場違いに見受けられる、執事服の男だった。女性の方は見るからにして『超大国ヘラスの血』を色濃く受け継いでいる分かりやすい外見と言えるだろう。しかし、執事の方はこの場にいることは中々に異常だ。ヘラス帝国に執事はいても、人間タイプは有り得ない。そんな二人の会話は二人きりに

なったことによって、再び始まった。

「お心遣い感謝いたします。ヘラス帝国第三皇女殿下」

「……25年ぶりぐらいか？ 戻って来たと思っただら……もう一度言ってみよ」

冷静で丁寧な口調だった女性は、執事服の男に言われたとおり、超大国ヘラスの皇女だった。しかし、執事服の男と部屋に二人だけになると、その口調は素に戻っていた。

「三十路おめでとございますテオドラ様」

「ヘラス族は長命だから人間換算でまだ十代だと知っておろう！！」

「ですが、事實は事實ですので……ああ、こんなに歳をお取りになられて……この前田。あの頃のテオドラお嬢様が、懐かしく思えます。おっと、涙が……おや？ ハンカチを忘れてしまったようなので、代わりにパンツを貸して頂けますか？ あ、今でもパンツは履いておられないのですか？」

「いつも穿いておるわ！！ お主がハンカチを忘れるなどと言う事も無かるう。全く……お主は変わらぬな。……前田よ」

「はい何でしょうか？」

「まさかとは思いますが、また妾の執事になってくれると言う事か……？？」

「誓ってそのようなことはございません」

「ちよつとは悩まぬか！！ はあ、そうか そうであるうな……今は主人はおるのか？ それとも、新しい主人を探しにこっちに帰って来たのか？」

「はい。私は現在 最高の主人に仕えております（ペカーツ）」  
「……そうか。って待って待て！！ 何故光る！！？」

「恋する執事はせつなくてお嬢様を想うとすぐ光っちゃうのでござ  
います」

「それは照れておるのか……？ それで？ 何しに来たのじゃ？」

「ええ、実は」

Side out

Side エヴァンジェリン

「夢の国」の観光旅行などゴメンだ。そう思っていたはずの私は  
今既にその一歩手前まで来てしまっている。前田の術式もでたらめ  
だな。何故、間接人員の長谷川が私に絶対的な命令権を持っている  
と言っただ。

あー言っただ。確かに学園祭最終日に前田に対しては「今日1日  
絶対服従」という契約は成された。しかした。その日に、「お嬢様  
をお願いします」と言っただ内容が追加されたとしても、何故に永続ト

ラップへとなるかが分らん。魔力うんぬんではないな。術式の問題だ。かつてナギのアホが私に掛けた様なモノと似ているところはあるだろう。掛けた本人が解きに来ないと解呪不可と言う様な代物だ。「登校地獄」自体は解呪されているわけだから私の能力的には問題がないわけだが、ただの人間に従わなければならんとは……。

「ストップだ長谷川千雨」

「あ？ 何だよ？ ……げっ」

そして、委員長もイギリスという情報だけで、私達を見つ出そうとしていた。アレは本当に人間か？

「もうどこですのー！？ 前田の匂いがしませんわー！！」

「鼻だけで探す気だったのかよ……」

「アホだな……そら、こっちだ行くぞ」

まあ着いてしまえばこっちのものだ。人間が来れる場所でもないしな。

予定していた通りのゲート解放日の早朝だ。

「ふむ、懐かしいな」

「すげえ濃い霧だな……2、3メートル先がほとんど見えん」

「はぐれるなよ？ 手順を踏んで進まんと、辿り着くことはできんからな」

「ロンダルキアかよ……っーかよ。その姿に違和感があんだけど……」

…」

長谷川千雨の言う違和感とは偽造身分証明書と同じ顔の姿だろう。しかし、それは仕方のない事だ。面倒事は避けるべきだからな。

「当たり前だろう。無闇に混乱させるわけにもいかないしな」

「混乱？ 吸血鬼つてのはそんなに不味いのか？ ファンタジーの代表格と思ってたんだけどよ。握手とかサインとか大変なのか？」

「はっ、まさか。『元』とはいえ、私は賞金首だからな」

「へ〜……マジで？」

前田はそう言った事は話してないんだな。いや、話すわけがないか。長谷川に魔法に関する知識を与えないためにも、私の情報を勝手に漏らすと言う事もしなかったと言う事が。

ストーンヘンジに着くと違和感を覚えた。どこかで感じたことがあった気がするモノだ。無機質な、それでいて覚えのある魔力を感じる。

「いかがいたしましたかマスター（ピポ……）」

ASIMOアセイモか？ いや、コイツとはまた違う感じの無機質な存在だ。どこで感じたのであったか……。

カラーンカラーンカラーン

転送開始の鐘が鳴る。地面が輝きだし次元跳躍大型転移魔法陣が作動する。

「……………」

「あ？ 何だよ？」

「いや、なに。お嬢様は魔法世界についてどんなことを考えているのかと思つてな。まさか天使がいるとか能天気な脳味噌をしているわけではあるまい？」

「けつ どーせとんでもねーファンタジーな世界だろ？ スライムとかがいるさー。はやだやだ、ほつとくと魔王とか出てくんじゃねーの？」

ふむ、魔王をアチラ側で見たことはないがな……。そんなことを考えていると空中魔法陣が描かれる。そして、一瞬の閃光と共に、転移先であるメガロメセンブリアのゲートポートに着いていた。

「ほれ、そこで外の世界が見れるぞ」

「……何だ現実と変わんねーな『現実＋空飛ぶ鯨』そんだけだ。くだんねー」

「ふむ、確かにそうだろうな。こつちも、麻帆良げんじつの方も大差はないだろうな」

「ああ、街並み見りゃ分かる。ここにや夢もメルヘンもねーな。多分 現実と同じ厄介でメンドーな世界が広がってるだけだぜ。どつちにしろくだらねー」

こつちいうところはやはり好感が持てるな。何故前田がこの長谷川千雨に仕えるのかは分からんが、クラスのアホ共とは違う視点を持っているな。気苦労せんで助かる。

びくっ

「チッ」

「あ？ どうした？」

この感覚。やはりそうだな。京都の時の若造だな。他も含めて4人と云ったところか。ここにいる警備の魔法使いどもは……紙屑だな。全く、厄介でメンドーな世界に来てしまったものだ。

「おい、長谷川千雨、ASIMOの傍を離れるなよ？ 緊急事態だ」  
「は？」

「マスター問題があります。アップデートに時間が数分かかります  
(ピピポ……)」

「……そのアップデートとやらをしない場合は？」

「通常の愉快で楽しいコンパニオンロボットでございます(ピポ  
……)」

「……時間はどれくらいかかる？」

「5、6分と言ったところでしょうか(ピポポ……)」  
「なあ？ なんの話だよ？」

「敵だ。私一人で何とかなるが、お前の身の安全が保障できないのと、場合によっては犯罪者扱いにされてしまうだろう」

「……何で私はこんなところに……」

お前が前田を殴りに来たいと言っただろが……。

「しかし、アップデートとやらは任せなければならんな。ASIM  
O、そいつを頼んだぞ」

「かしこまりましたマスター(ピピポ……)」

「出てこい。あの時の若造だろう？」





エヴァンジェリンは白髪のカキと、黒いローブの仮面の男。それに二刀流の女の攻撃を捌いている。それも目を疑う速さだ。この前の学園祭での武道大会がお遊びにすら思えてくるマジモノの戦いだ。……ん？ あの二刀流って京都で見た事……あるわけねーよな。有り得ない。

そして、何も無いところから突如として現れる黒い球体や、石や岩の槍だとか、がエヴァンジェリンを襲うが、エヴァンジェリンもエヴァンジェリンで氷みたい魔法でバンバン応戦している。私は階段の縁で頭を抱えて事が済むのを待つことしかできない。

既に警備員つばい魔法使いは倒れておりエヴァンジェリンが相手するしかないようだ。あ？ 少し離れたところにもう一人いるぞ！ 私達が来たストーンヘンジのところでは何かをしている。

「なあ！ まだアップデート終わらねーのかよ！？ アレ止めた方が」

「（ウウイイイイン……）」

あ、駄目だコイツ。アップデート中は話も何も出来やしねえ。そもそもコンパニオンロボになる必要はあったのか？ わざわざ戦うたびにアップデートとか面倒すぎる！！

「まだ仲間がいたか」

げっ！！ 不味い！！ 大声出したせいでバレた！？ 早く終わんねーのかアップデートオ！！！！

「全く、お嬢様らしく静かにしてられんのかお前は……」

エヴァンジェリンが呆れてそう言ってくる。エヴァンジェリンは脇に二刀流の女を抱えており、黒いローブに投げた。

「チツ 流石は不死の魔法使いマガ・ノスフェラトゥと言ったところか……」

「悪の魔法使いに挑むからには、それ相応の覚悟はしているのだからうな？」

「……なるほど、確かに京都の時と同様に吸血鬼の真祖が相手ではこちらの部が悪いね。カモ完全に取り戻しているようだし……中々貴重な経験をさせてもらったよ。僕達は目的を果たした」

「なにっ！ しまった!!」

単独行動をしていたローブの人物によって、ストーンヘンジの中央にある石柱にヒビが入る。あれって不味いのか？

「グイシユ・タル・リ・シユタル・ヴァンゲイト。おお 地の底にイメノンバシレイオン・ネクロン眠る死者の宮殿よ、ファインサスター・ヘーミン我らの下に姿を現せ。冥府の石柱」

「こんのクソガキがあ!!」

エヴァンジェリンは怒りを露わにして、氷の槍みたいなものを撃ちまくっている。そんなモノより、空から降ってくるデカイ石柱は良いのかよ……アレ？ つーか一本こっちに向かってきてないか？

「ギヤーツ!! 死ぬー!!?!?」

「インストール完了しました(ピポ……)」

「おせえええ!! 何とかしろアレ!!」

「かしこまりました(ピポ……)」

ASIMOは学園祭最終日でも見せていた中国拳法でバカでかい石柱が落ちてくる位置をスラし、私を抱えて、安全圏へ飛び出した。が……。結構離れた場所で魔法をバカス力撃つたエヴァンジェリンがこっちに来た。

「あのガキめ！ おい長谷川千雨！ 強制転移させられるぞ！ 手を掴め！！」

「お！？ おう！？」

私はわけも分からず、ASIMOに抱えられたままエヴァンジェリンの手を掴んで、次の瞬間視界はホワイトアウトした。

第29話「メルヘン皆無でございます」（後書き）

感想は随時受付中でございます。

ネギが転移魔法符で逃げた先とは！？

前田はテオドラの執事だった！！？

千雨ちゃんはフェイトと同じ日に魔法世界に行く事になり戦闘開始  
でも、バラバラには転移されない様で、でも予定外のところへ飛ば  
されてしまうようで……？

では、また次回。

第30話「執事の」挨拶でございます」（前書き）

挨拶。

それは宣戦布告とも言つー！

前田はお嬢様を魔法に関わらせないために完全なる世界を叩き潰すぞ！

……魔法世界に来ちゃってるけどねー！

第30話「執事のし挨拶でしつちいます」

岩が降ってくる。

石の槍や、柱。

それは岩石などが荒れ狂う暴風域だった。

ひとたび手をその暴風域に突っ込めば手は跡片もなく吹っ飛ばか、

粉碎骨折が関の山だろう。

しかし、金髪の少女が私を護る様に氷で防ぐ。

しかし、それを貫く石の雨。

やがて、私を護る少女さえも石になってしまい。

石化した彼女でさえ 破壊されてしまう。

「エヴァンジェリンー!!」

カツ…カツ…カツ……

死神の足音が近づいて来る。私の足は石になっているわけでもな

く、動かない。いや、動いてはいる。小刻みに揺れるそれは恐怖に  
よるものだ。

……カツ、ジャリ

「君は真つ当な人間だろう？ どうして、たかが執事を  
殴る為だけにこんな場所に來たんだい？ 学園で平和に過ごしてい  
た方が楽しく過ごせただろうに。君も石になって一生を送ると良い」

「のうわあああああつ！！！！？」（ガバツ！）

夢かよ……って、どこだここ？ あー嫌な汗かいた。嫌な声が響  
き渡る森の中ってか？ さっきから、鳥だか獣だか分からん声が響  
いている。

なんか怖え夢だったな……。エヴァンジェリンが石になるわ、私  
も石にされちまいそうなところで起きたけどよ……。あれは、ゲー  
トポートでエヴァンジェリンが敵って言ってた奴だよな。夢にまで  
出てくるとはな……。エヴァンジェリンは確かに無事だったはずだ。  
あーその後は……。どうなったんだっけか？

「あー……。何で來ちまったんだろう……。前田なんかに関わったせい  
だよな……」

パシヤ……。チャプ……。



その水音に引かれて私は足を運んだ。  
エヴァンジェリンだろうか？  
音はこっちの方から……。

「……長谷川様……（ピポ……）」

ガンツ！

私はすぐ横にあった大木に頭を打ち付けた。何でASIMOが身体洗ってんだよ！！？ 誰得の水浴びシーンだよ！！

ザバザバザバ……！

「いけませんまだ動かれては！ 大丈夫ですか！？ お加減は！？

（ピポポ……）」

「え？ あ、おい！？」

「ああ やはり熱です。35度5分も……（ピポ……）」

「それが私の平熱だよ！！」

「とにかく服を脱いで下さい！（ピポ！）」

「何だよ！！」（スパーンツ！）」

「失礼いたしました。視聴者サービスで水浴びをしたまでは良かったのですが、どうやらアップデートに失敗していたようで、たった今アップデートも完了しなおしました（ピポポ……）」

「視聴者サービスの時点で良くねーだろうがよ。変にバグってたってことで良いんだな？ アホか……あ？ そうだよ！ エヴァンジェリンはどこだよ？」

記憶が正しければ、戦ってた時もエヴァンジェリンが優勢に見えたから、夢と同じ状況にはなっていないだろうが……。

「マスターならそちらに（ピポポ……）」

エヴァンジェリンも水浴びしてやがったか……止めるよ。このアホロボを。

「起きたか。水浴びするか？ 寝汗で気持ち悪かろう」

「あ、ああ……」

「街に着けば風呂もある。とりあえずここは                      ジャングルだ」

ASIMOに連れられ高台に上ると、そこは辺り一面の緑。川やデカイ岩が見えたりもするが、基本的には水平線まで緑ってわけだ。

私の夏休みは……つか人生は、前田の所為で大きく崩れていた。

ピアスを付けたのは初めての事ではんの少し痛かった。でもそのおかげか、追って来ていた人達も僕とすれ違っても僕の姿がバレる事はなかった。

僕の背中には事前に用意していたリュックの中身と僕の杖。これがあれば当分はなんとか凌いでいけるだろう。既に魔法封じの術の効力は切れているため、魔法は使用出来るようになっていいる。今の問題は行く宛がないと言う事だ。

全く知らない土地をただ歩く。

「ほう……あの情報は本当でしたか。……コホコホ」

軽く咳き込む人が広場にやって来た。後ろにはメガロメセンブリアの正規兵。その重厚な黒い鎧に包まれた姿は10を超える。ふと身の危険を感じる。何故かは分からないけど、このピアスの効果も破られているようだ。この人は……危険だ！僕は片足の向きを変え、力を入れた。それを止めるかのように、その静かな声は発せられた。

「敵ではありませんよ。ネギ・スプリングフィールド。かつてこの世界を救った大英雄ナギ・スプリングフィールドの御子息」

「っ！？ あなたは一体……？」

「お茶を淹れさせましょう。どうぞ、こちらへ」

そして、僕は言われるがままに、メガロメセンブリア総督府へと足を踏み入れた。

カチャ……………コポコポコポ……………スチャ  
「どうぞ」

紅茶を用意され、僕は手を付けずに姿勢を崩すことなく、目の前の男の人を見据えた。

「フッフ、不思議。と言うよりも疑問、警戒の目ですね」

ピアスの認識阻害の効果が最初から効かない人。そんな人がいるのか？ 総督府と呼ばれる領内に、豪華と言えるその部屋から察するに、それにこの国のかなり上に位置するであろう権力の持ち主。父さんの事も知っている。信じていいのか。

「ふふ、手の内を明かしましょう。私宛にね手紙が来たのですよ。ここ総督府ではなく、私個人宛に。本来、私個人とはいえ手紙が来るとしたら嚴重なチェックが入り私の下に来ます。しかし、この手紙は式神という、旧世界は関西呪術と呼ばれる中の使い魔とでも言いますでしょうか。それが運んできました。幾重にもある警備を超えてね」

「……………式神 ……？」

ふと、天ヶ崎さんを思い出す。しかし有り得ないだろうと一瞬で否定の頭に切り替える。ここまで嚴重な警備は抜けるのは困難を極めるからだ。否定はしきれない。でも天ヶ崎さんの可能性は極端に低いだろう。強いて言うならば前田先生か。しかし、前田先生は魔法使いだ。関西呪術の系統では無い。

「 …… ええ、そして、その内容はネギ・スプリングフィールド。」

あなたの事でした。旧世界での行動履歴が初めの内は書いてあったのですが……数日前の手紙では、あなたはこの世界に認識阻害のピアスを付けて現れると

「っ!？」

「その解除方法も書かれてましてね。私だけがあなたを認識したと言っわけです」

「……差出人は？」

「不明です。筆跡鑑定や、指紋検出、式神の魔力探知。あらゆることを調べてみましたが、あたりは引けませんでした」

どこからでも見られている……僕が？ このピアスの事も知っている人物。前田先生か？ いや、それにしてもあそこまで準備してくれた事を考えると段取りが悪い気がする。そうすると、やはりこの人の傍にいる事は危険なのかもしれない。

「自己紹介がまだでしたね。私はクルト・ゲーデルといいます。ここ、メガロメセンブリアの元老院議員をやっています。そしてあなたの父が率いていた【紅き翼<sup>アラルブラ</sup>】に所属していました」

いつの間にか僕は、飲む気の無かった紅茶に口を付けていた。

S i d e o u t

Side テオドラ

良い匂いがあるので歩きまわり厨房に辿り着くと、ケーキを焼いているようだった。ふむ、誰かが来賓で来るとかの話しは聞いてないのだがな……。

カチャ

「殿下。こちらにいらっしやいましたか」

「ん？ 妾を探しておったのか？」

「もうすぐで準備が整うらしいですよ」

「準備？」

とりあえず、その準備とやらが進んでいるらしい部屋を教えて貰いその部屋へと向かった。その部屋に辿り着くと静かだったのだが、私が部屋の前に来たタイミングで、何やら歌声が響いて来た。

「ハッピーバースデー三十路」      ハッピーバースデー三十路」

ガチャ

「……………おい」

「ハッピーバースデー？」

「『何ですか？』みたいに答えるな！ 何をしておる！」

「飾り付けでございます。ケーキは今 焼いておりますので、今しばらくお待ちください」

「……聞きとわないのじゃが、妾の事を祝っておるのか？」

「はい。今のところする事がないので、仕方な……お祝い事ですので、ささやかながらの贈り物でございます」

「……言いたい事はあるが、まあよい」

「いやあでも姫様あ、前田さんのケーキなんて久しぶりですよあ」

侍女が数名 期待の声で飾り付けの手伝いをしている。確かに前田の作るモノに問題なんぞあるわけもなく、超一級品が用意されるであろうことは分かっている。そこには何も心配も不安もない。

ただ、その過程でふざけるのが我慢ならん。

そして、「では、ケーキ入り。お写真撮られる方は、どうぞ前の方へ」と言わんばかりの巨塔が建ち聳えていた。

「うわあ〜 ショート、チョコレート、チーズ、フルーツ、ミルフィーユ」

それらが、1つに積み上がっているわけではない。それぞれが積み上がっているのだ。5、6段のケーキが5、6個存在しているのだ。

「さて、随分と遅れてしまいましたが、お誕生日おめでとついでに  
ました」

「……はあ。ああ、有難く頂戴しよう。他の者も呼んで食べさせる  
が良い」

＼ ハクイ /

使用人の皆が前田特製ケーキ&紅茶に夢中になっているところ。  
私は前田の横に陣取った。

「今のお嬢様はどれぐらいの魔力を持つてるのじゃ？」

「持っております」

「は？ ……私の記憶が確かなら」

「はい、その記憶は間違いございません。しかしながら、私の中  
ルルル内容が変わったのでございます」

相変わらず、考えの先や人の心を読むのが好きな奴だな……。

「恐れ入ります。確かに、以前はある一定以上の魔力をお持ちの方  
に任せさせて頂きました。三十路様も例外ではございません」

<sup>それ</sup>三十路はヤメ口。

「かしこまりました。                    しかしながら、魔力という観点から行  
きますと、不都合が生じる事が分かりました。私の肌には合わないの  
かもしれませんね。結局は混ざりモノですので」

それは……まあ混ざりツ気なしと言う方が異常だろうな。しかし、  
混ざりツ気なしの魔力じゃないと合わないと言うのは初めて聞いた  
な。結局、前田は何なんだ？ 何を目的に主人を何度も変えている  
んだろうか？

「それで、魔力を持っていない主人を迎えて大丈夫なのか？」



「そうですね……後はお嬢様次第という事になりますね」

前田でも解決できない事があるようじゃな。

そして数日後、前田は「お世話になりました」と一言残して旧オステイアへと向かって行った。

Side out

数日かけて街へとやって来た。ここはメガロメセンブリアという街らしい。つまり、現実世界へのゲートがあつた場所だ。そんなゲートポートと呼ばれる付近は【KEEP OUT】のテープが張り巡らされるように、立ち入り禁止となっている。

「帰れねえ……」

「ふむ……問題は時間だな、ここが破壊されてアッチとの扉が壊れている以上、時間の流れも狂い始めている筈だ」

なんか冷静にエヴァンジェリンが分析してるが良く分からん。時差的なモノがもつとずれると言うことだろうか？ 空飛ぶ鯨とかではなく、本物のファンタジーが時間というモノで私を包んでいるよ

うだ。

「前田の位置はどうだASIMO」

「ここより北東になります……距離は測れません（ピポ……）」

前田センサーらしきモノでASIMOは前田のある程度の方位を特定する。前田はメガロメセンブリアにはいないらしい。北東ってどこだ？

「オスティア方面か？……何をしているんだアイツは」

あー、私は本当に何で来てしまったんだろう。帰れない。帰りたい。

「何を落ち込んでいる長谷川千雨。とりあえず宿を探すぞ」

「ああ………」

Side フェイト・アーウェルンクス

さて、順調に事は進んでいる。調べによると、この世界でアラルプラ紅き翼のジャック・ラカンハイデが生きている事と、旧世界の京都で会った吸血イライトウオーカー

鬼の真祖が来ていると言う事が不確定要素ではあるけど……。ネギ・スプリングフィールドは確認されていない。来ていないのか。

僕は荒廃とした都。オスティア。いや、旧ウエスペルタティア王国王都跡へとやってきた。

ヒュオオオオ……ズシンッ！

野生の黒龍ドラゴンが降り立つ。

石化をさせようとした瞬間だった。

『前田くっただけ』 前田くいかほど』

旧世界で一時期流行った気もするギャグとも言うのか、歌と成ってそれが現れた。竿竹を売っている感じに聞こえる。

ドラゴンはその歌声を聞くと一瞬で炉心マルチタウン溶融した。

「っ！！？ この質量を一瞬で溶かしただと！？」

デュナメスは驚愕している。僕も同じだ。石化などなら問題ない。しかし、溶かすなどという事は無理だ。どんな魔法使いでも無理だろう。造物主以外は……。

スタツ

それは執事の格好をした男だった。

「これは貴様がやったのか？」

「左様でございます」

「何者かな？」

「前田・ヴァンデンバーグ・政宗……でございます。ご挨拶をと思いまして馳せ参じました」

「へえ、じゃあ僕達の事を知っていると云う事かな？」

「ええ、テルティウム様。デュナミス様。ツクヨミ様。墓所の主様」  
「はえ？ ウチも？」

誰もこちらからは前田という人物を知る人はいないようだ。

「何の用かな？」

「私のお嬢様の為に　叩き潰しに……」

背筋に奇妙なモノを感じた。これは……まさか。ツクヨミさんやデュナミスを見ると同じような感じた。これは恐怖なのか？ 感じた事のない感情だ。背筋が冷える感じがする。

「と、思いましたが……今日はご挨拶だけでございます。コーヒーでも如何ですか？」

背筋の感じが引いた。これはやはり目の前の前田という男から発せられたモノだったのか。

「……貰おうかな」

そのコーヒーは非常においしかった。

が、その後日、数日間に渡って腹を壊す事になる。

「先制攻撃でございます」

そう言って執事はにこやかにコーヒーを淹れた。

今思えばあのセリフはそう言う事だったのかと、中々にせこい執事だと思った。

「完全なる世界　非常に良い事だと思います。しかし、お嬢様が巻き込まれてしまう可能性がございますので、あなた方の作戦は潰させて頂きます」

「たった一人で我々を止められるとでも言うのか？」

「ええ、私一人いれば十分でございます。スパイもいますしね」

「スパイだと？　我々に揺さぶりは効かぬぞ」

「どうぞご自由に捉えて下さいませ。では、ごきげんよう。前田フラッシュュ！」

そう言つて執事はその場から光つて消えた。

今の光は……京都で見た気もする……か？

「……フ」

「主よ、何がおかしい？」

「いや、やはり面白い奴だと思つてな」

……やはり？　墓所の主は何かを知っているのか？

「詳しくは知らんぞ、見ての通りの奴だ。20数年前に見かけた程度だ」

Side out

### 第30話「執事の」挨拶でございます」（後書き）

感想は随時受付中でございます。

ASIMOにアップデート失敗によるバグを引き起こさせ、前田分を混ぜて見た。

お嬢様は前田っぽい成分がすぐ近くないとツッコミが出来ないのだ！！

ネギはクルトの下へ！　ここで鍛えるかな？

ハッピーバースデーみそじ〜

やはりゲートポートは封鎖と成りました。帰らせないよ！！

墓所の主も前田を見た事がる！？

完全なる世界に前田のスパイが忍び込んでいる！？

第31話「観光中に発見でございます」（前書き）

メリクリだね。無意味にクリスマスネタのイラストも用意したからよろしく何だね。

さて、本編ではお嬢様が前田を発見したようです。  
ですが……

### 第31話「観光中に発見でございます」

Side ラカン

「へっ、クルトか……」

俺の下に手紙が届いていた。マギア・エレベアの巻物を頂戴したという内容で、即金で1000万ドラクマ。悪い話じゃない。俺としてもコレクションしてただけで必要のない代物だったしな。

ただ、10年以上も顔を合わせてねえ上に、まさかオステイアの総督になつてたあな……。そして、メガロメセンブリアでコレが必要になる理由。魔術開発部とかが動き出してるのか？ 何のために？ それが気がかりだった。

「……ま、いつか。俺に関係ねえし」

Side out



メガロメセンブリア『魔術開発部』ここでは魔法の研究などが常にされている。投薬による実験もだ。ダイオラマ魔法球と呼ばれる空間で1日を24日間にし、僕もここで修行をさせて貰っていた。強くなるためなら何でもした。副作用の話などもちゃんと聞き、問題がなさそうなら投薬も受けた。そして、8か月ほどが過ぎた頃だろうか？ 外の時間で1カ月も経っていないが、僕の下に普通とは思えない威圧を感じさせる巻物が届けられた。

「ネギ君。君は強くなるでしょう。君の父上、ナギをも超えるかもしれませぬ。しかし、それには膨大な時間がかかります。5年などでは効かないでしょう。10年、20年かかるやもしれませぬ。しかし、この巻物を使えば、闇の力を手にする事が出来ます。時間にして1年もいらぬでしょう」

「どんな副作用があるんですか？」

クルトさんはニコリと笑って続けた。

「失敗すれば魔法が使えない身体に。また、死ぬ可能性があります。この巻物はあなたを精神世界へと誘い、試練を課すものです」

「マギア……エレベア」

それはかつてエヴァンジェリンさんが使用していたモノ。タカミチの使っていた究極技法『アルデマ・アート咸卦法』にも匹敵する技術。でもすぐに強くなれても失敗した時が終わりを意味してしまう。

「フフ、そこで裏技です。これだけを忘れなければ確実に成功しま

す。戦う相手はエヴァンジェリンの劣化版。人造霊と呼ばれるものですが、勝つ必要はありません。『自分を受け入れ、善も悪も全てをありのままに受け入れる』これでマギア・エレベアはあなたのモノとなるでしょう」

全てを……受け入れる。

自分を受け入れ……善も悪も全てを……ありのままに受け入れる。

S i d e o u t

S i d e クルト

さて、ネギ君は巻物を開きましたが……。ここまでは間違いなく式神による手紙通り。シナリオ

マギア・エレベア？ そんな巻物をジャック・ラカンが所持しているなどとどうして知っていたのだ。それに下地作りにダイオラマ球で8カ月も投薬も含めた修行だと？ 人間じゃない。それをこれまで乗り切ってきたネギ・スプリングフィールドも父親譲りの膨大な魔力。いや、アリカ様譲りの点も否定できない。それを制御し、休息の時間すらも修行に充てていた。残り10年ほどでこの世界は

消え去るかもしれない。6700万人の同胞だけでなく、この世界すらも救えると言うのか？

こんな手紙シナリオは滅茶苦茶だ。

しかし、事は進んで行く。全ては計算通りに。

最初は魔力のオーバードライブだけで話にならないかと思った。しかし、すぐにそのオーバードライブも自分の制御化に置いた。旧世界でどういう生活をして来たのだろうか？ 旧世界、日本は平和だと言う。そんな場所で教師をしていた彼が、平和にやっていただけならば制御など出来ないはずだ。仲間を作らず、孤独という空間に身を置いて、強さを求め続ける様な環境でもない限りこれ程の修行には耐えられなかつただろう。

となると手紙シナリオは最初から最後まで正確に進んでいる。旧世界でホレ薬を作り、魔法を全世界に公表しようとしたのも全ては孤独に身を投じるため。で、あるならば、彼は間違いなく自己を犠牲にしてこの世界を救う存在と成りえるのかもしれない。

このシナリオを考えた。いや、実行しているのは何者だ。全てを知っている様な存在だ。シナリオはメガロメセンブリアで開かれる拳闘大会終了後の舞踏会までしか書かれていない。そこからは勝手に進むとでも言いたいのか。

S i d e o u t

「ここはどこだあ〜……」

「ヘラス帝国でございます長谷川様（ピポ…）」

地図を確認するが、ソレはオスティアって場所とは逆方向だった。

「前田を探すんじゃないのかよ？」

「普通に向かって見つかると思うか？」

エヴァンジェリンが鼻で笑って答える。

……思わねえけどよ。でもASIMOにも前田センサーみたいなモンが搭載されてるんだろ？ この前も旧オスティア方面に居るって言い当ててたし。

「20キロ圏内まで近づかないと分からないそうだ」

「申し訳ありません（ピポポ…）」

十分、高性能じゃねーか。まあここいらじゃ見つからんとしてもとりあえず観光という事で街を回る。どうやら近いうちに新オスティアで大規模な祭りが行われるらしい。

「あくまでも予測に過ぎないが、前田が現れる可能性があるだろう？」

ん〜……確かに当てずっぽうに動くよかマシな気がするな。

「つーかよ？ 帝国ってーのは外から見ただけなのか？」

「ああ、建築物を見たかっただけだからな。それにヘラスの人間じゃない奴はどんな扱いを受けるか分からん。傭兵とかなら話は別だろうが、一般人が入る事はまずないな」

ん？ その場所に少し前まで前田の反応があつたんだよな？

「フツ、まだ前田が人間じゃない事を疑っているのか？」

「や、やっぱりアイツ人間じゃねーのか？」

「……正直なところ難しいところだ。魔力が膨大すぎるが、それにしては別種族に……例えば魔族化する様な事もないしな。ナギの様なアホもいたからな……人間と言われればそうかも知れないし、違うと言われればその通りだとも思われる」

「アンタにも分からないのかよ……」

「前田の様な存在が知れ渡っていないだけだ。あいつほどの実力を持っているなら、もっと知れ渡っていてもおかしくない。だから人間とは考えづらい……と言ったところだな。魔族である可能性が高いと言ったところか」

人間の可能性もあるってわけか……。

「ASIMO……は知るわけないか」

「マサムネ様でございますか（ピポ……）マサムネ様の主な構成物質は、水35リットル・炭素20kg・アンモニア4リットル・石灰1.5kg・リン800g・塩分250g・硝石100g・硫黄80g・フツ素7.5g・鉄5g・ケイ素3g……」

「待て待て！ 何の話だ！？」

「つまり、人間と呼ばれる構成物質とほぼ変わりません（ピポポ…）」

錬金術か何かかソレは。禁忌か？ 禁忌なのか？

「ほう、良かったじゃないかお嬢様。人間らしい情報が手に入ったぞ」

「んなこと言われてもな……」

人間であってほしいんだけど、違う気もするんだよ……。つか何で私が前田で悩まなきゃならねーんだよ……。

## Side グラニクス闘技場

『さあ今期も開催されましたグラニクス夏季大会ミネルヴァ杯！  
第一試合 西方は全くの謎に包まれた新米自由拳闘士2名！ 謎の精霊と思われる『ボン太くん』と、気味の悪いお面を被った謎の執事服の男『マサムネ』！』

その闘技場では本戦へと繋がる事となる試合が行われようとしていた。ここでの試合に勝ち進めばオスティアで行われる最大のイベ

ント【ナギ・スプリングフィールド杯】への出場参加も可能となる。

『対する東方はヘカテスのベテラン自由拳闘士！ アルギユレの虎獣人』ラオ・バイロン』ケルベラスの森妖精『ラン・ファオ』という『ラオ・ラン』コンビだー！』

「新人ね……揉んでやるかラン」

「ういやっホーイ」

試合が開始された直後だった。執事服の仮面の男は後方に離れた。援護の為。いや、そうではない。前に出たボン太くんと呼ばれる精霊（？）だけで十分だと判断したためだ。

「ふもつぷ〜！」

ズン！

拳闘によるルールは基本的に統一されている。『ギブアップ』『戦闘不能』で決着となる。そして、武器・魔法に使用制限なし。さて、ボン太くんを知っている方はこの世界に居るだろうか？少なくともこの場にはいないであろう。謎の精霊と紹介されたボン太くんは虎獣人のラオの懐に瞬動で入り、拳を叩きこんだ。

「グヌツ！？」

そして、精霊（？）はショットガンを

ダンッ！！

金的に放った！！

「あふん……」

そして、ボン太くんは瞬時にショットガンからSVDドラグノフへ持ち換え、森妖精のランの真横を狙撃した。その威力は弾丸が真横を通り過ぎただけで理解し、ランは白旗を掲げ振った。

『おおっとコレは！ 大番狂わせ！ どうもー 勝利者インタビューです。魔法銃ですか？ 珍しいですね』  
「ふも？」

『ランキングでも常に上位に位置するラオ・ランコンビ！ このベテランを下して見事なデビュー戦おめでとデス！！ ちなみにボン太さんは精霊さん何ですか？』

「ふもっふ！ ふもるる！」  
「精霊ではありません。コレはただの着ぐるみです。 と言っております」

『なるほど、じゃあマサムネさん！ その素顔を拝見するわけには……』  
「申し訳ございません。名前も放送禁止ギリギリなのでミッフィーちゃんでございます」

『では、質問を変えます。この時期に拳闘を始めたと言う事は……』  
「はい、ナギ・スプリングフィールド杯の優勝が第一目的となります」

Side out



『以上、拳闘ニュースでした！ いやー、変わった新人さんでした  
ね』

『まあ色モノでしょう。本戦にも出られないのではないのでしょうか  
？』

ホテルの一室でテレビの様な映像を見ていた。まあテレビとほぼ  
変わりのない代物なわけだが……。そんなことよりもだな。

「居たアーーーーー！！」

「うるさいぞ長谷川千雨……メガロとはいえ安宿なんだ。苦情が来  
るぞ」

「発情期でございましょうか？（ピポ……）」

「前田だ！ 絶対前田だ！ 今、テレビにチラッと映ってた！」

「何だと？ あ……機械はよく分からんな」 ASIIMO

「はいマスター（ピポ……）」

少しばかり巻き戻しが効く様でその映像は流れた。

「……この面は……まあボン太くんもいるしなあ……間違いないだ  
ろ」

「よし！ 殴りに行くぞ！ そんなでどうにかして帰らせてもらおう！ 前田なら何とか出来んだろ！？」

「ドラえもんか何かかあいつは……流石に不可能だろう。それに、行かんぞ」

「は！？ 何でだよ！？」

「グラニクスだろ？ 治安是最悪だし、砂埃は酷いし、荒くれどもも多い。三重苦だ」

「そんなこと……！！」

「仮に、行きたいと言っても。何かの弱みにつけ込まれて奴隷にされる可能性もあるぞ？」

「奴隷！？」

「そついう町だ。一時期、私も身を隠すのに住んでいた時期はあるがな。まあその頃は奴隷などの法は無かったがな。聞いた限り、20年ほど前から奴隷法が大きく執り行われる町になっているようだ」

「ガァー……！！！！ 殴りたいのに殴れない！！ 寝ても覚めても前田の事ばかり考えさせられてる気がしてならん！！」

「恋する乙女の様でございますね（ピポポ……）」

スパーンッ！！

第31話「観光中に発見でございます」（後書き）

感想は随時受付中でございます。

番外 - ? 「サンタクロスでございます」 (前書き)

時系列が滅茶苦茶な為、ifストーリーです。

メリー

番外 - ? 「サンタクロスでございます」

ある日のことだった。

パパーンツ！

「メリークリスマス」

「ああ、めりーくりすまーす」

執事服に赤いサンタの帽子を被った前田に私がテキトーに応える。ここは寮であつてクラッカーを鳴らすような会場では無い。何てはた迷惑な執事だろうか。まあコイツが片付けるから別に良いのだが。目の前にはクリスマスケーキにスパークリングジュース。七面鳥の丸焼が用意されている。まるでクリスマス。ああ、クリスマスつて感じた。

「つーか、お前でもサンタの帽子なんて被るんだな」

「おやおや、お嬢様はもうサンタクロースを信じておられないお年頃でございますか？」

「普通は信じねーお年頃だろうよ。小学校の低学年で卒業だろ」  
「……」

私のその言葉に前田は涙する。

「な、なんだよ？」

「お嬢様。人とは大衆の意見に流されやすい生き物でございます。まさかお嬢様もサンタクロースを信じて居られないとは……お嬢様の信頼厚く受けるこの前田、泣かすには居られません」

「いや、信頼厚くねーから。な？　そこはき違えんなよ？」

「しかし、お嬢様サンタクロースは実在するのでございます」

始まった。はいはい前田前田ってわけだ。今回はどう攻めてくるんだ？　フィンランドのサンタ部隊の話でも始まるのか？　それとも深夜、私が寝た頃に侵入してきてプレゼント的なある意味爆発物的なモノを用意する気か？　念の為、今日は不眠不休でネツト三昧にするか。

「彼は毎年、その日になると奥様から真っ白な服を渡されておりました」

なんだなんだ？　何が始まった？

「真っ白なコート・真っ白なズボン・真っ白な手袋。男性は真っ白で立派な髭を携え、夜の街へと繰り出します」

真っ白ッて……サンタじゃねーのかよ？

「慈善事業のようなモノでただでおもちやを配る男性。そう、それはクリスマススイブでございます」

「いや、真っ白じゃねーか……」

「そう！　雪も白く降り積もり、息を吐けば白く染まるホワイトクリスマススイブ。彼のその誰にも悟られない様な縮地法は目にも止まらず、次々に恵まれない、それでいて純真な子ども家に忍び込み

ます。古い廊下でも音は立てず、子供の寝る寝室へ忍び込み、袋の中から一箱一箱配って行くのです」

なんか犯罪者風というか。スネーク的なものに聞こえてくるな。

「さて、袋の中身も空っぽに近くなった頃。毎年のように現れるのが恒例となっております。殺し屋です」

何で!?

「くくく、貴様を殺せと仕事の依頼が入っているのさ」

「私はただプレゼントを配っているだけだ。どけ……」

「殺し屋の集団は6名。全員がナイフを持ち、男性に襲いかかります。武器を持たない彼に出来る事は残りのプレゼントを壊されないように護る事」

真っ白のサンタァー!? 殺されんだろーがよ!

「一人が背中から彼にナイフを突き立てます。しかし、彼の意味は揺らぎません。プレゼントを配る。その事だけに集中していました。そして、その手には拳という武器があったのです。振り向き様にナイフを突き立てた男を殴り飛ばします。彼の拳はヘビー級のボクサーも真っ青の威力を持っていました。一撃で顔から出血する殺し屋。続けて二人、三人と殴り殺して行きます」

サンタ(?! つええええ!!

「最後の殺し屋に決まったクロスカウンター!!! 彼はそのまま最後の殺し屋の胸倉をつかみ上げます」

「誰に雇われた。言え！」

「ふっ！」

「吐血をし、最後の男も絶命しました。彼は殺し屋の雇い主も分からぬまま。とりあえず最後までプレゼントを配り続けました。そして、プレゼントを配る最後の家で少年はふと起き上がり、見てしまったのです。真っ赤な服を着た男性の姿を。その時は、サンタクロースの風習などありませんでしたが、最後のクロスカウンター。これがサンタという男性の名前から『サンタクロス』と名付けられ殺し屋に恐れられました。そう、サンタクロースの赤い服は、返り血の赤なのでございます」

「嘘つけー！！」（スパーンッ！）

「ちなみに殺し屋の雇い主はサンタクロースの奥様でございました。血に染まりかえる夫の姿に興奮し、聖夜を迎えると言っわけでございます」

「最低だな！ 相変わらず最低だなお前！」

ちなみに前田からのクリスマスプレゼントは『前田抱き枕』だった。表が執事服で裏が執事服だった。せめて突っ込みやすく裏は変えて欲しかった。とりあえずそのまま返した。



番外 - ? 「サンタクロスでございます」 (後書き)

感想は随時受付中でございます前田。

第32話「スパイ大作戦でございます」(前書き)

あけましておめでとございます。

今年もよろしくお願いいたします。

さてさて、前田が仕組んでいたスパイとは!?

### 第32話「スパイ大作戦でございます」

日々中継される拳闘の様。そこに仮面を被った執事は居た。毎度同じく執事服。そして、仮面は元の世界で何度か見た事があるキユアベリーの微妙に奇妙なお面だ。もう14〜5戦はしているらしく、ボン太くんだけで勝ち抜いている。

「全然戦ってねーじゃん」

「ふん、ボン太くんだけで十分という事なのだろうさ」

エヴァンジェリンは夕飯の肉をもぎゅもぎゅと食いながらその映像を見る。どうやらこの試合で本戦出場が決定するらしく、前田であろう執事服の男とボン太くんは、ココ。オスティアに来る事になったようだ。『ナギ・スプリングフィールド杯』それがここ本戦トーナメントの正式名称だ。

そして、そろそろ始まるオスティアの祭りだが、規模が半端ないらしい。老若男女に獣魔もごった返し、お尋ね者なんかも含んでの1週間らしい。最近この街に人が多くなってきたのはその祭りの為か。

エヴァンジェリンもASIMOと二人でたまに拳闘大会に出ては賞金を得て帰ってくる。今ではリゾート施設に泊まるほどの資金は溜まっている。拳闘って儲かるんだな。

しかし、そうか……前田にそろそろ会えるんだよな……。

「嬉しそうだな長谷川千雨」

「ああ……やっつぶん殴れる」

全力である顔をぶん殴ってやる。

「ASIMO占いによりますと、いきなり抱きしめられると出てお  
りますが……」（ヒポポ……）」

「はあ？ 高性能だったかと思えばアホだったのかよお前。憎しみ  
しかねーのに抱きつくわけねーだろ？ フルボッコだフルボッコ！」

Side フェイト

お腹の調子が戻ってきたようだ。とりあえず計画に支障は出てな  
いので良しとしよう。あの執事め……。

「平和のお祭りですかー。楽しそうですねー。正式開催は明後日か  
らでしたっけ？」

ツクヨミさんは暢気に夜空に浮かぶ新オスティアを眺めている。

「興味なさそうですねーフェイトはん」

「……そういつ君も興味はなさそうだね」

「……くす、もとより人の間では生きられぬ性なれば……ウチには血と戦いがあれば充分ですえ」

「フン……む。ツクヨミ」

僕は気配を感じ、ツクヨミさんのマフラーを締め上げて岩場の影に隠れた。

「げふつ。 何ですの〜？」

「静かに」

アリアドネーの特務潜空艦が通り過ぎ、また僕等は会話を始めた。

「ウチは戦えれば満足ですけど、フェイトはんはどうなんですか？  
計画聞いてもイマイチ よーわからへんのですが。あんた達の…  
…目的は？」

「……世界を救う」

「ほ それはまた……」

『お待たせしましたフェイト様』

「何ですかー？」

「『召喚シラベ 調ホムラ 焰シオリ 栞ヨミ 曆タマキ 環』 早かったね」

すると、焰は『フツ』と笑った。

「っ!?!?」

仮契約者である彼女等を召喚すると、僕はすぐさま燃やされた。

「……焰？ どういうつもりかな？」

火を振り払い、あくまで冷静に問い質す。しかし、更に暦もアーティファクトで僕の動きを停止させる。そこへ環の龍族変化による追撃が加わる。

「機会を窺っていたのです。フェイト・アーウェルンクス様」

「本当の主人が私達を迎えに来るのを待っていたのです」

本当の主人？ 調がアーティファクトを構えそう言い放つ。

裏切るつもりが最初からあったと……？ この程度で僕がやられるとも思ったのか？

「そこまででございます。落ち着いて下さいませ」

「執事の前田……コーヒー事件以来だね」

「左様でございますね。簡単にご説明いたしましょう。前回お会いした際に、『完全なる世界に私のスパイがいる』と伝えましたが、彼女達がそうです。完全なる世界その被害者でもある彼女達を私は逸早く保護いたしました。彼女達のご両親も生きていますよ。……ところで暦さん」

「はい前田様！」

「下着は黒でございますか？」

「は、はい……」

「大変結構」

なんだこのやり取りは……。

「今日はまたご挨拶だけです。失礼いたします。」

前田は踵を返して去ろうとする。焰達も同じ様に……。僕はアーティファクトのカードを取り出し、前田に声をかけた。これがあれば、無駄じゃないか。そう。

「契約があるじゃないか。僕は彼女達をアーティファクトによる召喚が……っ!?」

「はい、契約は切らせて頂きました。ご利用ありがとうございました。」

そして、前田はまた僕の前から去って行った。

手札が、勝手に切られていく? いや、計画は必ず遂行させる! 必ずだ!

S i d e o u t

S i d e 焰・調・栞・曆・環

私達は同じような境遇だった。戦争が起こり、それに巻き込まれ、紛争地域で巻き込まれと、戦争孤児となった。かに思われた。最初はフェイト達に付き従ったが、単独行動をしている際に前田様に会った。『親は、家族は生きています』全ては完全なる世界に騙されていたのだと知った。そこで私達は、ただ完全なる世界を抜けるのではなく、前田様に協力することにした。

「……………そして時は来たのです！」「……………」  
「元氣そうでなによりでございます」

つつい思いに力が入ってしまった私たちに前田様はにこやかに振り向いた。

「……………はっ！ 失礼しました！」「……………」

前田様はそもそも私たち一人一人に仕えたことがある。紛争から救われた瞬間に執事として私たちを「お嬢様」と呼び仕えたが、どうやら前田様の主人にはそぐわなかった様だ。

私たちは前田様から離れるのが嫌で逆に従うことにしたのだ。

現在、私たちは今までの情報をまとめて報告している。主だつて報告に挙がった中で前田様が深く思考を巡らせる素振りを見せたのはゲートポート破壊に関する報告だ。エヴァンジェリン・マクダウエルが障害になるとも言うのだろうか？

「いえ、エヴァンジェリンさんが来ているということは、ほぼ間違いない今お仕えしているお嬢様がこの世界に来てしまっている可能性が非常に高いということです。まさかとは思っていましたが……」



困ったものですね……」

今のお嬢様。どんな方なのだろう？

「……ふむ、なるほど。他にはございますか？　どんな些細なことでも構いませんが？」

「強いてあげるとすれば……」カニス・ニゲル『黒い獵犬』を近くで見かけました。4人組のトレジャーハンターを追っているようでしたが……」

カニス・ニゲル 黒い獵犬。賞金稼ぎ結社の中で冷酷非情で名を挙げている連中だ。だが、特に私たちには関係ない話だろう。

そもそもフェイト達がメガロメセンブリアのゲートを壊した罪を誰かに被せようとして結界等を張っていたらしいが、結界はエヴァンジェリンによって破壊され、誰に罪を被せる事も出来ずにいる事のほう的重要だ。前田様のお嬢様がこの世界に来ていて、巻き込まれていないことは不幸中の幸いと言えるだろう。

「4人組のトレジャーハンターと、黒い獵犬でございませうか……向かいませう」

「は？　あの、お嬢様はよろしいのですか？」

「エヴァンジェリンさんが付いております。そうそう問題は起きないと言えるでしょう」

「ま、前田様？」ダーク・エヴァンジェル 闇の福音も前田様が従えているのでしょうか？

「ええ、良好な関係かと思われませう。中々良いロリバ……ロリババアかと思えますよ」

（（（（なぜ言い直した！？）））））

とりあえず、私たちは数十キロ離れた黒い獵犬と接触しそうなト

レジャハンターたちのもとに向かうことになった。

Side out

Side トレジャーハンター

ズズンッ

ズドドドドドドドドドッ！！！！

もう少し、とは言っても後50キロも先になるわけだが、オステイアに辿り着くのは難しそうだ。それもこれも前々回の遺跡からお宝をゲットしたまでは良かったが、遺跡を崩壊させたのが不味かったのだろうか？

「どうだあクリス！」

「マズイねー。雨あられの魔法の矢攻撃だよ。しかも超遠距離。なんで僕らが狙われてるのか皆目見当もつかないけど……かなり高位の魔法使いが少なくとも二人……ヤバイかも……」

そう、なぜ狙われているのか。その確定的なものがないのだ。遺跡崩壊させたのだから、いきなり殲滅されるほどの戦力を寄越され

るとは夢にも思わない。

(見えたわ!)

「アイシャ!」

「千里眼で敵の姿を捉えたわ……距離3000、人数は見える範囲で4人……砂蟲っぽい魔獣も2体見えるわ。これは……マズイわね。あの黒衣の姿……見たことがあるわ。シルチス亜大陸で名を挙げている賞金稼ぎ結社『黒の獵犬』カニス・ニゲル!!! 勝てないわ逃げたほうが……キヤアツ!」

(キヤアツ)

「アイシャ!? アイシャ!」

(私が行く!)

「リン! ……クレイグ! 僕たちも」

「この雨どうするんだよ! やまねーぞ! ……チツ」

ズムツ!

長い尾と背中に2つの骨板を持つ恐竜のような顔をした獣人の拳がリンの腹部に深く入る。

「かはっ……!」

さらにその場に倒れる事は許さんと、巨大な砂蟲の魔獣による攻

勢も回避しなければならぬ。血反吐を吐きつつ、念話に伝える。

(おいリン！ 無事か!?)

「無事じゃない！ 大ピンチー!!」

(アイシヤは!?)

「捕まった!!」

「今、救い出したところでございます」

リンの思考は一瞬停止した。そして、その何一つ変わらぬその姿に驚いた。

「ま、前田!?!」

(マエダ!? リン！ 何言ってるんだ!?)

「お久しぶりでございます。リンお嬢様」

「誰だ貴様はア!! グッ!!!?!」

前田の一撃で沈む獣人。砂蟲も、いつ唱えたかも知れない轟音による千の雷と思われる高威力の大魔法によって二匹まとめて溶け死んだ。

S i d e o u t

Side チコタン

ば、パイオ・ツウを除く全てが一撃だと……？ 我々、黒い獵犬がたった一人の執事に？ ふふふ、だがまだ終わりではないぞ。この俺様にはまだ二段階の変身が……。

「動いたら燃やす」

「切り刻みます」

「悲鳴はあげないように静かに死んでくださいませ」

「諦める……」

「ふふふ、動かない方がいいですね」

パタ

やつべー……何このいきなり現れた5人娘。殺気が尋常じゃねーよ。殺されるっつーの。つーか何でパイオ・ツウは無事なの？

Side out

S i d e   パイオ・ツウ

ま、前田がいるとは……思わなかったヨ。私が前田にバレタ瞬間に降参したネ。勝てるわけがないヨ。

「回復魔法をかけましたが、大丈夫でしょうか？」

「あ、ああ大丈夫だけど……どうして前田がここに？」

「近くを通りかかり、少し気になったもので駆け付けさせて頂きました」

「あ、あの、ありがとうございます……（リン知り合いなの？）」

「う、うん……私の元執事っていうか……1週間ぐらいだけだったけど」

「アイシャー！　リンー！！」

私は走り寄ってきたターゲットであったはずの長髪の男を見やるが……。

「ってアレ？　……賞金首じゃない……？」

「ってことはまさか……勘違いで襲われたのか俺達は！！？」

「その様でございますね。パイオ・ツウさんもお元気で何よりですが……おっばいに？」

「貴賤なしネ！」

私は外装を脱ぎ捨て、前田に抱きついた。前田は私を戦災から救ってくれた命の恩人ネ。

「ちゃんとチチガミの道を進んでいるようですね安心しました」

「前田……その子は？」

「乳神様でございます」

「ところで、前田は新しい主人とか……」

「リンお嬢様。今のあなた様にはトレジャーハンターという夢にあふれた冒険劇があります。私はそれを応援いたします。ただ、私には既に新しいお嬢様がおりますので、申し訳ございません」

「前田、もう行っちゃうのか？」

「ええ、お嬢様を迎えに行かなければなりませんので」

ちなみに、黒い猟犬は賞金首じゃないグループを襲ったとして、解散となってしまったヨ……。良いおっぱいでも探しに行くかね。

Side out

「アシモグリーンフラッグ!! (ピポ!)」

「あ? なんだよ? 頭から旗振って……」

ASIMOの頭から小さいASIMOみたいな奴が緑色の旗を振る。

「マサムネ様が高速接近中でございます！（ピポ……）」

高速接近中？

「……あま……」

「あ？ 何だ!？」

私はテラスに出て……しまった。

「お嬢様……」

超高速接近する飛来ブツ。それは数週間ほど前から姿を消していた私の執事を名乗る前田だった。

私は一気に汗をふきだしながらも咄嗟に振りかぶり、全力に近い力で前田の顔面に拳を突き出した。それは、ASIMOに先日言われたあれが原因だろう。

『ASIMO占いによりますと、いきなり抱きしめられると出ておりますが……（ピポポ……）』

そんなわけがない。私の拳は間違いなく前田の顔面を捉えた。『ASIMO占い』というモノが絶対とでもいう代物ならば因果逆転だ。私は運命に勝ったと言える。私は恐らく確信を得た笑顔を浮かべたことだろう。

「お嬢様、残像でございます」

後ろから抱きしめられ、私は一気に顔を紅潮させた。



「ば……馬鹿野郎……！！！！」

「あ、当りましたね（ピポ……）」

「ん？ 何だ戻ってきたのか。ん？ 何だこの小娘共は？」

ASIMOとエヴァンジェリンと知らない5人の女の子たちを度外視し、私は裏拳から紅潮が冷めるまで前田を殴り続けた。

「HAHAHAご褒美でございますね」

「あ、ご褒美なんだ」

「すごいお嬢様だね？」

「うん……」

「でも、羨ましいですね」

「楽しそうだね」

……正直に言おう……悔しいが楽しい。私は涙ぐみながら前田のボディを殴り続けていたらしい。

「申し訳ございませんお嬢様」

「うるせー！ うるせー！！」

そして、あと2日後にはオステイア祭が始まることとなる。



第32話「スパイ大作戦でございます」(後書き)

感想は随時受付中ござい前田前田。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3752q/>

---

魔法先生ネギま！ 執事の前田

2012年1月1日00時37分発行